

森 町

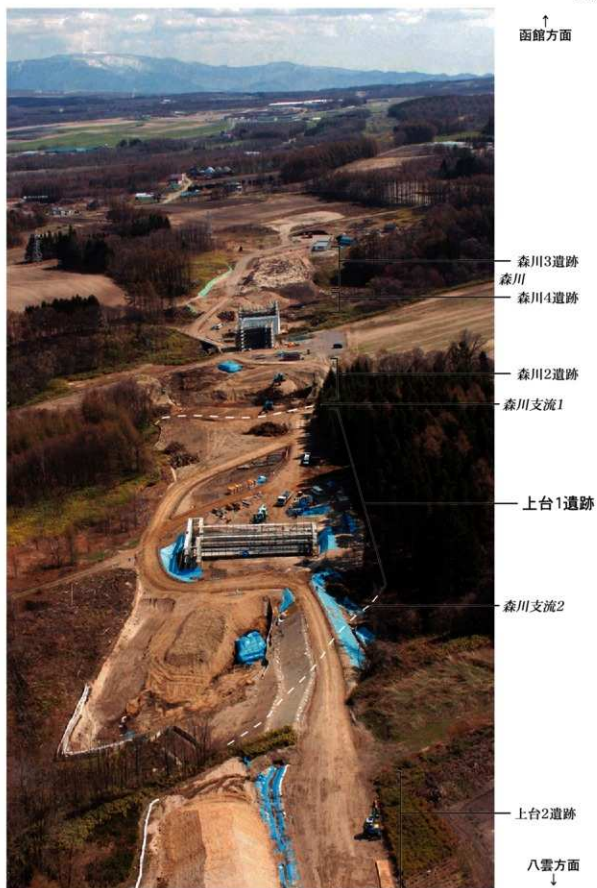
上^{うわ}台^{だい} 1 遺 跡

—北海道縦貫自動車道(七飯～長万部間)埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成15・16年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

口絵 1



遺跡全景 (2004年4月撮影) NW→



調査状況 南東側低位平坦面 W→



調査状況 北西側斜面 W→



UH-4 セクション SW→



UP-18 セクション N→



UP-21 セクション・遺物出土状況 NW→



UP-12 遺物出土状況 N→



UP-12 遺物出土状況 IV群a類土器 W→



US-19 検出 S→



UP-66 遺物出土状況 NE→



UP-6 セクション SW→



UP-6 完掘 SE→



UP-14 上層セクション S→



UP-45 セクション E→



UP-14 下層セクション S→



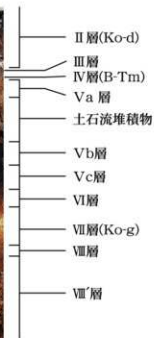
UP-45 遺物出土状況 N→



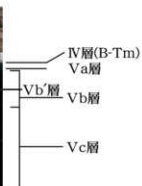
UP-14 遺物出土状況 E→



UP-45 遺物出土状況 IV群a類土器 E→



基本土層 (S-47区) SW→



基本土層 (13ライン) E→



土石流堆積物 南東側低位平坦面 (R-8区) E→ 土石流堆積物 北西側斜面 (P-44区) W→



Ⅲ群 a 類土器



Ⅳ群 a 類土器

例 言

1. 本書は日本道路公団北海道支社が行う北海道縦貫自動車道建設（七飯～長万部間）に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成15年度に実施した森町上台1遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は第1調査部第2調査課が行った。平成16年度の整理と報告は第2調査部第4調査課が担当した。
3. 本書の執筆は、各章・節について担当の調査員がそれぞれ行い、文末に文責者名を記している。全体の編集は影浦寛が行った。
4. 遺構は調査を担当した調査員がそれぞれ整理し、影浦が取りまとめた。遺物は土器を影浦が、石器等を谷島由貴が担当した。
5. 遺物等の現場での一次整理および台帳管理は影浦が統括した。
6. 発掘調査での写真撮影は各担当の調査員が行い、写真整理およびアルバム管理は柳瀬由佳が統括した。遺物の写真撮影・焼付けなどは柳瀬由佳・中山昭大・影浦寛が行った。
7. フローテーション試料については阿部明義が統括した。
8. 各種分析、同定は下記に依頼した。

黒曜石産地同定・黒曜石水和層年代測定（有限会社 遺物分析研究所）

放射性炭素年代測定（地球科学研究所）

炭化種子同定（札幌国際大学 椿坂恭代）

9. 火山灰分析は第1調査部第1調査課花岡正光による。
10. 報告書刊行後、出土資料および図面・台帳等の記録類は森町教育委員会が、写真フィルムは北海道立埋蔵文化財センターが保管する。
11. 調査にあたっては下記の諸機関および諸氏にご協力、ご指導をいただいた。

北海道教育庁文化課、森町教育委員会、八雲町教育委員会、七飯町教育委員会、森町教育委員会：藤田 登・荻野幸男・高杉博章・佐藤 稔・山田あや子・渡部明美・八重樫誠・本山志郎、八雲町郷土資料館：三浦孝一・柴田信一、八雲町教育委員会：吉田 力、七飯町教育委員会：(故)石本省三、山田 央、札幌国際大学：椿坂恭代、北海道考古学研究所：横山英介、函館市教育委員会：田原良信・野村祐一・阿部千春・福田裕二・小林 貢・輪島慎二・坪井睦美、函館市立博物館：長谷部一弘、函館市立博物館五稜郭分館：佐藤智雄、上磯町教育委員会：森 靖裕、木古内町教育委員会：木本 豊、松前町教育委員会：久保 泰、上ノ国町教育委員会：松崎水穂・斉藤邦典・塚田直哉、乙部町教育委員会：藤田 巧・森 広樹、厚沢部町教育委員会：石井淳平、伊達市教育委員会：大島直行・青野友哉・菅野修宏、虻田町教育委員会：角田隆志、苫小牧市博物館：赤石慎三、苫小牧市：佐藤一夫・宮夫靖夫・工藤 肇・二階堂啓也・兵頭千秋・大泉博嗣・渡辺俊一・鈴木耕崇、厚真町教育委員会：乾 哲也、泊村教育委員会：村上章久、芦別市教育委員会：長谷山隆博、富良野市教育委員会：杉浦重信・澤田 健、常呂町埋蔵文化財センター：武田 修、青森県埋蔵文化財センター：成田滋彦・坂本真弓、青森市教育委員会：児玉大成、青森県立郷土館：鈴木克彦、弘前市教育委員会：成田正彦、鹿角市教育委員会大湯ストーンサークル館：渡辺 正、藤井安正、花巻義人、三浦貴子、鷹巣町教育委員会：佐野一絵、榎本剛治、秋田県埋蔵文化財センター：五十嵐一治、小島朋夏

凡 例

1. 遺構に関しては、本文および図・表中では以下の略号を用い、原則として確認順に番号を付した。

UH：住居跡、UP：土坑、TP：Tピット、US：配石、礫集中、屋外石囲い炉、
 UF：焼土、UFC：フレイク集中、USP：柱穴状の小ピット、
 HP：住居内の柱穴、PP：土坑内の柱穴・付属遺構、HF：住居内の焼土

2. 掲載した実測図等の縮尺は原則として以下のとおりである。

遺構図・土層図	1：40	遺物出土状況図	1：20
復元土器	1：3	土器拓影	1：3
剥片石器	1：2	石斧類	1：2
礫石器	1：3	土・石製品、ミニチュア土器	1：2
石皿・台石	1：4		

3. 挿図中の遺物のシンボルマークは以下のとおりである。

	坑口部・覆土内出土	床面・坑底面出土
土器	○	●
剥片石器・剥片	△	▲
礫石器・礫	▽	▼
土・石製品	◇	◆

4. 遺構の規模は「確認面の長軸長/床面・坑底面での長軸長×確認面の短軸長/床面・坑底面での短軸長×確認面からの最大深（単位はm）」の順で記した。一部破壊されているものについては現存長を（ ）で示し、不明のものは－で示した。

5. 土層の表記は、基本土層はローマ数字で、遺構の覆土はアラビア数字で示した。

6. 土層の色調は『新版標準土色帖19版』（小山・竹原 1997）に準じた。

7. 土層の説明は『土壌調査ハンドブック改訂版』（日本ペドロジー学会編 1997）を参考に、土性、粘着性、堅密度および火山灰と礫の混入、その他に分けた。一部、土層の混在状態は、基本土層や上記の略号などを用いて、おもに下記のように表してある。

A+B：AとBがほぼ同量混じる。

A>B：AにBが少量混じる。

A≫B：AにBが微量混じる。

8. 火山灰の略号は、『北海道の火山灰』（北海道火山灰命名委員会 1982）による。

9. 遺構図中の方位は真北を、細数字は標高（単位m）を示している。

10. 土器・石器・土製品・石製品の大きさは以下の要領で示した。なお、破損しているものについては現存の最大値を（ ）で示した。

最大長×最大幅×最大厚（単位はcm）、重量（g）

目 次

口絵	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
表目次	
図版目次	

I 調査の概要

1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査に至る経緯	1
4 土層区分	3
(1) 基本層序	3
(2) 土石流による堆積物	4
5 調査の方法	5
(1) 発掘区の設定	5
(2) 調査の方法	19
(3) 整理の方法	19
(4) 遺物の分類	20
6 調査結果の概要	22

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と周辺の地形	25
2 周辺の遺跡	25

III 遺構の調査とその遺物

1 住居跡	31
2 土坑	41
3 Tピット	123
4 配石遺構	127
5 集石・礫集中	134
6 石囲い炉	137
7 焼土	145
8 フレイク集中	147
9 立石	154
10 柱穴状の小ピット	156

IV	包含層出土の遺物	
1	土器等	165
2	石器等	195
V	自然科学的手法による分析結果	
1	放射性炭素年代測定	219
2	黒曜石原材産地分析および黒曜石水和層年代測定	222
3	森町上台1遺跡から出土した炭化植物種子	233
VI	まとめ	
1	遺構	235
2	遺物	236

引用参考文献

一覧表

写真図版

報告書抄録

挿図目次

I 調査の概要

図I-1	遺跡の位置	2
図I-2	土層断面の位置と 基本土層模式図	6
図I-3	土層断面①	7
図I-4	土層断面②	8
図I-5	土層断面③	9
図I-6	土層断面④	10
図I-7	土層断面⑤	11
図I-8	土層断面⑥	12
図I-9	土層断面⑦	13
図I-10	土層断面⑧	14
図I-11	土層断面⑨	15
図I-12	土層断面⑩	16
図I-13	土石流堆積物	17
図I-14	グリッド設定図	18

II 遺跡の位置と環境

図II-1	遺跡周辺の地形①	26
図II-2	遺跡周辺の地形②	27
図II-3	周辺の遺跡	28

III 遺構の調査とその遺物

図III-1	遺構位置図①	32
図III-2	遺構位置図②	33
図III-3	遺構位置図③	34
図III-4	UH-4(1)	35
図III-5	UH-4(2)	36
図III-6	UH-4の遺物①	37
図III-7	UH-4の遺物②	38
図III-8	UH-4の遺物③	39
図III-9	UP-1・2・3	43
図III-10	UP-4	45
図III-11	UP-6(1)	46
図III-12	UP-6(2)	47
図III-13	UP-6の遺物①	49
図III-14	UP-6の遺物②	50
図III-15	UP-7	52

図III-16	UP-7の遺物とUP-8	53
図III-17	UP-9・10	56
図III-18	UP-10の遺物とUP-11	58
図III-19	UP-11の遺物	59
図III-20	UP-12(1)	60
図III-21	UP-12(2)	61
図III-22	UP-12の遺物①	62
図III-23	UP-12の遺物②	63
図III-24	UP-12の遺物③	64
図III-25	UP-13	66
図III-26	UP-13の遺物	67
図III-27	UP-14・25(1)	70
図III-28	UP-14・25(2)と UP-14の遺物	71
図III-29	UP-25の遺物とUP-15	73
図III-30	UP-16・18	75
図III-31	UP-19・20	77
図III-32	UP-20の遺物とUP-21	78
図III-33	UP-21の遺物	79
図III-34	UP-22・23・24	81
図III-35	UP-26・27・28	83
図III-36	UP-29・30・31	85
図III-37	UP-32・33・34	88
図III-38	UP-34の遺物とUP-35・36	89
図III-39	UP-37・38	91
図III-40	UP-39	93
図III-41	UP-40・41・42・43	95
図III-42	UP-44	96
図III-43	UP-45・46	98
図III-44	UP-45の遺物①	99
図III-45	UP-45の遺物②	100
図III-46	UP-45の遺物③	101
図III-47	UP-46の遺物とUP-47・50	102
図III-48	UP-51	105
図III-49	UP-53・54・55	107
図III-50	UP-55の遺物とUP-57	108
図III-51	UP-58・59	110
図III-52	UP-59の遺物①	111

図Ⅲ-53	UP-60・62	113
図Ⅲ-54	UP-63・64	115
図Ⅲ-55	UP-64の遺物とUP-66	116
図Ⅲ-56	UP-67	118
図Ⅲ-57	土坑出土の土器①	120
図Ⅲ-58	土坑出土の土器②	121
図Ⅲ-59	土坑出土の土器③	122
図Ⅲ-60	TP-1・2	124
図Ⅲ-61	TP-3・4	125
図Ⅲ-62	TP-5	126
図Ⅲ-63	US-13	128
図Ⅲ-64	US-19	129
図Ⅲ-65	US-19の遺物①	130
図Ⅲ-66	US-19の遺物②	131
図Ⅲ-67	US-19の遺物③	132
図Ⅲ-68	US-19の遺物④	133
図Ⅲ-69	US-14・15	135
図Ⅲ-70	US-16・20	136
図Ⅲ-71	US-1~6	138
図Ⅲ-72	US-7~9	141
図Ⅲ-73	US-10~12	143
図Ⅲ-74	US-17・18	144
図Ⅲ-75	UF-1・2・4・5	146
図Ⅲ-76	UFC-1・4	148
図Ⅲ-77	UFC-2①	149
図Ⅲ-78	UFC-2②	150
図Ⅲ-79	UFC-2の遺物	151
図Ⅲ-80	UFC-3①	152
図Ⅲ-81	UFC-3②	153
図Ⅲ-82	立石	155
図Ⅲ-83	柱穴状の小ピット	157
図Ⅲ-84	USP群1	158
図Ⅲ-85	USP群2	159
図Ⅲ-86	USP群3	160
図Ⅲ-87	USP群4	161
図Ⅲ-88	USP群5	162
図Ⅲ-89	USP群6	164

Ⅳ 包含層出土の遺物

図Ⅳ-1	出土状況①	166
------	-------	-----

図Ⅳ-2	出土状況②	167
図Ⅳ-3	Ⅱ群b類①	168
図Ⅳ-4	Ⅱ群b類②	169
図Ⅳ-5	Ⅲ群a類①	170
図Ⅳ-6	Ⅲ群a類②	171
図Ⅳ-7	Ⅲ群a類③	172
図Ⅳ-8	Ⅲ群a類④	173
図Ⅳ-9	Ⅲ群a類⑤	174
図Ⅳ-10	Ⅲ群b類・Ⅳ群a類①	175
図Ⅳ-11	Ⅳ群a類②	176
図Ⅳ-12	Ⅳ群a類③	177
図Ⅳ-13	Ⅳ群a類④	178
図Ⅳ-14	Ⅳ群a類⑤	179
図Ⅳ-15	Ⅳ群a類⑥	180
図Ⅳ-16	Ⅳ群a類⑦	181
図Ⅳ-17	Ⅳ群a類⑧	182
図Ⅳ-18	Ⅳ群a類⑨	185
図Ⅳ-19	Ⅳ群a類⑩	186
図Ⅳ-20	Ⅳ群a類⑪	187
図Ⅳ-21	Ⅳ群a類⑫	189
図Ⅳ-22	Ⅳ群a類⑬	190
図Ⅳ-23	Ⅳ群b類	191
図Ⅳ-24	V群c類①	192
図Ⅳ-25	V群c類②・土製品①	193
図Ⅳ-26	土製品②	194
図Ⅳ-27	包含層の石器等①	196
図Ⅳ-28	包含層の石器等②	197
図Ⅳ-29	包含層の石器等③	198
図Ⅳ-30	包含層の石器等④	199
図Ⅳ-31	包含層の石器等⑤	200
図Ⅳ-32	包含層の石器等⑥	201
図Ⅳ-33	包含層の石器等⑦	202
図Ⅳ-34	包含層の石器等⑧	203
図Ⅳ-35	包含層の石器等⑨	204
図Ⅳ-36	包含層の石器等⑩	205
図Ⅳ-37	包含層の石器等⑪	206
図Ⅳ-38	包含層の石器等⑫	207
図Ⅳ-39	包含層の石器等⑬	208
図Ⅳ-40	包含層の石器等⑭	209
図Ⅳ-41	包含層の石器等⑮	210

図Ⅳ-42	包含層の石器等⑥	212
図Ⅳ-43	包含層の遺物出土分布図(1)	213
図Ⅳ-44	包含層の遺物出土分布図(2)	214
図Ⅳ-45	包含層の遺物出土分布図(3)	215
図Ⅳ-46	包含層の遺物出土分布図(4)	216
図Ⅳ-47	包含層の遺物出土分布図(5)	217
図Ⅳ-48	包含層の遺物出土分布図(6)	218

V 自然科学的手法による分析結果

1 放射性炭素年代測定

図Ⅴ-1-1	¹⁴ C年代の暦年代校正(1)	220
図Ⅴ-1-2	¹⁴ C年代の暦年代校正(2)	221
2	上台1遺跡出土の黒曜石製石器、剥片の原材産地分析・水和層測定	
図Ⅴ-2-1	黒曜石原産地	230
図Ⅴ-2-2	水和層干渉スペクトル	232
3	森町上台1遺跡から出土した炭化植物種子	
図版Ⅴ-3-1	種実遺体	234

表目次

I 調査の概要

表I-1	検出遺構数一覧	23
表I-2	出土遺物一覧	23
表I-3	出土遺物割合	24
表I-4	出土土器割合	24
表I-5	出土石器割合	24

II 遺跡の位置と環境

表II-1	森町の遺跡一覧	29
-------	---------	----

V 自然科学的手法による分析結果

1 放射性炭素年代測定

表Ⅴ-1-1	¹⁴ C年代測定結果	220
表Ⅴ-1-2	¹⁴ C年代測定資料一覧	220
2	上台1遺跡出土の黒曜石製石器、剥片の原材産地分析・水和層測定	
表Ⅴ-2-1	各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値	228
表Ⅴ-2-2	黒曜石製遺物群の元素比の平均値と標準偏差値	229
表Ⅴ-2-3	湧別川河口城の河床から採取した247個の黒曜石円礫の分類結果	230
表Ⅴ-2-4	常呂川(中ノ島～北見大橋)から採取した37個の黒曜石円礫の分類結果	230

表Ⅴ-2-5	上台1遺跡出土黒曜石剥片の元素比分析結果	231
表Ⅴ-2-6	上台1遺跡黒曜石製遺物の原材産地分析結果	231
表Ⅴ-2-7	上台1遺跡出土黒曜石製遺物の水和層年代測定結果	232
3	上台1遺跡から出土した炭化植物種子	
表Ⅴ-3-1	フローテーション試料一覧	234
表Ⅴ-3-2	上台1遺跡炭化種子一覧	234

表1	遺構規模一覧	239
表2	遺構出土遺物一覧	242
表3	遺構出土掲載土器一覧(復元土器)	245
表4	遺構出土掲載土器一覧(拓影図)	247
表5	遺構出土掲載土製品一覧	248
表6	遺構出土掲載土器等一覧	249
表7	包含層出土遺物一覧	252
表8	包含層出土掲載土器一覧(復元土器)	253
表9	包含層出土掲載土器一覧(拓影図)	256
表10	包含層出土掲載土製品一覧	261
表11	包含層出土掲載土器等一覧	261

図版目次

- 口絵 1 遺跡全景
 口絵 2 調査状況
 口絵 3 遺構調査(1)
 口絵 4 遺構調査(2)
 口絵 5 基本土層
 土石流堆積物
 口絵 6 復元土器 (Ⅲ群 a 類土器・Ⅳ群 a 類土器)
- 図版 1 調査状況 南東側低位平坦面 NE→
 調査状況 北西側斜面 NW→
- 図版 2 UH-4 完掘 NW→
 UH-4 セクション E→
 UH-4 炉 S→
 UH-4 HP-2 遺物出土状況 S→
- 図版 3 UP-1 検出 SE→
 UP-1 セクション N→
 UP-2 完掘 N→
 UP-3 セクション N→
 UP-4 セクション SW→
 UP-4 完掘 S→
- 図版 4 UP-6 遺物出土状況・付属土坑
 検出状況 E→
 UP-6 セクション NE→
- 図版 5 UP-6 PP-1 セクション E→
 UP-6 PP-1 完掘 N→
 UP-6 PP-2 セクション SE→
 UP-6 PP-3 完掘 N→
 UP-6 PP-4 遺物出土状況 NW→
 UP-6 検出面の礫出土状況 E→
- 図版 6 UP-7 セクション SW→
 UP-7 セクション SE→
 UP-7 完掘 N→
 UP-7 遺物出土状況 NE→
 UP-9 セクション S→
 UP-9 完掘 S→
- 図版 7 UP-8 セクション E→
 UP-8 遺物出土状況 S→
 UP-8 完掘 N→
 UP-8 木製品?出土状況 E→
 UP-10 セクション SW→
 UP-11 セクション N→
- 図版 8 UP-12 完掘 N→
 UP-12 遺物出土状況 W→
 UP-12 セクション NE→
 UP-12 セクション NW→
- 図版 9 UP-13 完掘 NW→
 UP-16 遺物出土状況 W→
 UP-18 セクション N→
 UP-18 完掘 NE→
 UP-19 セクション W→
 UP-19 完掘 E→
- 図版 10 UP-14 セクション S→
 UP-14 下層セクション S→
 UP-14 遺物出土状況 E→
 UP-14 完掘 E→
 UP-14・24・25 検出状況 NE→
- 図版 11 UP-25 セクション S→
 UP-25 下層セクション S→
 UP-25 遺物出土状況 SE→
 UP-25 遺物出土状況 E→
 UP-14(手前)・25(奥) 作業状況 S→
 UP-25 完掘 NW→
- 図版 12 UP-20 セクション S→
 UP-20 完掘 NW→
 UP-21 遺物出土状況 NW→
 UP-21 遺物出土状況・セクション NW→
- UP-22 セクション NE→
 UP-22 完掘 NE→
- 図版 13 UP-23 完掘 S→
 UP-24 セクション W→
 UP-26 完掘 SE→

	UP-27	セクション	S→		UP-62	完掘	SW→
	UP-28	セクション	NE→		UP-63	セクション	S→
	UP-28	完掘	NE→		UP-64	完掘	NE→
図版14	UP-30	セクション	S→		UP-66	セクション	W→
	UP-33	完掘	SW→		UP-66	完掘	NE→
	UP-29	セクション	SE→	図版21	UP-67	セクション	W→
	UP-29	完掘	N→		UP-67	完掘	N→
	UP-32	セクション	S→		TP-2	セクション	SE→
	UP-32	完掘	S→		TP-2	完掘	W→
図版15	UP-34	セクション	E→		TP-4	セクション	S→
	UP-34	完掘	E→		TP-5	完掘	S→
	UP-35	セクション	SE→	図版22	US-2	SW→	
	UP-35	完掘	S→		US-7	W→	
	UP-37	セクション	S→		US-12	NE→	
	UP-37	完掘	S→		US-17	W→	
図版16	UP-39	セクション	E→		US-6	E→	
	UP-39	炉	E→		US-14	SE→	
	UP-39	完掘	E→	図版23	US-13	NW→	
	UP-43	完掘	NE→		US-19	NW→	
	UP-44	セクション	E→	図版24	UF-1	セクション	W→
	UP-44	完掘	SE→		立石1	セクション	SE→
図版17	UP-45	セクション	E→		立石2	検出	E→
	UP-45	遺物出土状況	N→		立石3	セクション	SE→
	UP-45	遺物出土状況	E→		立石5	検出	W→
	UP-45	遺物出土状況	NE→		立石6	セクション	S→
	UP-46	セクション	NE→		USP-74(左)・76(右)	セクション	S→
	UP-46	完掘	SW→		USP-88(左)	セクション	SE→
図版18	UP-46	遺物出土状況	NW→	図版25	UFC-2(2回目)	SE→	
	UP-53	完掘	S→		UFC-2(4回目)	SE→	
	UP-51	セクション	S→		UFC-3	NE→	
	UP-51	完掘	S→		UFC-4	E→	
	UP-59	遺物出土状況	W→		石皿出土状況(P-44区)	E→	
	UP-59	完掘	W→		Ⅲ群 a 類土器出土状況(S-53区、		
図版19	UP-57	セクション	E→		図N-7-6)	NW→	
	UP-57	完掘	NE→	図版26	Ⅲ群 a 類土器出土状況(N-9区)		
	UP-58	セクション	S→			NE→	
	UP-58	完掘	S→		Ⅲ群 b 類土器出土状況(T-10区、		
	UP-60	セクション	NW→		図N-10-26)	W→	
	UP-60	完掘	NW→		Ⅳ群 a 類土器出土状況(N-45区、		
図版20	UP-62	セクション	S→		図N-10-32)	N→	

	V群 a 類土器出土状況 (M-14区、 図Ⅳ-11-34) S→	UP-8
	V群 a 類土器出土状況 (T-50区、 図Ⅳ-15-55) SW→	UP-9
	V群 c 類土器出土状況 (R-9区、 図Ⅳ-24-163) W→	UP-10
		UP-11 (1、図Ⅲ-18-2)
		UP-11 (2、図Ⅲ-18-3)
		UP-11 (3、図Ⅲ-18-4)
図版27	土石流堆積物検出状況 (南東側低位 平坦面) NE→	図版36 UP-12
	土石流堆積物検出状況 (北西側斜面、 R-44付近) S→	図版37 UP-13
		UP-14
		UP-25
図版28	UH-4 (図Ⅲ-6-1)	図版38 UP-18
	UP-12 (図Ⅲ-23-7)	UP-19
	UP-6 (図Ⅲ-13-1)	UP-20
	UP-6 PP-1 (図Ⅲ-14-15)	図版39 UP-21
	UP-14 (図Ⅲ-28-1)	UP-23
	UP-16 (図Ⅲ-30-1)	UP-28
図版29	UP-12 (図Ⅲ-22-1、正面)	UP-34
	UP-12 (図Ⅲ-22-1、裏面)	UP-26
	UP-11 (図Ⅲ-18-1)	図版40 UP-39
	UP-13 (図Ⅲ-25-1)	UP-37
図版30	UP-30 (図Ⅲ-36-1)	UP-38
	UP-46 (図Ⅲ-47-1)	UP-45
	UP-59 (図Ⅲ-52-1)	図版41 UP-43
	UP-59 (図Ⅲ-52-2)	UP-46
	UP-59 (図Ⅲ-52-3)	UP-58 (図Ⅲ-51-1)
図版31	土坑出土 (図Ⅲ-57-2)	UP-55 (1、図Ⅲ-50-1)
	土坑出土 (図Ⅲ-57-3)	UP-55 (2、図Ⅲ-50-2)
	土坑出土 (図Ⅲ-58-4)	UP-55 (3、図Ⅲ-50-3)
	土坑出土 (図Ⅲ-58-5)	図版42 UP-59
	土坑出土 (図Ⅲ-58-6)	UP-60・63
	土坑出土 (図Ⅲ-59-7)	UP-62
図版32	UP-45 (図Ⅲ-44-1)	UP-64 (図Ⅲ-55-1上)
	土坑出土 (図Ⅲ-57-1)	UP-66 (図Ⅲ-55-1下)
	UH-4 (1)	UP-67
図版33	UH-4 (2)	US-19 (1)
	UH-4 (3、図Ⅲ-8-24)	図版43 US-19 (2)
	UP-4 (1)	US-19 (3、図Ⅲ-67-14)
	UP-4 (2、図Ⅲ-10-3)	US-19 (4、図Ⅲ-67-15)
図版34	UP-6	図版44 US-19 (5、図Ⅲ-68-16)
図版35	UP-7	US-19 (6、図Ⅲ-68-17)

- US-16・2
 US-6 (図Ⅲ-71-1)
 US-7 (図Ⅲ-72-1)
 US-9
 図版45 US-12
 UFC-1
 UFC-4
 UFC-2
 図版46 UFC-3
 立石7
 USP-26・46
 図版47 Ⅲ群 a類 (図Ⅳ-5-3)
 Ⅲ群 a類 (図Ⅳ-6-4)
 Ⅲ群 a類 (図Ⅳ-6-5)
 Ⅲ群 a類 (図Ⅳ-7-6)
 図版48 Ⅲ群 a類 (図Ⅳ-7-7)
 Ⅲ群 a類 (図Ⅳ-8-8)
 Ⅲ群 a類 (図Ⅳ-8-9)
 Ⅲ群 a類 (図Ⅳ-8-11)
 Ⅲ群 a類 (図Ⅳ-8-10)
 図版49 Ⅲ群 b類 (図Ⅳ-10-26)
 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-10-31)
 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-10-32)
 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-10-33)
 図版50 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-11-34)
 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-12-35)
 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-12-36)
 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-12-37)
 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-12-38)
 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-12-39)
 図版51 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-12-40)
 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-13-41)
 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-13-42)
 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-13-43a)
 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-13-43b)
 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-13-44a)
 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-13-44b)
 図版52 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-13-45)
 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-13-46)
 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-14-47)
 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-14-48)
 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-14-49)
 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-14-50)
 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-14-51)
 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-14-52)
 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-14-53)
 図版53 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-14-54)
 Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-20-114)
 Ⅳ群 b類 (図Ⅳ-23-150)
 Ⅳ群 b類 (図Ⅳ-23-153)
 Ⅳ群 b類 (図Ⅳ-23-154)
 V群 c類 (図Ⅳ-24-163)
 図版54 V群 c類 (図Ⅳ-24-164)
 V群 c類 (図Ⅳ-24-165)
 Ⅱ群 b類
 図版55 Ⅲ群 a類・Ⅲ群 b類
 図版56 Ⅳ群 a類1)
 図版57 Ⅳ群 a類2)
 図版58 Ⅳ群 a類3)
 図版59 Ⅳ群 a類4)
 図版60 Ⅳ群 a類5)
 図版61 Ⅳ群 a類6)
 図版62 Ⅳ群 b類・V群 c類
 図版63 石鏃・石槍またはナイフ
 図版64 石鏃・つまみ付ナイフ・
 スクレイパー1)
 図版65 スクレイパー2)・石核
 石斧
 図版66 たたき石・すり石・扁平打製石器2)
 図版67 扁平打製石器1)
 北海道式石冠・砥石
 図版68 台石 (図Ⅳ-39-131)
 台石 (図Ⅳ-39-132)
 台石 (図Ⅳ-40-133)
 石皿 (図Ⅳ-40-134)
 石皿 (図Ⅳ-41-135)
 石皿 (図Ⅳ-41-136)
 図版69 土製品
 石製品

I 調査の概要

1. 調査要項

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団 北海道支社

受託者：財団法人 北海道埋蔵文化財センター

遺跡名：上台1遺跡（北海道教育委員会登録番号 B-15-27）

所在地：茅部郡森町字上台33-1、42-1、364ほか

調査面積：6,200㎡

発掘期間：平成15年5月6日～10月24日

整理期間：平成15年10月27日～平成17年3月31日

2. 調査体制

平成15年度

理事長	森重 橋一
専務理事	宮崎 勝
常務理事	畑 宏明
第1調査部長	畑 宏明
第1調査部第2調査課長	種市 幸生
	主査 谷島 由貴
	(発掘担当者)
	主任 影浦 覚
	主任 柳瀬 由佳

平成16年度

理事長	森重 橋一
専務理事	宮崎 勝
常務理事	佐藤 俊和
第2調査部長	西田 茂
第2調査部第4調査課長	工藤 研治
	主任 影浦 覚
	主任 柳瀬 由佳
第2調査部第3調査課主査	谷島 由貴
	(発掘担当者)

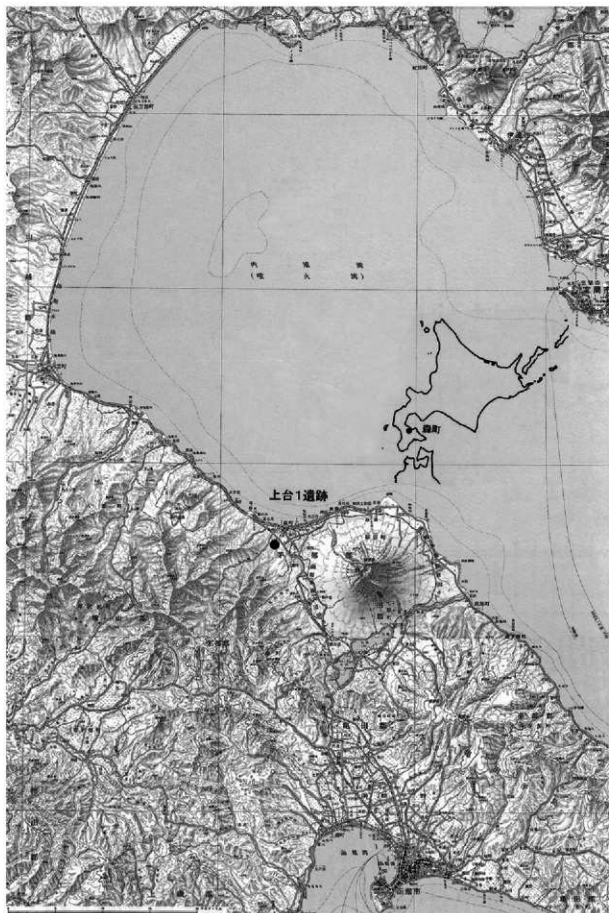
3. 調査に至る経緯

北海道縦貫自動車道（函館～名寄）は函館市を基点として室蘭・苫小牧・札幌・旭川の各都市を経由し、名寄市へ至る総延長488kmの自動車専用道路である。平成16年現在、長万部町国縫IC～剣淵町士別剣淵IC間の約376kmが供用されている。

七飯町～長万部間については平成元年に整備が決定し、平成2年4月、日本道路公団北海道支社から北海道教育委員会（以下、道教委と略）に対し、当該区間における埋蔵文化財保護のための事前協議がなされた。協議を受けた道教委は、平成2年4月と平成7年11月に表面踏査による所在調査、平成7年10月以降に試掘調査を実施している。

上台1遺跡の試掘調査は平成7年11月、平成13年10月及び平成15年4月に行われ、広い範囲にわたって埋蔵文化財包蔵地が確認された。この調査結果に基づき、道教委と道路公団が協議した結果、最終的に6,200㎡が発掘調査の対象となった。

発掘調査は平成15年5月から10月末まで行い、11月からは江別市にある当センターで土器の復元な



(この図は国土地理院発行20万分の1地形図「室蘭」(縮小)を複製、加筆したものである。)

図1-1 遺跡の位置

どの室内整理作業を開始した。整理作業は平成16年度も引き続き行った。

(谷島)

4. 土層区分

(1) 基本層序 (図I-2)

基本層序、遺構の土層の観察は『新版標準土色帖 2002版』および『土壌調査ハンドブック』(ペドロジスト懇話会 1984)を参考にした。

高速道路建設事業にともなって展開している森町内の他の遺跡と基本的に大きな違いはない。土層観察の結果、平成14年度に当センターが調査した倉知川右岸遺跡(2004『森町倉知川右岸遺跡』北理調報196)の土層区分設定をおおむね踏襲している。V～Ⅱ層が主な遺物包含層である。

I層：表土 黒色～黒褐色土(10YR2/1～2/2)。堅密度は弱く、粘性は中。調査前の現況は杉、落葉松などの植林と、落葉広葉樹林などからなる山林であった。

Ⅱ層：駒ヶ岳d降下軽石堆積物(Ko-d)。1640(寛永17)年降下。灰白色軽石層。粒径数mm～5cm程度。層厚1m70cm～1m80cm。

Ⅲ層：黒褐色土(7.5YR3/1)。堅密度は堅く、粘性は中。10世紀中葉から17世紀中葉(1640年)まで。擦文時代～中・近世の遺物包含層に相当するが、今回、当該期の遺構・遺物は検出されていない。層厚3～7cm。

Ⅳ層：白頭山苫小牧火山灰(B-Tm)。10世紀中頃降下。にぶい黄褐色(10YR4/3)。シルト質。層厚1～5cm。部分的に堆積が認められる。

V層：黒～黒褐色土

縄文時代前期～擦文時代の遺物包含層。今回の調査では縄文時代前期～晩期の遺物が出土した。土層観察にもとづいて、さらにVa層、Vb層、Vc層に細分した。

Va層：黒褐色土(10YR2/2)。堅密度は堅く、粘性は中。乾燥するとクラックが入り、ブロック状に固まる傾向がある。層厚5～10cm。倉知川右岸遺跡Ⅳc層相当。

Vb層：黒色土(10YR1,7/1)。堅密度は堅く、粘性は中。層厚20cm。駒ヶ岳g降下軽石堆積物(Ko-g)の軽石が3～7%程度混入する。主に縄文時代後期～晩期にかけての遺物が出土した。倉知川右岸遺跡Va層相当。

Vb'層：明褐色土(7.5YR7/2)。明瞭な部分では明褐色を呈するが、不明瞭な部分ではVb層がぼんやり灰色がかった感じで、判然としない。堅密度は軟らかく、粘性はほとんど感じられない。斜面下や凹地形などに二次堆積が認められた。層厚は5cm程度。森町倉知川右岸遺跡におけるVa'層と同じ内容のものと考えられる。この直上において、晩期末(聖山Ⅱ式)の土器を検出したことや、Vc層中で後期前葉の土器が多く出土していたことから、晩期と後期の境(3000年前)、あるいは後期中の堆積ではないかと予想された。未確認の火山灰の可能性もある。次年度刊行の『森川3遺跡』において、分析結果を掲載する予定である。

Vc層：黒色土(10YR2/1)。堅密度は堅く、粘性は中。層厚20cm。駒ヶ岳g降下軽石堆積物(Ko-g)の軽石が7～15%程度混入する。主に縄文時代前期～後期にかけての遺物が出土した。倉知川右岸遺跡Vb層相当。

なお、支流に面した低位段丘部分においては、河川堆積層によってVb、Vc層が細分するところがあった。そのため上位から順に算用数字を付加して、Vb1層、Vb2層と呼称した。河川堆

積層については砂質のものが多かったため、便宜的にV b 1 砂層などと呼称した。これらの土層は、河川堆積の認められた各所での相対的な分層であって、離れた範囲では、層名は同一でも必ずしも同一層とは限らない。

また支流に面した調査範囲両端の斜面部において土石流による堆積物が確認された。V b 層の上位で土石流堆積物と呼称した。縄文時代晩期以降、B-Tm 降下以前の河川氾濫が成因と考えられる。この土石流堆積物については次項で記載する。

Ⅵ層：褐色土 (10YR4/4) で、漸移層。場所により暗褐色を呈するところや、駒ヶ岳 g 降下軽石堆積物 (Ko-g) の堆積層に少量の黒色土が混入しているところもある。Ⅵ層からⅤ層への漸移層ととらえられる土層を含めた。層厚 5～10cm。

Ⅶ層：駒ヶ岳 g 降下軽石堆積物 (Ko-g)。約6000年前 (縄文時代前期) 降下。明黄褐色 (10YR6/8) 軽石層。層厚は 5～30cmで、20cm程度の部分が多い。斜面の傾斜が急なところでは消失していることもある。V c 層中において二次堆積が顕著で、遺構覆土との判別が困難な場合も多い。

Ⅷ層：褐色ローム層。堅密度は強く、粘性は中。層厚50cm～1m。上層では、駒ヶ岳 g 降下軽石堆積物 (Ko-g) と考えられる明黄褐色の軽石が混じる。今回の調査では数点が出土したにとどまったが、縄文時代早期の遺物包含層である。上台2遺跡側の森川支流2に向かった斜面では、プライマリーなⅧ層は認められず、Ⅸ層とⅧ層が混合した二次堆積層や、礫を大量に含む層が堆積していた。前者をⅧ'、Ⅷ'が若干腐植した層をⅧ''、後者をⅧ'''とした (図 I-6～8)。

Ⅸ層：濁川カルデラ火砕流堆積物および火砕サージ堆積物 (Ng)。濁川のカルデラを起源とするⅨ層は地質学的に『石倉層』と呼称されており、火山灰層中に角閃石を多量に含むのが大きな特徴となっている。約11000～13000年前の堆積物。上位の火砕流堆積物、下位の火砕サージ堆積物からなり、前者を a、後者を b とした。

Ⅸ a 層：明黄褐色軽石層。

黄褐色粘質土 (ローム質土) ・砂が少量混入する。

Ⅸ b 層：灰色火山灰層。

砂粒～シルト大粒子の火山灰の互層。下底は未確認。

(影浦)

(2) 土石流による堆積物 (図 I-2・3・6～13、口絵5、図版27)

調査区内の南東端と北西端で、土石流による堆積物が検出された。両者は類似しており、分布範囲と堆積形状・堆積層準・堆積物の内容などに共通点がある。

分布範囲は支流1と支流2に面した斜面で、斜面の上端では自然堤防状の高まりとなっている。支流1側では、急斜面と支流に面する平坦面に分布し、斜面上端の高まりが顕著である。支流2側では、支流に向かう緩斜面の全面において20～50cmほどの厚さで堆積し、調査区域外に続いている。54ライン付近より支流2側では堆積が厚く、1mほどになる部分がある。斜面上端の高まりは若干認められる程度である。

堆積層準はV b 層上位である。10世紀中頃に降下した火山灰であるⅣ層 (B-Tm) に覆われ、縄文時代中期～後・晩期の遺物包含層を覆っている。

堆積物の内容は、支流1側ではほぼ単一で、その内容は後述する支流2の「単一層」に類似する。

支流2側の堆積物の内容は、大きく二分される。高まり付近では、Ⅷ層（ローム）・Ⅸb層（Ng火山灰）のブロックや、これらと黒色土・Ⅷ層（Ko-g）などが斑状に混合した土層が堆積する。また、0.1～2.0cmの円礫の堆積が局所的にみられる。高まり部分以外では、黄灰色～黄褐色を呈するローム質のほぼ単一層からなる。拳大程度のロームのブロック、磨耗したⅨa層（Ng軽石）、Ⅸb層（Ng火山灰）の小ブロックが多く混入し、拳大～人頭大の垂円～垂角礫を少量含む。支流1側の土層はこの単一層に類似する。

土石流堆積物の形成時期については、堆積物中及び堆積物の上位・下位の遺物出土状況と、堆積層準によって推定できる。支流1側では、堆積物中からⅢ群a類・Ⅳ群a類・Ⅴ群c類が、堆積物より下位の遺物包含層からⅤ群c類までの遺物が出土している。支流2側では、堆積物中からⅡ群b類・Ⅲ群a類・Ⅳ群a類・Ⅳ群b類が、堆積物より下位の遺物包含層からⅣ群b類までの遺物が出土している。どちらも堆積物より上位では遺物は出土しておらず、また、堆積物はB-Tmに覆われている。これらのことから、土石流堆積物の形成時期について、支流1側は縄文時代晩期後葉以降10世紀中頃以前、支流2側は縄文時代後期中葉以降10世紀中頃以前であると言える。

今回検出したものと同様の堆積物は、支流1をはさんで本遺跡と隣接する森川2遺跡（森町教育委員会2003・2004）や、島崎川の対岸に位置する倉知川右岸遺跡（北理調報196）でも検出されている。両遺跡とも、堆積層準はB-Tmより下位で、かつ縄文時代後期あるいは晩期の遺物包含層より上位である。遺物出土状況は、倉知川右岸遺跡では、堆積物中から縄文時代の遺物が、堆積物の下位から縄文時代後期後葉までの遺物が出土しており、森川2遺跡では堆積物中から後期の遺物が、堆積物の下位から晩期後葉までの遺物が出土している。

本遺跡を含めた3遺跡は、島崎川をはさんだ2.5kmほどの範囲内に位置する。3遺跡で検出された土石流堆積物は、いずれも縄文時代後期中葉～晩期後葉以降、10世紀中頃以前に形成されたものである。また、3遺跡とも、少なくともⅡ層（Ko-d：1640年降下）～Ⅸ層（Ng：11000～13000年前降下とされる）間においては、これ以外の土石流堆積物は検出されていない。今回検出されたほどの堆積物を残す土石流が、近接する地域において、後期中葉～10世紀中頃という特定の期間でのみ複数回起きたとは考えにくいことから、3遺跡から検出された土石流堆積物は、ひとつの要因によって引き起こされた自然災害である可能性が指摘できる。その場合土石流堆積物の形成時期は、倉知川右岸の遺物出土状況から、縄文時代以降10世紀中頃以前である可能性がある。

（柳瀬）

5. 調査の方法

（1）発掘区の設定（図I-15）

発掘区の設定に当たっては日本道路公団北海道支社の「北海道縦貫自動車道霞台工事平面図（2）1000分の1図」を使用した。工事予定上り線の中央線上の中心杭であるSTA. 345とSTA. 346を通る線を基軸のMラインとし、STA. 345を基準に4m方眼を設定した。Mラインと並行に南西へ向かってL、K、J…とした。更に、STA. 345を通りMラインに直行する線を10ラインとし、北西へ向かって11、12、13…とした。この方眼は南端交点をアルファベットとアラビア数字の組み合わせで呼称する（例：STA. 345はM-10）。

MラインはN-36°-Wである。

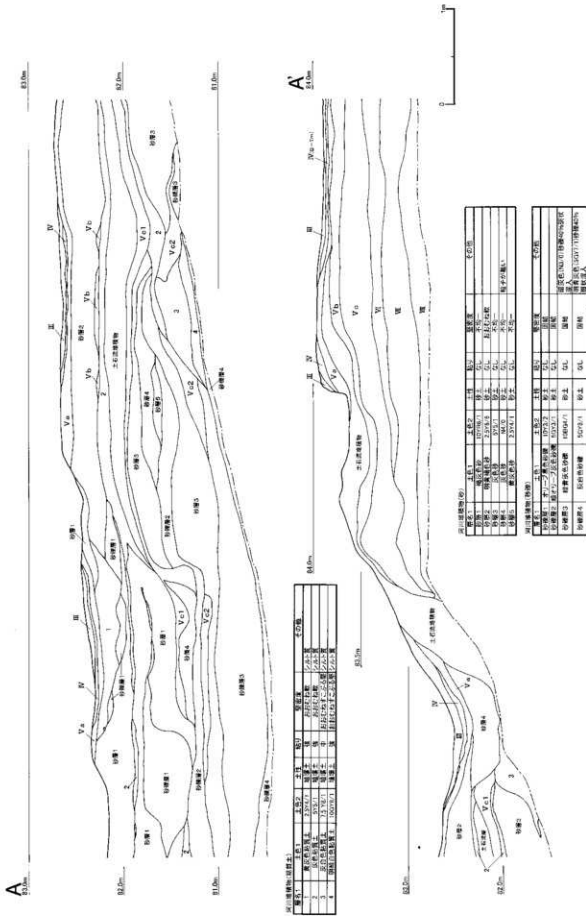


図1-3 土層断面(1)

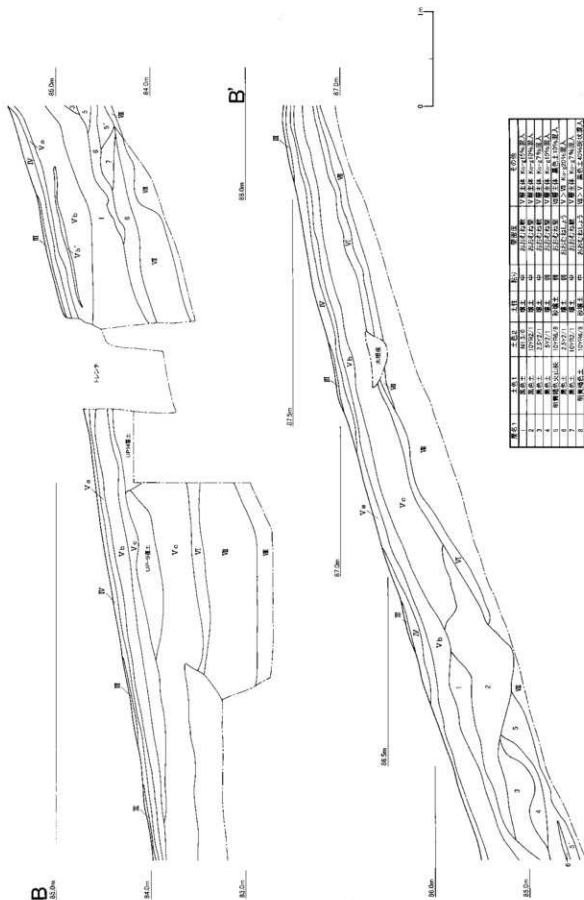


図1-4 土層断面(2)

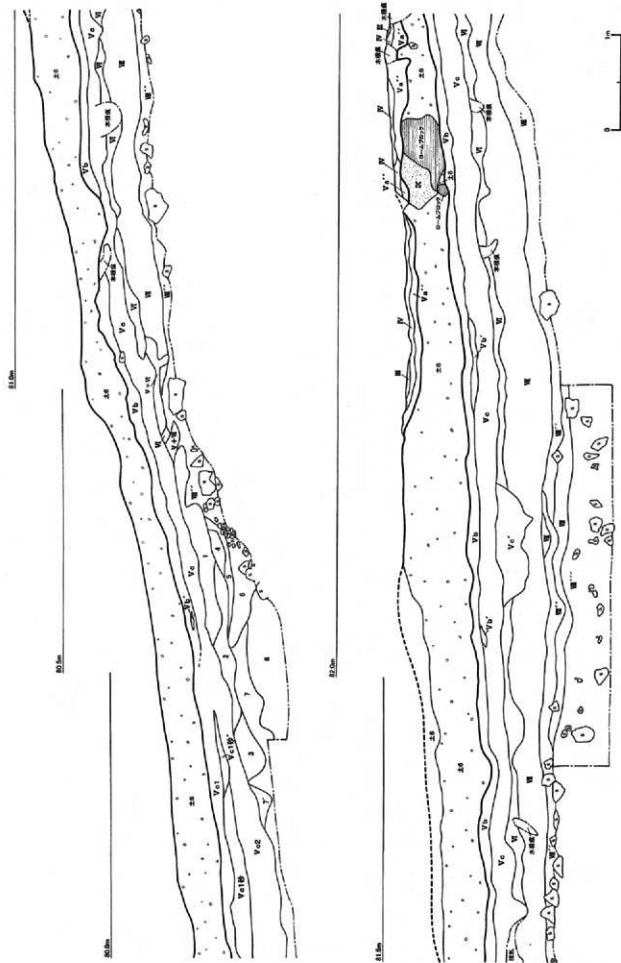


図 1-7 土層断面(5)

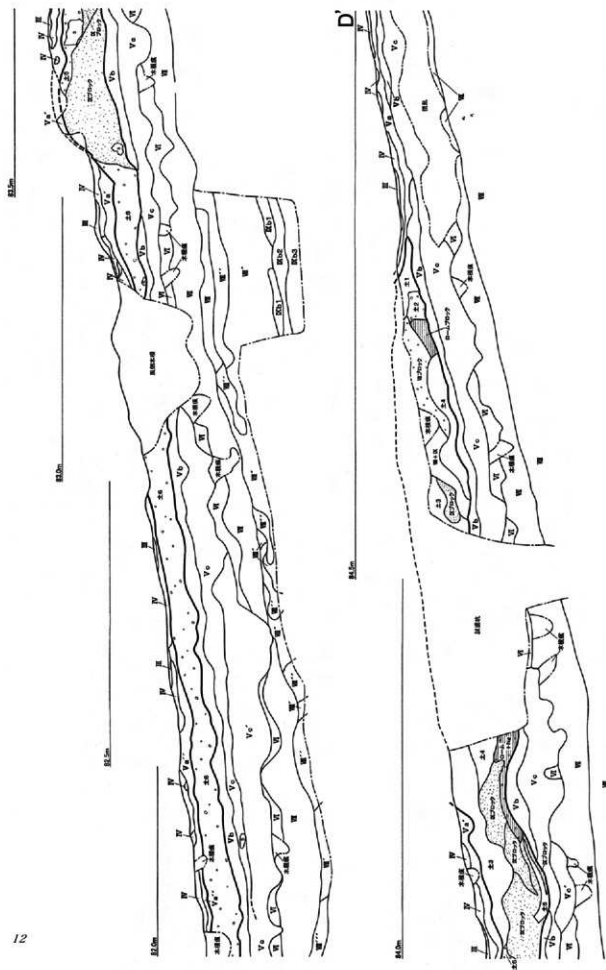


図1-8 土層断面(6)

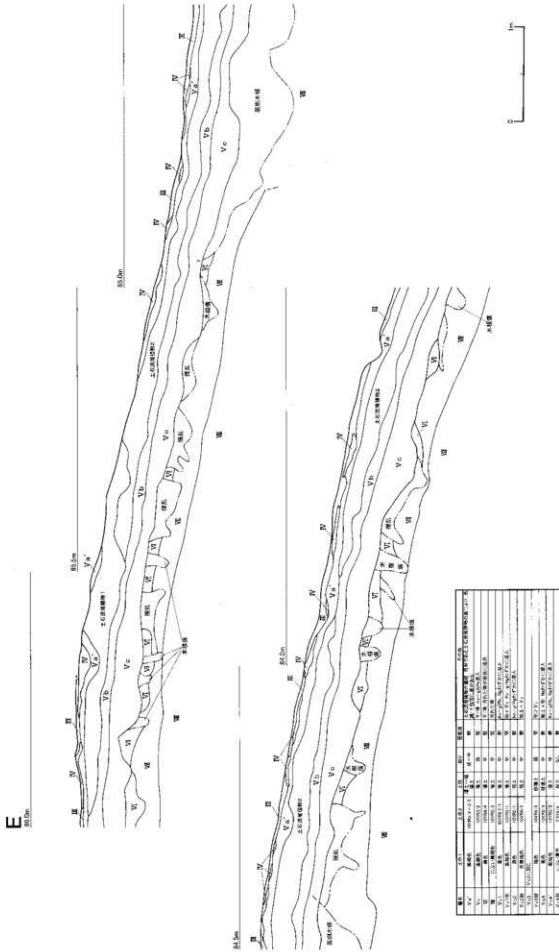


図1-9 土層断面(7)

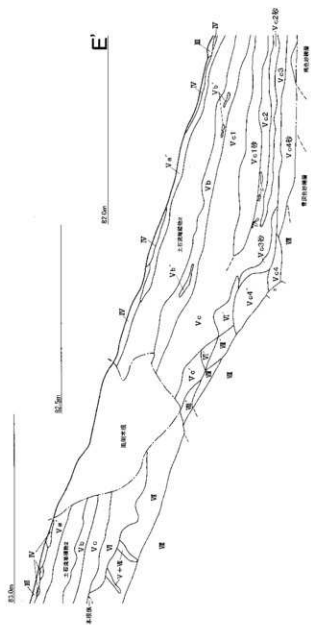
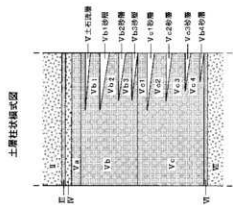
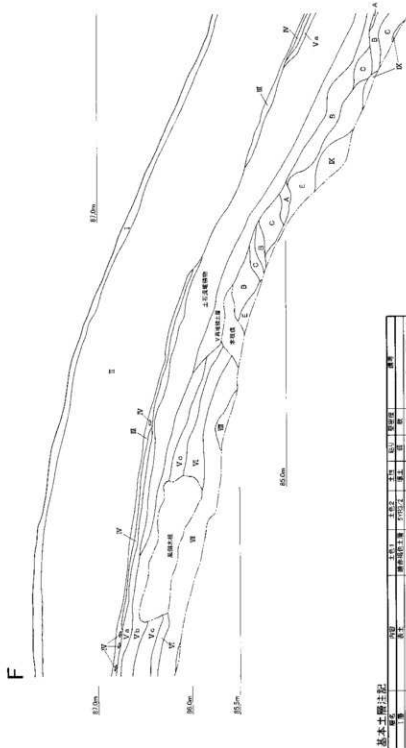


図1-10 土層断面(8)



基本土質調査記

調査箇所	調査内容	土質記号	土層厚	土質	調査方法	調査時期	調査者
調査箇所1	砂質土層下層に硬質層あり (R<E)	Vp	約0.5m	砂質土	手掘り	昭和47年6月13日(土曜) 14:00	佐藤 隆
調査箇所2	砂質土層 (R<E)	Vc	約0.5m	砂質土	手掘り	昭和47年6月13日(土曜) 14:00	佐藤 隆
調査箇所3	砂質土層 (R<E)	V	約0.5m	砂質土	手掘り	昭和47年6月13日(土曜) 14:00	佐藤 隆
調査箇所4	砂質土層 (R<E)	V	約0.5m	砂質土	手掘り	昭和47年6月13日(土曜) 14:00	佐藤 隆
調査箇所5	砂質土層 (R<E)	V	約0.5m	砂質土	手掘り	昭和47年6月13日(土曜) 14:00	佐藤 隆
調査箇所6	砂質土層 (R<E)	V	約0.5m	砂質土	手掘り	昭和47年6月13日(土曜) 14:00	佐藤 隆
調査箇所7	砂質土層 (R<E)	V	約0.5m	砂質土	手掘り	昭和47年6月13日(土曜) 14:00	佐藤 隆
調査箇所8	砂質土層 (R<E)	V	約0.5m	砂質土	手掘り	昭和47年6月13日(土曜) 14:00	佐藤 隆
調査箇所9	砂質土層 (R<E)	V	約0.5m	砂質土	手掘り	昭和47年6月13日(土曜) 14:00	佐藤 隆
調査箇所10	砂質土層 (R<E)	V	約0.5m	砂質土	手掘り	昭和47年6月13日(土曜) 14:00	佐藤 隆

土層記号	土層名	土層厚	土質	調査方法	調査時期	調査者
A	砂質土層	約0.5m	砂質土	手掘り	昭和47年6月13日(土曜) 14:00	佐藤 隆
B	砂質土層	約0.5m	砂質土	手掘り	昭和47年6月13日(土曜) 14:00	佐藤 隆
C	砂質土層	約0.5m	砂質土	手掘り	昭和47年6月13日(土曜) 14:00	佐藤 隆
D	砂質土層	約0.5m	砂質土	手掘り	昭和47年6月13日(土曜) 14:00	佐藤 隆
E	砂質土層	約0.5m	砂質土	手掘り	昭和47年6月13日(土曜) 14:00	佐藤 隆

図 I-11 土層断面⑨

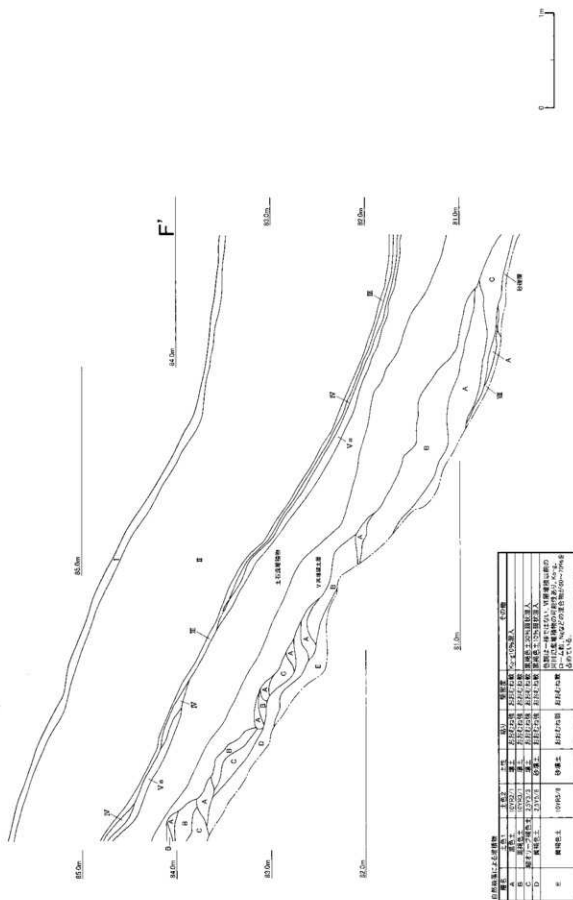


図 1-12 土層断面(四)

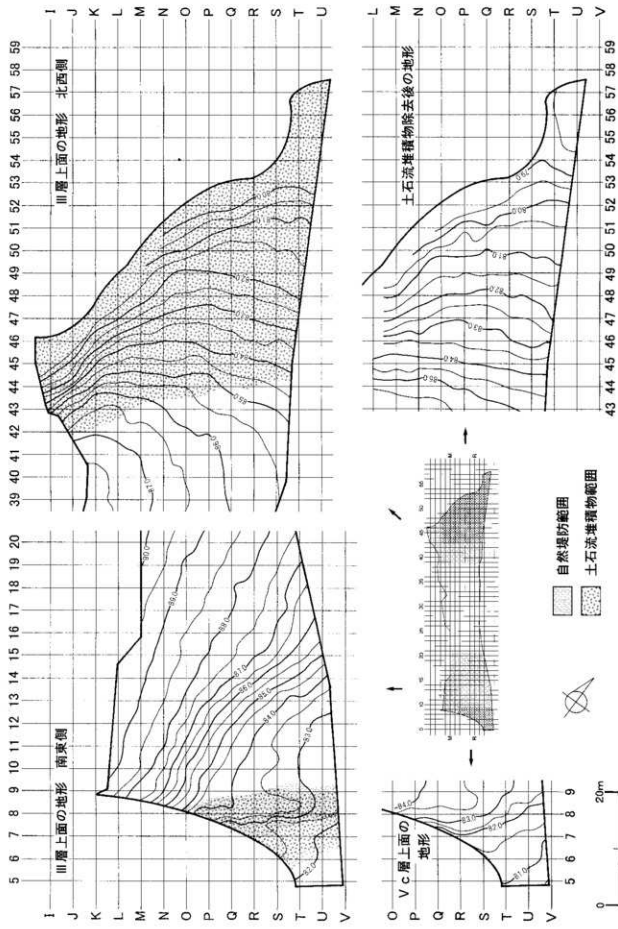


図1-13 土石流堆積物

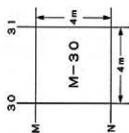
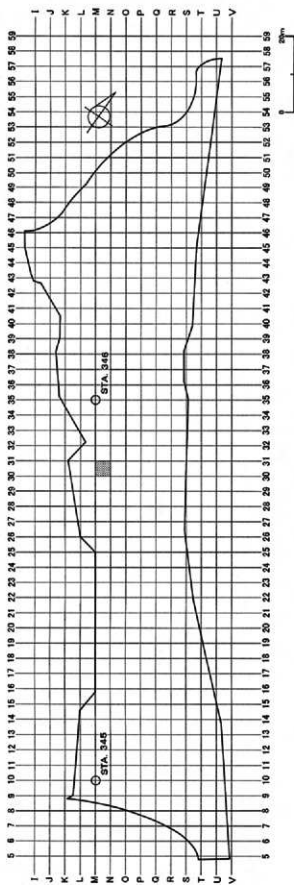


図1-14 グリッド設定図

この方眼の日本測地系による平面直角座標は第Ⅱ系で、以下のとおり。

STA. 345 (調査区杭番号 M-10) X=-212656.3036 Y=26653.9601

STA. 346 (調査区杭番号 M-35) X=-212575.7503 Y=26594.7095

また、測量法の改正に伴い、平成14年4月1日にそれまでの平面直角座標系(昭和43年建設省告示第3059号)は廃止され、新たに世界測地系に基づく平面直角座標系(平成14年国土交通省告示第9号)が施行された為、世界測地系による平面直角座標を併記しておく。なお、座標の変換には国土地理院のホームページで公開されている座標変換ソフト「TKY 2 JGD」を使用した。

この方眼の世界測地系による平面直角座標は第Ⅱ系で以下のとおり。

STA. 345 (調査区杭番号 M-10) X=-212399.8190 Y=26360.5732

STA. 346 (調査区杭番号 M-35) X=-212319.2659 Y=26301.3231

現地の基準杭等の設置測量及び水準測量(4級水準)は、北海道縦貫自動車道森南地区霞台工事により設置されたBMを基に実施した。BMの標高は86.489mである。

(2) 調査の方法

調査に当たっては、調査区を横断する町道の切り替え工事や、高速道路本線の工事工程との調整を図り、30ラインより北西側のI~Nライン間を優先的に着手することになった。

包含層調査

Ⅲ~Ⅵ層の遺物包含層は、調査区ごとに遺物の出土量、土層の変化を考慮して、必要に応じてジョレン、移植ごて、竹ベラなどを用いて人力により掘り下げた。Ⅶ層は、基本的にスコープで除去した。状況により重機で除去した場所もある。

遺構調査

包含層調査時に土層の変化によって確認された遺構については、その平面長軸と短軸に土層観察用のベルトを残して掘り下げた。小規模の遺構については長軸を土層観察面として、覆土を半割し調査した。また、Tピットの場合には短軸を土層観察面として半割、調査している。

遺物の取り上げ

包含層出土の遺物は、発掘区ごとに層単位での取り上げとした。必要に応じて、写真や出土状況図を作成した。遺構の覆土、床ないし坑底面出土の遺物は、図面、台帳等に出土位置を記録し、遺構単位で連続番号を付して取り上げた。ただし、調査状況によって、覆土から出土した遺物の一部には層位ごとの取り上げを行ったものもある。

(3) 整理の方法

現地では野外作業と並行して遺物の水洗、分類、遺物台帳作成、注記作業を行った。注記は小片や微細なものを除いた遺物に、遺跡名略号(上1)・遺構名または発掘区・層位名・遺物番号を記入した。また、土坑内と焼土付近の土壌についてフローテーション作業を行っている。二次整理作業で、土器の接合・復元、石器・礫の接合、土器・石器等の実測・製図、計測、集計、写真撮影、記録類の整理を行った。

(4) 遺物の分類

土器等

土器は便宜的に縄文時代早期をⅠ群、前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群、統縄文時代をⅥ群、擦文時代をⅦ群と分類した。この各群にアルファベットの小文字を組み合わせてより細かい時期区分を示した。前半をa類、後半をb類、あるいは前葉をa類、中葉をb類、後葉をc類としている。さらに算用数字を付記して細分したものもある。今回報告する資料には、Ⅱ群、Ⅲ群、Ⅳ群、Ⅴ群の土器がある。

Ⅰ群 縄文時代早期に属する土器群

本群はa、bの2類に細分される。

a類 貝殻文が施されるもの。

b類 縄文、燃糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文等の施されるもの。

(Ⅰ群は今回出土していない)

Ⅱ群 縄文時代前期に属する土器群

本群はa、bの2類に細分される。

a類 縄文の施された丸底、尖底を特色とするもの。(今回は出土していない)

b類 円筒下層式土器に相当するもの。

Ⅲ群 縄文時代中期に属する土器群

本群はa、bの2類に細分され、さらに細分される。

a類 円筒上層式土器に相当するもの。またはその系譜を引くもの。

a-1類 円筒上層a~c式に相当するもの。サイベ沢Ⅴ式に相当するもの。

a-2類 サイベ沢Ⅲ式に相当するもの。(今回は出土していない)

a-3類 見晴町式に相当するもの。

b類 榎林式、大安在B式、ノダツⅡ式、煉瓦台式に相当するもの。

b-1類 榎林式に相当するもの。

b-2類 大安在B式、ノダツⅡ式に相当するもの。

b-3類 煉瓦台式に相当ないしは併行するもの。(今回は出土していない)

Ⅳ群 縄文時代後期に属する土器群

本群はa~cの3類に細分され、さらに細分される。

a類 天祐寺式、涌元式、入江式、十腰内Ⅰ式に相当ないしは併行するもの。

a-1類 天祐寺式、涌元式に相当ないしは併行するもの。

a-2類 入江式に相当するもの(トリサキ式、大津Ⅶ群、白坂3式=木古内町新道4遺跡における盛土1類~5類に相当するもの)。十腰内Ⅰ式に相当ないしは併行するもの。

b類 ウサクマイC式、手輪式、鯨淵式に相当するもの。

b-1類 ウサクマイC式に相当するもの。

b-2類 手輪式に相当するもの。

b-3類 鯨淵式に相当するもの。

c類 堂林式、三ツ谷式、湯の里3式に相当するもの。(今回は出土していない)

Ⅴ群 縄文時代晩期に属する土器群

a類 大洞B式、上ノ国式に相当するもの。(今回は出土していない)

b類 大洞C₁式、大洞C₂式、聖山Ⅰ式に相当するもの。(今回は出土していない)

c類 型山Ⅱ式、大洞A式、大洞A'式に相当するもの。

Ⅳ群 統繩文時代に属する土器群

(Ⅳ群は今回出土していない)

Ⅴ群 擦文時代に属する土器群

(Ⅴ群は今回出土していない)

土製品 土器を除いた土製の加工品。

土偶、土製玉、三角板状土製品、円板状土製品などが出土している。

(影浦)

石器等

石器は、剥片石器類、礫石器類に大別し、器種ごとに分類した。

剥片石器類

石鏃：三角形のもの、木葉形や菱形のもの、有茎のもの、分類の困難な破片・未成品などがある。さらに三角形と有茎のものは凹基、平基、凸基がある。

石槍またはナイフ：有茎のもの、茎が明瞭にみられないもの、分類の困難な破片・未成品などがある。

石錐：素材の一部に刺突部を作り出したもの、棒状のもの、棒状のものにつまみ部をもつもの、分類の困難な破片・未成品などがある。

つまみ付ナイフ：片面全面加工のもの、周縁加工のもの、両面加工のもの、横型のもの、分類の困難な破片・未成品などがある。

スクレイパー：石べらと称されるもの、縦長剥片の下端部に刃部をもつもの、縦長剥片の側縁に刃部をもつもの、側縁に抉り入りがあり刃部とするもの、横長剥片の側縁に刃部をもつもの、素材の形状を大きく変えていないもの、分類の困難な破片・未成品などがある。

石核：剥片もしくは礫を素材とし、石器の素材としての目的が想定される大きさや形状の剥片を剥離した痕跡が、複数、ほぼ全面において観察されるもの。

原石：石器素材と成り得る礫の内、剥片の剥離がおこなわれていないか、不明瞭なもの。

フレイク：石核・石器から剥離されたもので、二次的な剥離を受けていないもの。

礫石器類

石斧：擦り切り手法によるもの、敲打により整形されたもの、打ち欠きにより整形されたもの、部分的に磨かれたもの、全面磨製のもの、分類の困難な破片・未成品などがある。

たたき石：棒状礫を素材としたもの、扁平礫を素材としたもの、円礫を素材としたもの、くぼみのあるもの、分類の困難な破片・未成品などがある。

すり石：断面が三角形の礫の稜を擦ったもの、円礫を素材としたもの、扁平な半円状の礫や礫を扁平な半円状に打ち欠き弦を擦りたいわゆる扁平打製石器、北海道式石冠と称されるもの、分類の困難な破片・未成品などがある。

砥石：研磨面に溝があるもの、研磨面が平滑かやや凹状で板状のものがある。

台石・石皿：礫を素材とし、敲打痕のみられるものを台石、擦痕が見られるもので、使用痕が凹状のものを石皿とした。

石製品：異形石器、玉類に分けている。

加工痕・使用痕のみられる礫

礫・礫片：加工痕・使用痕のみられない礫・礫片。被熱など有意と思われるものも含んでいる。

(谷島)

6. 調査結果の概要

遺跡は森町中心部から南へ約2km、森川の支流に挟まれた段丘上に立地する。それぞれの支流を境に南東側は森川2遺跡と、北西側は上台2遺跡と隣り合っており、便宜的に調査区南東側を支流1、北西側を支流2と呼称している。

今回調査した範囲はおおむね南東-北西方向に細長く伸び、長さ200m、幅40mである。この範囲における遺跡の標高は78~90mで、調査区の中央がもっとも高く、両端に近づくにつれて低くなっていく地形である。具体的には支流1に面した南東側の地形は河岸段丘と斜面、中央部は台地上の平坦面、支流2に面した北西側の地形は緩斜面と平坦面からなる。遺構・遺物は両支流に面した斜面部や平坦部において多く分布した。検出した遺構は竪穴住居跡1軒、土坑59基、Tピット5基、配石遺構2基、集石・礫集中4カ所、石囲い炉14基、焼土4カ所、フレイク集中4カ所、立石7基、柱穴状の小ピット78基である。すべて縄文時代のもので、大半が縄文時代後期前葉の構築と考えられる。縄文時代中期前半に属すると考えられる遺構も数基検出している。

遺物は46,540点出土した。遺構から7,817点（土器等3,953点、石器等1,197点、礫・礫片2,649点、自然遺物18点）、包含層から38,627点（土器等33,720点、石器等3,207点、礫・礫片1,692点、自然遺物8点）、このほかに排土・B調査試掘坑等から96点（土器71点、石器等13点、礫・礫片12点）が出土している。出土土器の約8割は縄文時代後期前葉のⅣ群a類であった。次いで縄文時代中期前半のⅢ群a類が1割強出土している。縄文時代晩期後葉のⅤ群c類が333点出土しているが、すべて包含層からの出土であった。一個体が潰れたままのような状態で出土したものが3カ所において見られ、これらは全て復元した。これら3個体だけで253点を数えている。晩期の土器はいずれも調査区南東の低位段丘部分で出土したものであるが、支流1をはさんだ対岸の森川2遺跡においても、同時期の土器が複数個体、同様の出土状況を示しているようである。

南東側の地区および中央部の概要

南東側を流れる支流1に面した地区では、竪穴住居跡1軒、土坑39基、Tピット5基、配石2基、集石・礫集中4カ所、石囲い炉5基、焼土2カ所、フレイク集中2カ所、立石7基、柱穴状の小ピット78基の遺構が検出された。これらの分布は、グリッドQラインと13ラインを結ぶ線よりおおむね支流1側の低位段丘部分、そこからグリッドNラインと15ラインを結ぶ線にかけての斜面部分、その上に続く台地の平坦部分とに分かれ、特に支流に近い低位段丘部分から斜面部分にかけての範囲で多く分布する。その内容は竪穴住居跡、土坑、フレイク集中、立石、柱穴状の小ピットなどである。

中央部になると遺構・遺物ともに数が減っていくが、Tピット5基は、すべてこの台地上で検出した。（影浦）

北西側の地区の概要

北西側を流れる支流2に面した地区では、土坑20基、石囲い炉9基、焼土2カ所、フレイク集中2カ所の遺構が検出された。これらの分布は、39~43ラインの高位の平坦面、43~49ラインの緩斜面、49~53ラインの低位の平坦面に分かれ、特に緩斜面と低位平坦面に多い。

高位の平坦面では、土坑が3基検出された。規模は異なるがいずれも礫を伴っている。

斜面では土坑10基、石囲い炉5基、焼土1カ所が検出された。土坑のうち時期の明確なものは、縄文時代中期前半のUP-20・28・45・46、縄文時代後期前葉のUP-4・6である。UP-20・28では坑底から北海道式石冠が、UP-45では坑底からⅢ群a類の円筒上層b式土器に伴って楕円形の明瞭な使用痕のある石皿と北海道式石冠が出土した。UP-20・28とUP-45・46はそれぞれ隣接して

検出されており、2基一組で構築された可能性がある。後期前葉に属するUP-6は竪穴状の掘り込みの内側に複数の土坑墓が構築されたと推測される遺構である。石囲いは後期のもので、US-5・10・3、US-10・11がそれぞれ等高線に沿って列をなすように分布している。

低位の平坦面では、土坑7基、石囲いが4基、焼土1カ所が、調査区北東側でまとまって検出された。時期の推測できるものには、縄文時代後期前葉のUP-14・25がある。2基は隣接しており、形態・規模・覆土堆積状況・遺物出土状況などに共通点がみられる。坑底付近がKo-gで埋め戻されることと、大量の礫が出土したことが特徴である。土坑墓と考えられ、2基一組で構築された可能性がある。

遺物の出土状況は、遺構分布の濃淡と同様の傾向がある。高位の平坦面から45ライン付近までは出土が少なく、45～53ラインの緩斜面から平坦面にかけて多く出土している。土器では、Ⅳ群a類が約80%を占めており、次いでⅢ群a類が15%出土している。Ⅳ群a類は低位の平坦面に特に集中しており、緩斜面の中間付近にも多い。Ⅲ群a類は低位の平坦面から更に下る急斜面、S-T-52・53の4グリッドに集中している。この範囲では、大量のⅢ群a類土器のほか北海道式石冠・扁平打製石器などの石器、逆Y字形を呈し貫通孔のある土製品（図N-25-175・176）などが出土しており、UFC-1・4もこの範囲内に位置している。これらは斜面に廃棄されたものと推測される。

(柳瀬)

表1-1 検出遺構数一覧

時期	遺構名	竪穴住居跡	土坑	Tピット	配石遺構	集石・ 礫集中	石囲い	焼土	フレイク集中	立石	柱穴状の 小ピット
縄文時代			3	1			1				
縄文時代前期後半			1								
縄文時代中期前半			5						2		
縄文時代中期前半あるいは後期前葉			10					1			
縄文時代後期前葉		1	38	4	2	4	13	2	2	7	78
縄文時代後期中葉											
縄文時代後期前～中葉			2								
縄文時代晩期後葉								1			
合計		1	59	5	2	4	14	4	4	7	78

表1-2 出土遺物一覧

分類	遺構	包含層・その他	合計
土器	Ⅲb	4	725
	Ⅲa	464	4,549
	Ⅳb	9	240
	Ⅳa	3,284	28,875
	Ⅳb	108	1,027
	Ⅳc	0	333
	土玉	0	2
	三角状土製品	0	8
	三角板状土製品	1	19
	円板状土製品	2	8
その他の土製品	0	2	
焼成粘土塊・粘土	1	3	
土器等合計	3,953	33,791	
石器	石鏃	12	142
	石鏃またはナイフ	3	10
	石鏃	1	12
	つまみ付きナイフ	3	15
	スクレイパー	22	138
	Ⅱフレイク	11	15
	Ⅲフレイク	11	31
	Ⅳフレイク	11	31
	Ⅳフレイク	11	31
	Ⅳフレイク	11	31
石製品	分銅	5	61
	原石	6	19
	フレイク(貫岩)	789	1,338
	フレイク(黒曜石)	91	146
	フレイク(その他)	111	745
	石片	5	43
	たたき石	25	146
	すり石	1	12
	扁平打製石器	13	57
	北海道式石冠	18	45
砥石	1	6	
台石・石皿	60	179	
加工痕のある礫	8	36	
三角柱状石製品	0	1	
三脚状石製品	1	2	
玉	0	1	
石製品合計	1,197	3,220	
礫	礫・礫片	2,649	1,704
	自然遺物等	18	8
	遺物合計	7,817	38,723

表1-3 出土遺物割合

	土器	土製品・ 焼成粘土塊	剥片石器	石核・原石	頁岩フレイク	その他のフレイク
点数	37,698	46	446	91	2,127	1,093
割合	81.00%	0.01%	0.96%	0.02%	4.57%	2.35%

	石斧・礫石器	石製品	加工痕のある礫	礫・礫片	自然遺物等	合計
点数	611	5	44	4,353	26	46,540
割合	1.31%	—	0.01%	9.35%	0.01%	100%

表1-4 出土土器割合

	Ⅱb	Ⅲa	Ⅲb	Ⅳa	Ⅳb	Vc	合計
点数	729	5,013	249	30,239	1,135	333	37,698
割合	1.93%	13.30%	0.66%	80.21%	3.01%	0.88%	100%

表1-5 出土石器割合

	石鏃	石槍または ナイフ	石錐	つまみ付き ナイフ	スクレイ パー	Rフレイク	Uフレイク	石斧
点数	154	13	13	18	160	26	62	48
割合	14.09%	1.19%	1.19%	1.65%	14.64%	2.38%	5.67%	4.39%

	たたき石	すり石	扁平打製 石器	北海道式 石冠	砥石	台石・石皿	加工痕の ある礫	合計
点数	171	13	70	63	7	239	36	1,093
割合	15.65%	1.19%	6.40%	5.76%	0.64%	21.87%	3.29%	100%

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と周辺の地形 (図II-1・2)

森町は内浦湾(噴火湾)に面する渡島半島のほぼ中央部に位置し、渡島管内茅部郡に属する。東側は駒ヶ岳(1,131m)山頂から押し出しの沢を境に砂原町と、南側は宿野辺川を挟んで大野町、七飯町と、南西側は渡島山地を分水嶺として厚沢部町と、西は茂無部川を挟んで八雲町と接し、北は内浦湾(噴火湾)に臨んでいる。町の面積は313.26km²。内陸部の山地は狗神岳(899.4m)、三九郎岳(802m)、二股岳(825.6m)などが連なり、東側に駒ヶ岳がそびえている。駒ヶ岳は有史以前から何度も大規模な噴火を繰り返してきた成層火山である。その火口原から上台1遺跡までの直線距離は10kmである。山頂部の東側には馬蹄形に開口した巨大火口が見られるが、これは1640(寛永17)年の山体崩壊をもとに激しい噴火の際に形成されたものである。

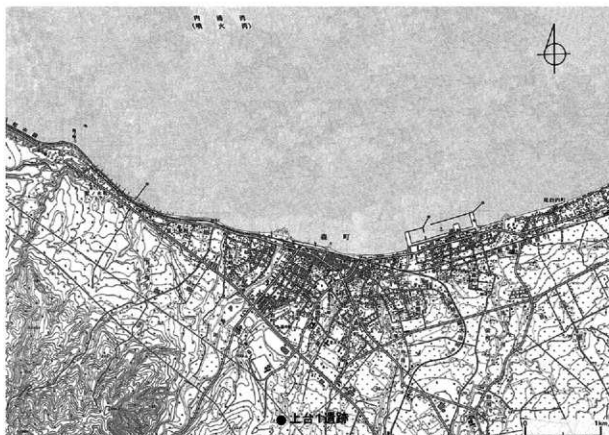
段丘地形は、北の茂無部川から桂川付近では標高70~120mの平坦面が海岸部まで続いて、桂川付近から尾白内川中流域にかけては標高20~50m及び標高70~120mの2つの平坦面がある。森町内の遺跡は標高10m程度の低位海岸段丘に立地する遺跡を除き、おおむねこの平坦面上に分布する。

上台1遺跡は森町中心部から南へ約2km、森川の支流に東西を挟まれた段丘上に立地する。便宜的に調査区南東側を支流1、北西側を支流2と呼称している。南東側は支流1を挟んで森川2遺跡と、北西側は支流2を挟んで上台2遺跡と隣り合っている。さらに森川2遺跡の東側は森川本流を挟んで森川4遺跡と森川3遺跡が隣接する。遺跡の現況は山林で、周辺にはミズナラ、トチノキ、クリ、カシワ、ホオノキ、ハルニレ、オシヨウなどが混交する落葉広葉樹林と、カラマツ、スギなどの造林地とが見られた。また、それらの林床にはマイヅルソウ、コウライテンナンショウ、オオアマドコロ、シロバナエンレイソウ、エンレイソウ、クマイザサ、ミヤコザサ、チシマザサ、イヌタデ、トクサなどが群生している。

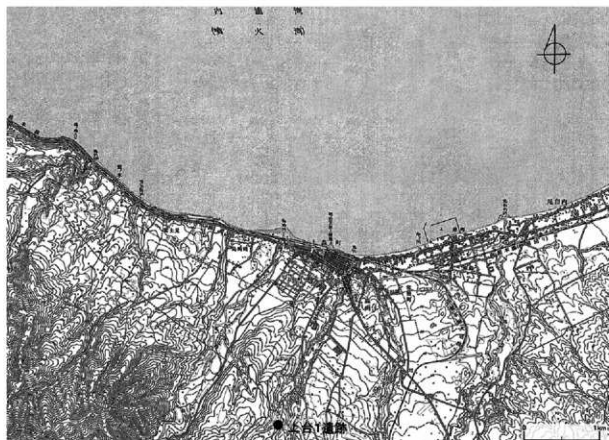
2 周辺の遺跡 (図II-3・表II-1)

平成17年3月現在、森町内では43カ所の遺跡が登載されている。1640(寛永17)年に噴火した駒ヶ岳の火山灰が厚く堆積しているため、北に隣接する八雲町に比べると確認されている遺跡の数は少なかったが、北海道縦貫自動車道建設工事に関連した所在確認調査によって新たに発見され、調査される遺跡も近年増加している。平成13年度に開始された高速道路建設にともなう森町内の一連の発掘調査は、町教育委員会による鷺ノ木4遺跡、鷺ノ木5遺跡を初めとし、当センターによる濁川左岸遺跡、倉知川右岸遺跡、森川3遺跡など継続中のものも含めて22遺跡が着手されている。これは森町内搭載遺跡数43カ所の約半分に相当する。うち鷺ノ木5遺跡は、平成15年度の調査で道内最大規模のストーンサークルと、これに隣接した堅穴墓城が発見されたことで注目を集めた。

遺跡の分布は、尾白内川中流域と七飯町との境界である宿野辺川流域に数カ所がある他は、森町市街地から茂無部川にかけての海岸段丘と内浦湾(噴火湾)にそそぐ河川沿いに集中している。この地域に分布する遺跡の時期は、縄文時代中期から後期のものが大半であるが、河川沿いの遺跡は、内陸部に向かって縄文時代後期を主体とするものが増加する傾向が見られる。統縄文時代以降の遺跡は、森町市街地の低位の海岸段丘に多い。縄文時代各期、統縄文時代、埴文時代、アイヌ文化期まで、各時期の遺跡の所在が知られているが、旧石器時代のものは今のところ見つかっていない。(影浦)



この図は、国土地理院 平成7年修正測量 平成8年7月1日発行 1/25,000「大磯島」を複製加筆したものである。



この図は、国土地理院 昭和32年測量 昭和40年3月30日発行 1/25,000「大磯島」を複製加筆したものである。

図Ⅱ-1 遺跡周辺の地形(1)

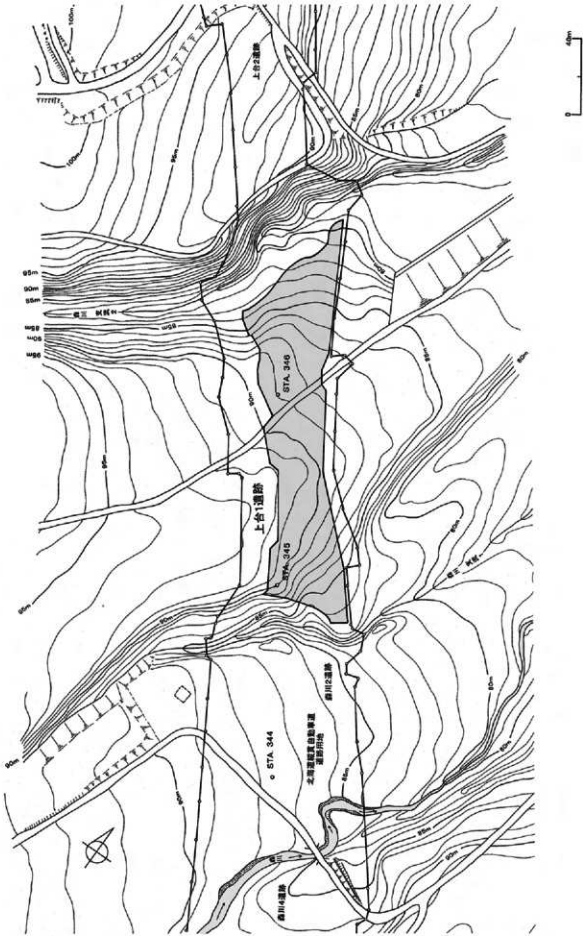


図 II - 2 遺跡周辺の地形(2)



この図は、春日役場の権設者国土地理院長の承認を得て同院発行の1/20,000地形図を元に平成11年に複製した「春日管内図」に測量加重したものである。

図 1-3 周辺の遺跡

表II-1 森町の遺跡一覧(1)

世帯番号	名称	種別	所在地	立地	標高(m)	時期(型式別名)	備考
1	姫川1遺跡	遺物包含地	字駒ヶ岳132-1~4	河岸段丘	167	縄文中期(円筒土層)	
2	姫川2遺跡	遺物包含地	字駒ヶ岳17-216、~217、~6	河岸段丘	112	縄文中期(円筒土層)	
3	白川遺跡	遺物包含地	字白川49-14	河岸段丘	48~50	縄文中・晩期・統縄文(恵山)・埴文	貝塚あり
4	川原貝塚遺跡	貝塚	森川町76~79ほか	低位海岸段丘	13~15	縄文早・前期・統縄文(恵山)・埴文・中近世	旧森川B遺跡
5	森川1遺跡	遺物包含地	森川町69-2ほか	低位海岸段丘	15~18	縄文前(円筒下層b)・中・後期・統縄文(恵山)	1982「森川A遺跡」森町教委 田森川A-C-D遺跡
6	森川2遺跡	遺物包含地	字西台34-1、35-2	台地	80~100	縄文前・中~晩期(聖山Ⅱ)・埴文・近世	2002 森町教委発掘調査 2004「森川2遺跡」森町教委
7	本内川右岸遺跡	遺物包含地	字石倉町610-7・8	台地	40~60	縄文中(円筒上層b、ノグップⅡ)・後期(天祐寺)・晩期・埴文	2003「森町本内川右岸遺跡」北理調報182
8	茂無部川右岸遺跡	遺物包含地	字石倉町610-2・5	台地	40~60	縄文中~後期	
9	尾白内貝塚遺跡	貝塚	字尾白内926、929-1ほか	低位海岸段丘	10~14	縄文晩期(大洞A)・統縄文(恵山)・埴文	1981「尾白内」、1993「尾白内2」森町教委
10	鳥崎遺跡	遺物包含地	鳥崎31-1、字富士見町1~3ほか	海岸段丘	15~30	縄文前~後期・中近世	1975「鳥崎遺跡」森町教委
11	蛙谷遺跡	遺物包含地	字蛙谷町146-1ほか	河岸段丘	30~32	縄文中(円筒上層)・後期	1971 森町教委発掘調査
12	赤井川1遺跡	遺物包含地	字赤井川229	丘陵	175~195	縄文中期(円筒上層)	旧赤井川A遺跡
13	赤井川2遺跡	遺物包含地	字赤井川229	丘陵	230~235	縄文中期	旧赤井川B遺跡
14	赤井川3遺跡	遺物包含地	字赤井川229	丘陵	210	縄文中期	旧赤井川C遺跡
15	オニウシ遺跡	集落跡	字上台町326-18	海岸段丘	25~35	縄文早(東銅器Ⅱ)~中期(円筒上層)	1977「森町オニウシ遺跡発掘調査報告書」
16	御幸町遺跡	遺物包含地	字御幸町132-2、字清澄3-1ほか	低位海岸段丘	8~20	縄文早・中(円筒上層)・後・晩期・統縄文・埴文	1985「御幸町」、1994「御幸町2」森町教委
17	清澄遺跡	遺物包含地	字清澄27、29-2	海岸段丘	33~39	縄文中期(円筒上層)・後期	旧校台遺跡
18	鷺ノ木1遺跡	遺物包含地	字鷺ノ木145-1ほか	海岸段丘	15~20	縄文中期(円筒上層)	
19	鷺ノ木2遺跡	台場跡	字鷺ノ木455ほか	海岸段丘	40	近世	
20	鷺ノ木3遺跡	遺物包含地	字鷺ノ木499-2ほか	河岸段丘	40~45	縄文中期(円筒上層)・統縄文(恵山)	
21	鷺ノ木4遺跡	集落跡・配石遺構・墳墓	字鷺ノ木506~510	河岸台地	45~50	縄文早~中(円筒上層)・後・晩(タンネトウL)・統縄文(恵山)	2001~03 森町教委発掘調査
22	濁川左岸遺跡	集落跡	字石倉町401、446-1、448	河岸段丘	40~50	縄文前(円筒下層)・中(円筒上層)・後期前葉(兩元式・トリサキ式・大津貝群)・統縄文(恵山)	2001、~02 道理文調査 2003「森町濁川左岸遺跡-B地区」北理調報190 2004「森町濁川左岸遺跡-A地区」北理調報208 2004道理文調査
23	本茅部1遺跡	遺物包含地	字本茅部町205、272~274、294	海岸段丘	80~85	縄文前(円筒下層)・中(円筒上層・見晴町)・晩期(大洞C2)・中近世	2003「森町本茅部1遺跡」北理調報191、2004「森町本茅部1遺跡2」北理調報199
24	栗ヶ丘1遺跡	遺物包含地	字栗ヶ丘38~44	河岸段丘	35~45	縄文早~晩期・統縄文	2001、~02 森町教委発掘調査 2004「栗ヶ丘1遺跡」森町教委
25	倉知川右岸遺跡	集落跡	字栗ヶ丘7、11-1・2	丘陵	75~80	縄文早・前・中(円筒上層・サイベツ貝)・後期(トリサキ)	2004「森町倉知川右岸遺跡」北理調報196
26	森川3遺跡	集落跡	字森川町317-1・7	丘陵	100	縄文前・中・後期・統縄文(恵山)・近世(須跡)	2002~04 道理文発掘調査
27	上台1遺跡	遺物包含地	字上台33-1、42-1、364	丘陵	90	縄文前(円筒下層d)・中(円筒上層b)・後(トリサキ・大津貝群・手堀)・晩期(聖山Ⅱ)	2003 道理文発掘調査 2005「森町上台1遺跡」北理調報217(本報告)
28	鷺ノ木5遺跡	環状列石・墳墓	字鷺ノ木503-1、495-4・5	河岸段丘	70	縄文早~晩期・統縄文	2003 森町教委発掘調査
29	石倉1遺跡	遺物包含地	字石倉町395~397、403、404、439	丘陵	30~40	縄文早・中・後期・統縄文	2002、~03 道理文発掘調査

表Ⅱ-1 森町の遺跡一覧(2)

登録番号	名称	種別	所在地	立地	標高(m)	時期(型式略名)	備考
30	森川4遺跡	遺物包含地	字森川町317-18	低位河岸段丘	90	縄文前(円筒下層)・中(円筒上層)・後(トリサキ・手稲)・晩期(聖山Ⅱ)	2003 道埋文発掘調査 2005『森町森川4遺跡』北埋調報218
31	上台2遺跡	集落跡	字上台町326-5	河岸段丘 ～緩斜面	90~100	縄文早～晩期・近世(御跡)	2003,-04, 道埋文発掘調査 2005『森町上台2遺跡』北埋調報216
32	石倉2遺跡	集落跡	字石倉町146, 623-1・3・4、 624-1, 306	高位河岸段丘	60~75	縄文中(榎林)・晩期(聖山Ⅱ)	2004『森町石倉2遺跡』北埋調報197
33	石倉3遺跡	遺物包含地	字石倉町482, 483, 490	河岸段丘	65~75	縄文後期(天祐寺・トリサキ)	2004『森町石倉3遺跡・石倉5遺跡』北埋調報205
34	石倉4遺跡	遺物包含地	字石倉町511, 520, 521	河岸段丘	60	縄文前(円筒下層)・中期(円筒上層・大安在B)	2004 道埋文発掘調査 2005『森町三次郎川左岸遺跡・石倉5遺跡②・石倉4遺跡』北埋調報219
35	森川5遺跡	遺物包含地	字森川町317-7・8, 318-1	丘陵	110	縄文早～後期・近世	2004 森町教委発掘調査
36	石倉5遺跡	遺物包含地	字石倉町512, 513, 519	河岸段丘	55~60	縄文前(円筒下層)・後期(トリサキ)・純縄文(恵山)	2003,-04, 道埋文発掘調査 2004『森町石倉3遺跡・石倉5遺跡』北埋調報205 2005『森町三次郎川左岸遺跡・石倉5遺跡②・石倉4遺跡』北埋調報219
37	三次郎川右岸遺跡	遺物包含地	字石倉町513, 516	河岸段丘	40~47	縄文前～後期・純縄文	2003,-04, 道埋文発掘調査
38	三次郎川左岸遺跡	遺物包含地	字石倉町610-24	河岸段丘	35~50	縄文前(円筒下層)・後期・純縄文(恵山・後北)	2003,-04, 道埋文発掘調査 2005『森町三次郎川左岸遺跡・石倉5遺跡②・石倉4遺跡』北埋調報219
39	鷺ノ木7遺跡	遺物包含地	字鷺の木町397-1ほか	尾根	60	縄文中～後期	2004 森町教委発掘調査
40	鷺ノ木川右岸遺跡	遺物包含地	字鷺の木町396	台地	60	縄文	
41	蛭谷2遺跡	遺物包含地	字蛭谷町281	台地	80	縄文	
42	駒ヶ岳1遺跡	遺物包含地	字駒ヶ岳228-10	小阿川左岸	185	縄文早期	2004 森町教委発掘調査
43	駒ヶ岳2遺跡	遺物包含地	字駒ヶ岳470-5	小阿川左岸	177	縄文	

Ⅲ 遺構の調査とその遺物

遺構は住居跡1軒、土坑59基、Tピット5基、配石2基、集石・礫集中4カ所、石囲い炉14基、焼土4カ所、フレイク集中4カ所、立石7基、柱穴状の小ピット78基が検出された。すべて縄文時代のものである。遺構の名称にはTピット・立石を除いて、上台の「U」を冠した。

調査範囲は森川の支流に挟まれた標高78～90mの台地上であるが、遺構は主に両側の支流に向かって緩斜面および低位段丘部分において集中する。調査区中央の平坦部分についてもTピットやいくつかの土坑などが検出されたが、数は多くない(図Ⅲ-1～3)。

検出遺構の構築時期は覆土内の遺物出土状況から大半が縄文時代後期前葉に属すると考えられる。ほかに縄文時代中期前半に属する遺構も数基検出している。(影浦)

1. 住居跡

1軒検出した。径が4mを越え、中央部で石囲い炉を検出したことから、住居跡としたものである。しかし、単独の検出であることや、周囲に分布する墓と見られる土坑群や立石とほぼ同時期のものである可能性があることから、祭祀的な性格が考えられる。なお、自然地形の扱いとなった欠番遺構(UH-1～3)があったことから、遺構番号はUH-4となっている。

UH-4 (図Ⅲ-4～8 図版2・28・32・33)

位置・立地：R-9・10、S-9・10 標高83.2～82.7mの段丘平坦面。

規模：4.14m/4.28m×3.80m/3.70m×(0.34～0.70)m

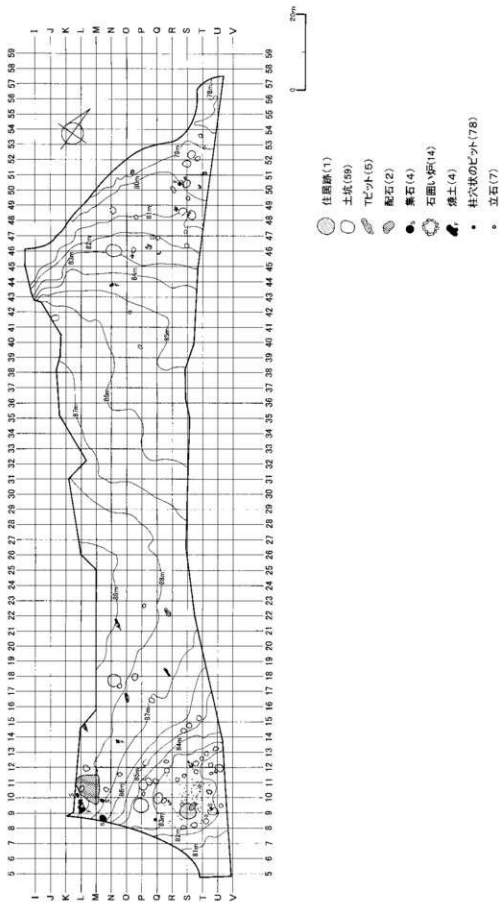
平面形：ほぼ円形

確認・調査：試掘坑の壁面を精査した際に黒色土の落ち込みが確認された。周囲を平面で精査し、トレンチを掘削した結果、壁の立ち上がりが確認され、中央部で石囲い炉も検出した。残りの覆土を掘り下げたところ、掘り込みはおおむねⅡ層下位、一部はⅢ層に達していた。また、浅い周溝が幅60cm程度で床面を3分の2周ほど巡ることも判明した。床面は東側から西側へ若干傾斜しており、柱穴状の穴の跡も何カ所かに表れたが、半截したところ、ほとんどが深さ10cmにも満たないものであった。この状況から本来の床面は少し上にある可能性が考えられたが、ベルトの再精査では周溝付近を除いて単層(覆土1)としてしか認識することができなかった。しかし、中央で検出された石囲い炉の上半が、熱を受けて赤化しており、この線が生活面であると判断された。一度できた竪穴の埋没過程において、くぼみを再利用して住居が構築されたと考えられる。土層観察では確認できなかったが、風倒木痕など自然のくぼみを利用した可能性もある。

覆土：周溝部分を除いて、ほぼ単層として観察されたが、基本土層における流れ込み土と類似することから、自然埋没した可能性が考えられる。

床・壁：壁はほぼ垂直に立ち上がるが、部分的にオーバーハングしているところもある。床には周溝が巡らされていた。周溝は南側が標高82m40cm前後と深く、北側が標高82m70cm前後と浅い。

付属遺構：柱穴状ピットは遺構内に13カ所、遺構外に2カ所、計15カ所を検出した。本遺構の周辺では柱穴状の小ピット(USP)が75基検出されているため、遺構外の2カ所については、この住居跡に伴うものではない可能性もある。HP-1は検出面からの掘り込みが浅いが、検出時に床面を見出



図III-1 遺構位置図(1)

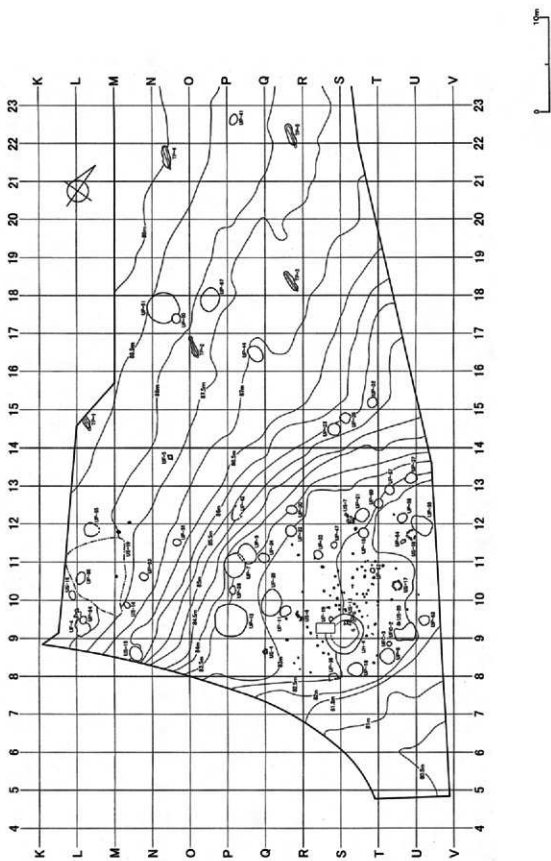
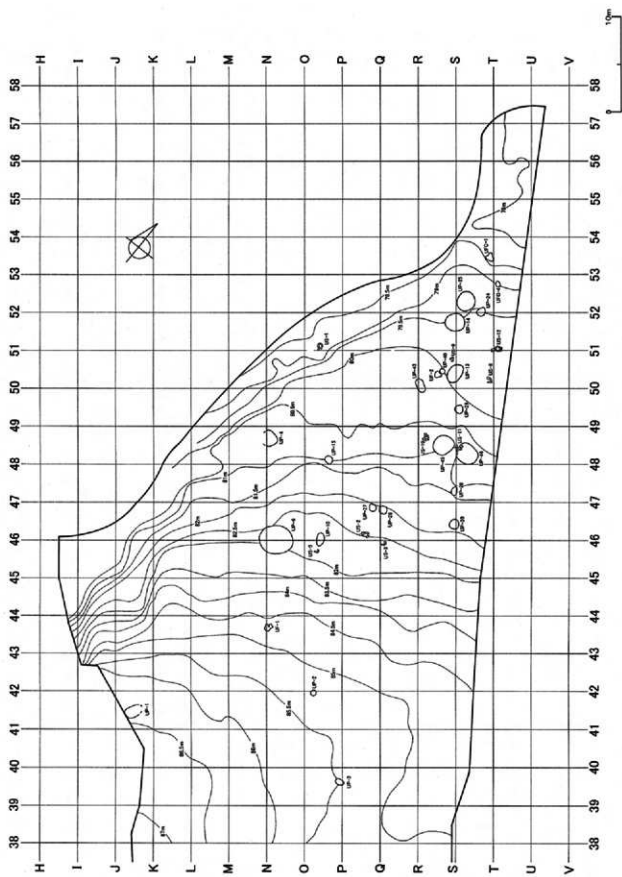
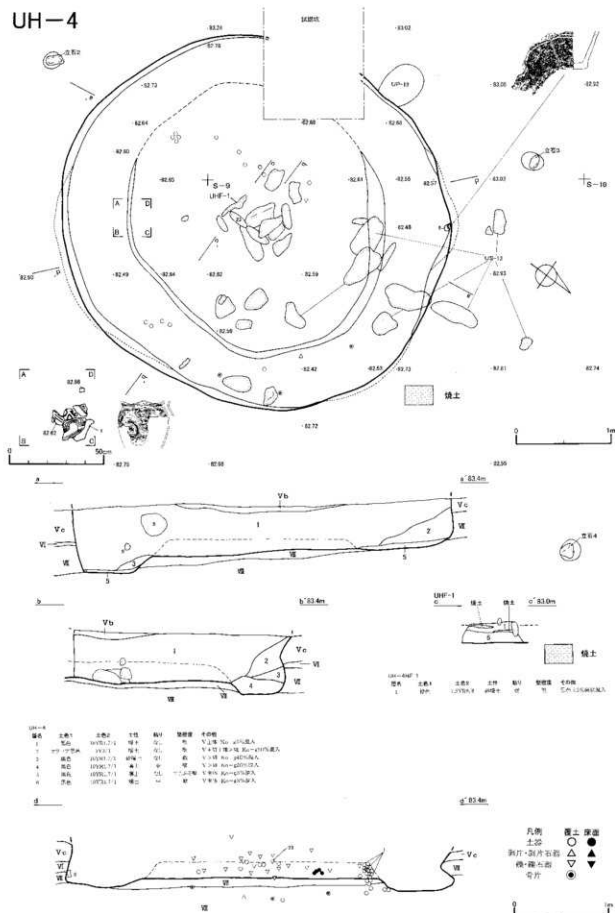


図 III-2 遺構位置図(2)



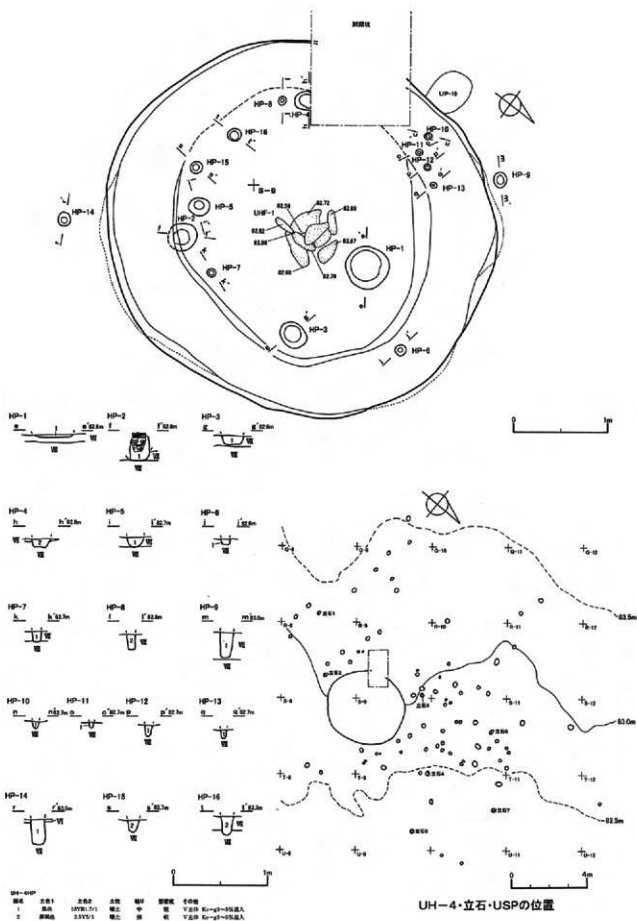
図III-3 遺構位置図(3)

UH-4



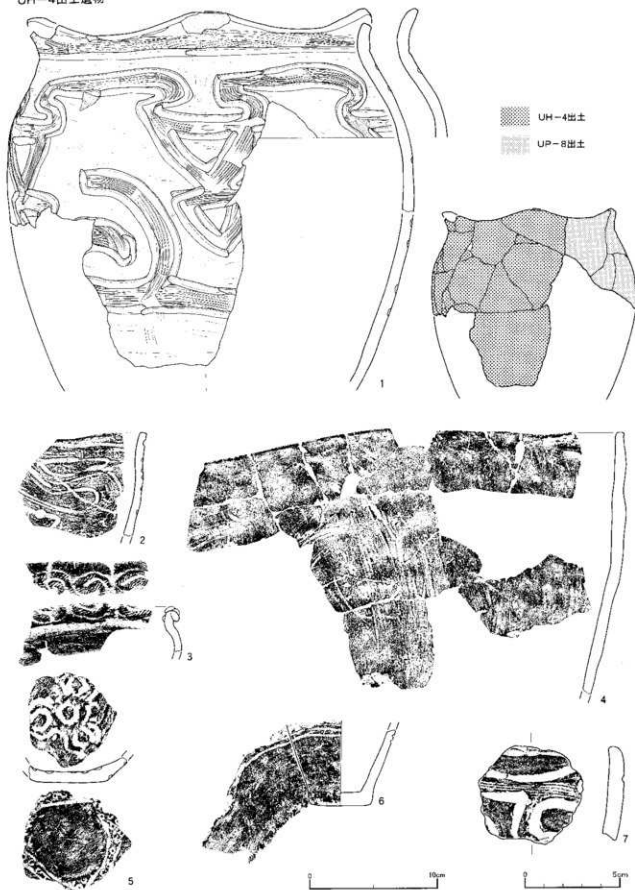
番号	土層1	土層2	土層	層別	壁層	平均値
1	褐色	1000.7-1	粘土	CL	赤	V 400 赤 200-400 赤土
2	砂	1000.7-2	粘土	CL	赤	V 400 赤 200-400 赤土
3	褐色	1000.7-3	粘土	CL	赤	V 400 赤 200-400 赤土
4	褐色	1000.7-4	粘土	CL	赤	V 400 赤 200-400 赤土
5	褐色	1000.7-5	粘土	CL	赤	V 400 赤 200-400 赤土

図 III-4 UH-4(1)

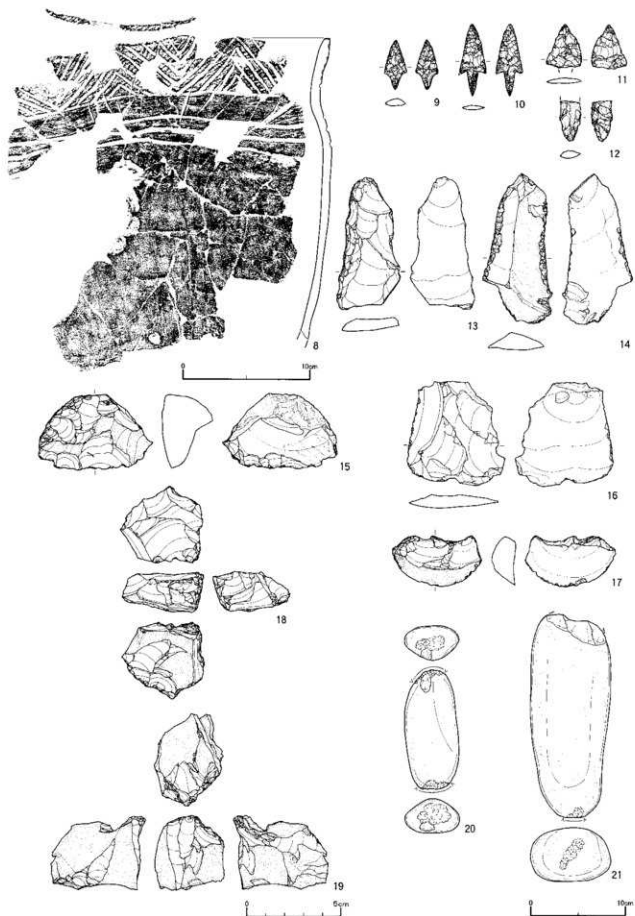


図III-5 UH-4(2)

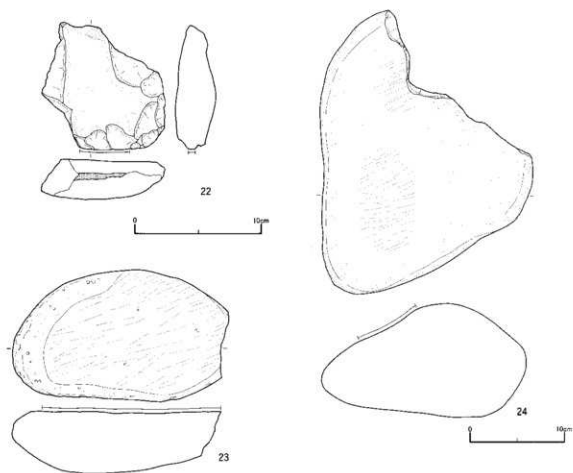
UH-4出土遺物



図Ⅲ-6 UH-4の遺物(1)



図Ⅲ-7 UH-4の遺物(2)



図Ⅲ-8 UH-4の遺物(3)

だせず実際より相当掘り下げてしまった可能性があるため、支柱穴と判断される。径は48cm。HP-10～13は杭状である。屋根を支える柱とは違う用途が考えられる。他に、Ⅳ群a類土器の口縁部を検出した付属遺構（HP-2）が1基ある。

遺物出土状況：土器（Ⅲa 9点・Ⅳa 1,058点・Ⅳb 3点）1,070点、土製品1点、石器（石鏃4点・スクレイパー3点・Uフレイク4点・石核2点・フレイク81点・石斧1点・たつき石2点・扁平打製石器1点・台石4点）102点、礫・礫片39点、計1,212点が出土している。この他に付属遺構のHP-2からⅣ群a類、大津Ⅶ群の土器片が11点出土した。全体としては台石サイズの扁平礫が比較的多く出土した。本遺構に伴う遺物として、西側の壁際で出土した小型土器（図Ⅲ-6-6）と、HP-2から出土した大津Ⅶ群の口縁から胴部にかけての土器片のまとまり（図Ⅲ-6-1）がある。覆土内から相当数出土した細かい土器片やフレイク類は、ほとんど埋没過程における流れ込みと考えられる。周溝部の一番低いところでは微細な骨片や炭が出土した。これらについては、雨などで冠水したときに、床面や石囲い炉にあったものがフローして溜まった痕跡ではないかと考えられる。

時期：付属遺構（HP-2）から出土した土器から、縄文時代後期前葉後半である。覆土で採取した炭化物の放射性炭素年代の測定結果は補正年代で3360±40、3570±40の値が得られている。

遺物：土器 いずれもⅣ群a類。1～7は大津Ⅶ群に相当する。8は白坂3式相当である。1・2は櫛歯状沈線文が施されたもの。1は流水文風の文様。北側に隣接する墓坑UP-8出土の土器と接合した。3は口唇上に粘土紐が蛇行して貼付けられたもの。4は器面調整の粗い無文土器。ヘラ状工具の痕が器面に残るが、あるいは沈線一度描いた文様をなで消したものかもしれない。5・6は底部片。5は中空の工具による刺突文が施されたもの。内面にはカニのハサミ状文が放射状に描かれている。7は円板状土製品。8は口唇断面が角型。口唇上にも縄文が施文されている。（影浦）

石器 9～12は石鏃。9・10は有茎。10は凹基で尖頭部の左側縁は急角度。11は茎部を欠く。12は茎部片。赤色頁岩を素材とする。13～15は頁岩を素材としたスクレイパー。13・14は側縁に、15は厚めの剥片の下側縁に刃部がある。16・17はUフレイク。16は側縁に、17は下側縁に使用痕がある。18・19は石核。残された剥離痕から大きなフレイクは取られていないようである。19は磨理面が多い。20・21はたつき石。20は両端に21は一端に敲打痕がみられる。22は扁平打製石器。半分欠損している。残存する下側縁にわずかな擦痕がみられ、破損以前の被熱の痕がある。23・24は台石。23は中央がへこみ、擦痕がみられる。24は図の下側縁が被熱している。20～24は安山岩製。（谷島）

2. 土坑

59基検出した。森川の支流に面した調査区両端の緩斜面および低位段丘部分に集中する傾向があり、中央の平坦な台地上ではあまり多くない。

南東側支流に面した低位段丘から斜面地形にかけての部分では31基を検出した。うち時期の特定できるものは28基あり、いずれも縄文時代後期前葉のものであった（UP-59は後期中葉の可能性もある）。墓の可能性が考えられている土坑は23基で、他8基は性格不明である。23基のうち13基がくびれの弱いフラスコ状の土坑であった。確認面の長径が1m前後のものが多く、これらは遺構同士が近接しながらも重複しない。遺物の出土状況であるが、坑口部中央に被熱礫・礫片や台石、土器片等の遺物がまとめて検出する傾向が一部において窺われた（UP-8・16・21・59）。

調査区中央の台地上では8基を検出した。おおむね縄文時代後期前葉の構築と推測されるが、検出遺物が少なく、性格不明なものが多い。坑底壁際に杭穴状の小ピットが6カ所巡り、墓の可能性が想定される土坑（UP-67）が1基ある。

支流2を挟んで上台2遺跡と隣接する北西側の低位段丘から斜面地形の部分においては20基を検出した。縄文時代中期前半と考えられる土坑が5基（UP-20・28・29・45・46）、後期前葉と考えられる土坑が4基（UP-4・6・14・25）。他、縄文時代中期前半から後期前葉の可能性のあるものが10基（UP-1～3・10・15・24・26・27・40・43）、後期前葉から中葉の可能性のあるもの1基（UP-13）がある。このうち墓の可能性が考えられるのは8基（UP-4・6・14・20・25・28・45・46）が数えられる。中期ではUP-20・28・45・46の4基、後期前葉ではUP-4・6・14・25の4基に墓の可能性がある。竪穴状の掘り込みの内部に複数の墓坑が構築された例（UP-6＝後期）や、竪穴状の例（UP-45・46＝中期、UP-4＝後期）などが見られ、南東側の地区とは様相が異なる。くびれの弱いフラスコ状土坑と見られるものは、性格不明のものを加えて5基（14・25・28・29・43）を数える程度であった。（影浦）

UP-1（図Ⅲ-9 図版3）

位置・立地：J-41 標高86.9m。台地の縁の平坦面。

規模：(1.68)m/(1.50)m×1.10m/1.02m×(0.46)m

長軸方向：N-36°-E **平面形：**長楕円形

確認・調査：調査区の南壁を精査したところ黒色土が落ち込んでいる場所を確認した。壁の奥(南側)へ調査範囲を2mほど拡張し、周囲を面的に掘り下げたところ、Vc層の中位において、多量の礫を出土した。礫は大小様々あったが、人頭大の不規則な円礫が比較的多く、焼けているものもいくつか目についた。礫のまとまりを中心に引き続き周囲を精査したが黒いまとまりはあまり明瞭には現れなかった。風倒木痕の落ち込みに礫を投げ入れた集石と考えられたが、礫を図化・撮影後、いくつかを取り上げ、改めて礫の分布の長軸に沿って半截してみたところ、壁と平坦な坑底面が検出された。坑口部に集石をとまなう性格不明の土坑である。

覆土：人為的な埋め戻しによる。

坑底・壁：坑底はⅢ層上面で、ほぼ平坦である。壁は長軸方向では緩やかに、短軸方向では急に立ち上がる。

遺物出土状況：礫・礫片が31点出土している。加工痕が観察されるものは1点も見られなかった。うち9点が被熱礫である。坑口部から覆土中位にかけて、密にかたままって出土した。地形的に台地の縁

に位置するが、遺構の範囲外、地形的にやや下がった場所にも同様の礫が何点か広がっているのが確認された。上面の礫は露出していた可能性がある。自然の営為で、斜面下に落ちた礫もいくつかあったと考えられる。礫は一番重いもので54kg、一番軽いもので1.65kg。総重量は287.64kgであった。

時期：周辺の遺物出土状況から、縄文時代中期前半あるいは後期前葉と推測される。（影浦）

UP-2（図Ⅲ-9 図版3）

位置・立地：O-41・42 標高85.6m付近の平坦面

規模：0.55m/0.42m×0.54m/(0.36)m×0.14m

平面形：円形

確認・調査：Ⅱ層上面で検出した。それ以前にO-41区Vc層から人頭大の礫が出土しており、UP-2に関連する可能性がある。性格は不明である。

覆土：Vc層に類似する。

坑底・壁：坑底は平坦で、Ⅱ層まで掘り込まれている。立ち上がりは緩やか。

遺物出土状況：覆土から、安山岩のフレイクが2点、礫が1点、計3点出土した。

時期：周辺の遺物出土状況から、縄文時代中期前半あるいは後期前葉と推測される。（柳瀬）

UP-3（図Ⅲ-9 図版3）

位置・立地：O-39 標高85.9mの平坦面。

規模：0.86m/0.70m×0.60m/0.50m×(0.18)m

長軸方向：N-89°-E 平面形：楕円形

確認・調査：Vc層下位を掘り下げ中、扁平礫と円礫が並んで出土した。周囲を精査したところ礫を中心に遺構の平面形を確認したので、半截した。その結果、最初に出土した礫の下にも礫が2つあり、中央部に4つの礫を配置した土坑であることが判明した。性格は不明。

覆土：覆土は単層であるが、礫の出土状況から人為的な埋め戻しと考えられる。

坑底・壁：皿状の土坑である。坑底はⅡ層内である。坑底面は平坦で、壁は直線的に開く。

遺物出土状況：石器（台石1点・石皿1点）2点、礫片3点、計5点が出土している。5点中4点は覆土の中央部において検出したもので、台石と石皿は上下に重なりあっていた。

時期：周囲の遺物出土状況から、縄文時代中期前半あるいは後期前葉と推測される。（影浦）

UP-4（図Ⅲ-10 図版3・33）

位置・立地：M-N-48 標高81.4m付近の平坦面

規模：(1.64)m/(1.19)m×(0.97)m/(0.61)m×0.52m

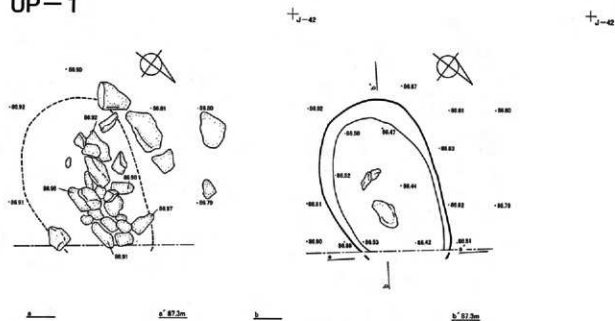
長軸方向：N-63°-W 平面形：隅丸方形？

確認・調査：M-48区とN-48区との境界の壁面で暗オリーブ褐色土主体の落ち込みを検出した。N-48区を平面的に掘り下げ、Vc層下位～Ⅱ層上面で平面形を確認した。トレンチ調査で坑底・壁を検出し、土坑と確認した。性格は、覆土が埋め戻しと推測されることから墓坑の可能性がある。

覆土：Ko-gが非常に多く含まれており、埋め戻しと推測される。

坑底・壁：坑底は平坦で、Ⅱ層上面付近まで掘り込まれている。立ち上がりは緩やかで、壁は外傾する。

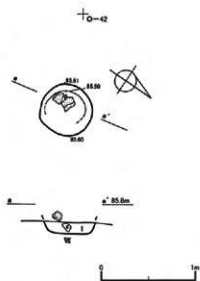
UP-1



UP-1

層名	土色1	土色2	土質	層厚	層位	層位	層位	層位	層位	層位
1	赤色	1F92/2	硬土	0	層	V>III	Ka-g	砂状腐植土層		
2	暗褐色	1F92/2	硬粘土	6.1	層	V=III	Ka-g	砂状腐植土層		
3	黄褐色	1F93/2	硬土	層	V<II	砂	V=III	砂		

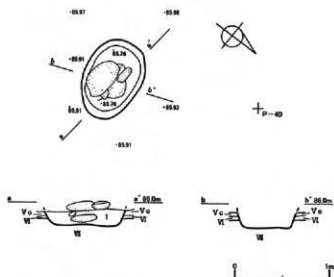
UP-2



UP-2

層名	土色1	土色2	土質	層厚	層位	層位	層位	層位	層位	層位
1	赤色	1F92.1/2	硬土	層	層	Vc	Ka-g	砂状腐植土層		

UP-3



UP-3

層名	土色1	土色2	土質	層厚	層位	層位	層位	層位	層位	層位
1	赤色	1F92.1/2	硬土	層	層	Vc	Ka-g	砂状腐植土層		

図 III-9 UP-1・2・3

遺物出土状況：土器（Ⅳa）5点、石器（つまみ付きナイフ1点、台石1点）2点、礫・礫片2点、計9点が出土した。このうち、台石（3）とⅣ群a類土器の口縁部破片（1）は覆土上面から、つまみ付きナイフ（2）は坑底直上から出土したものである。

時期：出土遺物から、縄文時代後期前葉である。 （柳瀬）

遺物：土器 1はⅣ群a類。口縁部に2条の貼付文が施されている。貼付文と体部地文でLR原体の回転方向を変えて羽状縄文にしている。 （影浦）

石器 2は頁岩を素材としたつまみ付きナイフ。外湾部の刃部は鋭利で内湾部の刃部は直角に近い。3は安山岩を素材とした台石。両面に擦痕、周縁部に敲打痕がみられる。 （谷島）

UP-6（図Ⅲ-11～14 図版4・5・28・34）

位置・立地：M-N-45・46 標高83.2m～83.6m付近の斜面の中間、やや平坦な部分

規模：3.48m/3.08m×3.00m/2.34m×0.66m

長軸方向：N-54°-E **平面形**：楕円形

確認・調査：25%調査の際、M-46区Ⅷ層上面で部分的に検出した。調査区境界に沿ってトレンチ調査を行い、坑底・壁を確認した。その後、周辺の土石流堆積物を重機で除去し、M-N-45・46区Vc層中位で、楕円形の平面形と、その北～北東端に分布する集石を検出した。この面を掘り込み面と判断し、トレンチ調査を行ったところ、竪穴状の掘り込みと、掘り込みの中央付近と南西端に位置する付属土坑を確認した。規模・形状から竪穴住居跡と想定した。

覆土の中位付近で人頭大の礫・台石が3点出土、坑底ではⅣ群a類土器・台石・フレイクなどが出土し、PP-1～5が検出された。PP-1・2・4はトレンチ調査の際から確認されたもの、PP-3は覆土中位で出土した人頭大の礫の下位から検出されたものである。これらの付属土坑について、土層断面a-a' a-b' c-c'の観察により、坑底から掘り込まれていること、埋め戻しと推測されること、平面的には検出できなかったが、断面からはマウンド状の堆積が存在した可能性があることを確認した。付属土坑のうち、PP-1～3は土層の堆積状況と遺物の出土状況から墓であると推測された。当初は平面形や規模から竪穴住居跡と想定したが、調査の結果、竪穴状の掘り込みの内部に複数の墓坑が構築された遺構であると判断した。

覆土：竪穴の覆土は大きく4層に分層した。土層2はVc層に相当し、自然堆積である。この上位に堆積している土層1は色調やKo-gの混入が多いことから、他遺構の掘上土などの可能性がある。土層3・4は、自然堆積と埋め戻しの双方の可能性が想定でき、断定できなかった。検出面において土層3に作られた集石が検出されていること、覆土の中層にあたる土層3上面から複数の礫が出土していることから、人為堆積の可能性が考えられる。この場合、集石は竪穴を埋め戻した際の目印などと推測される。しかし、堆積形状からは自然堆積の可能性もあり、その場合、検出面の集石はUP-6には伴わないこととなる。土層断面b-b'の土層8～19は、それぞれ付属土坑に関わる土層である。

なお、遺物の取り上げ層位は、取り上げ「覆土1」は断面図土層1に、「覆土2」は土層2に、「覆土3」は土層3に相当する。

坑底・壁：坑底はほぼ平坦で、斜面上方にあたる南東側ではⅧ層上位まで、斜面の下方にあたる北西側ではⅧ層まで掘り込まれている。Ⅷ層が露出する北西半では脆弱である。立ち上がりは緩やかで、壁は外傾する。

UP-4

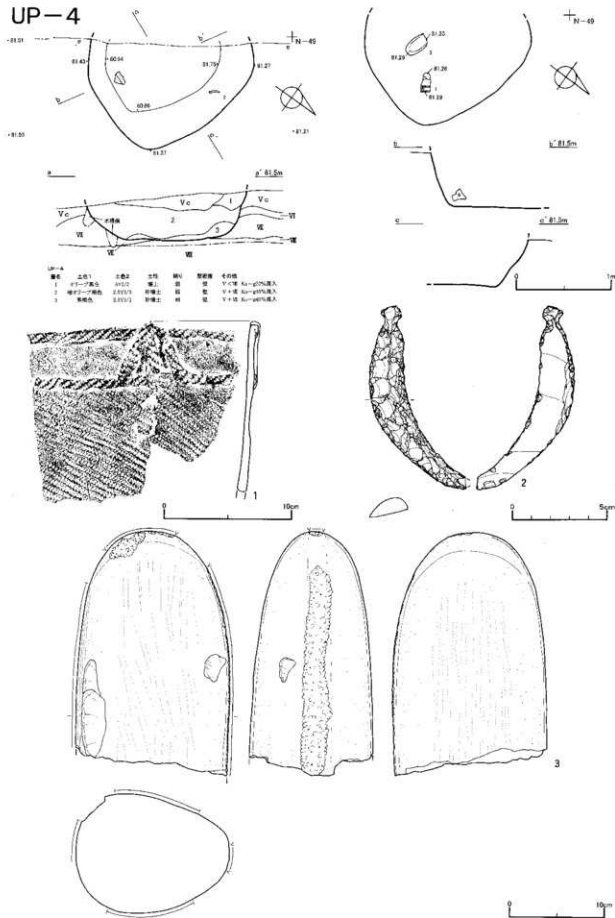


図 III-10 UP-4

UP-6

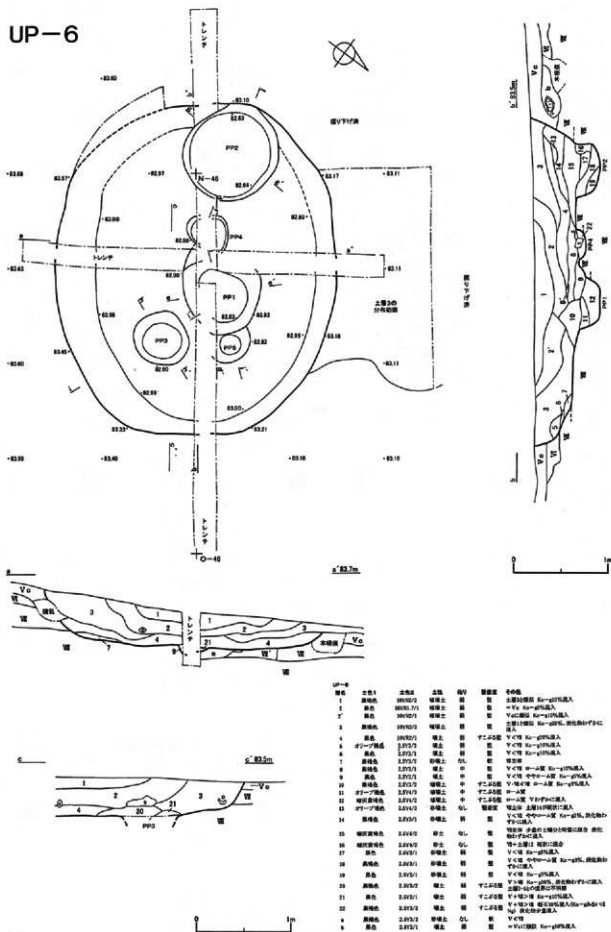
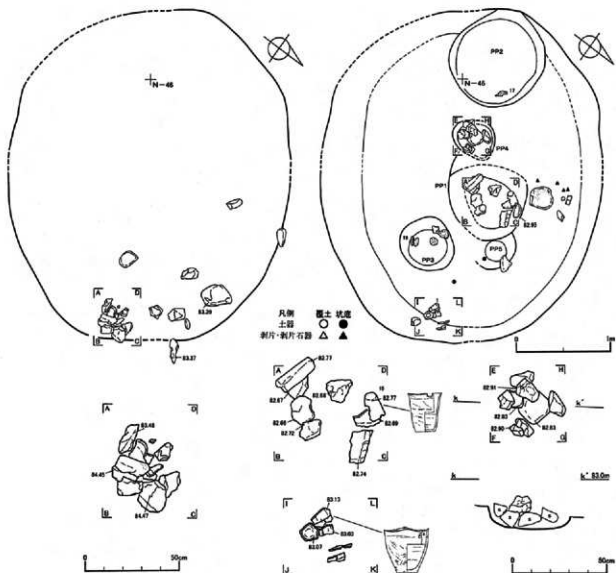
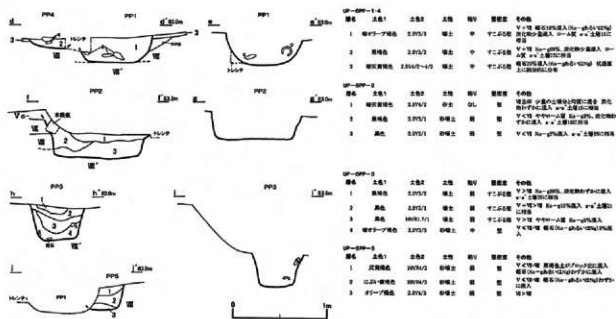


図 III-11 UP-6(1)



図III-12 UP-6(2)

遺物出土状況：土器（Ⅳa）183点、石器（石鎌2点・Rフレイク1点・Uフレイク1点・フレイク24点・石斧2点・たき石2点・砥石1点・台石石皿6点）39点、礫・礫片52点、計27点が出土した。

検出面において、竪穴の北東端を中心に19点の礫からなる集石が検出された。位置関係からUP-6に伴うものと考えたが、土層3が自然堆積である場合はUP-6に伴うものではない可能性もある。礫の大きさは拳～人頭大ほどで、約半数には被熱によると思われる色調の若干の変化が認められた。

坑底直上からはⅣ群a類土器が25点、台石が1点、頁岩・安山岩のフレイクが5点出土した。このうち、縄文のみが施されたⅣ群a類土器の胴部破片と、台石（14）・フレイクは北西側でまともって出土し、北東端の壁際からは無文の小形土器が1個体（1）出土した。付属土坑の出土遺物は後述する。

付属土坑：坑底から5基検出された。

PP-1は竪穴の中央付近に位置する。PP-5と重複しており、これより新しい。平面形は、トレンチにより一部が欠損してしまい不明瞭であるが、卵形に近いものと推測される。北西側に緩やかな張り出しが認められた。覆土は単層で、埋め戻しと推測される。b-b'土層断面から、土層8～10がマウンド状に堆積し、焼土である土層8'がその上面に位置していた可能性を考えたが、平面的には確認できなかった。坑底～坑底直上から、礫7点とⅣ群a類土器1個体がまともって出土した。礫は長辺が13～25cm程度で、このうち1点は剥離と敲打が認められるもの、他の6点は被熱したものである。土器（15）は胴部～口縁部の1/3程度と、口縁の一部の幅2cmほどが欠損している。意図的に打ち欠かれた可能性がある。

PP-2は竪穴の南西端に位置し、部分的に竪穴の壁を壊して構築されている。覆土は埋め戻しと推測される。土層1は土層断面b-b'の土層15に対応しており、マウンド状に堆積していた可能性がある。覆土・坑底から、Uフレイクがそれぞれ1点出土した。

PP-3は竪穴の東寄りに位置する。覆土は埋め戻しと推測される。土層1・2は土層断面c-c'の土層20・21に相当し、マウンド状に堆積していたものと推測される。この上面から径40cmほどの扁平な礫が出土した。覆土から、Ⅳ群a類土器1点、スクレイパー1点、安山岩のフレイク1点、軽石3点が出土した。軽石はNg起源のもので、1点はこぶし大ほどである。Ⅲ層中に含まれるものより大きいことから、意図的に納められた可能性がある。

PP-4は竪穴の中央付近に位置する。覆土は埋め戻しである。坑底～覆土中から、被熱した礫が7点密集して出土した。また、覆土からⅣ群a類土器が1点出土した。

PP-5は竪穴の北東寄りに位置する。PP-1と重複しており、これより古い。PP-1の壁面から検出した。PP-1およびトレンチにより欠損してしまったが、平面形は円形あるいは楕円形と推測される。覆土は埋め戻しと推測される。遺物は出土していない。

時期：坑底直上および付属土坑から出土した土器から、縄文時代後期前葉である。なお、PP-1坑底、PP-3覆土、PP-4覆土から採取した炭化物の放射性炭素年代の測定結果は、補正年代でそれぞれ4070±40、3940±40、3820±40である。やや幅があるが、出土遺物と大きく矛盾しない。

（柳瀬）

遺物：土器 いずれもⅣ群a類である。1・15は復元土器。1は口縁部が緩やかな波状をなし、4つの波頂部を持つ。内外面から補修孔を穿とうと試みた痕が2カ所見られるが、貫通はしていない。15はPP-1から出土した器壁の薄い土器。口縁の一部が欠けているが、意図的になものと考えられる。2は広口壺形土器の胴部上半と考えられる。磨消縄文によって、入組波状文を形成している。器

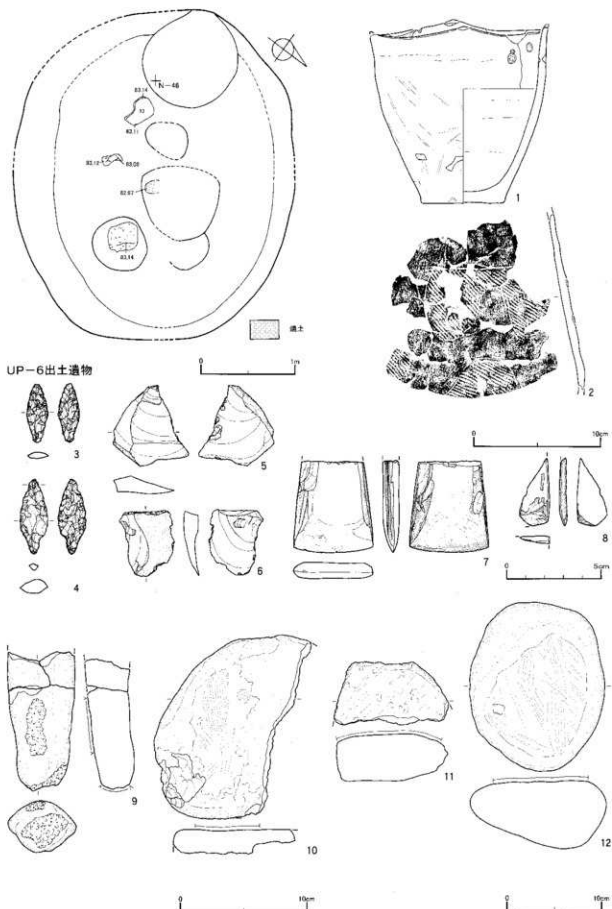
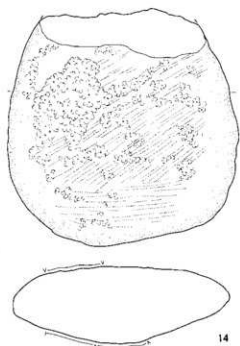
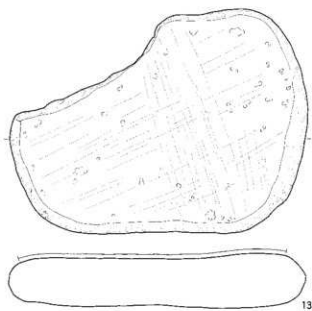
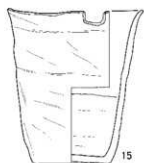


図 III-13 UP-6の遺物(1)



PP-1出土遺物

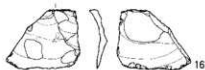
14



PP-2出土遺物

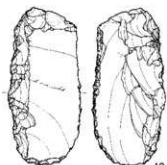


17

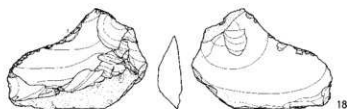


16

PP-3出土遺物



19



18



壁が薄く器表面の剥離が著しい。後期前葉のうちでも前半に属すると考えられる。(影浦)

石器 3は頁岩を素材とした菱形に近い石鏃。基部にアスファルトと見られる黒色物質が薄く付着している。4は頁岩を素材とした凸基有茎石鏃。基部末端に摩擦がみられ石鏃としても使用したと考えられる。5はRフレイク。6はUフレイク。7・8は石斧の刃部破片。7は緑色泥岩を素材とし錆が明瞭である。8は片岩を素材とした小型の石斧。9はたたき石。3点が接合し下半部が残存する。下端と一面に敲打痕がみられる。10は砥石片。浅い擦痕の中央にすり溝が数条観察される。安山岩製。11~14は台石。11は岩滓(火山礫)を素材とした台石。上面がすらわれている。12は使用面に溝が重複して観察される。13は上面に敲打痕と擦痕がみられる。12~14は安山岩製。16~19は付属遺構(PP-1~3)から出土した石器。16はPP-1出土のRフレイク。頁岩を素材とし、下の側縁に調整痕と使用痕がみられる。腹・背面ともに被熱によると見られる剥離が生じている。17・18はPP-2出土のUフレイク。頁岩を素材とし、側縁に使用痕がみられる。19はPP-3出土のスクレイパー。頁岩を素材とし、両側縁に刃部調整が行われている。(谷島)

UP-7 (図Ⅲ-15・16 図版6・35)

位置・立地: O 4-10・11 斜面から低地平坦面に移行する傾斜変換部にあたる。

規模: 2.25m/1.45m×2.41m/1.23m×1.25m

平面形: 不整形円形

確認・調査: V b層内で火山灰かと思われる暗灰色のV b'層がやや広範囲に広がっていた。遺構を想定して、トレンチを掘ったところ、墓坑2基が確認されたので、UP-7、UP-9とした。これらは重複している。

覆土: 坑底近くまで黒色のシルト質壤土を主体にⅧ層のKo-gが混じった土が入っている。b-b'の土層断面は壁際に近いところであるが、砂質が多くなる。坑底は粘質の黒色土がみられる。堆積状況から、自然堆積とみなされる。UP-7とUP-9の東側の斜面下位に掘上げ土と思われる層が、V c層の上位に最大厚15cm広さ2mの範囲で認められた。両者のものか、または、どちらかいずれの掘上げ土であるかを判別できなかった。ここから礫2点が出土している。

坑底・壁: 確認面は南北にやや長く、坑底は東西に長い楕円形を呈する。断面形は坑底がほぼ平坦で下半は急角度に立ち上がり上半が広がる。Ⅷ層に掘り込まれている。

遺物出土状況: 土器(Ⅲ a 5点・Ⅳ a 65点)70点、石器(たたき石)3点、礫・礫片5点、計78点が出土している。覆土下部と坑底からⅣ群 a類土器やたたき石、礫が出土した。覆土からⅢ群 a類土器が出土したが埋め戻し時に混入したものである。

時期: 出土遺物から判断して縄文時代後期前葉である。UP-9が新しく、UP-7が古い。(谷島)

遺物・土器 いずれもⅣ群 a類。1は太い沈線文のもの。ゆるやかな波状口縁で、波頂部の下で沈線文は渦巻き状を呈する。口唇上は磨きで摩擦しているが、波頂部で中空の工具による刺突文を、他の部分では無節Rで口縁部地文と同時に施文した痕跡が窺われる。隣接したUP-34出土の土器とも接合した。2は波頂部に棒状工具で刻みを加えたもの。(影浦)

UP-7

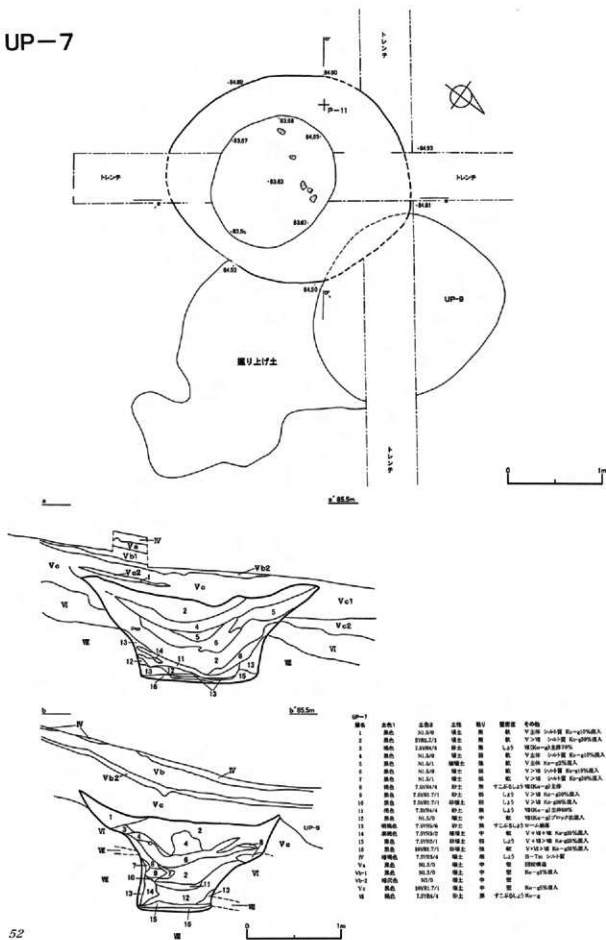
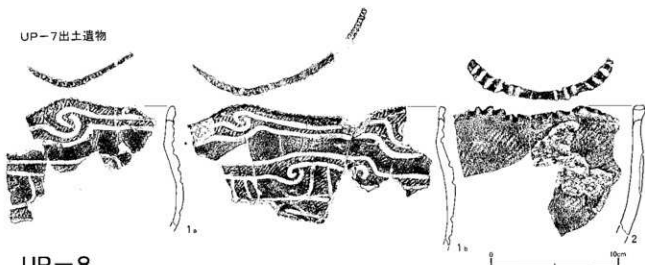
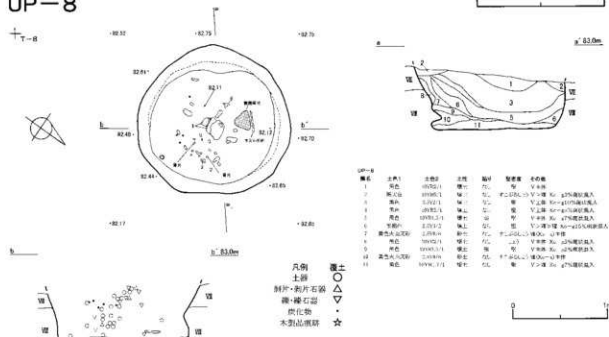


図 III-15 UP-7

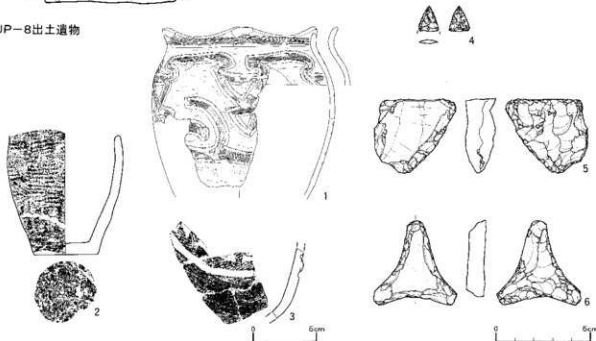
UP-7出土遺物



UP-8



UP-8出土遺物



図III-16 UP-7の遺物とUP-8

UP-8 (図III-16 図版7・35)

位置・立地：T-8 Ko-d降灰(1640年)以前の自然堤防の下で、標高82.5~82.8mの平坦面。

規模：1.62m/1.38m×1.56m/1.26m×0.66m

平面形：ほぼ円形

確認・調査：Vb層内に堆積が確認された土石流堆積物の下、Ⅵ層上面を精査中に検出した。掘り込まれているⅥ層は、地下水分の影響で酸化鉄、マンガン等が浸潤し、ほとんど固結した状態にあった。土層観察用のトレンチで壁面のオーバーハングを確認したが、坑底付近は特に水気が強く、酸化鉄、マンガン等が斑状に浸潤している状況であった。覆土も自然層も固結しており、その部分の壁の検出は難行した。図上で補正を加えたが、部分的に若干掘りすぎたところもある。遺物の出土状況から墓坑の可能性が考えられる。

覆土：堆積状況や遺物の出土状況などから、人為的に埋め戻したものと理解される。覆土10は壁の崩落土。覆土3の中位から下は地下水の影響で鉄分が著しく浸潤し、部分的にすこぶる固結している。坑底・壁：坑底面は平坦である。壁はややオーバーハングしたのち、緩やかに開くところと垂直に立ち上がるところがある。

遺物出土状況：土器(Na)111点、石器(石鏃1点・石槍またはナイフ1点、フレイク15点)17点、石製品1点、礫・礫片22点、計151点が出土している。覆土中央部に遺物がまとまる傾向が窺われた。特に礫・礫片等は上部からまとまって出土した。埋め戻しの際に、坑口部付近に入れたと考えられる。坑口部中央の礫(3.36kg)の下から出土した土器片(1)は、UH-4の付属遺構(HP-2)で出土した土器片と接合した。胴部上半部分のみの接合であり、他の部分は見つからない。礫・礫片は全て安山岩で計22点を数えた。最大のものは前述した坑口部中央検出の3.36kgで、他21点は全て1kgに満たない小型のものであった。他に坑口部からは、厚手の頁岩の剥片を素材とし、粗い打ち欠きで縁辺を整形した三脚状の石製品(6)も出土した。坑底部の東壁際では小型の土器(2)が出土した。また、西側の覆土を掘り下げ中、坑底上20cmの位置から、ほぼ水平な状態で棒状木製品の可能性が考えられるものを出土した。スポンジ状の触感を呈する点や、色調の違いなど、明らかに周辺覆土と異なる点がいくつか認められるものであった。しかし、保存処理後、実体顕微鏡による観察を行ったが、樹種同定はおろか、細胞壁等も確認することはできなかった。覆土内に多量に混入していたKo-gも確認できなかったことから、何らかの木製遺物があった可能性は高いものの、木製遺物そのものというよりその痕跡、腐植土のようなものであろうという結論に至っている。他に覆土内からは炭や焼いた微細骨片等が散点的に採取された。微細骨片は鑑定を受けた結果、ニシンであることが判明した。椎骨が26点と比較的多く見られた。他に前耳骨1点と上顎骨2点が得られている。上顎骨はどちらも右のものであったため、少なくとも頭部に関しては2匹が数えられる。他にニシンより大きな魚の椎骨の破片も1点検出されたが、こちらは種を特定できなかった²¹。

時期：出土土器片から縄文時代後期前葉後半である。覆土で採取した炭化物の放射性炭素年代の測定結果は補正年代で3610±40、3470±40の値が得られている。

遺物：土器 いずれもIV群A類。1は坑口部中央において礫の下から出土した。南側に隣接するUH-4のHP-2出土土器と接合したものの。櫛歯状沈線文によって流水文風の様相が展開する(図III-6-1・図III-16-1)。2はLの縄が全面に横走する。3は胴部片。(影浦)

石器 4は石鏃の先端部破片。5は石槍またはナイフ。4・5は黒曜石を素材とする。5は原材産地分析の結果は赤井川産の黒曜石が使用され、水和層年代測定の結果は水和層の厚さの平均が3.41 μ m

mで経過年代は6,031±487年である。6は頁岩を素材とした三脚形石製品。側縁を剥離調整した後、部分的に剥離の稜線をすりつぶし整形している。(谷島)

註1：東京国立博物館客員研究員金子浩昌氏による。

UP-9 (図Ⅲ-17 図版6・35)

位置・立地：P-10・11 斜面から低地平坦面に移行する傾斜変換部にあたる。

規模：2.04m/1.30m×(1.57)m/1.13m×1.21m

平面形：不整形

確認・調査：UP-7と同時に検出した。

覆土：坑底近くまで黒色の壤土とKo-gが混じった砂土が入っている。坑底は黒色壤土の上にKo-g主体の砂土がみられる。堆積の状態から判断して自然堆積とみなされる。

坑底・壁：確認面、坑底ともに不整形である。坑底はほぼ平坦で土坑の下半の壁は垂直に近く上部の角度は緩く広がる。Ⅱ層に掘り込まれている。

付属遺構：UP-7とUP-9の東側の斜面下位に掘り上げ土と思われる層が、Vc層の上位に最大厚15cm広さ2mの範囲で認められた。

遺物出土状況：土器(Ⅳa34点・Ⅳb3点)37点、石器(フレイク)1点、礫・礫片5点、計43点が出土している。

時期：出土遺物から判断して縄文時代後期前葉である。UP-9が新しく、UP-7が古い。(谷島)

遺物：土器 1・2はⅣ群a類。1は地文の縄文が横走る。口縁の波頂部に中空の工具による刺突が1つ加えられ、その左右に原体による刻みが施されている。裏面は磨かれて平滑。2は無文のもの。縄文が施された痕跡も一部に残るが、ナゲ消されており、不明瞭である。全体に指頭圧痕が顕著。3はⅣ群b類。手稲式相当と思われる。(影浦)

UP-10 (図Ⅲ-17・18 図版7・35)

位置・立地：O-45・46 標高83.2m付近の斜面

規模：1.44m/1.10m×0.70m/0.38m×0.36m

長軸方向：N-23°-W 平面形：楕円形

確認・調査：Vc層中位で礫のまとまりを検出した。周辺を掘り下げて平面形を検出し、半截・トレンチ調査により土坑と確認した。性格は不明である。

覆土：Ko-gが多く混入する。

坑底・壁：坑底は皿状にくぼみ、Ⅱ層まで掘り込まれる。立ち上がりは緩やかで、壁はやや外傾する。

遺物出土状況：土器(Ⅲa1点・Ⅳa3点)4点、石器(北海道式石冠1点・石皿1点)2点、礫・礫片4点、計10点が出土した。坑口付近の土層1・2から、北海道式石冠未成品・石皿・礫2点がまとまって出土した。

時期：出土遺物と周辺の遺物出土状況から、縄文時代中期前半あるいは後期前葉と推測される。

(柳瀬)

遺物：土器 1はⅢ群a類。口唇上には縄線文による刻みが深めに加えられている。(影浦)

石器 2は側面と上部に打ち剥がしのみられる北海道式石冠の未成品。下面に使用痕はみられない。

3は石皿で両面に浅いすり溝がみられる。いずれも安山岩を素材とする。(谷島)

UP-11 (図III-18・19 図版7・29・35)

位置・立地：Q-9 標高83.6mの平坦面。

規模：1.30m/0.96m×1.04m/0.66m×0.60m

長軸方向：N-15°-E 平面形：楕円形

確認・調査：トレンチ掘削中にⅥ層で検出した。土層観察用のベルトの壁面に沿って小トレンチを入れ、壁の立ち上がりと坑底を確認した。遺物の出土状況から、遺構の性格としては墓坑の可能性が高い。

覆土：土層観察用のベルトから、本来の掘り込みはⅤc層上位であることが確認された。人為的な埋め戻しと考えられる。

坑底・壁：坑底面はやや皿状を呈する。土層確認用ベルトにかかっていたため、構築面からの深さが60cmあることが確認されたが、トレンチによって壁が破壊された部分も多い。残存部分では壁は緩やかに開く。坑底部付近はⅥ層中の掘り込みで、調査中も壁面の崩落は著しかった。覆土は掘削後、すみやかに埋め戻したと考えられる。

遺物出土状況：土器(Ⅳa)109点、石器(フレイク1点・台石3点)4点、計113点が出土している。南の壁際において、土器が一個体、横倒しになった状態で検出された。口縁から胴部下半までが確認され全周したが、底部は見られなかった。坑底部からは他に熱を受けた台石が3点出土した。

時期：出土した土器から縄文時代後期前葉の構築と考えられる。

遺物：土器 1はⅣ群a類。底部を欠くが、意図的に打ち欠いたものの可能性がある。全面をヘラ状工具で粗く調整し、沈線文で区画された文様帯には入れ子状に描かれた乱雑な菱形文が巡る。この文様帯の下に、菱形を描いて、それをヘラ状工具で掻き消した痕跡も見られる。(影浦)

石器 2～4は台石。2は両面に使用痕がみられ、被熱によりひび割れが生じている。3は上面に敲打痕と擦痕がみられる。4は図の上縁辺が被熱で変色している。いずれも安山岩を素材とする。(谷島)

UP-12 (図III-20～24 図版8・28・29・36)

位置・立地：O-P-9 斜面から低地平坦面に移行する傾斜変換部にあたる。

規模：3.44m/2.71m×3.33m/1.54m×0.98m

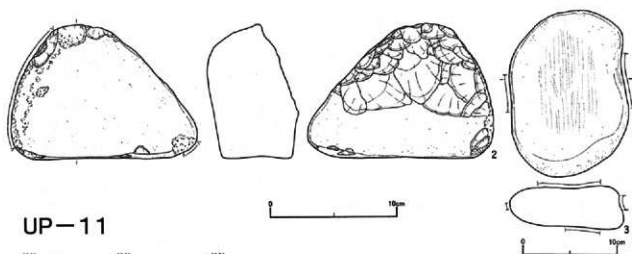
平面形：隅丸方形

確認・調査：Ⅴb層中に暗灰色のⅤb'層がやや広範囲に広がって現れていたため、土層観察のためベルトを残し、トレンチを掘って確認した。大きさから竪穴住居跡を想定していたが、炬・焼土・柱穴等の施設は検出されなかった。壁の検出時にベンチ状の段が現れたため、この境目から上下が別な遺構の可能性も推定したが、堆積状態や出土遺物などから違いを見出すことはできず、単独の遺構と結論するに至った。

覆土：ベンチ状の構造で斜面上部からの流れ込みによる自然堆積である。ベンチ状の段の高さでは分層されないことや上部からベンチの下段に掘り込みが見られないことから、単独の遺構であることが確かめられた。遺物の出土状態から竪穴墓と推定できる。

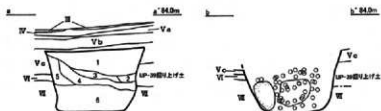
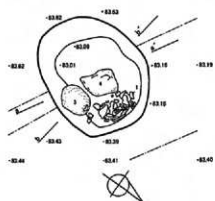
坑底・壁：隅丸方形を呈するベンチ状の上半と隅丸長方形を呈する下半からなる。ベンチ状の構造は南側半分で顕著で上段の平坦部を有するが、他は壁の傾斜が途中から変化して明瞭ではない。坑底はⅥ層中でほぼ平坦、北側にある上段の面は壁際からやや傾斜しており、部分的に凹凸がある。

付属遺構：ベンチ状の構造を有する。



UP-11

-83.68 -83.72 -83.78

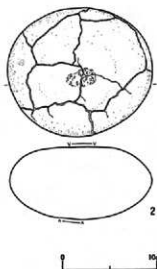


UP-11
番号

番号	品名	品目	土質	形状	数量	中心値
1	磁器	10793.13	硬土	丸	個	V少径 Karaf持込入
2	磁器	7.8737.1	硬土	丸	個	V少径 Karaf持込入
3	磁器	10793.23.2	硬土	丸	個	V少径 Karaf持込入
4	磁器	10793.1	硬土	丸	個	V少径 Karaf持込入
5	磁器	7.8737.1	硬土	丸	個	V少径 Karaf持込入
6	磁器	10793.23.1	硬土	丸	個	V少径 Karaf持込入

凡例
○ 硬土
0 1cm

+ R-10



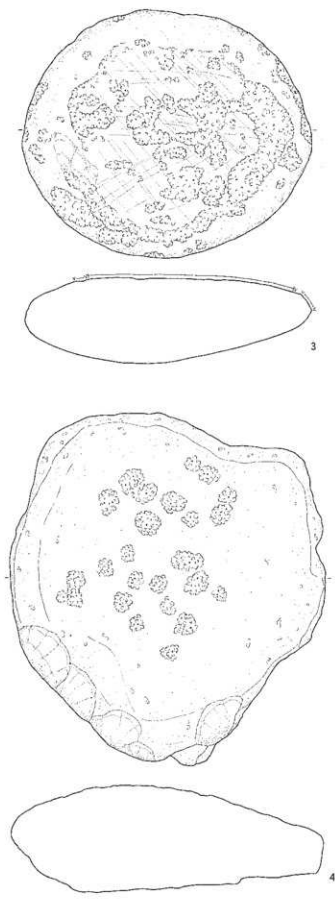
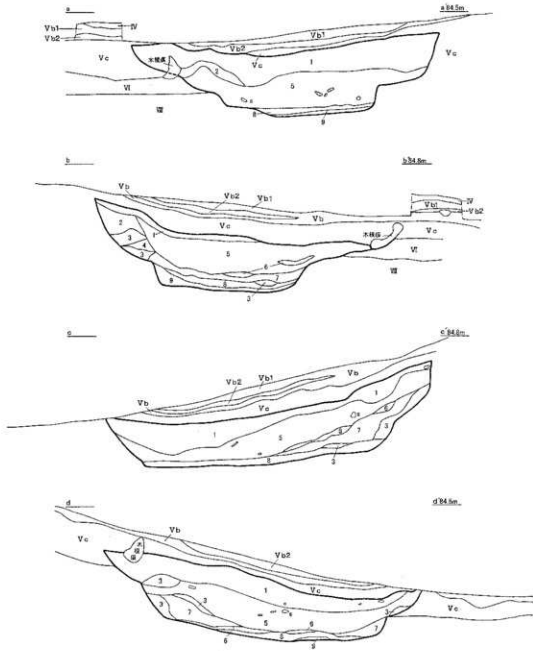


図 III-19 UP-11の遺物

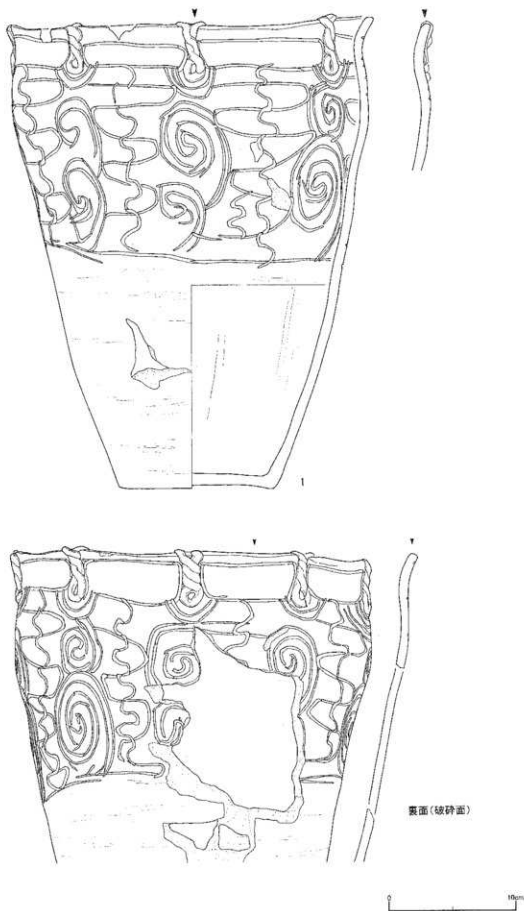


UP-12

層名	土色	土質	土層	厚	深	特徴	年代
1	褐色	2.0X2.0	硬土	約	約	V>VI 灰土層	約
2	褐色	1.0X1.0	硬土	約	約	V>VI 灰土層	約
3	褐色	1.0X1.0	硬土	約	約	V>VI 灰土層	約
4	褐色	1.0X1.0	硬土	約	約	V>VI 灰土層	約
5	褐色	1.0X1.0	硬土	約	約	V>VI 灰土層	約
6	褐色	1.0X1.0	硬土	約	約	V>VI 灰土層	約
7	褐色	1.0X1.0	硬土	約	約	V>VI 灰土層	約
8	褐色	1.0X1.0	硬土	約	約	V>VI 灰土層	約
9	褐色	1.0X1.0	硬土	約	約	V>VI 灰土層	約
Vb1	褐色	1.0X1.0	硬土	約	約	V>VI 灰土層	約
Vb2	褐色	1.0X1.0	硬土	約	約	V>VI 灰土層	約
Vc	褐色	1.0X1.0	硬土	約	約	V>VI 灰土層	約
VI	褐色	1.0X1.0	硬土	約	約	V>VI 灰土層	約



図 III-21 UP-12(2)



図III-22 UP-12の遺物(1)

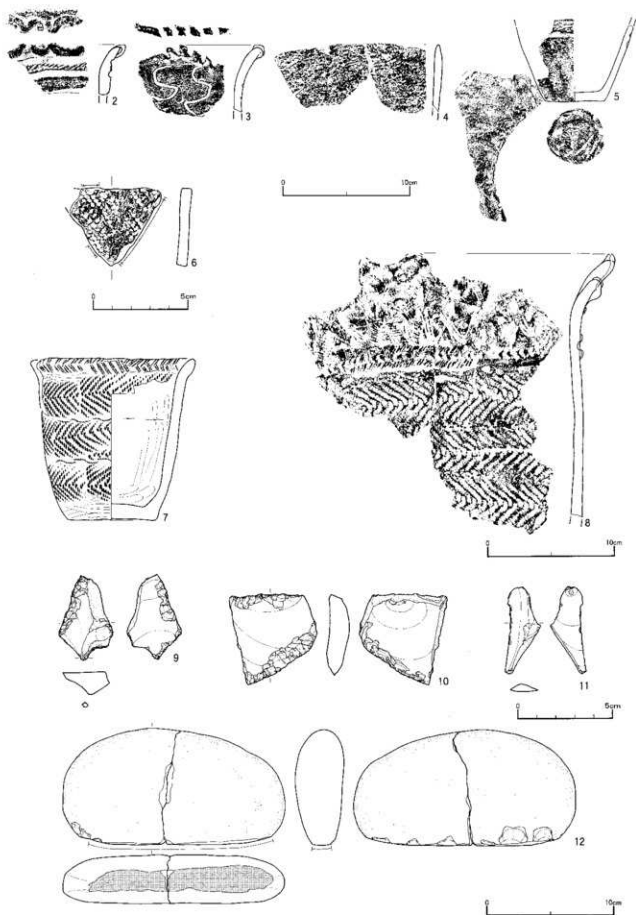
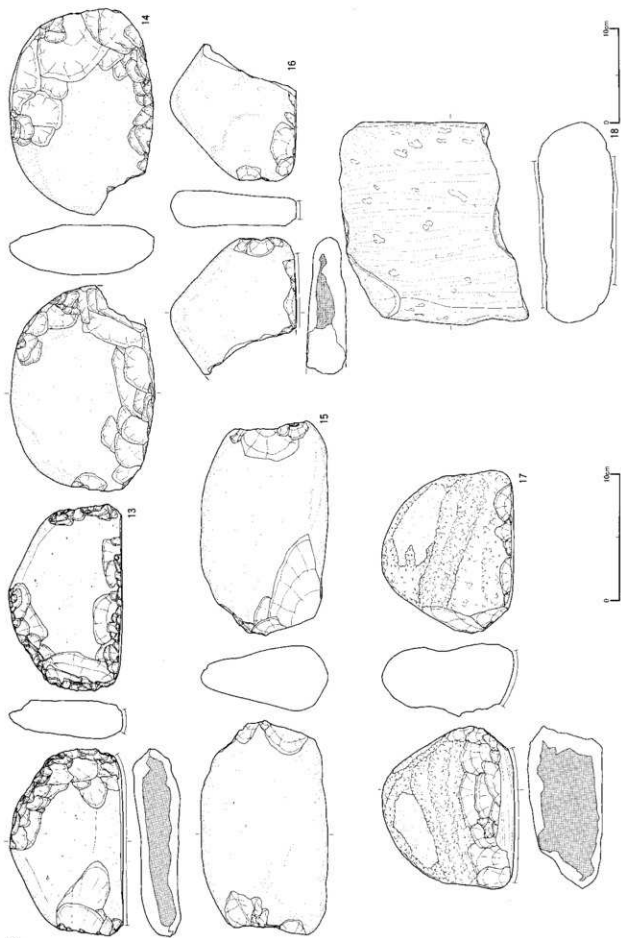


図 III-23 UP-12の遺物(2)



図III-24 UP-12の遺物(3)

遺物出土状況：土器（Ⅱb 1点、Ⅲa 35点・Ⅳa 384点・Ⅳb 6点）426点、土製品1点、石器（石錐1点・スクレイパー1点・Uフレイク1点・メノウ原石1点・フレイク10点・扁平打製石器6点・北海道式石冠1点、石皿1点）22点、礫・礫片42点、計491点が出土している。遺物はベンチ状の上半には少なく、主に覆土の下半部から出土している。また、下半でも東側にまとまった遺物の出土が見られた。坑底の北側では底からわずかに浮いた状態でⅣ群a類土器がまとまりをもって検出された。底部を東に向け、口縁部から胴部にかけて内面を上に向け重ねられた状態であった。

時期：出土遺物から判断して縄文時代後期前葉である。

（谷島）

遺物：土器 1～5はⅣ群a類。1は8の字状にひねった粘土紐を口縁部にほぼ等間隔で8カ所貼付して、それらの下に2本1組の沈線文で渦巻き文を描いたもの。渦巻きと渦巻きの間は蛇行沈線文で結ばれている。坑底部に近い覆土内においてまとまって出土したもので、ほぼ完形だが、胴の一部に大きな割れ口が開いている。外側に剥離痕が広がっていることから、意識的に内側から衝撃を加えて打ち割ったと考えられる。トリサキ式に相当する。2は粘土紐が口唇上に貼付されている。3には口縁の波頂部に棒状工具で刻みに加えられ、櫛歯状の工具による蛇行沈線文が2本垂下する。4はRの縄が横走気味に施文されているが、ほとんど磨滅で消失している。5は底部片。粗い沈線文が横走している。6はⅣ群a類の土器片を素材にした三角状土製品。7・8はⅢ群a類である。いずれも地文は結束第1種羽状縄文。7は燃りの方向の同じ燃糸が2本組で羽状に圧痕され、口縁を巡る。8は口縁部の剥落が著しい。基本的に粘土紐を三角に貼付し、3本組の燃糸圧痕が縁取りしている。胴部と文様帯の境には粘土紐を2本巡らせ、その間に馬蹄形圧痕文を加えている。

（影浦）

石器 9は石錐。下端に刺突部を作り出し、一側縁に両面からの刃部調整を行っている。10はスクレイパー。下側縁に両面からの刃部調整を行っている。両者とも原石面を残している。11はUフレイク。側縁の一部に使用痕がみられる。12～16は扁平打製石器。12は包含層出土のものと同接合している。下側縁をすって平らにし、すり面を形成している。13は側縁を打ち剥がし、下面にすり面があるもの。14・15は側縁に打ち剥がしがみられる。16は両端に打ち欠きがみられ、下側縁にすり面のある破損品である。17は北海道式石冠。すり面は片減りしている。18は石皿。両面に浅くくぼすり痕がみられる。9～11は頁岩、12～18は安山岩を素材とする。

（谷島）

UP-13（図Ⅲ-25・26 図版9・29・37）

位置・立地：R S-50 標高80.5m付近の平坦面

規模：1.98m/L.66m×1.36m/L.08m×0.54m

長軸方向：N-12°-W **平面形**：楕円形

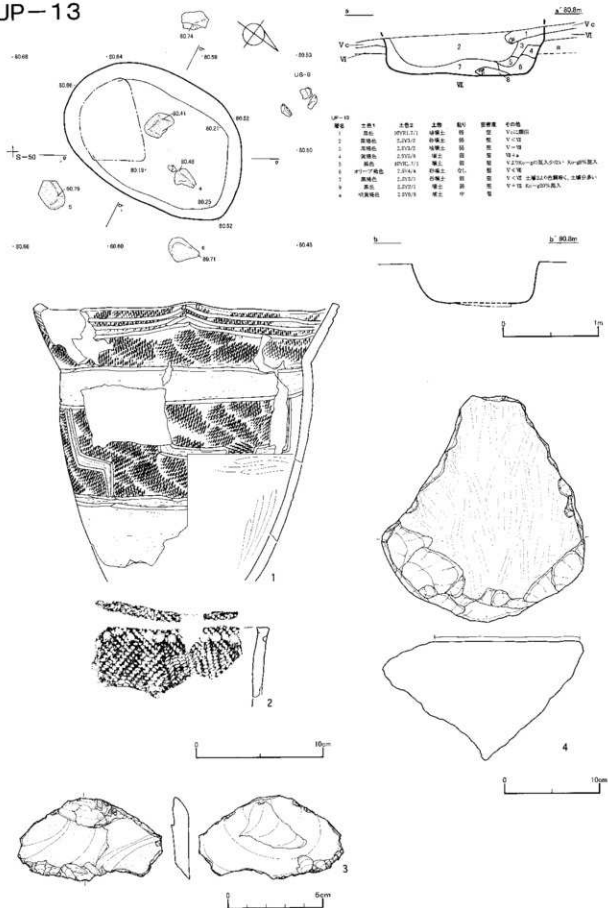
確認・調査：Vc層上位で検出した。ほぼ同一面で、隣接してUS-9が検出されており、関連する可能性がある。性格は不明である。

覆土：黒褐色土主体。東半部では坑底付近に黒色土（土層8）が堆積する。また土層2と土層7の差は顕著ではなく、単一層に近い埋め戻しと推測される。なお、遺物の取り上げ層位は、遺物取り上げ「覆土1」：断面図土層2、「覆土2」：土層4、「覆土3」：土層5、「覆土4」：土層6、「覆土5」：土層11である。

坑底・壁：坑底は平坦で、Ⅶ層まで掘り込まれている。東半部では緩やかに立ち上がり壁は外傾、西半部では立ち上がりはやや急で壁は垂直に近い。

遺物出土状況：土器（Ⅲa 1点・Ⅳa 49点・Ⅳb 16点）66点、石器（スクレイパー1点・頁岩のフレイク2点・台石石皿3点・加工痕のある礫1点）7点、礫・礫片6点、計79点が出土した。

UP-13



図III-25 UP-13

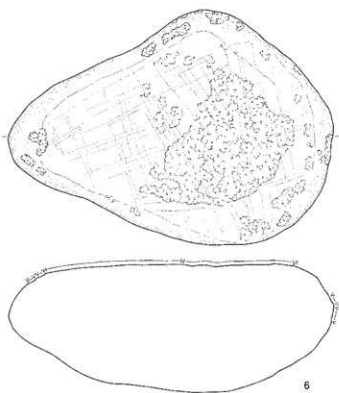
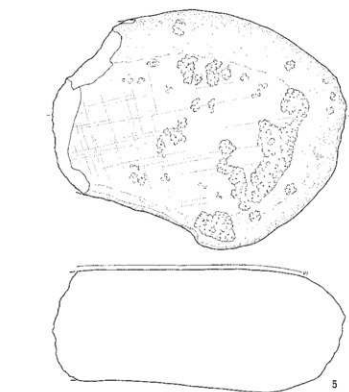


図 III-26 UP-13の遺物

覆土から人頭大の台石1点(4)、礫1点が出土した。また、同じく人頭大の台石(5・6)・礫が、検出面においてUP-13に隣接して出土し、伴うものと判断した。

時期：出土遺物および周辺の遺物出土状況から、縄文時代後期前葉～中葉と推測される。(柳瀬)

遺物：土器 1はⅣ群b類。口縁部を3本組の沈線文、頸部を無文帯が巡る。胴部にはクランク状の磨消文が展開している。2はⅣ群a類。粗い器面調整をおこなった後、原体の回転方向を変えながら施文したもの。口縁を刺突文が巡るが間隔は一定しない。内面は輪積みの接ぎ線が顕著である。

(影浦)

石器 3は頁岩を素材としたスクレイパー。4～6は安山岩製の台石。(谷島)

UP-14 (図Ⅲ-27・28 図版10・11・28・37)

位置・立地：R 8-51 標高80.0m付近の平坦面から斜面への変換点付近

規模：2.30m/1.53m×1.90m/1.70m×1.15m

平面形：円形

確認・調査：Ⅴc層下位～Ⅵ層上面でUP-24・25と同時に検出し、UP-25と並行して調査を行った。トレンチ調査により、覆土とKo-gとの明瞭な境界を確認し、坑底および壁と想定した。

調査中、覆土から礫が大量に出土したため、概ね20cm以上のものを図化し、20cm以下のものは出土地点を記録しながら随時取り上げた。Ⅵ層まで掘り込まれた遺構と考えていたことから、Ⅶ層であるKo-gの面を検出して調査を終了した。周辺の包含層の掘り下げを再開したが、坑底と考えていた面で黒色土が斑状に認められたため、当初のベルトに沿ってさらにトレンチ調査を行い、Ⅶ層と想定していたKo-gを除去した。その結果、Ⅶ層中に掘り込まれた坑底・壁が検出され、坑底付近にⅦ層起源のKo-gが堆積している土坑であることが判明した。

改めて検出した坑底・壁には多数の礫が露出しており、土坑は礫を多く含む土層を掘り込んで作られていると判断された。また覆土から出土した礫と坑底・壁に露出した礫は類似しており、出土した礫は土坑掘削時に掘り上げたものと推測された。これらのことから、土坑の埋め戻し過程について、坑底付近と壁際をKo-gで埋め戻した後、土坑掘削時に掘り上げた礫を投入しながらさらに埋め戻したものと推測される。性格は、覆土が埋め戻しであることと礫の出土状況から、墓坑の可能性がある。形態・規模・土層堆積状況・遺物出土状況がUP-25と類似する。

覆土：埋め戻しと推測され、上下2層に大別される。上層は黒色土・黒褐色土が主体の土層1～9、下層はKo-g主体の土層10～14である。

上層は、黒色土・黒褐色土主体層とKo-g・ローム主体の土層が互層をなしており、礫を大量に含む。下層はKo-g主体で、自然堆積のⅦ層との区別は困難であった。土層13'の黒色土が層状に認められる部分があるが、平面的な広がりには明瞭ではない。この黒色土には混入物がみられない。礫はほとんど含まない。

なお、遺物の取り上げ層位は、遺物取り上げ「覆土1」：断面図土層1、「覆土2」：土層2・3、「覆土3」：土層4～9、「坑底」：土層10上面、「覆土下」：土層10以下、である。また、上層・下層の区分および下層の堆積状況はUP-25と類似する。

坑底・壁：坑底はやや凹凸があり、皿状にくぼむ。Ⅶ層を掘り抜き、Ⅶ層まで掘り込まれている(図I-7参照)。立ち上がりは急で、若干オーバーハングする部分がある。壁は垂直に近い。Ⅶ層には主に人頭大程度の礫が大量に含まれるため、坑底および壁には礫が多数露出している。

遺物出土状況：土器(Ⅲa 3点・Ⅳa 53点・Ⅳb 1点) 57点、石器(スクレイパー1点・頁岩と安山

岩のフレイク18点・北海道式石冠2点・加工痕のある礫1点) 22点、礫・礫片181点、計260点が出土した。

礫のほとんどは覆土の上層から出土した。人頭程度のもが多く、坑底や壁に露出しているものと同様に鉄分が付着したり、黄色味を帯びたりしていることから、土坑構築時に掘上げた礫を納めたものと推測される。熱を受けた痕跡を確認できるものはない。

時期：覆土から出土した遺物から、縄文時代後期前葉と推測される。(柳瀬)

遺物：**土器** いずれもⅣ群 a類。1は口縁がやや内湾する。剥落しているが口縁は折り返しである。折り返しの下位を縄線文が巡る。縄線文の間は無文である。地文はRL縄文。2は鋸歯状沈線文が施されたもの。頸部を無文帯が巡る。3は底部片。原体の回転方向を変えて、縦位に羽状縄文を構成している。(影浦)

石器 4は頁岩を素材としたスクレイパー。下側縁に刃部調整を行っている。5・6は安山岩を素材とした北海道式石冠。5は下側縁と一端が欠損している。6は北海道式石冠の破片。(谷島)

UP-25 (図Ⅲ-27~29 図版10・11・37)

位置・立地：S-52 標高80.0m付近の平坦面～斜面の変換点付近

規模：1.98m/1.76m×1.93m/1.64m×0.94m

長軸方向：N-20°-E **平面形**：円形

確認・調査：Ⅴc層下位～Ⅵ層上面でUP-14・24と同時に検出し、UP-14と並行して調査を行った。トレンチ調査により、覆土とKo-gとの明瞭な境界を確認し、坑底および壁と想定した。

調査中、覆土から礫が大量に出土したため、概ね20cm以上の礫を図化し、20cm以下のものは出土地点を記録して随時取り上げた。Ⅵ層まで掘り込まれた遺構と考えていたことから、Ⅶ層であるKo-gの面を検出して調査を終了し、周辺の包含層の掘り下げを再開した。この後の経過はUP-14と同様で、UP-25はⅦ層を掘り込んでおり、坑底付近にⅦ層起源のKo-gが堆積している土坑であることが判明した。

改めて検出した坑底・壁の状況と出土した礫の関係、土坑の埋め戻し過程などはUP-14と共通である。性格は、覆土が埋め戻しであることと礫の出土状況から、墓坑の可能性がある。形態・規模・土層堆積状況・遺物出土状況がUP-14と類似する。

覆土：埋め戻しと推測され、上下2層に大別される。上層は黒色土・黒褐色土が主体の土層1～18、下層はKo-g主体の土層19～22である。

上層は、黒色土・黒褐色土が主体で、Ko-g・ローム・Ngなどが多く混入し、礫を大量に含む。下層はKo-g主体で、自然堆積のⅦ層との区別は困難であった。礫はほとんど含まない。また、土層断面には現れていないが、UP-14の土層13'と同様の黒色土が斑状に認められた。

なお、遺物の取り上げ層位は、遺物取り上げ「覆土1」；断面図土層1、「覆土2」；土層2・3、「覆土3」；土層4～9、「坑底」；土層21上面、「覆土下」；土層19以下、である。また、上層・下層の区分および下層の堆積状況はUP-14と類似する。

坑底・壁：坑底は、部分的にやや凹凸があるがほぼ平坦で、Ⅶ層を掘り抜き、Ⅶ層まで掘り込まれている(図Ⅰ-7参照)。立ち上がりは急で、若干オーバーハングする部分がある。壁は垂直に近い。Ⅶ層には主に人頭大までの礫が大量に混入しているため、坑底および壁には礫が多数露出している。

遺物出土状況：**土器**(Ⅱb 2点・Ⅲa 47点・Ⅳa 5点) 54点、**石器**(安山岩のフレイク 8点・扁平打製石器 2点・台石 1点) 11点、礫・礫片150点、計215点が出土した。

UP-14・25

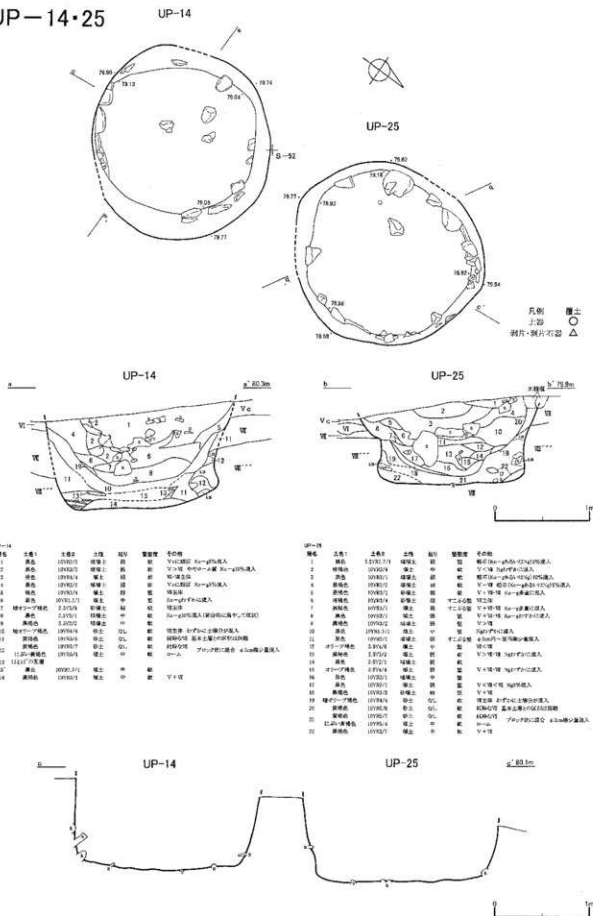


図 III-27 UP-14・25(1)

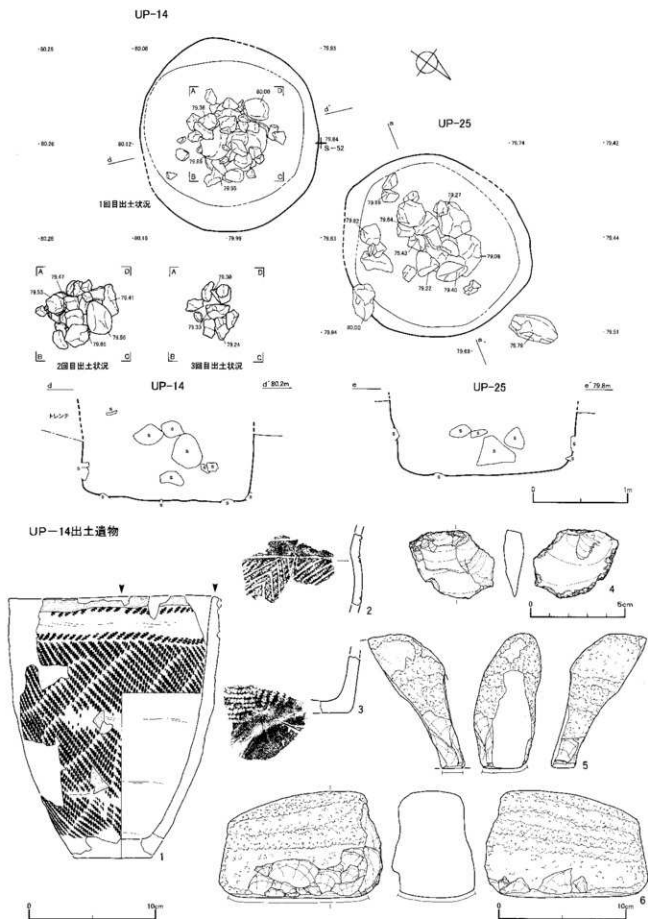


図 III-28 UP-14・25(2)とUP-14の遺物

礫のほとんどは覆土の上層から出土した。礫は人頭大へやや小ぶりなものと、こぶし大より小さいものが多い。これらは坑底や壁に露出しているものと同様に鉄分が付着したり、黄色味を帯びたりしていることから、土坑構築時に掘上げた礫を投入したものと推測される。熱を受けた痕跡を確認できるものはない。「坑底」とした土層21の上面からは、出土した中でも極端に大きい礫が2点出土した。重さは53.8kg、101.3kgである。少数の土器・石器も出土しているが混入と推測される。

時期：覆土から出土した遺物から、縄文時代後期前葉と推測される。 (柳瀬)

遺物：土器 いずれもⅢ群a類。1は貼付文で文様帯を区画したものの。3本組の燃系文で縁取られ、その間は馬蹄形圧痕文が加えられている。2は燃系文のもの。3は直線の貼付文と蛇行する貼付文とが組み合わされている。 (影浦)

石器 4・5は扁平打製石器。4はほぼ全面を打ち剥がして厚みを取っている。5は上部を打ち剥がしている。両者とも下側縁にすり面がみられる。6は台石。上面に敲打痕と擦痕がみられる。いずれも安山岩を素材とする。 (谷島)

UP-15 (図Ⅲ-29)

位置・立地：O-48 標高81.7m付近の斜面

規模：0.88m/0.78m×0.79m/0.65m×0.18m

長軸方向：N-83°-E **平面形：**卵形

確認・調査：Ⅵ層～Ⅶ層上面で検出した。遺物の出土状況から、石皿・台石の素材を埋納した土坑の可能性がある。

覆土：Ko-gを非常に多く含む黒褐色土の単層。礫の出土状況から、埋め戻しの可能性がある。

坑底・壁：坑底はほぼ平坦で、Ⅶ層まで掘り込まれている。北東側にやや傾斜する。立ち上がりは緩やかである。

遺物出土状況：坑底付近から大形の礫が1点出土した。約50cm×48cm×12cm、重さ28.4kgで、大きさ・形状ともに石皿・台石の素材となり得るものである。

時期：周辺の遺物出土状況から、縄文時代中期前半あるいは後期前葉の可能性が高い。 (柳瀬)

UP-16 (図Ⅲ-30 図版9・28)

位置・立地：S-11 標高83.0mの平坦面。

規模：1.06m/0.93m×(0.96)m/(0.84)m×0.48m

平面形：円形

確認・調査：Vc層の中位で確認した。覆土は人為的な埋め戻しによるものであり、全体の約6分の1程度が風倒木によって破壊されていることが判明した。遺物の出土状況から墓坑の可能性が高いと考えられる。

覆土：確認面中央で礫を検出しているが、覆土1と2は皿状の堆積を示しているため、あるいは埋め戻し後の窪みにVc層が流れ込んだものかもしれない。覆土3～8はブロック状の堆積で明らかに人為的な埋め戻しである。

坑底・壁：坑底はⅧ層上面で、皿状にやや浅くくぼむ。壁は垂直に立ち上がる。北側の壁は一部、風倒木痕によって破壊されている。

遺物出土状況：土器（Ⅳ a）25点、石器（フレイク）1点、礫・礫片13点、計39点が出土している。遺物は覆土中央にまとまって出土する傾向が窺われた。特に礫・礫片が覆土上部の中央にかたまって出土した。礫・礫片はすべて安山岩で13点を数えた。使用痕は1点も確認できなかったが、6点において被熱の痕跡が観察された。もっとも大きな礫も被熱していた。その重さは4.3kgだが、出土した13点のうち11点は1kgに満たない小型の礫であった。礫の総重量は8.32kgである。土器はすべてⅣ群 a類。いずれも破片であり、出土位置に傾向等は窺われなかった。

時期：出土土器片から縄文時代後期前葉後半と考えられる。

遺物：土器 1はⅣ群 a類の脚部片。下が少し広がる形状で、ほとんど剥落しているが3本の粘土紐が横走し、沈線文が縁取りをしている。（影浦）

UP-18（図Ⅲ-30 図版9・38）

位置・立地：S-8 自然堤防部下、標高82.8~82.9mの平坦面。

規模：1.54m/1.26m×1.40m/1.16m×0.75m

平面形：ほぼ円形

確認・調査：Vc層下位を精査中に検出した。周囲は土石流堆積物の下にV層（黒色土層）が20cm程度しか堆積していない場所であった。このことから確認面は、ほとんど本来の構築面と差のないことが想定される。遺物は少ないが、規模・形状の点から周辺で検出した遺構との類似性を考えると墓坑の可能性が高い。

覆土：覆土の堆積状況やKo-gの混入量の差から、人為的な埋め戻しと考えられる。

坑底・壁：坑底はⅢ層上面で、皿状にやや浅くくぼむ。壁はややオーバーハングしたのち緩やかに開くところと、オーバーハングしないで垂直に開くところがある。

遺物出土状況：土器（Ⅲ a 4点・Ⅳ a 125点）129点、石器（石鎌1点・石核1点・メノウ原石1点、フレイク5点）8点、礫・礫片12点、計149点が出土している。Ⅳ群 a類の土器片と礫・礫片が覆土内から散発的に出土したが、特に傾向は窺われなかった。頁岩の有茎石鎌、石核とメノウの原石片が各1点出土しているが、これらについては埋め戻しの際、混入した可能性がある。礫・礫片は全て安山岩で計13点を数えた。一番大きなものは4.97kgあるが、他12点は1kgに満たない大きさである。被熱の痕跡が確認されたのは一番大きな礫のみであった。礫・礫片の総重量は7.4kgである。

時期：出土した土器片から縄文時代後期前葉と考えられる。

遺物：土器 1はⅣ群 a類。太い沈線文と中空の工具で引いたと見られる細い平行沈線文が組み合わさったもの。半載した中空の工具の外側と内側を両方使ったものであろう。波頂部の口唇には太い刻み加えられている。（影浦）

石器 2は頁岩を素材とした平基の有茎石鎌。3は黒曜石のフレイクで、原材産地分析によると赤井川産との判定である。（谷島）

UP-19（図Ⅲ-31 図版9・38）

位置・立地：R-9 標高83.0mの平坦面。

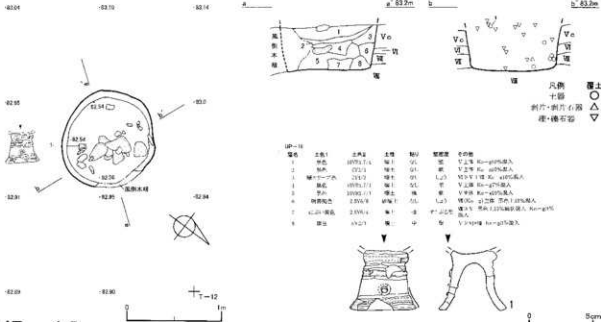
規模：(0.46)m/(0.42)m×0.38m/0.32m×0.32m

長軸方向：N-85°-W

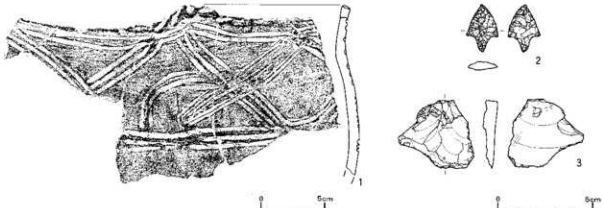
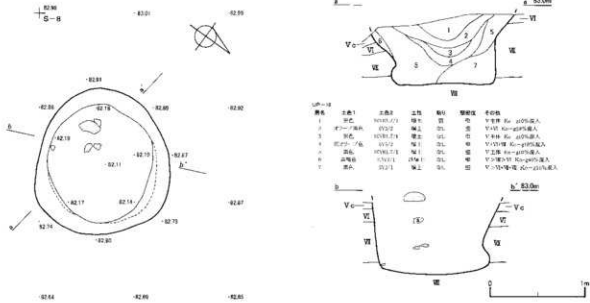
平面形：楕円形

確認・調査：Vc層最下部を精査中、土器片のまとまりを検出した。周囲を精査したところ、黒色土の落ち込みを認めたので、半載した。当初、本遺構の一部がUH-4に切られていたものと考えてい

UP-16



UP-18



図III-30 UP-16・18

たが、重複部分がわずかであり、また双方の覆土が非常に類似していたこともあり、新旧関係は見極められなかった。

覆土：遺物の出土状況から人為的な埋め戻しと考えられる。

坑底・壁：坑底は平坦で、壁は急に立ち上がる。底の掘り込みはⅡ層までである。

遺物出土状況：土器（Ⅳa）51点、礫片1点、計52点が出土している。覆土上部において、口縁部から胴部にかけての土器片が出土した。次いでこれと同一個体の同じく口縁部から胴部にかけての土器片が西側の壁際からも出土した。一個体の土器を打ち割って、1つは壁際に立て掛け、1つは坑口部に置いたと想定される出土状況である。底部片は未検出で、口縁部も全周していない。おそらく他の場所で意図的に土器を打ち割り、その一部分を持ってきたと考えられる。また、安山岩の礫片が1点、直立した状態で出土した。上部先端は剥離痕が見られるが、この剥離が人為的なものかどうかは定かでない。下端部は割れ口である。

時期：出土した土器片から縄文時代後期前葉と考えられる。

遺物：土器 1a・1bはⅣ群a類。4つの波頂部を持つ深鉢であると予想されるが、両者は接合しない。全体に磨滅が著しいが、太い条と細い条が交互に観察されることから、原体が付加条の可能性もある。底部を欠くがすばまる器形である。（影浦）

UP-20（図Ⅲ-31・32 図版12・38）

位置・立地：R 8-46 標高82.4m付近の斜面

規模：0.99m/0.63m×0.98m/0.62m×0.39m

長軸方向：N-17°-W **平面形**：円形

確認・調査：Ⅱ層～Ⅲ層上面で検出した。覆土が埋め戻しと推測されることから墓坑の可能性がある。

覆土：黒色土の単層。埋め戻しと推測される。

坑底・壁：坑底は平坦で、Ⅲ層上面付近まで掘り込まれている。立ち上がりは緩やかで、壁はおおむね丸みがあり、外傾する。

遺物出土状況：覆土下位から、たたき石1点（1）・北海道式石冠2点（2・3）・礫1点が出土した。

時期：出土遺物から、縄文時代中期前半である。（柳瀬）

遺物：石器 1はたたき石。帯状に一周する敲打痕がみられる。2・3は北海道式石冠。2は両端を欠損している。3は一端を欠損し、その欠損部を整形して再使用している。いずれも安山岩を素材とする。（谷島）

UP-21（図Ⅲ-32・33 図版12・39）

位置・立地：S-12 標高83.0mの平坦面。

規模：1.46m/1.40m×1.24m/1.30m×0.64m

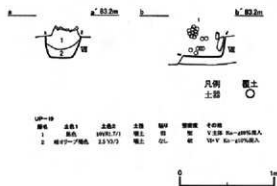
平面形：ほぼ円形

確認・調査：Ⅱ層を掘り下げ中に礫の集中があったので、周囲を精査した結果、検出した。半截したところ、覆土内から礫・礫片、土器片、剥片がまとまって出土した。墓坑の可能性が高いと考えられる。

覆土：遺物の出土状況から人為的な埋め戻しによると考えられる。

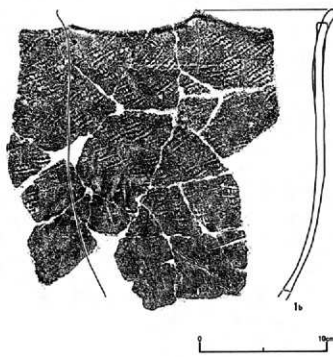
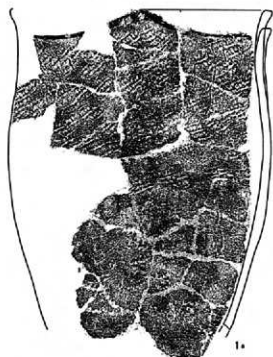
坑底・壁：坑底はほぼ平坦である。壁は長軸方向が垂直に立ち上がり、短軸方向がややオーバーハングしている。

UP-19

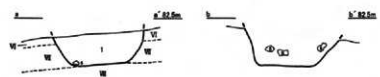
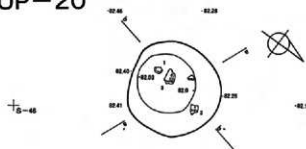


UP-19	遺物	土器	土器	土器	土器	土器	土器
1	赤色	199(S.7)	焼土	特	特	Y 支那 No-4975 土人	
2	緑がら-アフリカ	137(S.7)	焼土	特	特	特	10-V No-4975 土人

±S-19



UP-20

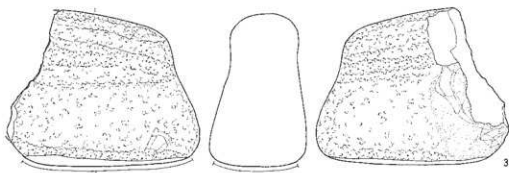
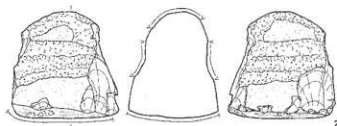


UP-20	遺物	土器	土器	土器	土器	土器	土器
1	赤色	179(S.7)	焼土	特	特	Y 支那 No-4975 土人	



図 III-31 UP-19・20

UP-20出土遺物



0 10cm

UP-21

±S-12

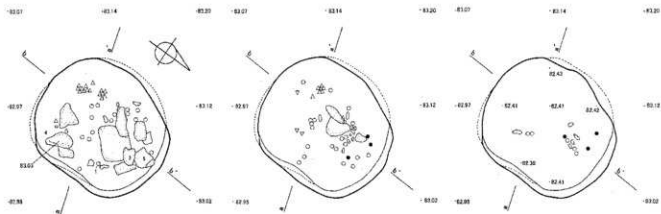
±S-12

±S-12

1回目出土状況

2回目出土状況

3回目出土状況



凡例
 土器 土製
 土製 土製
 土製 土製
 土製 土製

b' 83.3m



b' 83.3m



層名	土層	土層	土層	土層	土層	土層	土層
1	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土
2	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土
3	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土
4	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土
5	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土

0 5m

UP-21出土遺物

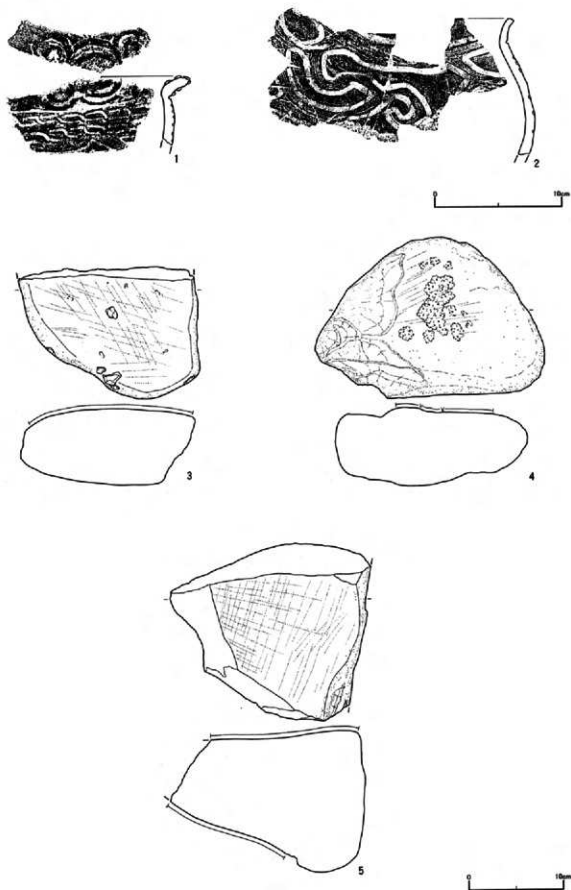


図 III-33 UP-21の遺物

遺物出土状況：土器（Ⅳa 91点・Ⅳb 1点）92点、石器（フレイク25点・台石2点・石皿1点・加工痕のある礫2点）30点、礫・礫片28点、計150点が出土している。覆土内全体において礫・礫片、土器片、剥片が出土したが、壁際よりも中心部にまとまる傾向が窺われた。礫石器・礫・礫片の33点については覆土上部から坑口部にかけて多く出土する傾向が窺われた。素材は全て安山岩である。1kg以上の重さを有するものは12点あり、最大のもは9.45kgの礫であった。これら礫類の総重量は54.7kgである。また、これらのうち、石皿片1点、台石片1点、加工痕のある礫1点、礫・礫片7点が熱を受けていた。覆土上部の南側では頁岩のフレイクが20点ほどまとまって出土した。1、2点を除いては、同一母岩と考えられる。

時期：出土した土器片から縄文時代後期前葉後半の構築と考えられる。

遺物：土器 いずれもⅣ群a類。1は波頂部に粘土紐が貼付されている。乙字状の沈線文が施され、その下に櫛歯状工具による施文も見られる。2は波状に文様が展開している。内面は平滑だが、粘土を積み上げた跡が顕著に観察される。（影浦）

石器 3・4は台石。上面に敲打痕と擦痕がみられる。5は石皿。両面に浅くくぼんだ使用痕がみられる。いずれも安山岩を素材とする。（谷島）

UP-22（図Ⅲ-34 図版12）

位置・立地：Q-11 標高83.4～83.8mの緩斜面上。

規模：1.23m/1.02m×1.08m/0.96m×0.84m

平面形：ほぼ円形

確認・調査：Vc層を掘り下げ中に検出した。半截したところ、Ⅶ層まで掘り込んだ遺構であることが判明した。調査中もⅦ層の崩落は著しかったため、覆土は掘削後すみやかに埋め戻したと考えられる。出土遺物は少ないが、墓坑の可能性はある。

覆土：大きくⅦ層内を掘り込んでいるが、覆土内に混入したKo-gの量が少ない。覆土4については壁の崩落土の可能性が考えられる。堆積状況から人為的な埋め戻しによるものと考えられる。

坑底・壁：坑底は皿状にくぼむ形状である。壁は垂直に立ち上がったのち、中位でやや屈曲し、また坑口部に向けて垂直に立ち上がる。

遺物出土状況：土器（Ⅳa）7点、礫・礫片4点、計11点が出土している。南側の坑口部付近で被熱した礫が1点出土した。この礫は2.67kgである。その他に覆土内から100g台の礫・礫片（非被熱）やⅣ群a類の土器片が散発的に出土した。

時期：縄文時代後期前葉の構築と考えられる。（影浦）

UP-23（図Ⅲ-34 図版13・39）

位置・立地：R-14 斜面上、標高85.4～85.8mの地点。

規模：1.30m/1.06m×1.20m/0.96m×0.76m

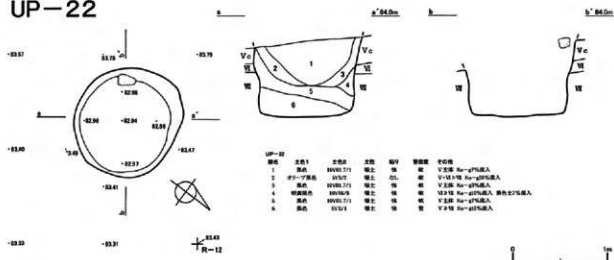
平面形：ほぼ円形

確認・調査：Vc層下位を精査中に検出した。斜面地形の上部に立地しているため、斜面下への流れ込みで周囲はⅦ層・Ⅷ層の堆積が見られなかった。ほとんどⅦ層を掘り込んでの構築である。出土遺物は少ないが、墓坑の可能性が考えられる。

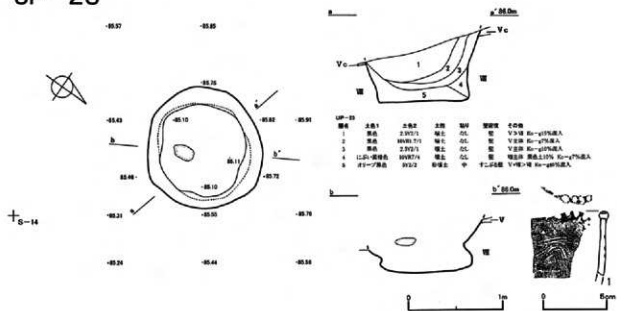
覆土：覆土の堆積状況から人為的な埋め戻しによるものと考えられる。

坑底・壁：坑底面は皿状にくぼむ。壁はややオーバーハングしたのち屈曲し、ゆるやかに開く形状で

UP-22



UP-23



UP-24

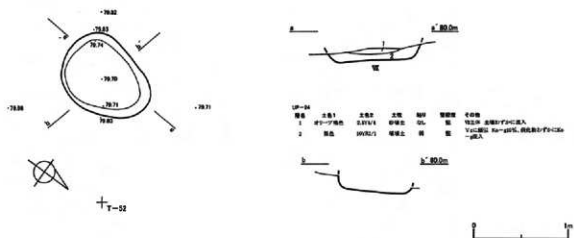


図 III-34 UP-22・23・24

あるが、一部、垂直に開くところもある。

遺物出土状況：土器（Ⅳa）13点、礫2点、計15点が出土している。覆土中央の坑口部付近で被熱した扁平礫が1点出土した。この礫は3.58kgである。他に覆土内から小型の被熱礫（56g）が1点とⅣ群a類の土器片が散発的に出土した。

時期：出土遺物から縄文時代後期前葉の構築と考えられる。

遺物：土器 1は波頂部に棒状工具による刻みを加えたもの。胴部は繊維質の目立つ沈線文を引いている。Ⅳ群a類。 (影浦)

UP-24 (図Ⅲ-34 図版13)

位置・立地：S-51・52 標高79.8m付近、平坦面から斜面への変換点。

規模：1.01m/0.84m×0.78m/0.66m×0.21m

長軸方向：N-1°-E **平面形**：卵形

確認・調査：Ⅷ層上面でUP-25とともに検出した。性格は不明である。

覆土：Ko-g主体層とVc類似層からなる。埋め戻しの可能性があるが、坑底付近のみの検出であったため、詳細は不明である。

坑底・壁：坑底は平坦で、Ⅷ層まで掘り込まれている。立ち上がりは緩やかで壁は外傾するが、東側ではやや急に立ち上がり、壁はややオーバーハングする部分がある。

遺物出土状況：出土していない。

時期：周辺の遺物出土状況から、縄文時代中期前半あるいは後期前葉と推測される。 (柳瀬)

UP-26 (図Ⅲ-35 図版13・39)

位置・立地：P-Q-46 標高82.5m付近の斜面 UP-27と隣接する

規模：0.80m/0.54m×0.85m/0.47m×0.38m

長軸方向：N-13°-W **平面形**：円形

確認・調査：Ⅷ層上面でUP-27とともに検出した。性格は不明である。

覆土：黒色土および黒褐色土からなる。

坑底・壁：坑底は平坦で、Ⅷ層上面付近まで掘り込まれている。立ち上がりは概ね緩やかで壁はやや外傾するが、東～南側では急に立ち上がり、壁は垂直に近い。

遺物出土状況：土層2上面からたたき石1点（1）、覆土から礫1点が出土した。

時期：周辺の遺物出土状況から、縄文時代中期前半あるいは後期前葉の可能性が高い。 (柳瀬)

遺物：石器 1はたたき石。両端を使用している。片面から側縁にかけて黒色物質が付着している。安山岩を素材とする。 (谷島)

UP-27 (図Ⅲ-35 図版13)

位置・立地：P-46 標高82.5m付近の斜面 UP-26と隣接する

規模：0.71m/0.53m×0.66m/0.50m×0.23m

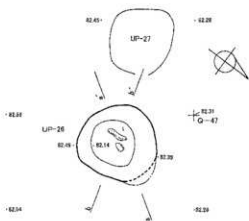
長軸方向：N-69°-E **平面形**：隅丸方形

確認・調査：Ⅷ層上面でUP-26とともに検出した。性格は不明である。

覆土：Vc層に類似する。

坑底・壁：坑底は皿状にくぼみ、Ⅷ層が若干掘り込まれている。立ち上がりは緩やか、壁は外傾する。

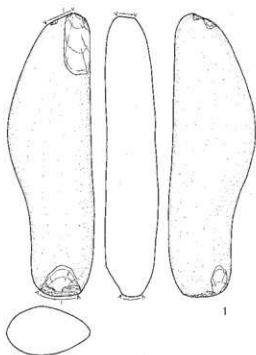
UP-26



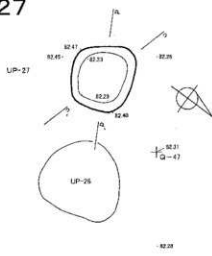
UP-26						
層名	土色	土質	厚	範囲	特徴	その他
1	赤色	砂質土	約 10cm	全周	瓦片	V>Vc 瓦片の破片
2	赤褐色	粘質土	約 5cm	中心部	瓦片	V<Vc
3	赤色	砂質土	約 10cm	全周	瓦片	V=Vc 瓦片の破片
4	赤色	粘質土	約 10cm	中心部	瓦片	V=Vc 瓦片の破片



UP-26出土遺物



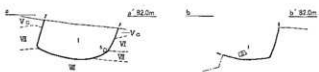
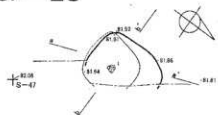
UP-27



UP-27						
層名	土色	土質	厚	範囲	特徴	その他
1	赤色	砂質土	約 10cm	全周	瓦片	V=Vc 瓦片の破片



UP-28



UP-28						
層名	土色	土質	厚	範囲	特徴	その他
1	赤色	砂質土	約 10cm	全周	瓦片	V=Vc 瓦片の破片



UP-28出土遺物

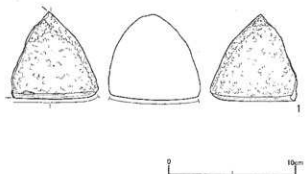


図 III-35 UP-26・27・28

遺物出土状況：覆土から安山岩のフレイクが1点出土した。

時期：周辺の遺物出土状況から、縄文時代中期前半あるいは後期前葉の可能性が高い。（柳瀬）

UP-28 (図Ⅲ-35 図版13・39)

位置・立地：R-S-47 標高81.9m付近の斜面

規模：(0.78)m/0.58m× - m/0.58m×0.42m

長軸方向：N-4°-W 平面形：隅丸方形

確認・調査：S-47区とR-47区との境界の壁面において、黒色土の落ち込みを検出した。R-47区を掘り下げたところVc層下位で平面形を検出した。覆土が埋め戻しと推測されることから墓坑の可能性はある。

覆土：黒色土の単層である。埋め戻しと推測される。

坑底・壁：坑底はほぼ平坦だが、南側ではやや傾斜する。Ⅱ層がわずかに掘り込まれている。南半では立ち上がりは急で、壁はオーバーハングする。北半では緩やかに立ち上がり、壁はやや外傾する。

遺物出土状況：坑底直上から北海道式石冠の破片が1点出土した。

時期：出土遺物と周辺の遺物出土状況から、縄文時代中期前半である。（柳瀬）

遺物：石器 1は安山岩を素材とした北海道式石冠の下部破片。（谷島）

UP-29 (図Ⅲ-36 図版14)

位置・立地：S-49 標高80.7m付近の平坦面

規模：0.83m/0.51m×0.78m/0.53m×0.49m

平面形：円形

確認・調査：Ⅱ層上面で検出した。坑底から大形の扁平礫が2点出土しており、遺物出土状況から、石皿・台石の素材を埋納した土坑と推測される。

覆土：Vc層に類似する黒色土。埋め戻しと推測される。

坑底・壁：坑底は皿状にくぼみ、Ⅱ層がわずかに掘り込まれている。立ち上がりは緩やかで、壁は垂直に近い。南側で壁はややオーバーハングする。

遺物出土状況：Ⅲ群a類土器14点、安山岩のフレイク2点、礫3点、計19点が出土した。Ⅲ群a類土器は検出面で出土したものである。礫のうち2点は坑底をうめるように出土した。図の左の礫が45cm×32cm×14cm・26.8kg、右のものが40cm×33cm×14cm・30.4kgで、大きさ・形状ともに石皿・台石の素材となり得るものである。右の礫は縁辺に敲打痕が認められる。

時期：出土遺物および周辺の遺物出土状況から、縄文時代中期前半の可能性が高い。（柳瀬）

UP-30 (図Ⅲ-36 図版14・30)

位置・立地：Q-12 標高83.8~84.0mの緩斜面。

規模：(1.12)m/(0.82)m×(0.86)m/(0.58)m×(0.34)m

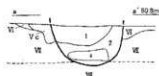
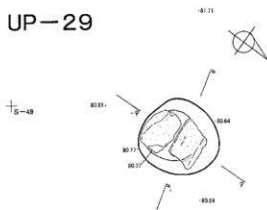
長軸方向：N-66°-E 平面形：楕円形

確認・調査：Ⅱ層上面において確認した。斜面の下で流れ込み土が多いため、遺構の範囲が判然としなかったが、黒色土のまとまりの中から土器を検出したため、半截した。遺構の性格は不明。

覆土：単層であるが、遺物の出土状況から人為的な埋め戻しの可能性が考えられる。

坑底・壁：坑底面はやや皿状にくぼむと予想される。坑底面がⅡ層(Ko-g)上位であったことから、

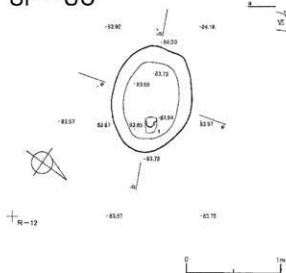
UP-29



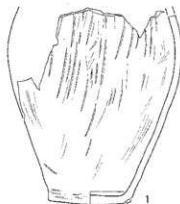
層名	土層1	土層2	土質	層V	受埋物	その他
1	礫層	砂礫土	砂礫土	砂	イロ土層等	Vc:砂土層 Kc=砂土層
2	礫層	砂礫土	砂礫土	砂	イロ土層等	Vc:砂土層 Kc=砂土層



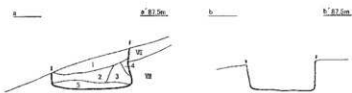
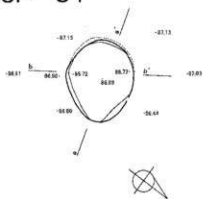
UP-30



層名	土層1	土層2	土質	層V	受埋物	その他
1	礫層	砂礫土	砂土	砂	イロ土層等	Vc:砂土層 Kc=砂土層



UP-31



層名	土層1	土層2	土質	層V	受埋物	その他
1	礫層	砂礫土	砂礫土	砂	イロ土層等	Kc=砂土層 Kc=砂土層
2	礫層	砂礫土	砂土	砂	イロ土層等	Kc=砂土層 Kc=砂土層
3	礫層	砂礫土	砂礫土	砂	イロ土層等	Kc=砂土層 Kc=砂土層
4	礫層	砂礫土	砂土	砂	イロ土層等	Kc=砂土層 Kc=砂土層
5	礫層	砂礫土	砂礫土	砂	イロ土層等	Kc=砂土層 Kc=砂土層

図 III-36 UP-29・30・31

覆土と一緒に掘り過ぎた可能性がある。

遺物出土状況：土器（Ⅳa）11点が出土している。Ⅳ群a類土器が1個体分出土した。

時期：出土した土器片から縄文時代後期前葉の構築と考えられる。

遺物：土器 Ⅰは無文土器の下半部。縦方向の擦痕が顕著に残る。（影浦）

UP-31（図Ⅲ-36）

位置・立地：N-11 河岸段丘の斜面に位置する。

規模：0.85m/0.87m×0.72m/0.70m×0.32m

長軸方向：N-59°-E **平面形**：傾斜に直交する東西にやや長い楕円形

確認・調査：Ⅱ層上面で黒色のまとまりを検出したので、土層観察のため斜面の傾斜に沿って半載した。掘り込み面はⅤb層と考えられる。

覆土：覆土はKo-gを含む砂壤土が主体で、自然堆積である。

坑底・壁：断面形は坑底がほぼ平坦で、西側の坑底が確認面より広がり同方向の壁はオーバーハングする。他は坑底から若干丸みを持ちほぼ垂直に立ち上がる。坑底はⅢ層に掘り込まれている。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：周囲の包含層で出土した遺物から判断して、縄文時代後期前葉の可能性がある。（谷島）

UP-32（図Ⅲ-37 図版14）

位置・立地：S-15 斜面上、標高85.4～85.6mの地点。

規模：1.10m/1.06m×1.06m/0.94m×0.52m

平面形：ほぼ円形

確認・調査：Ⅱ層上面を精査中、確認した。ほぼ同一の標高にUP-23、UP-35と並んでおり、いずれとも規模・平面形が似ていたため、早い段階から遺構を想定することができた。出土遺物が非常に少なく、覆土も自然堆積と人為堆積の別を明らかにし得なかったが、UP-23などと一連のものとして掘るならば、墓坑の可能性も考えられる。

覆土：堆積状況から人為的な埋め戻しによるものと考えられる。確認面がⅡ層中、掘り込みはⅢ層上面までであるが、覆土はⅤ層を主体としたものである。おそらくⅤ層中から掘り込んだのであろう。また、埋め戻しの際に、掘り上げ土のうちからⅢ層に相当するKo-gを意図的によけた可能性も考えられる。

坑底・壁：坑底はⅢ層上面で、皿状にくぼむ。壁はややオーバーハングしたのち屈曲し、ゆるやかに開くが、一部、垂直に立ち上がることもある。

遺物出土状況：土器（Ⅳa）5点が出土している。覆土内から散発的に出土した。

時期：出土した土器片から縄文時代後期前葉の構築と考えられる。（影浦）

UP-33（図Ⅲ-37 図版14）

位置・立地：R-11 標高83.0m付近の平坦面。

規模：0.98m/0.84m×0.84m/0.72m×0.36m

平面形：ほぼ円形

確認・調査：Ⅱ層上面で検出した。Ⅱ層中の掘り込みであるため、調査中に壁の小崩落が見られた。構築後、覆土はすみやかに埋め戻したと考えられる。立ち枯れた木根痕の空洞にⅤ層（黒色土）が流れ込んだ跡など自然攪乱の疑いもある。

覆土：上下2層に分けられる。一応、人為的な埋め戻しと考えられるが、覆土1が自然攪乱である場合は、木根痕の可能性もありうる。

坑底・壁：坑底はⅦ層中である。浅く皿状にくぼむ。壁は急に立ち上がる。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：不明であるが、周辺の遺構および出土遺物から縄文時代後期前葉の可能性が高い。（影浦）

UP-34（図Ⅲ-37・38 図版15・39）

位置・立地：P-Q-11 斜面下、標高84.0~84.2mの地点の構築と推定される。

規模：1.14m/1.18m×1.06m/1.14m×0.82m

平面形：ほぼ円形

確認・調査：トレンチ調査中に断面で検出した。検出部分で深さ82cmを測ったが、斜面の下で流入土の堆積が厚い地区であったため、坑底部はⅦ層内にとどまっている。遺構の性格は不明。

覆土：堆積状況から人為的な埋め戻しによるものと考えられる。掘り込みがⅦ層まで達していないにもかかわらず、覆土5においては著しいKo-gの混入（40%）が認められた。隣接する大型土坑UP-9の掘り上げ土が混入したものであろう。

坑底・壁：坑底面は皿状を呈する。壁はオーバーハングしたのち屈曲し、坑口部に向けて大きく開く。いわゆるフラスコ状の土坑である。

遺物出土状況：土器（Ⅳa）29点、石器（Uフレイク1点・たつき石5点・台石1点）7点、礫・礫片6点、計42点が出土している。覆土中位において台石（非被熱）を検出した。重さ6.5kg。他に覆土内からⅣ群a類の土器片、たつき石片、礫・礫片などが散発的に出土した。たつき石片はすべてが接合し1個体となった。礫・礫片はいずれも1kgに満たない小礫である。

時期：覆土内の出土土器片と周辺の遺構から縄文時代後期前葉の可能性が高い。また覆土の観察結果から、隣接するUP-9より後の構築と考えられる。（影浦）

遺物：石器：1は頁岩を素材としたUフレイク。下側縁に使用痕がみられる。2はたつき石。片面を使用している。被熱によりひび割れが生じている。3は台石。両面に敲打痕と擦痕がみられる。2・3は安山岩を素材とする。（谷島）

UP-35（図Ⅲ-38 図版15）

位置・立地：S-14 斜面下、85.6~85.8mの地点。

規模：1.10m/1.22m×0.98m/1.10m×0.80m

平面形：ほぼ円形

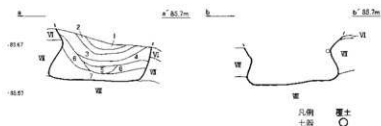
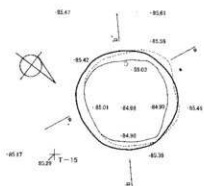
確認・調査：Ⅶ層精査中に検出した。UP-23、UP-32の間に位置し、ほぼ一列に並ぶ。出土遺物は少ないが、坑口部付近で検出した礫に注目し、さらにUP-23、UP-32と一連のものとして捉えるならば、墓坑の可能性も考えられる。

覆土：ほとんど黒色の砂壤土であるが、下へいくほど粘性が増しオリーブ色を帯びてくる傾向がある。その堆積状況から人為的な埋め戻しと考えられる。

坑底・壁：坑底は周縁の一部が中央部よりわずかに下がっているところがある。壁はややオーバーハングしたのち屈曲し、坑口部に向けて大きく開く。くびれの弱いフラスコ状の土坑である。

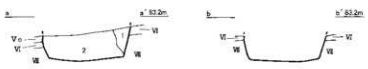
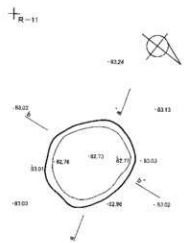
遺物出土状況：土器（Ⅳa）2点、礫・礫片2点、計4点が出土している。坑口部付近において礫を1点出土した。重さ1.875kgである。他に覆土内からⅣ群a類の土器片と被熱した小礫片が出土した。

UP-32



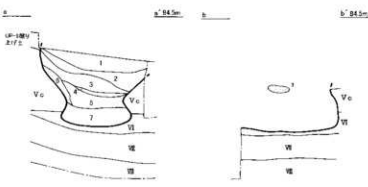
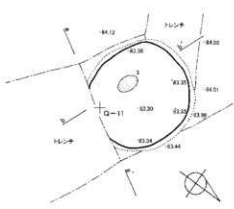
層名	土色1	土色2	土質	形状	厚さ	特徴	その他
1	赤色	黒色	粘土	溝	約 10cm	溝	V-12層 赤土層の底
2	赤色	黒色	粘土	溝	約 10cm	溝	V-12層 赤土層の底
3	赤色	黒色	粘土	溝	約 10cm	溝	V-12層 赤土層の底
4	赤色	黒色	粘土	溝	約 10cm	溝	V-12層 赤土層の底
5	赤色	黒色	粘土	溝	約 10cm	溝	V-12層 赤土層の底
6	赤色	黒色	粘土	溝	約 10cm	溝	V-12層 赤土層の底
7	赤色	黒色	粘土	溝	約 10cm	溝	V-12層 赤土層の底

UP-33



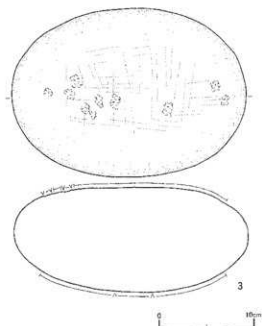
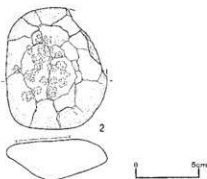
層名	土色1	土色2	土質	形状	厚さ	特徴	その他
1	赤色	黒色	粘土	溝	約 10cm	溝	V-12層 赤土層の底
2	赤色	黒色	粘土	溝	約 10cm	溝	V-12層 赤土層の底

UP-34

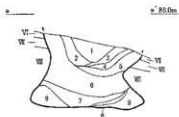
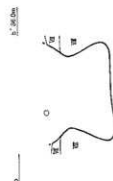
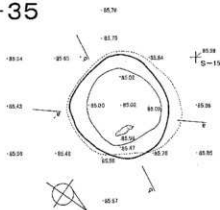


層名	土色1	土色2	土質	形状	厚さ	特徴	その他
1	赤色	黒色	粘土	溝	約 10cm	溝	V-12層 赤土層の底
2	赤色	黒色	粘土	溝	約 10cm	溝	V-12層 赤土層の底
3	赤色	黒色	粘土	溝	約 10cm	溝	V-12層 赤土層の底
4	赤色	黒色	粘土	溝	約 10cm	溝	V-12層 赤土層の底
5	赤色	黒色	粘土	溝	約 10cm	溝	V-12層 赤土層の底
6	赤色	黒色	粘土	溝	約 10cm	溝	V-12層 赤土層の底
7	赤色	黒色	粘土	溝	約 10cm	溝	V-12層 赤土層の底
8	赤色	黒色	粘土	溝	約 10cm	溝	V-12層 赤土層の底

UP-34出土遺物



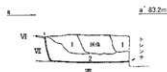
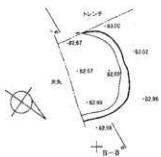
UP-35



遺物	発見1	発見2	土質	形状	厚さ	厚さ	その他
1	丸石	1000(17)	硬土	楕円	約	約	V-25層 K ₁₀ -g ₁₇ 層底
2	オリーブ片	1000(17)	硬土	楕円	約	約	V-25層 K ₁₀ -g ₁₇ 層底
3	骨片	1000(17)	硬土	楕円	約	約	V-25層 K ₁₀ -g ₁₇ 層底
4	オリーブ片	1000(17)	硬土	楕円	約	約	V-25層 K ₁₀ -g ₁₇ 層底
5	オリーブ片	1000(17)	硬土	楕円	約	約	V-25層 K ₁₀ -g ₁₇ 層底
6	オリーブ片	1000(17)	硬土	楕円	約	約	V-25層 K ₁₀ -g ₁₇ 層底
7	オリーブ片	1000(17)	硬土	楕円	約	約	V-25層 K ₁₀ -g ₁₇ 層底
8	オリーブ片	1000(17)	硬土	楕円	約	約	V-25層 K ₁₀ -g ₁₇ 層底
9	オリーブ片	1000(17)	硬土	楕円	約	約	V-25層 K ₁₀ -g ₁₇ 層底



UP-36



遺物	発見1	発見2	土質	形状	厚さ	厚さ	その他
1	丸石	2000(17)	硬土	楕円	約	約	V-25層 K ₁₀ -g ₁₇ 層底
2	オリーブ片	2000(17)	硬土	楕円	約	約	V-25層 K ₁₀ -g ₁₇ 層底



図 III-38 UP-34の遺物と UP-35・36

時期：UP-23、UP-32とほぼ同時期の構築と考えられること、遺構の規模・形状、坑口部の礫のあり方などから縄文時代後期前葉の可能性が高い。(影浦)

UP-36 (図Ⅲ-38)

位置・立地：R-7 自然堤防部の下で、標高83.0mの平坦面。河岸段丘の屑部分。

規模：(0.90)m/(0.84)m×(0.60)m/(0.54)m×0.30m

平面形：円形(推定)

確認・調査：Ⅱ層を精査中に検出した。東側の半分は段丘部にかかっていた土石流を除去した際に削平した可能性が高い。段丘縁での検出であることから、遺構構築後、土石流堆積以前の河川の浸食作用によって、最初から失われていた可能性も考えられる。南側は基本土層観察用に掘削したトレンチによって欠失した。遺構の性格は不明。

覆土：セクションベルトが薄かったため、半截作業中に一部が崩落、欠失した。このため、自然作用による埋没か人為的な埋め戻しによるか、覆土の成因は明らかにし得なかった。立ち枯れた木根痕の空洞にⅤ層(黒色土)が流れ込んだ跡など自然攪乱の疑いもある。

坑底・壁：掘り込みはⅡ層上面に及ぶ。坑底は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：不明である。(影浦)

UP-37 (図Ⅲ-39 図版15・40)

位置・立地：T-13 標高82.6~82.8mの斜面上。

規模：1.18m/1.20m×1.00m/1.16m×0.45m

平面形：不整形円形

確認・調査：斜面部分を精査中、礫のまとまりを検出した。最初は斜面の上から流れ落ちた礫のたまりと考えられたが、遺物を残して半截したところ、人為的な埋め戻しが確認された。遺構の性格は不明である。

覆土：ほとんど黒色の壤土を基調としたものであるが、その堆積状況から人為的な埋め戻しである。Ⅱ層内の掘り込みであることから、すみやかに埋め戻したものと考えられる。

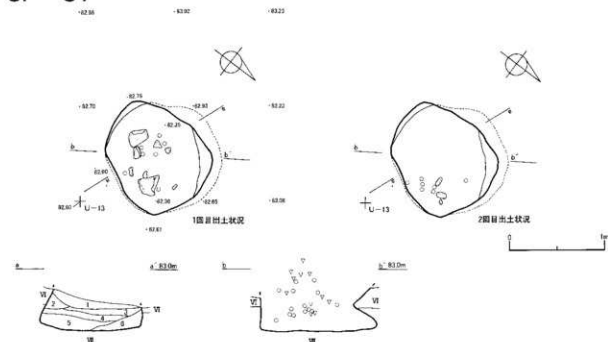
坑底・壁：坑底はほぼ平坦である。壁はややオーバーハングしたのち屈曲し、ゆるやかに開くが、一部、垂直に開くところもある。

遺物出土状況：土器(Ⅳa46点・Ⅳb2点)48点、石器(石槍またはナイフ1点・フレイク1点)2点、礫・礫片15点、計65点が出土している。坑口部中央において礫・礫片のまとまる傾向が窺われた。重量1kgを越える礫・礫片は5点を数える。最大のもは6.95kg、次いで5.8kg、1kg台の礫が3点と続く。土器はⅣ群a類13点、Ⅳ群b類2点が覆土内から散発的に出土、他に頁岩製のナイフ片とメノウのフレイクが各1点出土した。

時期：縄文時代後期前葉と考えられる。(影浦)

遺物：石器 1はスクレイパーの破片。右側縁は両面調整である。左側縁は被熱による破損面。頁岩を素材とする。(谷島)

UP-37



UP-37

層名	土名1	土名2	土質	層V	層名	年代
1	褐色	10791219	硬土	赤	無	V 1910 Ac. 40752A
2	黄褐色	10791119	硬土	赤	有	V 1910 Ac. 40752A
3	褐色	10791119	硬土	赤	有	V 1910 Ac. 40752A
4	褐色	10791119	硬土	赤	有	V 1910 Ac. 40752A
5	褐色	10791119	硬土	赤	有	V 1910 Ac. 40752A
6	褐色	10791119	硬土	赤	有	V 1910 Ac. 40752A

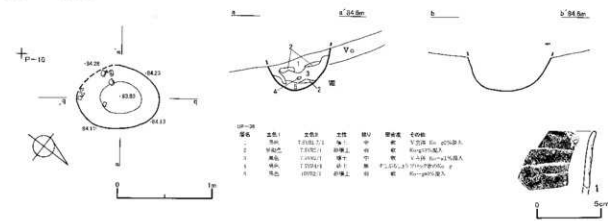
凡例

○ 土器

▽ 硬土

0 1 5cm

UP-38



UP-38

層名	土名1	土名2	土質	層V	層名	年代
1	褐色	10791119	硬土	赤	有	V 1910 Ac. 40752A
2	黄褐色	10791119	硬土	赤	有	V 1910 Ac. 40752A
3	褐色	10791119	硬土	赤	有	V 1910 Ac. 40752A
4	褐色	10791119	硬土	赤	有	V 1910 Ac. 40752A
5	褐色	10791119	硬土	赤	有	V 1910 Ac. 40752A

図 III-39 UP-37・38

UP-38 (図III-39 図版40)

位置・立地：P-9 斜面から低地平坦面に移行する傾斜変換部にあたる。

規模：0.87m/0.44m×0.67m/0.33m×0.44m

長軸方向：N-36°-W

平面形：傾斜に併行する北西-南東方向の長楕円形

確認・調査：UP-7とUP-12の間のVc層で黒色土のまとまりを確認したので、土層観察のため斜面の傾斜に沿って半載した。掘り込み面はVb層と思われる。

覆土：覆土はKo-gを含む砂壤土が主体で、埋め戻したと思われる。木根による攪乱とみなされる部分もある。

坑底・壁：坑底から壁の立ち上がりは丸みを持つ。坑底はⅧ層に掘り込まれている。

遺物出土状況：土器(Ⅲa1点・Ⅳa5点)6点、礫・礫片2点、計8点が出土している。斜面上部に該当する南半部にまとまって出土した。

時期：出土遺物から判断して、縄文時代後期前葉である。(谷島)

遺物：土器 1はⅣ群A類。粘土を輪積みした痕が明瞭である。(影浦)

UP-39 (図III-40 図版16・40)

位置・立地：P-Q-9・10 低位河岸段丘面に位置する。

規模：2.79m/2.56m×1.92m/1.93m×0.55m

長軸方向：N-30°-W

平面形：南北方向の長楕円形

確認・調査：層位確認のため河岸段丘斜面から低位段丘面までトレンチを入れたが、そのトレンチの壁で黒色土の落ち込みを確認した。円形に近い平面形になると考え、土層断面位置を設定したが西側は緩い湾曲になる。覆土の上部から石囲い炉とそれに伴う焼土を検出している。

覆土：覆土1層は自然堆積層でVb層に相当する。覆土3層の上面から石囲い炉と焼土が検出されている。これより下部は埋め戻しと思われる。

坑底・壁：坑底は西側がえぐり込み円形に近い。坑底は中央部がやや盛り上がり、壁は西側がオーバーハングし、南側で直立、東側は開き気味に立ち上がる。北側の壁はトレンチにより失われているが、残存する立ち上がり部分は坑底部分から上がり始め丸みを持つ。坑底はⅧ層上面である。

付属遺構：中央部西側の覆土3層の上面から石囲い炉と焼土を検出した。石囲い炉の西側の炉石は動き、元の推定される位置より高いところから出土している。覆土1層は自然堆積層であることから墓坑上部のくぼみを利用した炉の可能性もあるが、炉石の状態から墓坑に伴う石囲い炉と思われる。この墓坑を埋め戻した上に炉を作り火が焚かれていた可能性が高い。焼土の上部から骨片が出土している。中央部西側の坑底に先のすばまる小ピットが検出されている。

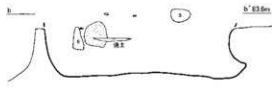
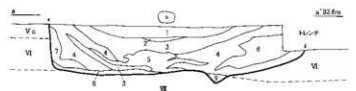
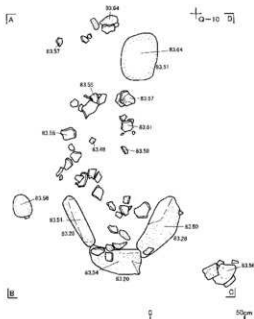
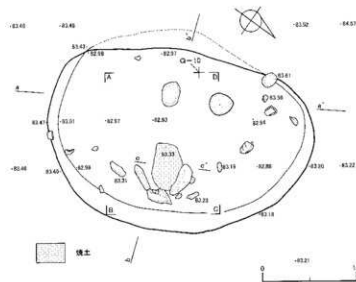
遺物出土状況：土器(Ⅲa1点・Ⅳa51点)52点、石器(スクレイパー1点・Uフレイク1点・フレイク4点・たつき石1点・扁平打製石器1点)8点、礫・礫片26点、計86点が出土している。覆土上部からすべての土器片とUフレイク、扁平打製石器、それからフレイク3点と礫・礫片22点出土している。覆土の中位からスクレイパー、たつき石、フレイクが各1点と礫2点が出土し、坑底からスクレイパー1点が出土している。東側に多く検出している。

時期：出土遺物から判断して、縄文時代後期前葉である。(谷島)

遺物：土器 1はⅣ群A類。口縁の波頂部は肥厚し、刻みが深く加えられている。(影浦)

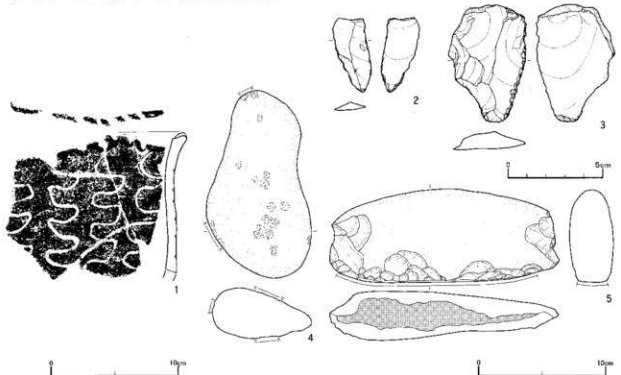
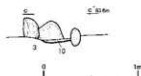
石器 2はスクレイパー。一側縁と他の側縁下部に刃部調整がみられる。3はUフレイク。両側縁

UP-39



UP-39

番号	土器名	土器の	土器	形状	資料所	その他
1	土器	10000.1	土器	丸	丸	10000.1 No. 10000.1, 丸, 10000.1
2	土器	10000.2	土器	丸	丸	10000.2 No. 10000.2, 丸, 10000.2
3	土器	10000.3	土器	丸	丸	10000.3 No. 10000.3, 丸, 10000.3
4	土器	10000.4	土器	丸	丸	10000.4 No. 10000.4, 丸, 10000.4
5	土器	10000.5	土器	丸	丸	10000.5 No. 10000.5, 丸, 10000.5
6	土器	10000.6	土器	丸	丸	10000.6 No. 10000.6, 丸, 10000.6
7	土器	10000.7	土器	丸	丸	10000.7 No. 10000.7, 丸, 10000.7
8	土器	10000.8	土器	丸	丸	10000.8 No. 10000.8, 丸, 10000.8
9	土器	10000.9	土器	丸	丸	10000.9 No. 10000.9, 丸, 10000.9
10	土器	10000.10	土器	丸	丸	10000.10 No. 10000.10, 丸, 10000.10
11	土器	10000.11	土器	丸	丸	10000.11 No. 10000.11, 丸, 10000.11
12	土器	10000.12	土器	丸	丸	10000.12 No. 10000.12, 丸, 10000.12



図III-40 UP-39

に使用痕がみられる。4はたたき石。両面と側縁部を使用している。5は扁平打製石器。両端と下側縁に打ち欠きがみられ、下面を擦っている。2・3は頁岩、4・5は安山岩を素材とする。(谷島)

UP-40 (図Ⅲ-41)

位置・立地：R-50 標高80.3m付近の平坦面 UF-2と隣接する

規模：0.58m/0.30m×0.50m/0.25m×0.18m

長軸方向：N-64°-W 平面形：楕円形

確認・調査：Ⅱ層中位で検出した。UF-2と隣接する。性格は不明である。

覆土：黒褐色土の単層。

坑底・壁：坑底は皿状にくぼみ、Ⅱ層まで掘り込まれている。立ち上がりは緩やかで、壁は外傾する。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：周辺の遺物出土状況から、縄文時代中期前半あるいは後期前葉と推測される。(柳瀬)

UP-41 (図Ⅲ-41)

位置・立地：P-22 台地上に位置する。

規模：1.07m/0.89m×0.81m/0.71m×0.20m

長軸方向：N-8°-W 平面形：南北方向の楕円形

確認・調査：Ⅱ層上面で黒色土のまとまりを確認し、土層観察のため南北の長軸方向で半截した。

覆土：覆土は黒色壤土の単一層で、掘り込み面はⅡ層中と考えられる。

坑底・壁：坑底は若干丸みを帯び、緩やかに壁が立ち上がる。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：周囲の包含層で縄文時代後期前葉が出土していることから、同時期と推定される。(谷島)

UP-42 (図Ⅲ-41)

位置・立地：P-12 河岸段丘の斜面に位置する。

規模：(0.70)m/(0.75)m×0.95m/0.75m×0.57m

長軸方向：N-0° 平面形：南北方向の楕円形と推定される。

確認・調査：層位確認のために掘った河岸段丘斜面から低位段丘面までのトレンチの壁で黒色土の落ち込みを確認した。トレンチで失われて、北半分の形態は不明だが、残存部分から南北方向に長軸を持つ楕円形と推定される。

覆土：覆土下層にⅡ層とⅢ層を含む砂壤土が堆積し、上部はⅡ層を含む黒から黒褐色の砂壤土が自然堆積している。坑底はⅢ層に掘り込まれ、掘り込み面はⅡ層である。

坑底・壁：坑底は丸みがあり南側がくぼむ。西側の壁は中程が突き出してくびれ、南側はオーバーハングし、東側は斜めに開いて立ち上がる。断面形態から判断して木根の可能性を考えたが、覆土下部のⅡ層とⅢ層を含む砂壤土があることや坑底に木根の痕跡がみあたらないことから墓坑とした。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：Ⅱ層から掘り込まれていることや、周囲の包含層でⅡ群 a 類の土器片が出土していることから、同時期と推定される。(谷島)

UP-44

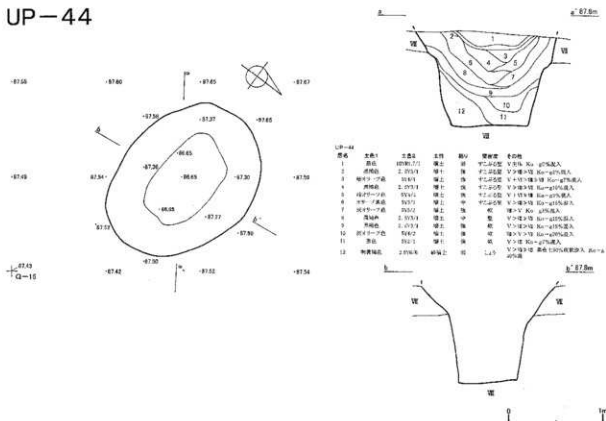


図 III-42 UP-44

UP-43 (図 III-41 図版16・41)

位置・立地：Q-R-49・50

規模：1.54m/1.34m×(0.77)m/0.70m×0.28m

長軸方向：N-57°-W 平面形：楕円形

確認・調査：R-50区Ⅶ層で検出した。R-49区へ続くことを想定して半載したところ、坑底と壁が検出されたため土坑と判断した。性格は不明である。

覆土：黒色土および黒褐色土である。堆積の形状から、埋め戻しの可能性がある。

坑底・壁：坑底は平坦で、Ⅶ層まで掘り込まれる。立ち上がりは、南・北側では急、東・西側では緩やか。壁は垂直に近く、南・北側ではややオーバーハングする部分もある。

遺物出土状況：土器(Ⅲa 1点・Ⅳa 3点) 4点、台石片 1点、礫 3点、計 8点が出土した。覆土から、20cmほどの礫が 3点出土した。

時期：出土遺物および周辺の遺物出土状況から、縄文時代中期前半あるいは後期前葉と推測される。

(柳瀬)

遺物：石器 1は安山岩を素材とした台石。図の下側縁は被熱している。

(谷島)

UP-44 (図 III-42 図版16)

位置・立地：P-16 標高87.55~87.65m 台地上の平坦面。

規模：1.80m/1.02m×1.38m/0.62m×1.02m

長軸方向：N-86°-W 平面形：楕円形

確認・調査:Ⅱ層を精査中に検出した。長軸で半截したところ、中心部が深く、Ⅱ層中にある坑底面までは深さ1mあることが判明した。規模や形状からTピットの可能性があるが、本遺構の調査後に台地上で数基検出されたTピットとは特徴が異なり、一基のみ単独の印象があった。また、覆土もローム質が強く、人為的な埋め戻しが想定されるものであった。TPを冠せず、土坑と判断した。

覆土:黒褐色土とオリブ系の土壌の互層である。人為的に埋め戻した可能性が高い。

坑底・壁:坑底はほぼ平坦である。壁は垂直に急角度で立ち上がり、途中で屈曲し、緩やかな角度で大きく開く。

遺物出土状況:遺物は出土していない。

時期:不明である。

(影浦)

UP-45 (図Ⅲ-43~46 図版17・32・40)

位置・立地:R-48 標高81.3m付近の平坦面 UP-46と隣接する

規模:(1.99)m/(1.70)m×(1.60)m/(1.48)m×0.40m

長軸方向:N-11°-E **平面形:**隅丸長方形?

確認・調査:R 48-48区V c層上位で、長径5m程度の黒色土の楕円形の広がり、その中央付近に位置する石囲い炉US-11を検出した。黒色土の規模と平面形から、竪穴住居跡の存在を想定し、US-11は竪穴住居跡廃棄後のくぼみに構築されたものと判断した。トレンチ調査を行ったところ、トレンチの全面にわたって床面と想定されるⅡ層との境界が検出され、また、明瞭な立ち上がりが部分的に検出されたため竪穴住居跡と判断して、検出した黒色土の範囲にしたがって掘り下げを行った。

当初想定した床面近くまで調査を進めた段階で、床面と想定した面に、東西で高低差があることがわかった。再度精査したところ、当初検出した楕円形の中央付近は木根などによると思われる攪乱であり、楕円形の西端と東端はそれぞれ1基の土坑であることを確認した。西端の土坑をUP-45、東端の墓坑をUP-46とし、改めて調査を行った。このような調査経過のため、UP-45西半部では壁の大部分が確認できなかった。UP-45とUP-46の間の攪乱は、UP-45・46構築後に起こり、その後US-11が構築されたと判断した。覆土が埋め戻しと推測されることと遺物の出土状況から、墓坑と推測される。

覆土:黒色土および黒褐色土で、V c層にKo-gが混入した土層である。埋め戻しと推測される。

坑底・壁:坑底は平坦でⅡ層上面付近まで掘り込まれている。立ち上がりは緩やかで、壁は外傾する。

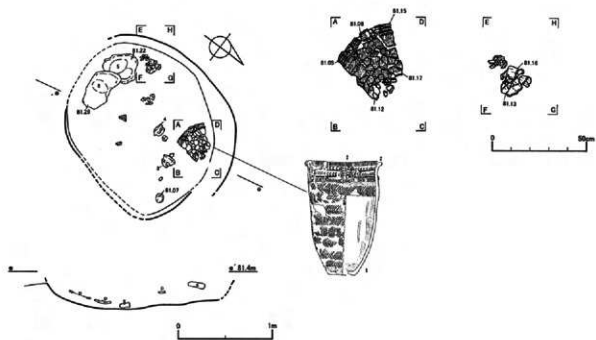
遺物出土状況:土器(Ⅲ a 314点・Ⅳ a 3点) 317点、焼成粘土塊1点、石器(安山岩のフレイク3点・北海道式石冠3点、石皿2点) 8点、礫・礫片8点、計334点が出土した。

坑底直上からⅢ群 a類土器と石器がまとまって出土した。Ⅲ群 a類土器は2個体出土し、一方は北側の壁際でつぶれた状態で(1)、もう一方は西側の壁際で1/2個体分ほどがまとまって(2)出土した。未焼成の底部片が1点出土している。石器は石皿2点(5・6)、北海道式石冠2点(3・4)、安山岩のフレイク1点、礫3点が出土した。石皿2点は南側の壁際で部分的に重なって、北海道式石冠は北側の土器の近くで出土した。

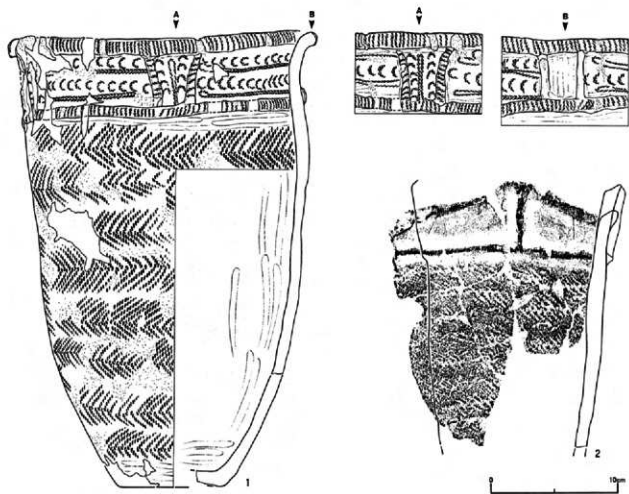
時期:出土遺物から、縄文時代中期前半である。

(柳瀬)

遺物:土器 いずれもⅢ群 a類。1は復元個体。文様帯は2本組の燃系圧痕と馬蹄形圧痕文からなる。縦の2本の貼付文に区画されたところが4カ所で見られるが、文様の施文パターンはどれも異なる。地文の結束第1種羽状縄文は一部が重複して、斜行縄文に見えるところもある。2は波頂部から粘土紐が縦に垂下し、横の貼付文と結びついたもの。地文は結束第1種斜行縄文が上位を2段巡り、



UP-45出土遺物



図III-44 UP-45の遺物(1)

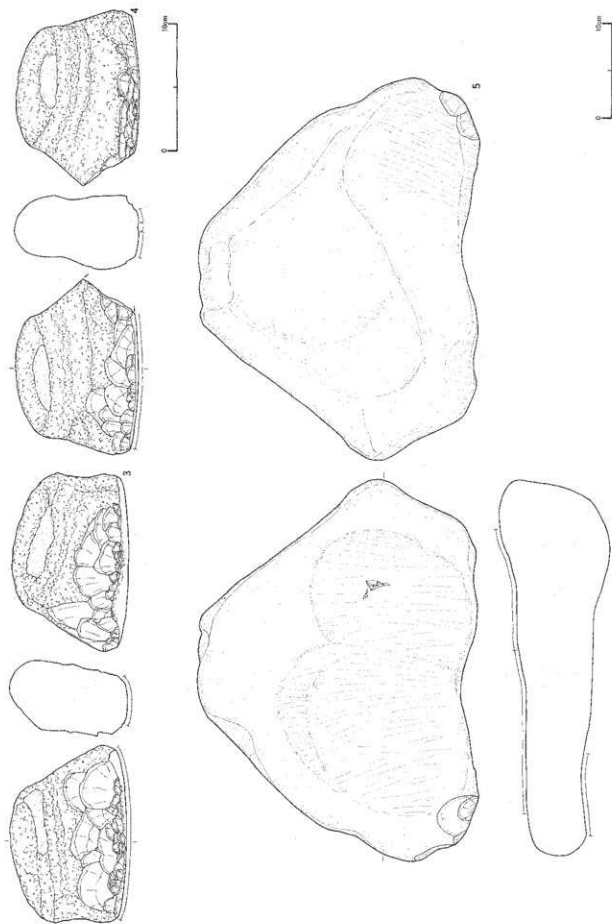


図 III - 45 UP-45の遺物(2)

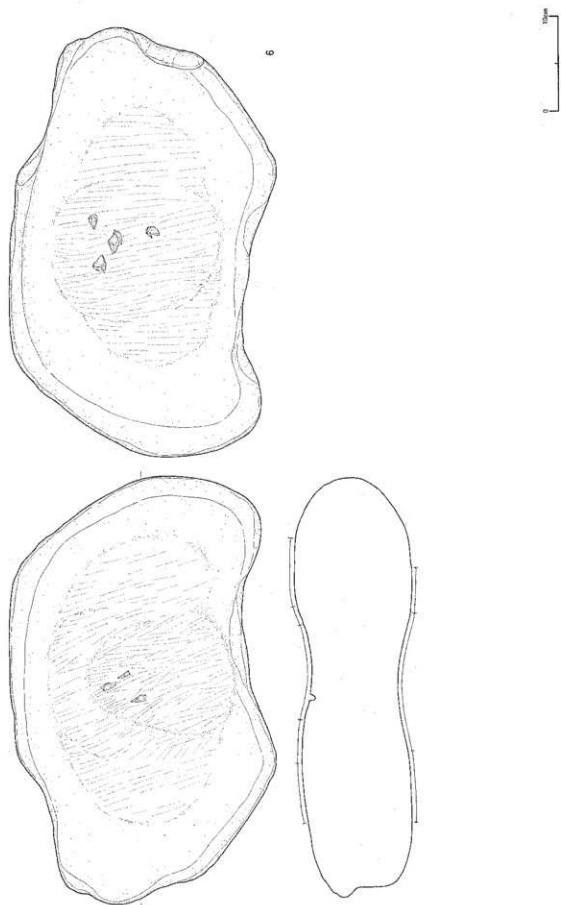
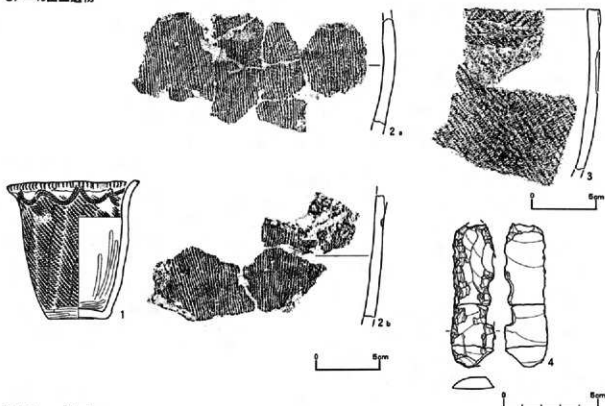
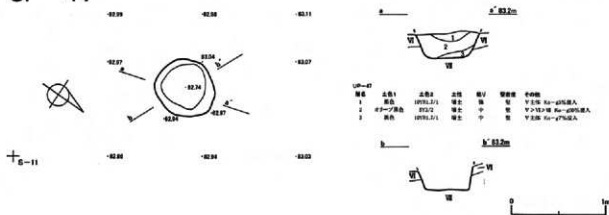


図 III-46 UP-45の遺物(3)

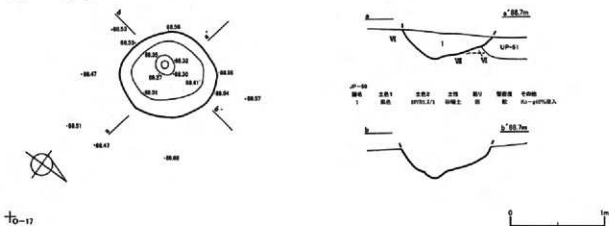
UP-46出土遺物



UP-47



UP-50



↑6-17

図Ⅲ-47 UP-46の遺物とUP-47・50

その下位に結束第2種斜行縄文が施されている。(影浦)

石器 3・4は北海道式石冠。3の一端は鋭角で他の一端は直角を呈し、正面観は台形状を呈している。4は一端を破損しているが、3とほぼ同形態のものである。5・6は石皿。5は上面の両端に使用痕があり、下面は端部に敲打を含む使用痕がみられる。6は両面に楕円形にくぼむ使用痕がみられる。いずれも安山岩を素材とする。(谷島)

UP-46 (図Ⅲ-43・44・47 図版17・18・30・41)

位置・立地：S-48 標高81.3m付近の平坦面 UP-45と隣接する

規模：2.24m/2.10m×1.90m/1.70m×0.43m

長軸方向：N-90° **平面形**：隅丸長方形

確認・調査：調査経緯はUP-45と同様で、当初楕円形の竪穴住居跡と想定したが、調査の過程で、2基の土坑であることを確認した。S-48区を10cmほど掘り下げ平面形を確認した後、改めて調査を行った。このような調査経過のため、北西側の壁の一部は確認できなかった。覆土が埋め戻しと推測されること、隣接するUP-45と規模・形態・堆積状況などが共通することから、墓坑と推測される。

覆土：主に黒褐色土からなる。Vc層にKo-gが多量に混入する。埋め戻しと推測される。

坑底・壁：坑底は平坦でⅣ層上面付近まで掘り込まれる。立ち上がりは丸みがあり、壁はおおむね外傾する。

遺物出土状況：土器(Ⅲa 6点・Ⅲb 6点・Ⅳa 23点) 35点、石器(スクレイパー3点、頁岩・黒曜石のフレイク2点) 5点、礫・礫片2点、計42点が出土した。坑底直上から小形のⅢ群a類土器が1個体(1)出土した。Ⅲ群b類・Ⅳ群a類土器は、覆土の最上部から出土したもので、UP-46に伴うものではない。

時期：出土遺物から、縄文時代中期前半である。(柳瀬)

遺物・土器 1はⅢ群a類。口唇上は燃系圧痕が加えられている。また、3本組の燃系圧痕文が口縁部を横に蛇行しながら巡る。地文は縦位の結束第1種斜行縄文。2a・2bはⅢ群b類。いずれも燃系文の胴部片。2bには一部沈線文が観察される。椀林式相当。3はⅣ群a類。口縁は折り返し。折り返し部と胴部とで原体の施文方向を変えている。(影浦)

石器 4は頁岩を素材としたスクレイパー。破片となった2点が接合している。割れ方から被熱による折損と判断される。(谷島)

UP-47 (図Ⅲ-47)

位置・立地：R-11 83.0mの平坦面。

規模：0.64m/0.48m×0.60m/0.46m×0.30m

平面形：ほぼ円形

確認・調査：トレンチ調査で検出した。木根痕など自然攪乱の疑いもある。性格は不明。

覆土：自然埋没である。

坑底・壁：坑底面は平坦である。壁は直線的に開く。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：不明である。(影浦)

UP-50 (図Ⅲ-47)

位置・立地：N-17 台地上に位置する。UP-51と重複する。

規模：1.04m/0.91m×0.90m/0.62m×0.32m

平面形：ほぼ円形

確認・調査：UP-51のプラン確認のため周囲を掘り下げた際に検出した。南側を半截して墓坑であることを確認した。

覆土：覆土は黒色砂壤土の単一層で、Ⅱ層まで掘り込まれている。

坑底・壁：坑底は丸みを持ち中央部が丸く窪んでいる。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：UP-51より新しいと判断されるため掘り込み面はV b層中の可能性が推定される。周囲の包含層でⅣ群 a類が多く出土していることから、同時期と推定される。(谷島)

UP-51 (図Ⅲ-48 図版18)

位置・立地：M-N-17・18 台地上に位置する。UP-50と重複する。

規模：3.31m/2.67m×3.13m/2.49m×0.58m

平面形：円形

確認・調査：V c層上面で検出した。十字形のベルトを設定し、プラン確認のため周囲を掘り下げると東側にUP-51を切るUP-50が検出された。新しいUP-50の調査を先行した。

覆土：黒から黒褐色の砂壤土を主体とし、間にKo-gを多く含む層を挟む。坑底にはそのKo-gを多く含む暗褐色の砂壤土が4cm程の厚さでほぼ全面に見られる。自然堆積で埋没したものであろう。

坑底・壁：平面形は円形を呈し、坑底はほぼ水平で平坦である。坑底から丸みを持ち、開き気味に壁が立ち上がる。炉・柱穴などが検出されないことから墓坑としている。

付属遺構：竪穴住居跡の可能性も考え柱穴等を探したが付属施設は検出されていない。

遺物出土状況：遺物は出土していない。北側の覆土中位で炭化物が検出されている。位置や堆積状態から判断してこの遺構に伴うものではない。

時期：掘り込み面がV c層であることや、周囲の包含層で縄文時代後期前葉が多く出土していることから、同時期と推定される。しかし、M-17区とN-18区でⅡ群 b類が各1点出土しているので縄文時代前期後半の可能性もある。UP-50より古い。(谷島)

UP-53 (図Ⅲ-49 図版18)

位置・立地：M-10 台地の縁辺部に位置する。

規模：0.96m/0.63m×0.78m/0.51m×0.40m

長軸方向：N-65°-E

平面形：楕円形

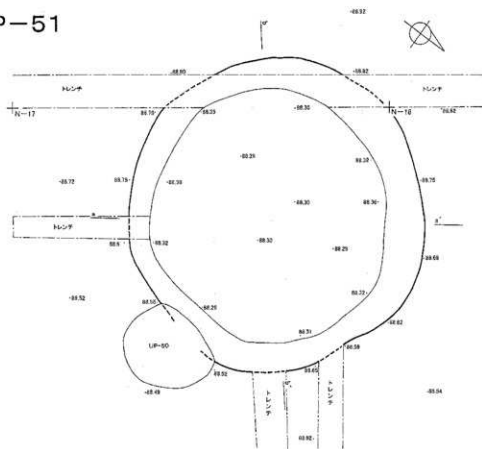
確認・調査：Ⅱ層の上面で検出したので、土層観察のために地形の傾斜に沿って南側を半截した。形態や覆土から礎が出土したことから墓坑と推定される。

覆土：主に黒色の砂壤土と黒褐色の壤土からなり、坑底にはⅡ層の火山灰に黒色土がわずかにまじる砂土が堆積していた。

坑底・壁：坑底はⅡ層を掘り込んでおり、やや丸みを帯び、壁は緩やかに開いて立ち上がる。

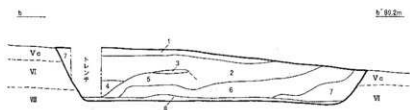
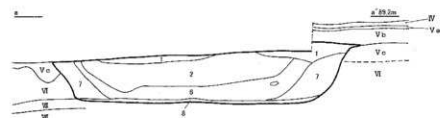
遺物出土状況：土器(Ⅳ a)4点、安山岩のフレイク1点、礎・礎片4点、計9点が出土している。

UP-51



10-17

10-18



UP-51

層号	土色①	土色②	土質	層厚	層位置	中心點
1	黄砂	UP51-1/1	砂礫土	中	北	Ko-p174埋入
2	黄砂	UP51-2	砂礫土	中	北	V>Vc for 200埋入
3	灰土・黄砂	UP51-3	砂礫土	中	北	Ko-p175埋入
4	灰黄砂	UP51-4	砂土	狭	北	埋入(=)未埋入
5	灰黄砂	UP51-5	砂礫土	狭	北	Ko-p176埋入
6	灰黄砂	UP51-6	砂礫土	狭	北	Ko-p177
7	黄砂	UP51-7	砂礫土	中	北	V>Vc for 200埋入
8	黄砂	UP51-8	砂礫土	狭	北	Ko-p178



図Ⅲ-48 UP-51

大きな礫2点が坑底の砂土の上から検出され、土器片はこの礫の間から出土している。

時期：出土遺物から判断して縄文時代後期前葉である。(谷島)

UP-54 (図Ⅲ-49)

位置・立地：L-9 台地の縁辺部に位置する。上層のVb層にUF-4があるが重複はしない。

規模：0.78m/0.60m×0.74m/0.43m×0.31m

平面形：円形

確認・調査：Ⅱ層の上面で検出した。土層観察のために地形の傾斜に沿って北側を半截した。

覆土：覆土は黒色壤土の単層である。坑底はⅡ層に掘り込まれている。

坑底・壁：確認面は円形であるが、坑底は南北に長軸を持つ楕円形を呈する。坑底は丸く、壁は緩やかに開いて立ち上がる。

遺物出土状況：覆土上部から礫2点が出土している。

時期：周辺包含層でⅡ群A類の土器片が多く出土していることから、同時期と推定される。(谷島)

UP-55 (図Ⅲ-49・50 図版41)

位置・立地：L-11 台地上に位置する。

規模：(1.38)m/(1.27)m×1.36m/1.17m×0.25m

平面形：不明

確認・調査：Vc層の上面で確認した。東端はすでにⅡ層まで掘り下げたためこの部分のプランの確認はできていない。東端のプランは不明だが、ほぼ西側の広い卵形を呈すると思われる。南側のUS-19との関連が推定される。

覆土：黒色壤土の単層で、やや堅くしまっている。

坑底・壁：坑底はほぼ平坦だが壁近くから丸く立ち上がり始める。

遺物出土状況：石器(台石2点・石皿1点)3点が出土している。いずれも西西部で出土した。

時期：検出層位や周辺包含層で縄文時代後期前葉のⅡ群A類土器が多く出土していることから、同時期と推定される。

遺物：石器 1・2は安山岩製の台石。1はほぼ平坦な、2は浅くくぼんだ使用痕がみられる。3は安山岩製の石皿。やはり使用面は浅いくぼみを呈している。(谷島)

UP-57 (図Ⅲ-50 図版19)

位置・立地：T-12 斜面下 標高82.8~82.9mの地点。

規模：0.98m/1.12m×0.94m/0.98m×0.44m

平面形：ほぼ円形

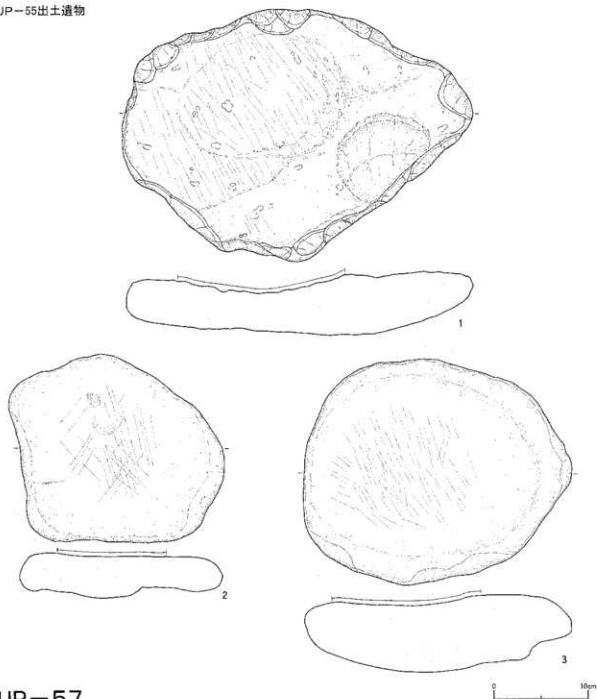
確認・調査：Vc層最下部を掘り下げ中にⅡ群A類の土器片が小さくまとまって出土した。これを残しながら周囲を掘り下げ、Ⅱ層上面で検出した。遺物は少ないが、規模・形状の点から周辺遺構との類似性を考えると墓坑の可能性がある。

覆土：ほとんどが黒色の壤土を基調とする。覆土4は壁の崩落土。遺物の検出状況から人為的な埋戻しによると考えられる。

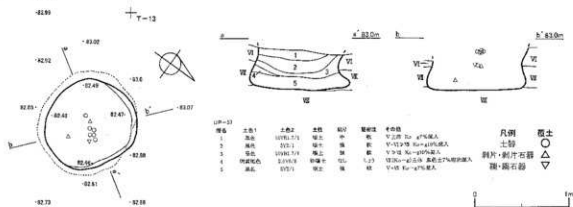
坑底・壁：坑底は皿状である。壁はややオーバーハングし、フラスコ状を呈する。

遺物出土状況：土器(ⅡA46点・ⅡB18点)64点、石器(フレイク)3点、礫片1点、計68点が出土

UP-55出土遺物



UP-57



している。遺物は少ないものの、坑口部中央付近にまとまって検出する傾向が窺われた。

時期：出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

(影浦)

UP-58 (図III-51 図版19・41)

位置・立地：T-12 斜面下、標高82.4~82.5mの平坦面。

規模：1.04m/0.88m×0.92m/0.84m×0.46m

平面形：ほぼ円形

確認・調査：Ⅱ層上面を精査中に確認した。出土遺物は少ないが、規模・形状の点から周辺遺構との類似性を考えると墓坑の可能性がある。

覆土：人為的な埋め戻しによるものと考えられる。

坑底・壁：坑底は皿状に浅くくぼむ。壁はややオーバーハングしたのち屈曲し、ゆるやかに開くが、一部、垂直に開くところもある。

遺物出土状況：土器(Ⅳa)36点、石器(フレイク2点・台石1点)3点、礫片1点、計40点が出土している。北側の壁際から重量8.2kgの台石を検出した。他の遺物は覆土内から散発的に出土した。

時期：縄文時代後期前葉と考えられる。

(影浦)

遺物：石器 1は安山岩製の台石。上面に使用痕がみられる。

(谷島)

UP-59 (図III-51~52 図版18・30・42)

位置・立地：U-11・12 標高82.4mの平坦面。

規模：2.42m/2.10m×1.68m/1.32m×0.74m

長軸方向：N-88°-E

平面形：楕円形

確認・調査：上台地区はKo-dが平均2m近く堆積していたため崩落防止用に法面を設けて調査を行っていたが、調査区境界付近のⅡ層を精査中、法面の下において一部を検出した。Ko-dを除去して平面形を出してみたところ長軸短軸ともに2mを超える楕円形の土坑で、覆土内から土器片や礫・礫片がまとめて出土した。遺構の性格としては墓坑の可能性が考えられる。

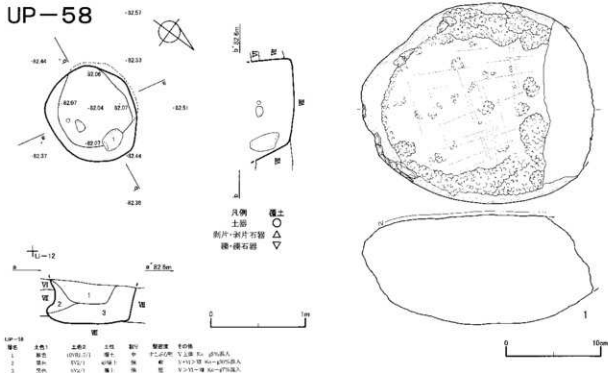
覆土：覆土の堆積と遺物の出土状況から人為的な埋め戻しによるものと考えられる。覆土6は崩落土である。

坑底・壁：坑底面は平坦である。壁はややオーバーハングし、坑口部付近で開く。一部、直線的に立ち上がるところもある。

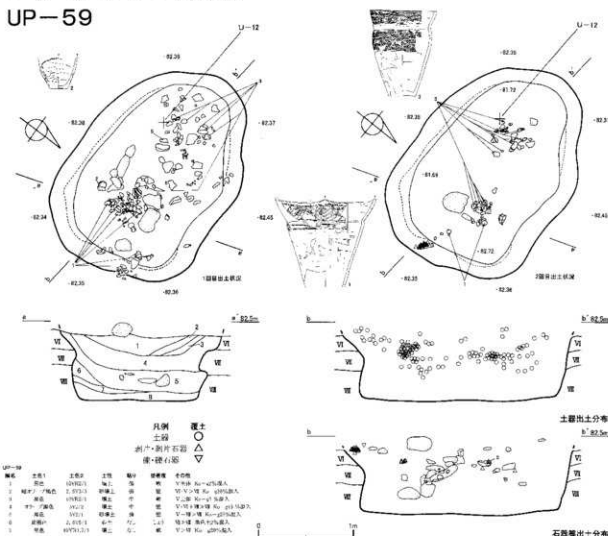
遺物出土状況：土器(Ⅲa1点・Ⅳa321点・Ⅳb56点)378点、石器(つまみ付ナイフ1点・頁岩原石1点・メノウ原石1点、フレイク45点・台石1点・加工痕のある礫1点)50点、礫・礫片39点、計467点が出土している。遺物は覆土の上位においては全体的に出土したが、覆土中位では2つのまとまりになり、覆土下から坑底面にかけてはほとんど出土しなかった。この状況から当初は2つの遺構の重複も考えられたが、坑底面が平坦であることと、周辺で検出した同規模の遺構において、重複例がないことから、一つの遺構と認識した。壁際付近も遺物が少ない。大型礫は覆土上位から中位にかけてまとまっていた。坑口部の北東において黒曜石のフレイクが27点かたまっても出土した。やや内側に入った覆土内からも黒曜石のフレイクが5点かたまっても出土した。これらは同一母岩の可能性がある。礫・礫片の総重量は約58kg。最大の礫の重量は14.6kgであった。また、39点中24点は熱を受けていた。

時期：出土遺物から縄文時代後期前葉から後期中葉の可能性がある。覆土で採取した炭化物の放射性

UP-58



UP-59



UP-59出土遺物

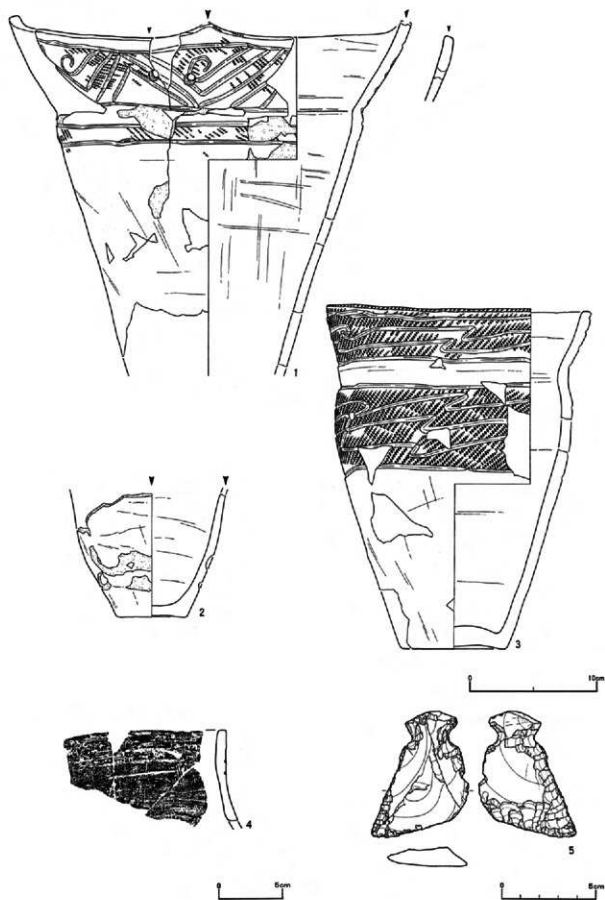


図 III-52 UP-59の遺物(1)

炭素年代の測定結果は補正年代で3460±40、3610±40の値が得られている。

遺物：土器 1・2はⅣ群a類。1は器形や文様から当初Ⅳ群b類を考えたが、三角形のモチーフに渦文を組み合わせる類例として、矢不來2遺跡の資料があり、Ⅳ群a類とした。文様帯の部分に2カ所補修孔が穿たれている。2は無文の底部。粘土を輪積みした継ぎ目で破損していた。3はⅣ群b類。クランク状の沈線文が繋がって横位に巡る。頸部は幅の狭い無文帯。最初、Ⅳ群a類末の白坂3式かと考えたが、口唇直下を巡る沈線文からⅣ群b類と判断した。4はⅣ群a類である。磨滅が著しいが、平行沈線文を3本ほど巡らせた痕跡が認められる。 (影浦)

石器 5は頁岩を素材としたつまみ付きナイフ。 (谷島)

UP-60 (図Ⅲ-53 図版19・42)

位置・立地：T-12 標高82.8～83.0mの平坦面。

規模：0.94m/0.76m×0.88m/0.68m×0.38m

平面形：ほぼ円形

確認・調査：Vc層下位で礫が2点重なって出土したため、配石を想定して半載した。しかし、覆土1がVc層に非常に類似していたため、礫の直下については、壁の立ち上がり等を見極めることはできなかった。礫以外の遺物の出方も周辺包含層の出土状況と変わらない散発的なもので、風倒木痕など自然のくぼみに礫を2点配したものの可能性もある。

覆土：Ⅱ層内の掘り込みであるが、覆土中にKo-gがそれほど混入していないことから、すみやかに埋め戻した可能性が高い。風倒木痕の一部の可能性もある。

坑底・壁：坑底面はやや傾斜している。壁は直線的に開く形状である。

遺物出土状況：土器(Ⅳa)19点、礫・礫片8点、計27点が出土している。坑口において10.8kgの礫と1.4kgの被熱礫片が重なり合って出土した。他にⅣ群a類の土器片や小礫が散発的に出土している。

時期：出土遺物から縄文時代後期前葉の可能性がある。

遺物：土器 1はⅣ群a類。鋸歯状沈線文が見られる。 (影浦)

UP-62 (図Ⅲ-53 図版20・42)

位置・立地：S-10 標高82.5mの平坦面。

規模：0.48m/0.34m×0.46m/0.30m×0.38m

平面形：円形

確認・調査：Ⅱ層上面において検出した。

覆土：黒色の壤土を基調とする。遺物の検出状況から人為的な埋め戻しによると考えられる。壁がⅡ層であることからすると、すみやかに埋め戻した可能性が高い。

坑底・壁：坑底面はⅡ層上面で平坦である。壁は急角度で立ち上がる。

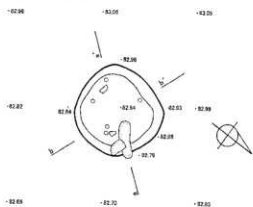
遺物出土状況：土器(Ⅳa)9点、石器(スクレイパー1点・台石2点)3点、計12点が出土している。確認面中央にⅣ群a類の小型土器片(同一個体)が9点まとまって出土した。他に覆土の中位から扁平な台石片(接合したため一個体)、頁岩のスクレイパーが出土している。

時期：出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

遺物：土器 1はⅣ群a類。クランク状の文様を描いたもの。 (影浦)

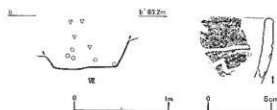
石器 2は頁岩を素材としたRフレイク。両端に調整がみられ、下側縁は破損している。スクレイパーの破片とも考えられる。3は安山岩製の台石。上面に使用痕がみられる。 (谷島)

UP-60

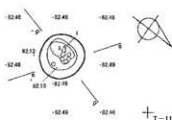


凡例
○ 覆土
○ 土層
△ 削片・削片石層
▽ 礎・礎石層

UP-60	主基1	主基2	土階	削片	礎石層	その他
1	基内	1074.71	礎土	削	削	Y>70 K0-g1%基土
2	基外	1070.71	礎土	削	削	Y>70 K0-g1%基土

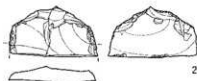


UP-62



凡例
○ 覆土
○ 土層
△ 削片・削片石層
▽ 礎・礎石層

UP-62	主基1	主基2	土階	削片	礎石層	その他
1	基内	1074.71	礎土	削	削	Y>70 K0-g1%基土
2	基外	1070.71	礎土	削	削	Y>70 K0-g1%基土



図III-53 UP-60・62

UP-63 (図Ⅲ-54 図版20・42)

位置・立地：U-9 自然堤防部下、標高82.2~82.3mの平坦面。

規模：1.12m/1.00m×0.98m/0.74m×0.42m

平面形：不整形円形

確認・調査：調査区境界付近で検出した。上台地区はKo-dが平均2m近く堆積していたため崩落防止用に法面を設けて調査を行っていたが、調査区境界付近のⅣ層を精査中、法面の下において一部を検出した。法面部分のKo-dを1mほど除去して、全体を検出した。出土遺物が少ないものの、規模と形状から墓坑の可能性が考えられる。

覆土：いずれも黒色の壤土を基調とする。人為的な埋め戻しによると考えられる。

坑底・壁：坑底はⅣ層中で、ややくぼむ。壁は一部にオーバーハングが見られるが、基本的には緩やかに開く。

遺物出土状況：土器(Ⅳa)8点、石器(Uフレイク)1点、礫・礫片15点、計24点が出土している。礫・礫片15点のうち最大のものは3.4kgの礫片である。他14点についてはいずれも1kgに満たない小型のものであった。

時期：出土した土器片から縄文時代後期前葉と考えられる。

遺物：土器 1a・1bは沈線文による幾何的な文様や連弧文が特徴的に見られる。1aにはカニのハサミ状文もある。(影浦)

石器 2は頁岩を素材としたUフレイク。側縁に使用痕がみられる。(谷島)

UP-64 (図Ⅲ-54・55 図版20・42)

位置・立地：T-11 標高82.4mの平坦面。

規模：0.46m/0.44m×0.26m/0.16m×0.18m

長軸方向：N-26°-E 平面形：楕円形

確認・調査：Ⅳ層上面を精査中に検出した。完掘したところ礫が1つつまっているのが明らかになった。礫の重量は10.8kg、大きさは42cm×25cm×9cmである。礫を埋納するために礫のサイズに合う穴を掘ったものと考えられる。性格は不明。周辺で立石が7基検出されているため、あるいは、それに類するものかもしれない。

覆土：黒色壤土による単層である。ほとんどが礫の体積であるため覆土そのものは少なかったが、遺物の出土状況から人為的な埋め戻しによると考えられる。

坑底・壁：坑底は平坦である。壁は垂直に立ち上がる。

遺物出土状況：台石が1点出土した。

時期：縄文時代後期前葉の可能性が考えられる。(影浦)

遺物：石器 1は台石。上面に使用痕がみられる。安山岩製。(谷島)

UP-66 (図Ⅲ-55 図版20・42)

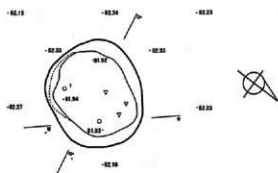
位置・立地：L-10 台地上に位置する。上部にUS-19がある。

規模：1.30m/0.97m×0.85m/0.58m×0.41m

長軸方向：N-12°-W 平面形：南北方向に長軸を持つ楕円形

確認・調査：Ⅴb層のUS-19の調査で礫などの遺物を取り上げた後、Ⅴc層の上面で確認した。台

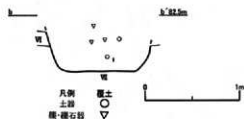
UP-63



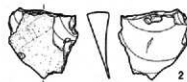
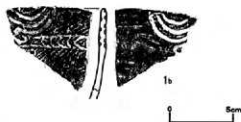
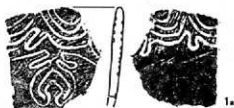
+U-10



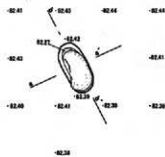
層名	土層1	土層2	土層	砂/	層厚	特徴
1	褐色	2.5(2.1)	硬土	中	厚	Y>11.7層 Ks-47%混入
2	褐色	1.0(0.5)	硬土	薄	厚	Y>10.8層 Ks-47%混入
3	褐色	1.5(1.1)	硬土	薄	厚	Y>11.7層 Ks-47%混入



凡例
 硬土 ○
 砂 ○
 硬・硬石層 ▽



UP-64



+U-12

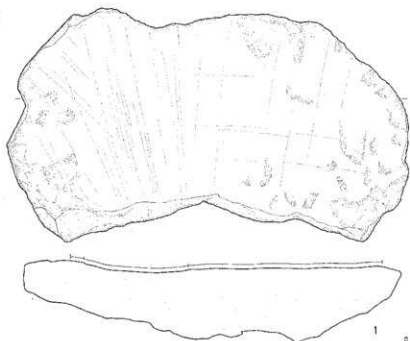


層名	土層1	土層2	土層	砂/	層厚	特徴
1	褐色	1.0(0.5)	硬土	中	厚	Y>10.8層 Ks-47%混入

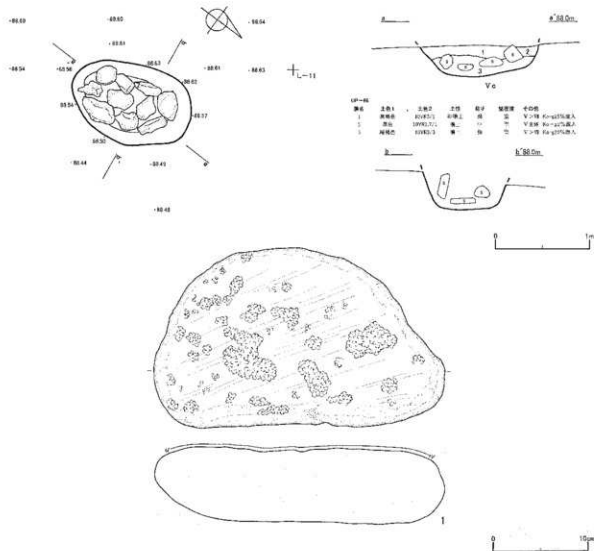


図Ⅲ-54 UP-63・64

UP-64出土遺物



UP-66



石・礫などが重なり合うように墓坑内に広がっている。覆土や礫などの状態から US-19 と併伴した墓坑とみなされる。

覆土：上半は黒色の砂壤土を主体とし、下半は暗褐色のシルト質壤土で遺物の間を埋め戻したと推定される。

坑底・壁：坑底は丸みを持ち、壁は外側に開く。

遺物出土状況：石器（台石）1点、礫・礫片9点、計10点が出土している。台石1点と礫9点が墓坑内で重なり合うように検出された。US-19として取り上げた遺物との間に南側の礫は上下に接しているが、北半部の遺物は10～15cmの間隔がある。

時期：掘り込み面と考えられる US-19 と同じ縄文時代後期前葉と推定される。

遺物：石器 1は安山岩製の台石。上面に使用痕がみられる。 (谷島)

UP-67 (図III-56 図版21・42)

位置・立地：O-17・18 台地上に位置する。

規模：2.46m/1.29m×1.93m/1.46m×0.80m

平面形：不整形円形

確認・調査：Ⅳ層上面で黒色土のまとまりを検出したので、土層観察用のトレンチを入れて確認している。上半部は木根痕などの攪乱に似ていたが下半を占めるⅣ層の堆積土の下から坑底上に黒褐色と褐色の砂壤土が堆積していた。確認面は不整形円形を呈するが、流れ込みにより削られた部分と推定される。このことを考慮すると、確認面、坑底ともにほぼ円形を呈すると思われる。坑底まで掘り下げ後、精査した結果、坑底際から6カ所の小ピットを検出した。小ピットは、それぞれ間隔を開けて壁際から検出されている。北側3本の間隔は狭く南側3本の間隔が広くなり、配置は六角形の各頂点に配されている。西側の1本がやや内傾するが他はほぼ直立する。これらの覆土はⅣ層とⅤ（ローム）層が混合している。

覆土：覆土の上半は黒～黒褐色の壤土や植壤土が堆積している。覆土の下半は大部分をⅣ層が占め坑底部は黒褐色と褐色の砂壤土が堆積している。覆土の下半は埋め戻しと推定され、6層上面から上位は落ち窪んだ後に自然堆積したものである。遺構の北と南側の緩い傾斜は上半の自然堆積時に削られたようである。

坑底・壁：断面形は坑底がほぼ平坦で、壁の上半は外側に開き、下半は一部がオーバーハングするがほぼ垂直に立ち上がる。

付属遺構：6カ所の小ピットが壁際から検出され掘立柱の柱穴と思われる。崩落を抑える板を留めていた柱穴や、墓坑の上部に構造物を作るための柱穴などが推定される。

遺物出土状況：土器（Ⅱb）1点、石器（北海道式石冠）1点、計2点が出土している。覆土上部から北海道式石冠の上部破片、覆土中位からⅡ群b類土器が出土している。

時期：出土遺物から縄文時代前期後半と推定される。

遺物：石器 1は北海道式石冠の上部破片。安山岩を素材とする。 (谷島)

UP-67

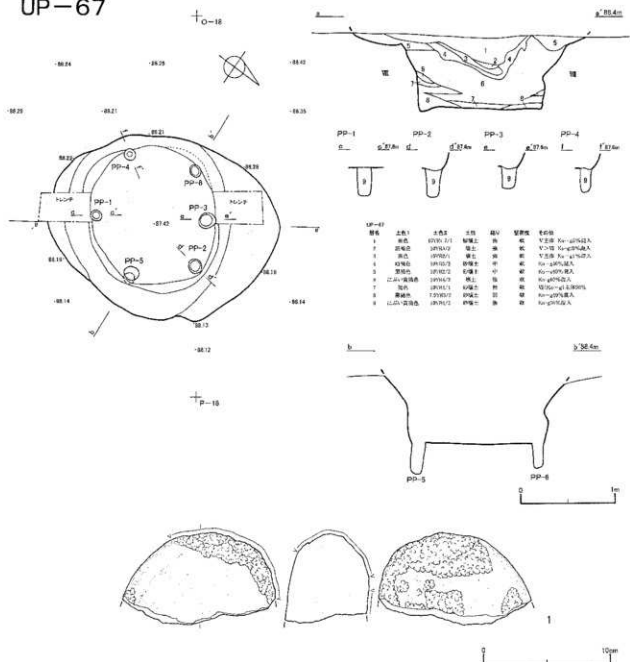


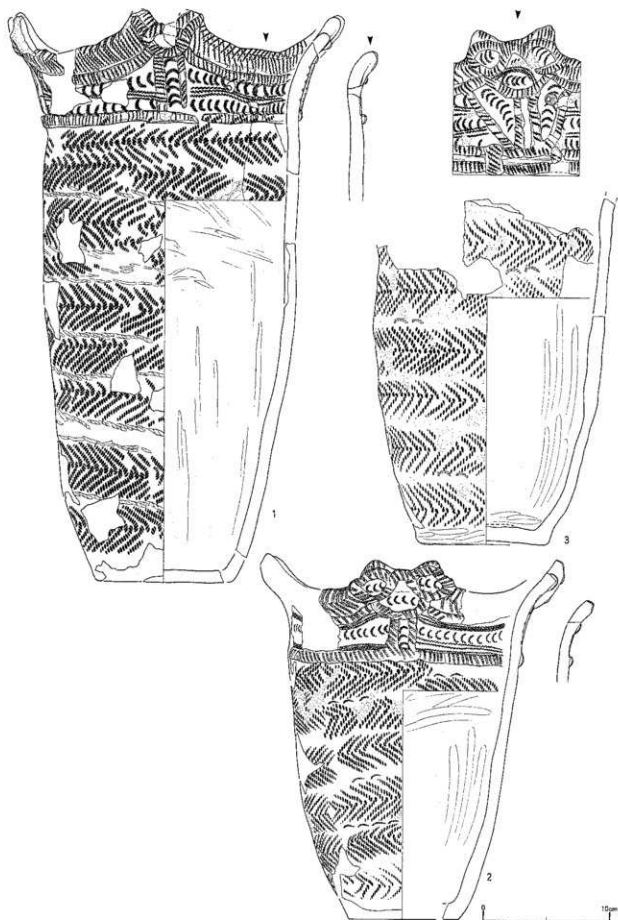
図 III-56 UP-67

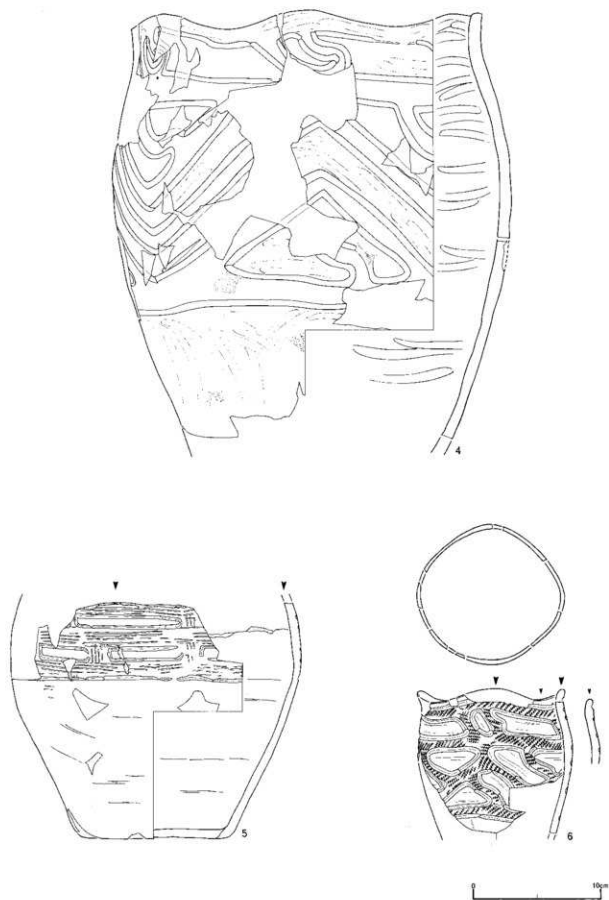
土坑出土の復元土器 (図Ⅲ-57~59 図版31・32)

土坑出土の土器片を含むが、土坑分の破片が少ないものや、複数の土坑で出土した破片が接合したものをここにまとめた。土坑にともなうとは考えられないもの、あるいは土坑の特定ができないものである。

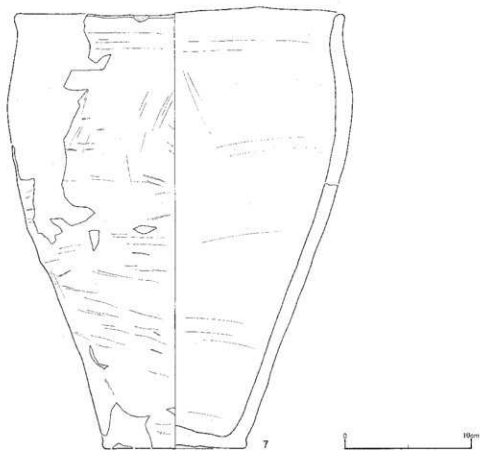
1~3はⅢ群 a 類。いずれも地文は結束第 1 種羽状縄文である。1・2は 3 本組の燃糸と馬蹄形圧痕文が交互に施されている。燃糸は矢羽状に付されている。3は下半部の復元。1は119点接合中 1 点が UP-12 の出土。2は44点接合中 2 点が UP-12、1 点が UP-18 の出土。3は44点接合中 4 点が UP-7、1 点は UP-12 の出土である。UP-12 は調査者によってⅣ群 a 類の時期の竪穴墓と判断された遺構であるが、調査段階では重複の可能性が想定されていた。あるいは UP-12 構築以前にⅢ群 a 類の遺構が存在したものかもしれない。いずれも円筒上層 b 式。

4~7はⅣ群 a 類。4~6は磨消縄文が施されたもの。4・5は太い沈線文と櫛歯状工具によって文様が構成されている。5はその後の器面調整で磨滅が著しい。6は帯縄文が多用されたもの。対になって向き合う波頂部が 4 つある。上面観は隅丸方形を呈している。7は無文土器。4は122点接合中 2 点が UH-4、3 点が UP-12、25 点が UP-39 からの出土である。UP-39 の 25 点は比較的多いが全点覆土上の出土である。それぞれの遺構の埋没過程において流れ込んだと推定される。5は13点接合中 3 点が UP-30 の出土。他 10 点は周辺の 5 グリッドで出土したものが接合しており、流れ込みの遺物が覆土に混入したと判断された。6は48点接合中 7 点が UP-7、3 点が UP-12、2 点が UP-38 の出土である。他 36 点は周辺の 5 グリッドで出土したものの接合。7は54点接合中 1 点が UP-60 で出土した。(影浦)





図III-58 土坑出土の土器(2)



図Ⅲ-59 土坑出土の土器(3)

3. Tピット

台地上の平坦面（標高87～90m）で5基検出した。いずれも長楕円形で、壁は垂直に立ち上がり、坑口部付近で開く。TP-1・2・3とTP-4・5で、それぞれ列をなしているように見える。各Tピット間の直線距離はほぼ13.5mで、調査範囲外にも続いていることが予想される。形状や規模、Tピット間の距離から、すべて同時期に構築された可能性が高い。（影浦）

TP-1（図Ⅲ-60）

位置・立地：L-14 台地上に位置する。

規模：(1.30)m / (1.46)m × 0.57m / 0.13m × 1.15m

長軸方向：N-64°-W 平面形：長楕円形

確認・調査：Ⅱ層上面で検出した。調査区域の縁にかかるため、これを観察用土層断面として東側半分の調査を行った。その結果、掘り込み面はⅤc層中と確認できた。東西方向に長軸を持つ溝状と思われるが、西側半分は調査区域外のため不明である。TP-1・2・3で等高線を斜めに横切る様に列を成す。

覆土：上半は黒～黒褐色の壤土で下半はⅡ層主体の砂土が堆積し、坑底は暗褐色の砂壤土がみられる。坑底・壁：坑底は長軸方向にやや高低差があり、西端はオーバーハングする。横断面の上部観はラッパ状に広がり呈している。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：周辺包含層の出土遺物から縄文時代後期前葉の可能性が高い。（谷島）

TP-2（図Ⅲ-60 図版21）

位置・立地：N-O-16 台地上に位置する。

規模：2.21m / 2.30m × 0.51m / 0.12m × 1.07m

長軸方向：N-55°-W 平面形：長楕円形

確認・調査：Ⅱ層上面で黒色土のまとまりを確認した。長軸中央にベルトを設定し、両側を掘り下げた。長軸は北西から南東方向で、溝状を呈する。

覆土：坑底に黒褐色の砂壤土が堆積し、その上は崩落や流れ込みの自然堆積である。

坑底・壁：坑底は中央部がくぼみ、壁の南東端は缺けてオーバーハングし北西端は垂直に立ち上がる。横断面の壁の上部はラッパ状に広がる。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：周辺包含層の出土遺物から縄文時代後期前葉の可能性が高い。（谷島）

TP-3（図Ⅲ-61）

位置・立地：Q-18 標高87.5m付近の緩斜面

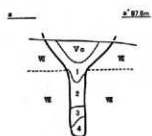
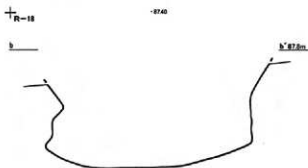
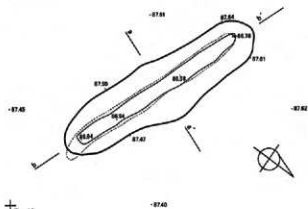
規模：2.32m / 2.08m × 0.68m / 0.17m × 1.12m

長軸方向：N-68°-W 平面形：楕円形

確認・調査：Ⅱ層上面で、黒色土のまとまりとして確認した。半截したところ、坑底・壁を確認したことから、Tピットと判断した。TP-1・2とともに列をなす。

覆土：色調の差はあるが、いずれも主にⅤc層とⅡ層が混合した土層である。

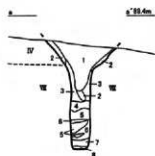
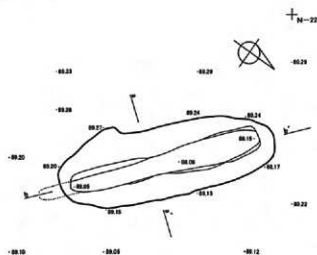
TP-3



層名	土色1	土色2	土質	磁石	特徴	年代
1	褐色	10YR/3	砂土	黒	Y+層 K ₂ -pH5.8層入	
2	暗褐色	2.5YR/2	砂礫土	赤	Y+層 K ₂ -pH5.8層入	
3	褐色	10YR/3	砂礫土	赤	Y+層 K ₂ -pH5.8層入	
4	褐色	10YR/3	砂礫土	赤	Y+層 K ₂ -pH5.8層入	



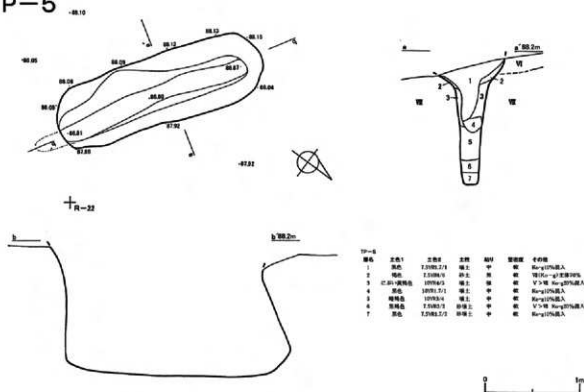
TP-4



層名	土色1	土色2	土質	磁石	特徴	年代
1	褐色	10YR/3	砂土	赤	K ₂ -pH5.8層入	
2	褐色	10YR/3	砂礫土	赤	K ₂ -pH5.8層入	
3	暗褐色	2.5YR/2	砂礫土	赤	K ₂ -pH5.8層入	
4	褐色	10YR/3	砂礫土	赤	Y+層 K ₂ -pH5.8層入	
5	褐色	10YR/3	砂礫土	赤	K ₂ -pH5.8層入	
6	暗褐色	2.5YR/2	砂土	赤	Y+層 K ₂ -pH5.8層入	
7	暗褐色	2.5YR/2	砂礫土	赤	Y+層 K ₂ -pH5.8層入	
8	暗褐色	2.5YR/2	砂礫土	赤	Y+層 K ₂ -pH5.8層入	

図 III-61 TP-3・4

TP-5



図Ⅲ-62 TP-5

坑底・壁：坑底はⅢ層中に構築されている。長軸方向の両端で高く、中央はくぼんでいる。立ち上がりは急。壁はおおむね垂直で、東端では坑底から大きくオーバーハングする。Ⅲ層とⅣ層の境界より上方は大きく外傾する。当初Ⅲ層中に垂直に構築された壁が崩落したものと推測される。

遺物出土状況：礫・礫片が2点出土した。

時期：縄文時代である。

(柳瀬)

TP-4 (図Ⅲ-61 図版21)

位置・立地：N-21 台地上に位置する。

規模：2.31m/2.40m×0.75m/0.19m×1.27m

長軸方向：N-49°-W **平面形**：長楕円形

確認・調査：Ⅳ層上面で確認した。溝状のTビットである。TP-4・5で等高線と直交して列を成す。

覆土：坑底に黒褐色の砂壤土が堆積し、その上は崩落や流れ込みのV・Ⅵ・Ⅶ層が混合して自然堆積している。

坑底・壁：坑底は中央部がややくぼみ、壁の北西から南東端は抜けてオーバーハングし北西端は垂直に立ち上がる。横断面の壁の上部はラッパ状に広がる。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：TP-5と一連に作られたものと考えられ、周囲の包含層出土の遺物から判断して縄文時代後期前葉と推定される。

(谷島)

TP-5 (図Ⅲ-62 図版21)

位置・立地: Q-21・22 台地上に位置する。

規模: 2.37m/2.38m×0.69m/0.16m×1.36m

長軸方向: N-59°-W **平面形:** 長楕円形

確認・調査: VI層上面で確認した。TP-4・5で等高線と直交して列を成す。

覆土: 坑底は黒褐色の砂壤土が堆積し、その上は崩落や流れ込みの自然堆積である。

坑底・壁: 坑底は北西側が高く緩やかに傾斜し、壁の南東端はくびれてオーバーハングし北西端は垂直に立ち上がる。横断面の壁の上部はラッパ状に広がる。

遺物出土状況: 遺物は出土していない。

時期: TP-5と一連に作られたものと考えられ、周囲の包含層出土の遺物から判断して縄文時代後期前葉と推定される。(谷島)

4. 配石遺構

2基検出した。一つはUH-4が埋没している過程で、大きな礫を配したもの(US-13)。UH-4の覆土内からもいくつかの礫を検出していたため、礫11点を配石として取り上げたものの、両者の線引きは不明瞭である。30kgを超える大きな礫が2つ直線的に並んで検出され、それらについては掘り込みが確認されたことから配石遺構と認定した。

もう一つは範囲が8.5m×7.0mと広く、6つのグリッドにまたがるもの(US-19)であるが、この中心はL-10区のUP-66直上の礫のまとまりと考えられる。くられた範囲全体に礫が分布しているが、斜面地形等の流れ込み作用の影響を受けている可能性も高い。遺物は配石の構築面とほぼ同レベルで出土したものである。(影浦)

US-13 (図Ⅲ-63 図版23)

位置・立地: S-9 UH-4の覆土上 標高83.0mの平坦面。

規模: 不明

確認・調査: UH-4の範囲を確認中、大きな礫のまとまりを検出した。礫の並びの長軸に沿う形で十字にベルトを設定し、周囲を掘り下げた。その結果、礫1と2についてはUH-4覆土およびVc層への掘り込みが確認されたが、他の礫(3~11)については掘り込みの有無を確認することができなかった。礫3と4については礫の大きさから、礫1・2と一連のものである可能性が高い。

礫5~11については調査時の判断で一つの配石遺構としてくれる可能性のある礫につき最大限取り込んだものである。したがってUH-4の埋没過程において、流れ込んだ可能性も考えられる。もっとも大きな礫は1で重量35kg、次いで2が32.2kg、4の28.4kg、3の27.2kgがそれに続く。礫(1~11)の総重量は156kgである。

遺物出土状況: 石器(加工痕のある礫)1点、礫10点、計11点を取り上げた。

時期: UH-4埋没後のものであるが、斜面地形による流れ込み土の堆積が厚い地域であるため、UH-4との時間的な差はそれほど大きくはないと判断される。周辺の遺構や包含層出土遺物のあり方から、縄文時代後期前葉の可能性が高い。(影浦)

US-19 (図III-64~68 図版23・42~44)

位置・立地：L・M-9・10・11 台地上に位置する。

規模：8.5m×7.0m

確認・調査：L-10区Vb層の調査で礫を多量に検出した。そのため範囲を広げ礫の検出に努めた。配石遺構と考えられるが、緩斜面に位置するため礫は下方に移動しているように思われる。全体に三角形を呈するように広がるが、範囲の南側で大きな礫が重なるように出土している。

覆土：Vb層中から大半の遺物は出土しているが、同層位の中で上下がある。

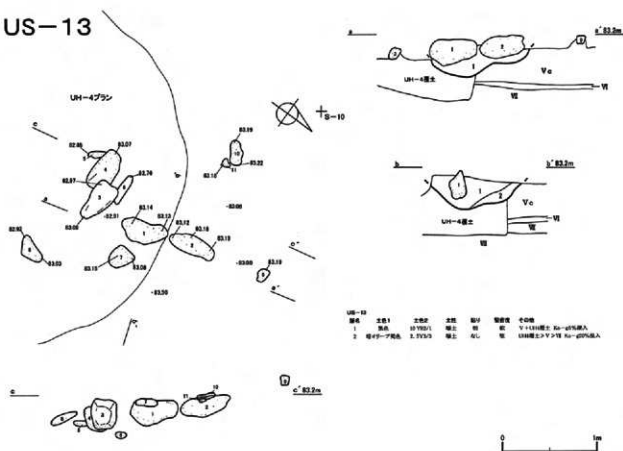
付属遺構：L-10区で礫を取り上げた後で、UP-66の落ち込みを確認している。覆土に、その上位から出土した礫とほぼ同じ大きさの礫が詰まった状態で検出されていることからUS-19から掘り込まれた可能性が高く、これに付随する墓坑と考えられる。

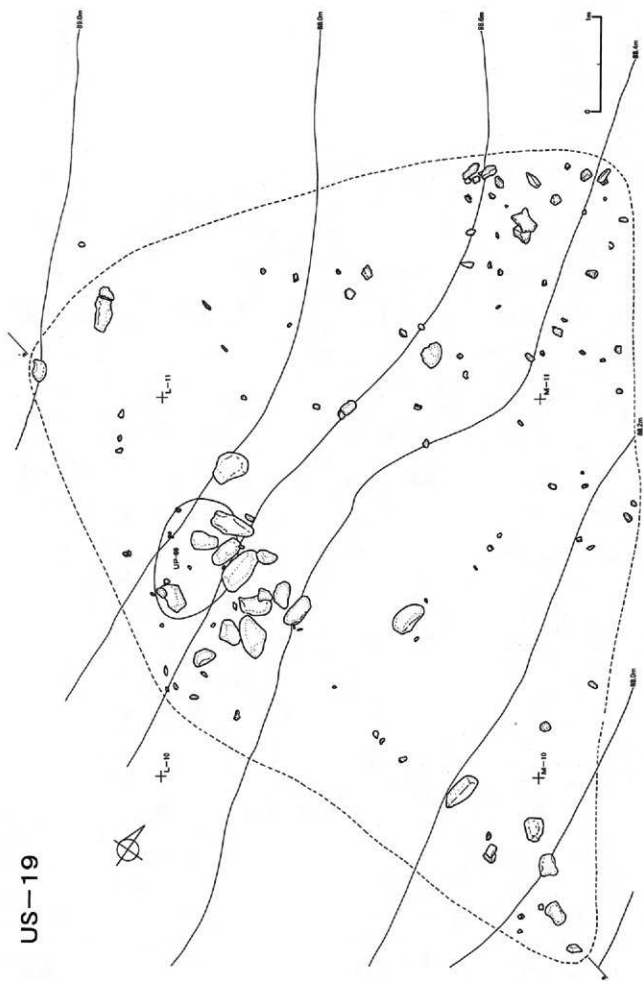
遺物出土状況：土器(Ⅲa14点・Ⅲb3点、Ⅳa113点、Ⅳb2点)132点、土製品1点、石器(石鏃2点、つまみ付ナイフ1点、スクレイパー5点・フレイク16点・たつき石3点・すり石1点、扁平打製石器2点、北海道式石冠7点、台石16点、石皿2点、加工痕のある礫1点)56点、礫・礫片125点、計314点が出土している。大きめの礫は立った状態で検出されたものは無く、緩斜面を下方に動いているものと推定される。北側は小さな礫が多く土器・石器と共に出土している。南側は大きめの礫が出土し、礫の間から土器・石器が少量出土している。

時期：出土した遺物から判断して縄文時代後期前葉の時期と推定される。(谷島)

遺物：土器 ⅠはⅣ群a類。波頂部に刻みが加えられている。地文は横走気味の縄文。施文後、ヘラ状工具による器面調整が内外面に施されており、縄目は一部潰れている。(影浦)

US-13





US-19

図 III-64 US-19

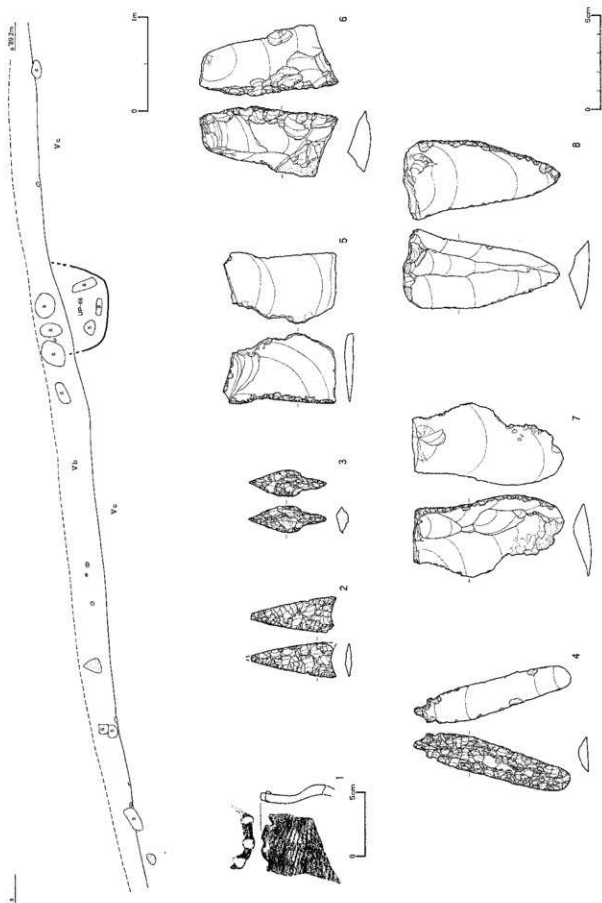


図 III-65 US-19の遺物(1)

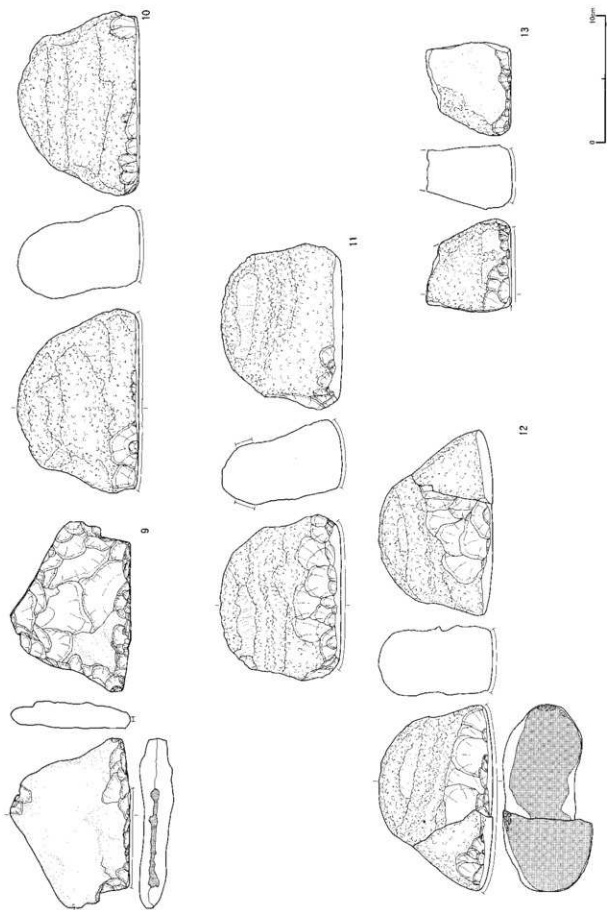
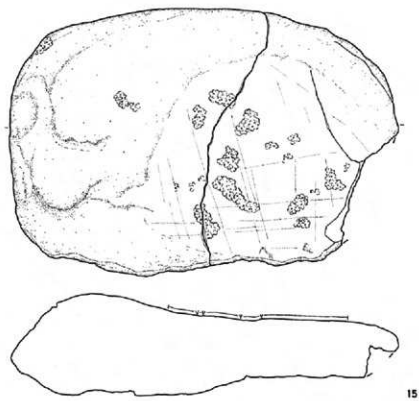
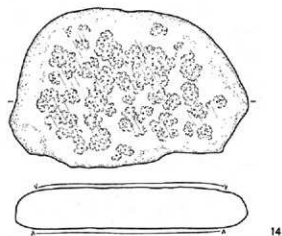
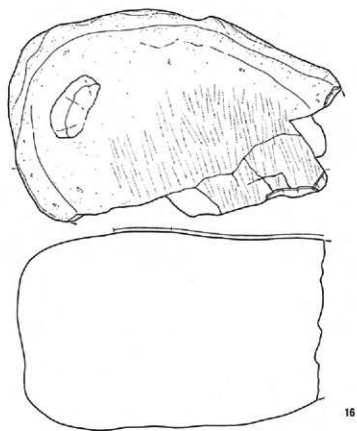


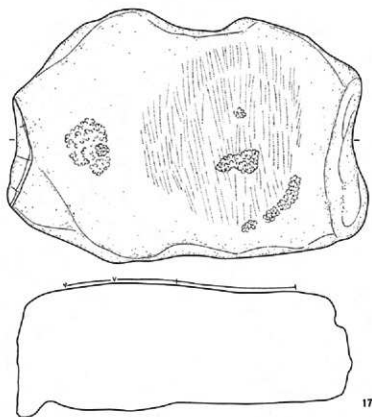
図 III-66 US-19の遺物(2)



図Ⅲ-67 US-19の遺物(3)



16



17



図 III-68 US-19の遺物(4)

石器 2・3は石鏃。2は三角形凹基、3は有茎凸基。4はつまみ付きナイフ。両側縁部に刃部調整がみられ、つまみ部のえぐりが2段あることから下段は再加工された可能性がある。5～8はスクレイパー。いずれも一側縁に刃部調整がみられる。5～7は刃部が鋭利。8はやや急角度な刃部で、両面から調整を加えている。9は扁平打製石器。10～12は北海道式石冠。12は2点が接合したもので、上部まで残った側は破損後さらに使用している。すり面は若干片減りしている。14・15は台石。14は上面に使用痕がみられる。16・17は石皿。上面に浅い使用痕がみられる。2～8は頁岩、9～17は安山岩を素材とする。(谷島)

5. 集石・礫集中

台地の縁辺部において小礫が楕円形に集中しているところが3カ所、比較的隣接して確認された(US-14～16)。風倒木痕のくぼみを利用したもの(US-15)などもあるが、規模や内容から、これらについてはいずれも同時期に構築された可能性が高い。他に木根痕と見られる自然のくぼみに扁平な礫が3点重なって出土したもの(US-20)もある。(影浦)

US-14 (図III-69 図版22)

位置・立地: M-9 台地の縁辺部に位置する。

規模: 0.75m×0.45m

平面形: 楕円形

確認・調査: US-19の東側で、Vc層上面に小礫がまとまった状態で確認された。60×50cmの楕円状を呈し、西端には径5～10cmのバミスが多量に混入した層が25×10cmの範囲で認められている。両者は一体のものと思われ、分け置かれた様である。US-16でも同じく小礫がまとまっている。小礫の集石遺構と考えられる。

覆土: 西端には25×10cmの範囲で黒褐色壤土にバミスを多量に混入した層が同じくVc層上にある。

遺物出土状況: 礫・礫片147点を取り上げた。小砂利状のバミスについて数量は数えていない。

時期: 検出層位や周辺包含層の出土遺物から判断して縄文時代後期前葉と推定される。(谷島)

US-15 (図III-69)

位置・立地: L-8 台地の縁辺部に位置する。

規模: 1.2m×0.6m

確認・調査: W層で検出した。東西方向にベルトを残して調査を行った結果、焼土を挟んで、上下に小礫を含む層を確認した。小礫の集石遺構と考えられる。

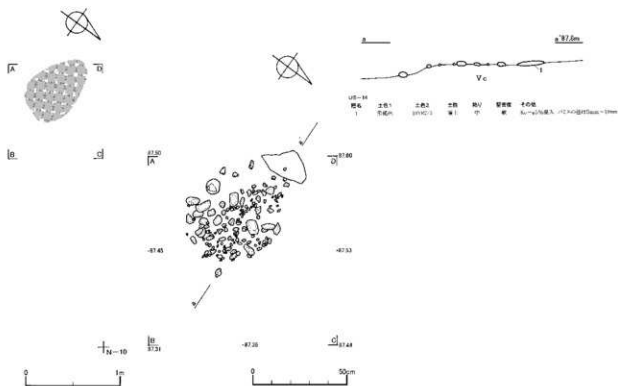
覆土: 覆土の上部は黒色壤土で、その下に土器や多量の礫・礫片を挟み2層の焼土層がある。さらに下には3層に挟まれ小礫を多量に含むW層がある。これより下位は風倒木痕のくぼみである。尚、基本層序にはKo-gの様に砂状の層もあるが、礫・砂利等を多量に含む層は無い。

遺物出土状況: 土器(Ⅲa 3点・Ⅳa 18点) 21点、石器(フレイク1点・たたき石1点) 2点、礫・礫片741点、計764点が出土している。上部の小礫層はやや散漫な出土状況であるが、下位の小礫層は55×35cmの楕円形の範囲である。Ⅳ群a類土器は上部の小礫層から出土している。

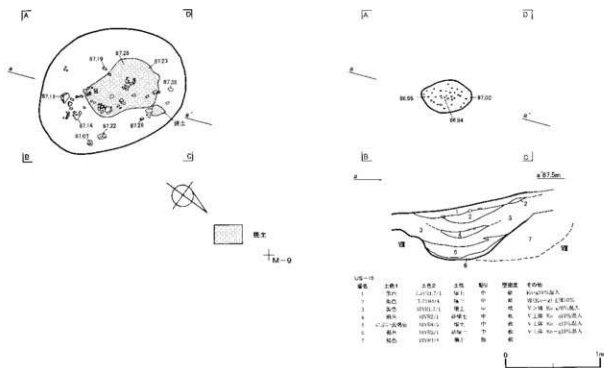
時期: 出土した遺物から判断して縄文時代後期前葉と推定される。(谷島)

US-14 $\pm M-10$

$\pm M-10$



US-15



図III-69 US-14・15

6. 石囲い炉

14カ所検出した。礫が被熱しているものの、焼土、掘り方の確認されなかった例が多い。

14カ所中5カ所は支流1に面した南東側の低位段丘部分で検出した。円形のもの(US-4)、馬蹄形のもの(US-7)、コの字形のもの(US-18)、正方形のもの(US-17)がある。礫の形状や組み方からUS-17と18は同時期に作られた可能性が高い。またUS-7は立石状の礫をともっている。

14カ所中9カ所は支流2に面した北西側の緩斜面および低位段丘部分において検出した。楕円形のもの(US-1・12)、半円形のもの(US-2・5・10)、L字形のもの(US-3)があり、形状不明のものが3基(US-8・9・11)数えられる。構築場所はグリッド45・46ライン付近の緩斜面に3基(US-2・3・5)、支流2に近い低地部分に6基(US-1・8~12)と、それぞれ分かれている。

形状については検出段階の現況で記載してあるが、半円形のもの、馬蹄形のもの、コの字形のもの、L字形のものなどは、本来、円形であったり、楕円形であったり、四角形を呈していた可能性もある。

(影浦)

US-1 (図III-71)

位置・立地：O-51 河岸段丘縁 標高79.3~79.4mの地点。

規模：0.64m×0.44m

平面形：楕円形

確認・調査：支流2に面した低位段丘部分のVc2層を調査中、楕円形に組まれた礫を検出した。周囲はVc2砂層まで掘り下がっていたが、検出状況から標高79m40cm付近のVc2層が構築面と考えられる。焼土はまったく残っていなかった。しかしながら、組まれた礫の上部が被熱で赤化しており、礫の掘り込み面(標高79m40cm)と、被熱した礫の上端との差が5~8cmであることから、焼土の堆積は5cm内外と考えられる。

遺物出土状況：土器(Ⅲa)1点、礫11点、計12点を取り上げた。

時期：不明である。平面図に示した土器片(略称Pで引いたもの)はほぼ同レベルのもので、Ⅲ群a類。直接伴うものではないが、縄文時代中期前半の可能性はある。

(影浦)

US-2 (図III-71 図版22・44)

位置・立地：P-46 標高83.0m付近の緩斜面

規模：0.51m×(0.38)m

平面形：半円形

確認・調査：Vc層中位で、US-3とともに検出した。焼土・掘り方は確認されなかった。礫は赤化している。

遺物出土状況：土器(Ⅳa)6点、礫・礫片5点、計11点。礫のうち4点は石組を構成するものである。

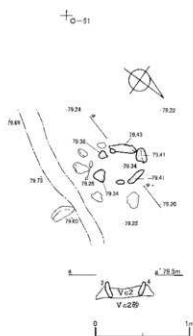
時期：周辺の遺物出土状況から、縄文時代後期前葉と推測される。

(柳瀬)

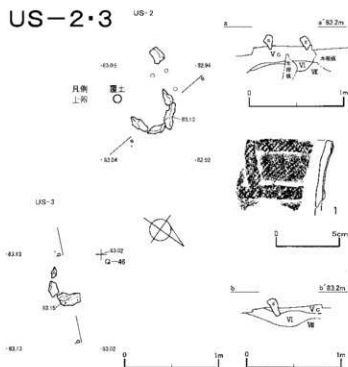
遺物：土器 ⅠはⅣ群a類。炭化物の付着が顕著。縄文は貼付文上も同時施文している。

(影浦)

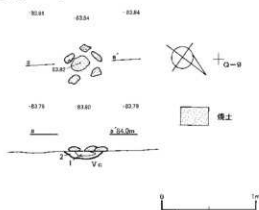
US-1



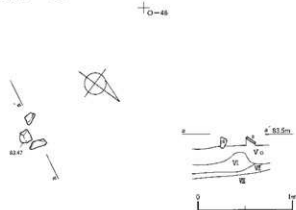
US-2・3



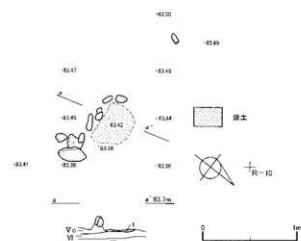
US-4



US-5



US-6



US-6出土遺物



US-1	US-2	US-3	US-4	US-5	US-6	US-7	US-8	US-9	US-10	US-11	US-12
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

US-3 (図Ⅲ-71)

位置・立地：Q-45 標高83.0m付近の緩斜面

規模：(0.40)m×(0.34)m

平面形：L字形

確認・調査：Vc層中位で、US-2とともに検出した。焼土・掘り方は確認されなかった。礫は若干赤化している。

遺物出土状況：礫片3点。すべて石組を構成するものである。

時期：周辺の遺物出土状況から、縄文時代後期前葉と推測される。(柳瀬)

US-4 (図Ⅲ-71)

位置・立地：P-8 低地平坦面に位置する。

規模：0.45m×0.35m

平面形：円形

確認・調査：Vc層上面で確認した。礫5点が円形に配され、中に焼土が検出された石囲い炉である。礫は間隔を空けて配されている。

覆土：Vc層に礫が埋め込まれ、焼土が2層で最大厚8cmのレンズ状になっている。

遺物出土状況：礫5点を取り上げた。礫は円形に配されていた。

時期：周囲の包含層出土の遺物から判断して縄文時代後期前葉と推定される。(谷島)

US-5 (図Ⅲ-71)

位置・立地：O-45 標高83.4m付近の緩斜面

規模：0.38m×(0.28)m

平面形：半円形

確認・調査：Vc層下位で検出した。焼土・掘り方は確認されなかった。周辺には炭化物が少量認められた。礫は若干赤化している。

遺物出土状況：礫片3点。すべて石組を構成するものである。

時期：周辺の遺物出土状況から、縄文時代後期前葉と推測される。(柳瀬)

US-6 (図Ⅲ-71 図版22・44)

位置・立地：Q-9 標高83.4mの平坦面。

規模：(0.95)m×(0.50)m

平面形：不明

確認・調査：Vc層下位において被熱した礫のまとまりを検出した。周囲を掘り下げたところ、M層において周囲の土壌がかすかに赤く変色しているのを確認、石囲い炉と判断した。礫の配置は不規則であるが、被熱した土壌の範囲から本来は楕円形を呈していた可能性が高い。

遺物出土状況：石器(たつき石1点・台石1点)2点、礫・礫片8点、計10点を取り上げた。

時期：周辺の遺構や包含層出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。(影浦)

遺物：石器 1は安山岩を素材とした台石。上面に使用痕がみられる。(谷島)

US-7 (図Ⅲ-72 図版22・44)

位置・立地：S-12 標高83.3mの平坦面。

規模：(1.26)m×(0.70)m

平面形：楕円形(推定)

確認・調査：Vc層を掘り下げ中、被熱礫がまとまって出土した。周囲を掘り下げたところ、コの字状の配置が認められたため、石囲いが判断し、調査を進めた。台形様の礫(1)が立石風に検出されたため、何らかの祭祀的な意味を持つ炉かもしれない。石で囲まれた内側の土は暗オリーブ色を呈し、周囲の自然堆積層(Vc層)と若干色調を異にしていた。

遺物出土状況：石器(台石)1点、礫・礫片13点、計14点を取り上げた。

時期：周辺の遺構や包含層出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。(影浦)

遺物：石器 1は安山岩製の台石。上面に使用痕がみられる。(谷島)

US-8 (図Ⅲ-72)

位置・立地：S-50 標高80.4m付近の平坦面

規模：(0.50)m×0.52m

平面形：不明

確認・調査：Vc層下位で検出した。焼土・掘り方は確認されなかった。礫は赤化しているものがある。

遺物出土状況：礫・礫片4点。すべて石組を構成するものである。

時期：周辺の遺物出土状況から、縄文時代後期前葉と推測される。(柳瀬)

US-9 (図Ⅲ-72 図版44)

位置・立地：R-50 標高80.5m付近の平坦面 UP-13と隣接する。

規模： - m× - m

平面形：不明

確認・調査：Vc層中位で検出した。焼土・掘り方は確認されなかった。1点は扁平打製石器である。礫は赤化しており、扁平打製石器は赤化し焼けはじけがみられる。

遺物出土状況：扁平打製石器1点、礫・礫片2点。すべて石組を構成するものである。

時期：周辺の遺物出土状況から、縄文時代後期前葉と推測される。(柳瀬)

遺物：石器 1は扁平打製石器。両端と下縁部に打ち欠き、片面に厚みを取る打ち剥がしがみられる。下面を擦っている。両端は被熱で変色している。安山岩を素材とする。(谷島)

US-10 (図Ⅲ-73)

位置・立地：R-48 標高81.3m付近の平坦面

規模：(0.40)m×(0.26)m

平面形：半円形

確認・調査：Vc層下位で検出した。焼土・掘り方は確認されなかった。周辺には炭化物が少量確認された。礫は赤化している。

遺物出土状況：礫・礫片6点。すべて石組を構成するものである。

時期：周辺の遺物出土状況から、縄文時代後期前葉と推測される。

(柳瀬)

US-11 (図Ⅲ-73)

位置・立地：S-48 標高81.3m付近の平坦面

規模：(0.73)m×(0.42)m

平面形：不明

確認・調査：Vc層上位で、UP-45・46と同時に検出した。UP-45・46埋没後にUS-11が構築されている。焼土・掘り方は確認されなかった。検出した礫の配置は不規則であるが、離れて接合するものがあり、使用後に移動したものと推測される。礫は赤化しているものが多い。

遺物出土状況：礫片16点。すべて、本来は石組を構成していたと推測されるものである。

時期：周辺の遺物出土状況から、縄文時代後期前葉と推測される。

(柳瀬)

US-12 (図Ⅲ-73 図版22・45)

位置・立地：T-51 標高80.2m付近の緩斜面

規模：0.58m×0.36m

平面形：楕円形

確認・調査：Vc層下位で検出した。焼土・掘り方は確認されなかった。周辺は70cmほどの範囲で周辺よりわずかにくぼんでおり、やや掘り込んで構築された可能性がある。北東側に隣接して土器の集積がみられ、US-12に伴うものと判断した。礫はほとんどが赤化している。

遺物出土状況：土器(Ⅳa)176点、たたき石1点、礫・礫片16点。計193点が出土した。土器は石組みの北東側でまとまって出土した。2～3cmほどの細片が多く、同一個体ではあるがほとんど接合しなかった。礫・礫片のうち9点は1個体の礫が被熱による劣化により割れたもので、たたき石を含め9個の礫で石組みが構成されている。

時期：出土遺物から、縄文時代後期前葉である。

(柳瀬)

遺物：土器 1はⅣ群a類の底部片。上げ底気味の底面は平滑だが、内外面に指頭圧が顕著に残る。

(影浦)

石器 2はたたき石。安山岩を素材とする。

(谷島)

US-17 (図Ⅲ-74 図版22)

位置・立地：T-10 標高82.5mの平坦面。

規模：0.86m×0.78m

平面形：ほぼ正方形

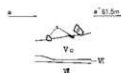
確認・調査：Ⅵ層掘り下げ中にUS-18と相次いで検出した。ほぼ正方形に扁平礫が組まれていたが、東側の角に隙間が開いていた。礫を掘り抜いた跡が認められなかったことから、この部分は最初から開いていたと考えられる。灰の掻き出し口であったかもしれない。内側には焼土の堆積が認められたが、骨片等の混入は確認されなかった。

遺物出土状況：たたき石3点、礫・礫片14点、計17点を取り上げた。たたき石3点は1個体に接合した。礫のうちの2点も1個体に接合する。石囲い炉自体は14個の扁平礫によって構成されたものである。

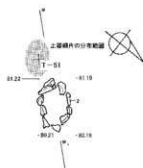
時期：縄文時代後期前葉の可能性が考えられる。

(影浦)

US-10



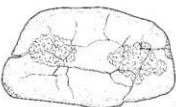
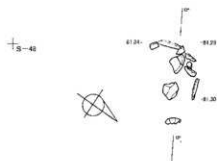
US-12



US-12出土遺物

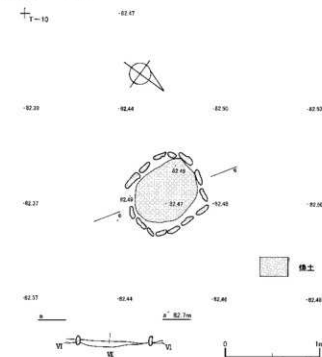


US-11



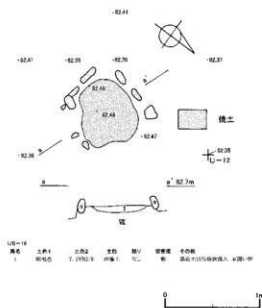
図Ⅲ-73 US-10~12

US-17



US-17	遺名	土色1	土色2	土層	層ノ	層ノ	層ノ	層ノ	その他
1	中層土	灰褐色	灰褐色	砂層土	砂	砂	砂	砂	遺構(石造)の遺構、土間、壁

US-18



US-18	遺名	土色1	土色2	土層	層ノ	層ノ	層ノ	層ノ	その他
1	中層土	灰褐色	灰褐色	砂層土	砂	砂	砂	砂	遺構(石造)の遺構、土間、壁

図Ⅲ-74 US-17・18

US-18 (図Ⅲ-74)

位置・立地：T-11 標高82.5mの平坦面

規模：0.88m×0.80m

平面形：コの字形

確認・調査：Ⅱ層掘り下げ中にUS-17と相次いで検出した。礫は扁平な礫と丸みのある礫が併用され、礫同士の間隔は一定していない。しかしながら規模は隣接するUS-17とほとんど同じである。

遺物出土状況：礫9点を取り上げた。

時期：縄文時代後期前葉の可能性が考えられる。

(影浦)

7. 焼土

4カ所検出した。それぞれ離れているが、UF-2以外は台地の縁辺部での検出である。

UF-1 (図III-75 図版24)

位置・立地：N-43 標高85.4mの平坦面。

規模：0.86m×0.64m×0.20m

平面形：不整形

確認・調査：Vb層中に検出した。比較的厚い焼土で、その場で焚かれたと考えられる。トレンチを入れたところ、後世の木根痕が入り込んでいて、下のほうまで粒状に焼土の分布が確認された。根の生育によって押されたものと、根痕の空洞を伝って落ちたものであろう。

遺物出土状況：確認面において被熱した礫が1点出土した。重さは0.78kgである。

時期：周辺の出土遺物から縄文時代後期前葉の可能性がある。(影浦)

UF-2 (図III-75)

位置・立地：R-50 標高80.8m付近の平坦面 UP-40と隣接する

規模：0.76m×0.67×0.12m

平面形：不整形

確認・調査：Vc層中位で検出した。周辺では、RS-50区、S-51区で赤化した礫が、Q-50区で焼けはじけた礫片が出土しており、UF-2と関係がある可能性がある。UP-40と隣接する。

遺物出土状況：検出面直上で、IV群b類の土器片が出土している。

時期：周辺の遺物出土状況から、縄文時代中期前半あるいは後期前葉と推測される。(柳瀬)

UF-4 (図III-75)

位置・立地：K-9 台地の縁辺部に位置する。下層のVc層にUP-54があるが直接重複はしない。

規模：2.90m×1.40m×0.12m

平面形：不整形

確認・調査：Vb層中で検出した。緩斜面に位置し、北側が高い。北西から南東方向に長軸を持ち、北西側には細長く炭化物も出土している。土色や厚み、分布から、半分から使用法に違いが推定され、炭・灰と焼土を北西側に移動した可能性もある。

覆土：3層に分かれ、一部を除き平面上でも分割されている。1は薄く広がるが、3は厚みがある。

遺物出土状況：北側の4カ所から炭化物が焼土上と縁辺に検出されている。

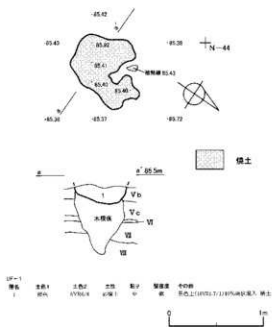
時期：焼土内から採取した炭化物の放射性炭素年代の測定結果は補正年代で2210±40の値が得られている。支流1に面した地区ではV群c類の聖山II式が出土しているの、縄文時代晩期後葉の可能性が高い。(谷島)

UF-5 (図III-75)

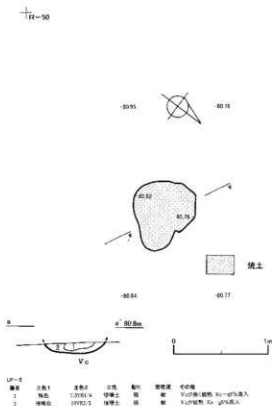
位置・立地：N-13 台地の縁辺部に位置する。

規模：0.60m×0.44m×0.06m

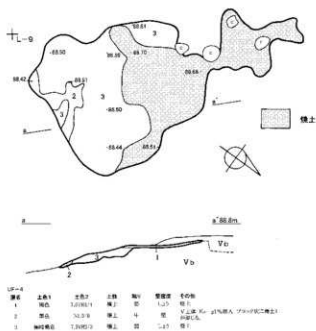
UF-1



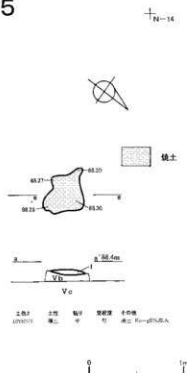
UF-2



UF-4



UF-5



図III-75 UF-1・2・4・5

平面形：不整形

確認・調査：V b層中で検出した。5 cm程の最大厚があり断面観はレンズ状を呈する

覆土：V b層が焼けたもので堅くなっている。

遺物出土状況：出土していない。

時期：周囲の包含層出土の遺物から判断して縄文時代後期前葉と推定される。（谷島）

8. フレイク集中

4カ所検出した。支流1に面した南東の低位段丘部分に2カ所（UP-2・3）、支流2に面した斜面から平坦面への変換点付近に2カ所（UP-1・4）ある。UFC-1・3は黒曜石、UFC-2・4は頁岩のフレイク集中である。UFC-3は黒曜石の石器素材様のフレイク類が20点とまって検出したもので、微細片を伴っていない。（影浦）

UFC-1（図Ⅲ-76 図版45）

位置・立地：S-53 標高78.6m付近の、斜面から平坦面への変換点付近

規模：0.19m×0.17m

確認・調査：V c 2層中で検出した。細片が多くみられたため、土壌ごと取り上げ、水洗選別により遺物を回収した。

遺物出土状況：Ⅲ群 a 類土器3点、石器（石鏝1点・黒曜石のフレイク43点）44点、また UFC-1 に隣接して礫が4点出土した。

時期：出土遺物と、これより南東側の斜面でⅢ群 a 類土器など縄文時代中期前半の遺物が大量に出土していることから、縄文時代中期前半と推測される。（柳瀬）

遺物：石器 1は黒曜石を素材とした石鏝未成品。左端は厚みがある。（谷島）

UFC-4（図Ⅲ-76 図版25・45）

位置・立地：T-52 標高79.0m付近の、平坦面から斜面への変換点付近

規模：0.37m×0.20m

確認・調査：V c 層下位で検出した。細片が多くみられたため、土壌ごと取り上げ、水洗選別により遺物を回収した。

遺物出土状況：石核2点、フレイク77点が出土しており、いずれも頁岩の同一石材を素材とする。

時期：これより南東側の斜面でⅢ群 a 類土器など縄文時代中期前半の遺物が大量に出土していることから、縄文時代中期前半と推測される。（柳瀬）

遺物：石器 1～3は接合資料。原石表皮のついた頁岩の同一母岩を使用したと見られ、包含層出土のフレイクとも接合している。打点の転移がみられ規則的な剥離は行われていない。また、接合したものからは、目的剥片の持ち出しは確認できない。（谷島）

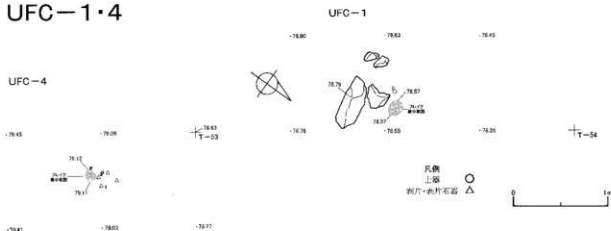
UFC-2（図Ⅲ-77～79 図版25・45）

位置・立地：T-9 標高82.9mの平坦面。

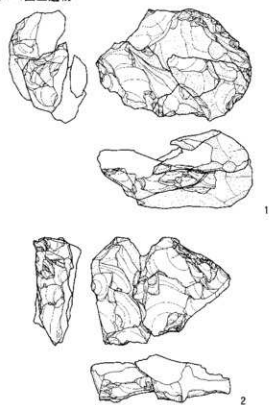
規模：2.00m×1.60m×0.20m

確認・調査：V c 層下位を掘り下げ中、赤色頁岩のフレイク集中を検出した。土坑の存在を想定した

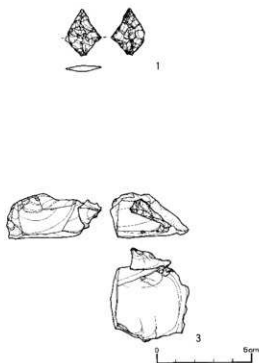
UFC-1・4



UFC-4出土遺物



UFC-1出土遺物



図Ⅲ-76 UFC-1・4

が、掘り込み等は検出されなかった。

遺物出土状況：土器（Ⅳa）30点、石器（石鏃1点・Rフレイク2点・フレイク541点・台石1点）545点、礫・礫片6点、計581点を取り上げた。フレイク以外の遺物は、直接フレイク集中に関係しない可能性があるが、同一レベルの同範囲資料として一緒に取り上げた。フレイクは約1m四方に分布し、うち60cm四方の範囲で特に密であった。図化と計測は全部で5回に分けて行なった。レベル的には標高82.75～82.95mまでほぼ20cmの厚さにわたって出土した。フレイクは全部で541点。頁岩が540点、泥岩が1点である。540点を数えた頁岩フレイクのうち赤色のものは503点。93%を占めた。なお、肉眼判定で2m四方以下のものはカウントしなかったので、実数は数千ないしは数万점에及ぶ。

UFC-2

†T-9

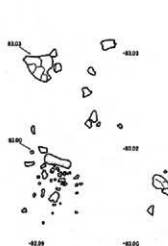
†T-9



凡例
 土器 ○
 削片・削片石群 △
 礫・礫石群 ▼



全体出土状況

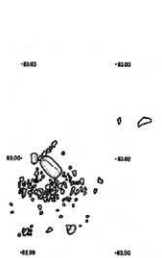


1回目出土状況

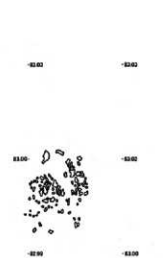


†T-9

†T-9



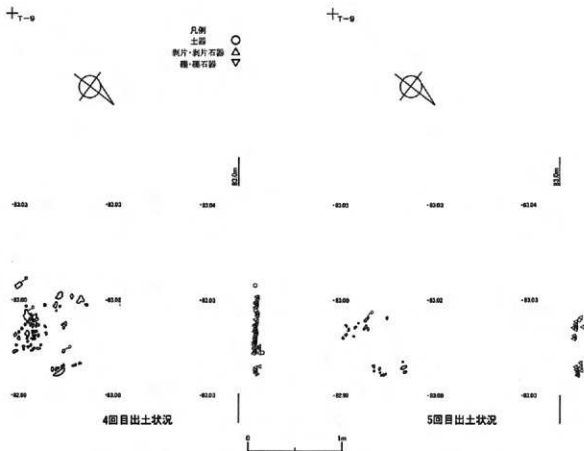
2回目出土状況



3回目出土状況



図III-77 UFC-2(1)



図Ⅲ-78 UFC-2(2)

時期：同時に計測して取り上げた土器片から縄文時代後期前葉の可能性がある。

遺物：土器 1はⅣ群a類。クランク状の沈線文が連続する。大津Ⅶ群。 (影浦)

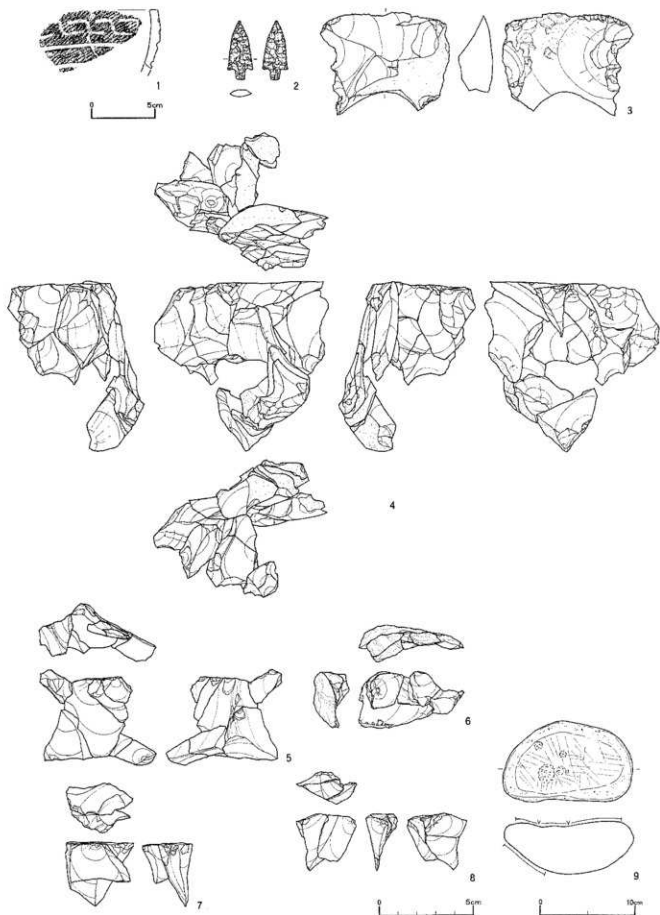
石器 2は頁岩を素材とした石鎌で、有茎凹基。3は赤色の頁岩を素材としたRフレイクで、側縁に調整剥離がみられる。接合資料は4～7まで図示した。この他各2点が接合したものは4点ある。これらは赤色の頁岩で原表皮のついた同一母岩を使用したと思われ、包含層出土のフレイクとも接合している。打点の転移がみられ規則的な剥離は行われていない。接合したものからは、目的剥片の持ち出しは確認できない。8は安山岩製の小型台石。上面に使用痕がみられる。 (谷島)

UFC-3 (図Ⅲ-80・81 図版25・46)

位置・立地：T-8 標高82.75mの平坦面。

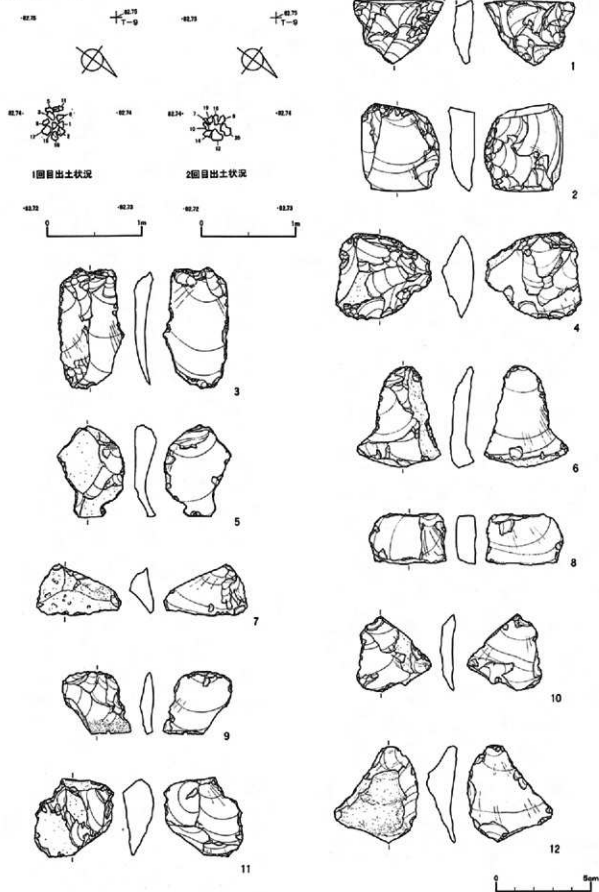
確認・調査：Vc層を掘り下げ中に黒曜石のフレイク集中を検出した。周囲を精査したが、掘り込み等は検出されなかった。出土した10点の黒曜石を図化、地点計測し、取り上げたところ、直下から同様のフレイクを8点検出した。黒曜石のまとまりに土をかぶせたものか、Vc層中にごく浅い土坑を掘り込みフレイクを埋納したものの可能性があるが、平面の検出にとらわれ、土層観察用のベルトを設定していなかったため、判別できなかった。検出状況からこれらの黒曜石が袋状のものに入っていた可能性もある。

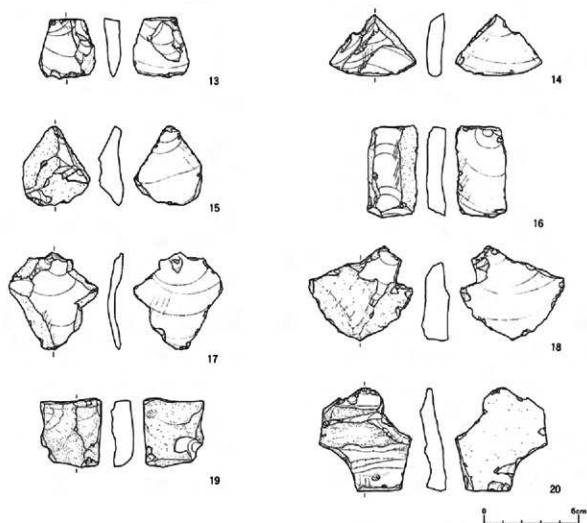
遺物出土状況：石器(石槍またはナイフ1点・スクレイパー5点・Rフレイク7点・原石2点、フレイク5点)20点を取り上げた。全点黒曜石である。Vc層下位、標高82.71～82.79mの間で、上から



図III-79 UFC-2の遺物

UFC-3





図Ⅲ-81 UFC-3(2)

10点、下から8点を検出した。他に計測点をおさえられなかったものが2点(4・13)ある。

時期：周辺の出土遺物から縄文時代後期前葉の可能性が高い。(影浦)

遺物：石器 1～20は黒曜石を素材としたもの。原材産地分析の結果13を除き赤井川産の判定である。13は豊泉産の判定である。同一母岩から剥離したと思われるものもあるが、直接接合していない。

1は石槍またはナイフ。2～6はスクレイパー。7～12はRフレイク。13～18はフレイク。19・20は板状の原石。20はいくつか小さな剥離がみられる。黒曜石の産地推定分析と水和層年代測定を行っている。産地推定分析は全点、水和層年代測定はこの中から4点行っている。同一地点、同一層位、同一産地にもかかわらず水和層の厚さにバラツキがみられ、更に厚いことから予想した年代より古い結果になっている。地下水など地温が影響したものと考えられているが、データを蓄積し検証する必要がある。(谷島)

9. 立石

垂直に立った状態で検出した礫を特に立石としたが、周囲では柱穴状の小ピット（USP）が75カ所検出されており、中には覆土内に礫が埋納されているもの（USP-74）も見られた。これらは一連のものとしてとらえられる可能性がある。（影浦）

立石 1（図Ⅲ-82・83 図版24）

位置・立地：Q-8 自然堤防部下、標高83.3mの平坦面。

確認・調査：Vc層の下位で礫を検出した。半截したところ、掘り込みはⅡ層まで続いていた。確認面の径は23cm、深さ18cmである。礫の大きさは長さ28cm、重さ4.03kg。

時期：周辺の遺構や包含層出土物のあり方から、縄文時代後期前葉の可能性が高い。（影浦）

立石 2（図Ⅲ-82・83 図版24）

位置・立地：R-8 自然堤防部下、標高83.0mの平坦面。

確認・調査：Vc層の下位で礫を検出した。半截したところ、掘り込みはⅡ層上面まで続いていた。確認面の径は19cm、深さ34cmである。礫の大きさは長さ22cm、重さ2.35kg。

時期：周辺の遺構や包含層出土物のあり方から、縄文時代後期前葉の可能性が高い。（影浦）

立石 3（図Ⅲ-82・83 図版24）

位置・立地：R-9 標高82.9mの平坦面。

確認・調査：Ⅱ層上面で礫を検出した。半截したところ、掘り込み穴はⅡ層内で終わっていた。確認面の径は20cm、深さ24cmである。礫は被熱が認められるもので、長さ16cm、重さ1.25kg。覆土内からⅣ群a類の土器片が1点出土した。

時期：周辺の遺構や包含層出土物のあり方から、縄文時代後期前葉の可能性が高い。（影浦）

立石 4（図Ⅲ-82・83）

位置・立地：S-9 標高82.5mの平坦面。

確認・調査：Ⅱ層上面で礫を検出した。半截したところ、掘り込み穴はⅡ層内で終わっていた。確認面の径は29cm、深さ42cmである。礫の大きさは、長さ25cm、重さ7.74kg。

時期：周辺の遺構や包含層出土物のあり方から、縄文時代後期前葉の可能性が高い。（影浦）

立石 5（図Ⅲ-82・83 図版24）

位置・立地：S-10 標高82.8mの平坦面

確認・調査：Vc層下位で礫を検出した。半截したところ、掘り込みはⅡ層内で終わっていた。確認面の径は20cm、深さ19cmである。礫の大きさは、長さ24cm、重さ2.84kg。

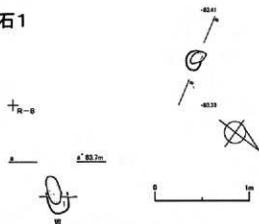
時期：周辺の遺構や包含層出土物のあり方から、縄文時代後期前葉の可能性が高い。（影浦）

立石 6（図Ⅲ-82・83 図版24）

位置・立地：T-9 標高82.4mの平坦面

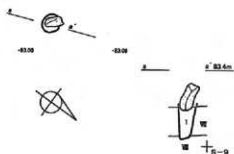
確認・調査：Vc層下位で礫を検出した。半截したところ、掘り込みはⅡ層内で終わっていた。確認面

立石1



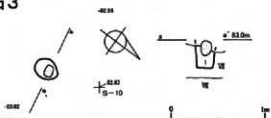
立石1
標高 1
断面 1
土層1 2070.71
土層2 標上
層IV 中
層 砂
層 V 3層 Ka-47%混入

立石2



立石2
標高 1
断面 1
土層1 2070.71
土層2 標上
層IV 中
層 砂
層 V 3層 Ka-47%混入

立石3



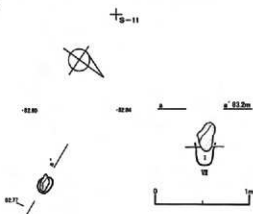
立石3
標高 1
断面 1
土層1 2070.71
土層2 標上
層IV 中
層 砂
層 V 3層 Ka-47%混入

立石4



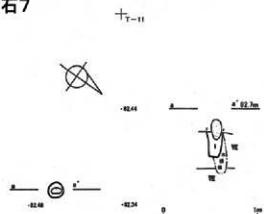
立石4
標高 1
断面 1
土層1 2070.71
土層2 標上
層IV 中
層 砂
層 V 3層 Ka-47%混入

立石5



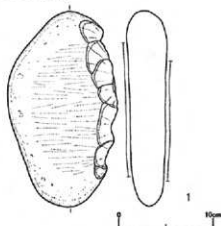
立石5
標高 1
断面 1
土層1 2070.71
土層2 標上
層IV 中
層 砂
層 V 3層 Ka-47%混入

立石7

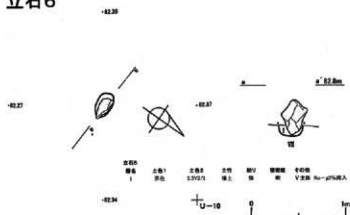


立石7
標高 1
断面 1
土層1 2070.71
土層2 標上
層IV 中
層 砂
層 V 3層 Ka-47%混入

立石7出土遺物



立石6



立石6
標高 1
断面 1
土層1 2070.71
土層2 標上
層IV 中
層 砂
層 V 3層 Ka-47%混入

図III-82 立石

の径は26cm、深さ12cmである。礫の大きさは、長さ36.5cm、重さ8.68kg。

時期：周辺の遺構や包含層出土遺物のあり方から、縄文時代後期前葉の可能性が高い。（影浦）

立石7（図Ⅲ-82・83 図版46）

位置・立地：T-10 標高82.5mの平坦面

確認・調査：Vc層下位で礫を検出した。半截したところ、掘り込み穴はⅡ層内で終わっており、古い木根跡の上の重複が確認された。確認面の径は16cm、深さ26cmである。礫の大きさは、長さ20cm、重さ1.34kg。

時期：周辺の遺構や包含層出土遺物のあり方から、縄文時代後期前葉の可能性が高い。（影浦）

遺物：石器 1は台石。側縁の一部に打ち欠き状の剥離が観察され、両面に使用痕がみられる。安山岩製。（谷島）

10. 柱穴状の小ピット

78基検出した。うち75基は支流1に面した南東の低位段丘部分での検出である。他3基（USP-49～51）は台地上の平坦部分で検出された。周辺で検出された土坑の時期が縄文時代後期前葉であることから、これらの構築も同時期である可能性が高い。台地上の3基はVc層中での検出であるが、低位段丘部分の75基はすべてⅡ層上面まで掘り下げた段階で検出したものである。実際の掘り込みはV層中と考えられる。覆土は基本的にVc層の流入と思われる単層で、まれに壁面の崩落土が入り込んでいるものも見られた。おおよそ隣接するものでまとめて掲載したが、積極的に掘立柱建物跡と判断できるものはほとんど見出せなかった。USP群（1）としてくくったものに、その可能性がある。

覆土内から遺物が出土したのとして8基が数えられる。うち5基（USP-28・45・70・74・83）はⅣ群a類の土器片である。いずれも1、2点であり、これらについては埋没過程で混入した可能性が高い。石斧および石斧片を出土したものが2基（USP-26・46）ある。これらは意図的に埋納したものと考えられる。縦位に礫を検出したものが1基（USP-74）ある。立石の項でも述べたが、立石として取り扱った7基も、同じ性格の遺構であった可能性がある。（影浦）

USP群1（図Ⅲ-83・84 図版24・46）

位置：S-10区を中心とする。USP-13～15・26・73～76・82～84・88・92・96～99・105・106・129・130

漠然とはあるが円環するような配列を持っている。その場合、USP-96から92、99と結んで円形に閉じるのか、それとも96から105、106とつながって長楕円を呈するのかわからない。USP-92・97～99・130あたりで何か小屋状の組み合わせが可能のようにも見える。円形に閉じる場合は2.8×2.2mの規模、長楕円に伸びる場合は4.1×2.2mの規模である。配列の並びに立石5があるが、縦位に礫を検出したUSP-74と対角をなすようにも見える。東側に少し離れたUSP-26からは石斧が1点出土した。（影浦）

遺物：石器 1はUSP-26で出土した石斧。両面の上半は柄との着装部に打ち剥がしの再加工が行われている。砂岩製。（谷島）

USP群2（図Ⅲ-83・85）

位置：R-9・10、S-9区を中心とする。USP-1～10・16・19～22・34～36・38～40・44・56・58・

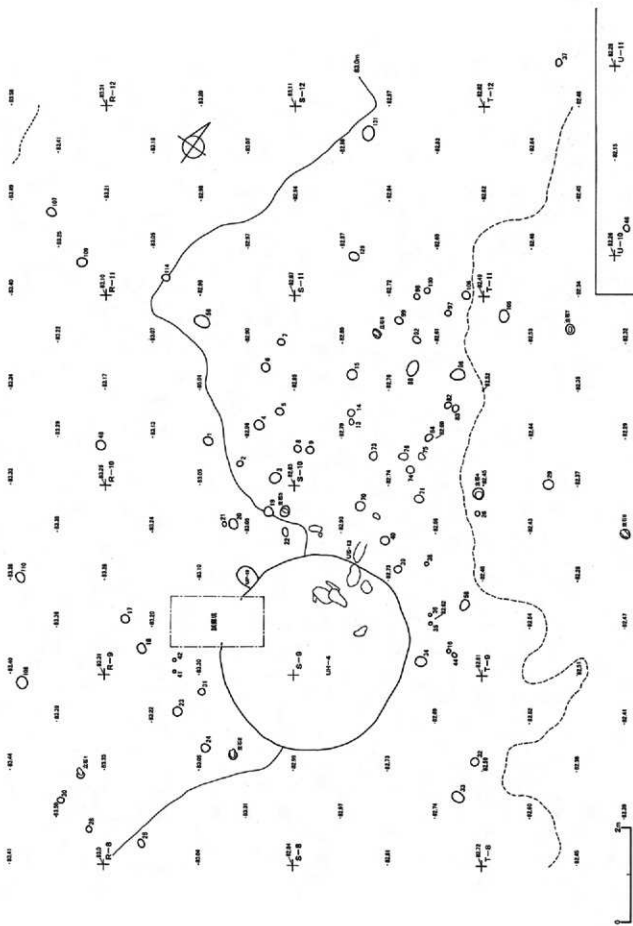
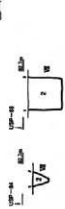
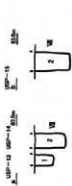
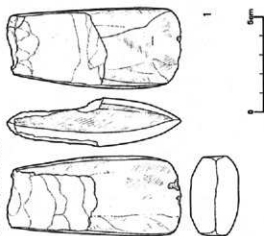


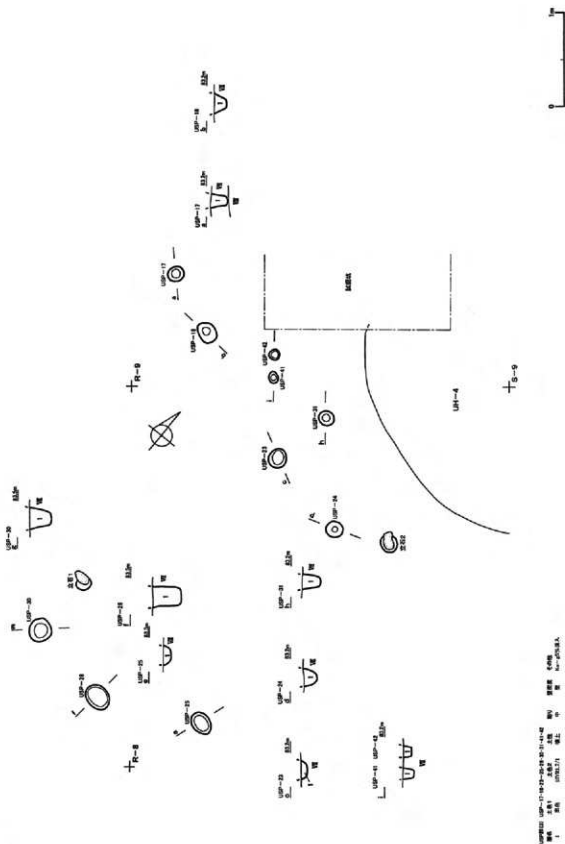
図 III-83 柱穴状の小ピット

USP-26出土遺物



番号	土器名	土器種別	土器形状	土器用途
1	USP-13	土器	丸底	貯器
2	USP-14	土器	丸底	貯器
3	USP-15	土器	丸底	貯器
4	USP-16	土器	丸底	貯器
5	USP-17	土器	丸底	貯器
6	USP-18	土器	丸底	貯器
7	USP-19	土器	丸底	貯器
8	USP-20	土器	丸底	貯器
9	USP-21	土器	丸底	貯器
10	USP-22	土器	丸底	貯器
11	USP-23	土器	丸底	貯器
12	USP-24	土器	丸底	貯器
13	USP-25	土器	丸底	貯器
14	USP-26	土器	丸底	貯器
15	USP-27	土器	丸底	貯器
16	USP-28	土器	丸底	貯器
17	USP-29	土器	丸底	貯器
18	USP-30	土器	丸底	貯器
19	USP-31	土器	丸底	貯器
20	USP-32	土器	丸底	貯器

図 84 USP群1



図III-86 US群3

USP-17 2330 ± 100 BP
 USP-18 2330 ± 100 BP
 USP-19 2330 ± 100 BP
 USP-20 2330 ± 100 BP
 USP-21 2330 ± 100 BP
 USP-22 2330 ± 100 BP
 USP-23 2330 ± 100 BP
 USP-24 2330 ± 100 BP
 USP-25 2330 ± 100 BP
 USP-26 2330 ± 100 BP
 USP-27 2330 ± 100 BP
 USP-28 2330 ± 100 BP
 USP-29 2330 ± 100 BP
 USP-30 2330 ± 100 BP
 USP-31 2330 ± 100 BP
 USP-32 2330 ± 100 BP
 USP-33 2330 ± 100 BP
 USP-34 2330 ± 100 BP
 USP-35 2330 ± 100 BP
 USP-36 2330 ± 100 BP
 USP-37 2330 ± 100 BP
 USP-38 2330 ± 100 BP
 USP-39 2330 ± 100 BP
 USP-40 2330 ± 100 BP
 USP-41 2330 ± 100 BP
 USP-42 2330 ± 100 BP
 USP-43 2330 ± 100 BP
 USP-44 2330 ± 100 BP
 USP-45 2330 ± 100 BP
 USP-46 2330 ± 100 BP
 USP-47 2330 ± 100 BP
 USP-48 2330 ± 100 BP
 USP-49 2330 ± 100 BP
 USP-50 2330 ± 100 BP
 USP-51 2330 ± 100 BP
 USP-52 2330 ± 100 BP
 USP-53 2330 ± 100 BP
 USP-54 2330 ± 100 BP
 USP-55 2330 ± 100 BP
 USP-56 2330 ± 100 BP
 USP-57 2330 ± 100 BP
 USP-58 2330 ± 100 BP
 USP-59 2330 ± 100 BP
 USP-60 2330 ± 100 BP
 USP-61 2330 ± 100 BP
 USP-62 2330 ± 100 BP
 USP-63 2330 ± 100 BP
 USP-64 2330 ± 100 BP
 USP-65 2330 ± 100 BP
 USP-66 2330 ± 100 BP
 USP-67 2330 ± 100 BP
 USP-68 2330 ± 100 BP
 USP-69 2330 ± 100 BP
 USP-70 2330 ± 100 BP
 USP-71 2330 ± 100 BP
 USP-72 2330 ± 100 BP
 USP-73 2330 ± 100 BP
 USP-74 2330 ± 100 BP
 USP-75 2330 ± 100 BP
 USP-76 2330 ± 100 BP
 USP-77 2330 ± 100 BP
 USP-78 2330 ± 100 BP
 USP-79 2330 ± 100 BP
 USP-80 2330 ± 100 BP
 USP-81 2330 ± 100 BP
 USP-82 2330 ± 100 BP
 USP-83 2330 ± 100 BP
 USP-84 2330 ± 100 BP
 USP-85 2330 ± 100 BP
 USP-86 2330 ± 100 BP
 USP-87 2330 ± 100 BP
 USP-88 2330 ± 100 BP
 USP-89 2330 ± 100 BP
 USP-90 2330 ± 100 BP
 USP-91 2330 ± 100 BP
 USP-92 2330 ± 100 BP
 USP-93 2330 ± 100 BP
 USP-94 2330 ± 100 BP
 USP-95 2330 ± 100 BP
 USP-96 2330 ± 100 BP
 USP-97 2330 ± 100 BP
 USP-98 2330 ± 100 BP
 USP-99 2330 ± 100 BP
 USP-100 2330 ± 100 BP

USP群4

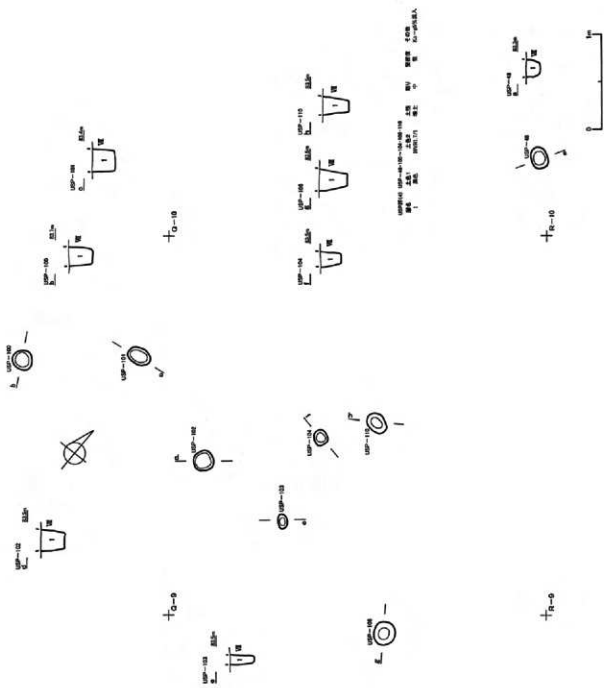


図 III - 87 USP 群 4

70・71

UH-4・US-13の北側から西側にかけて近接するものをまとめた。USP-8・9、20・21など漠然としているが2つで1組に見えるものがいくつかある。USP-35・36と16・44は径の小さいもので、2つで1組のもの同士が、また組をなしているように見える。(影浦)

USP群3 (図Ⅲ-83・86)

位置：R-8・9区を中心とする。USP-17・18・23~25・28・30・31・41・42

UH-4の南側に近接するものをまとめた。USP-17・18、28・30、24・23、41・42など漠然としているが2つ1組に見えるものが、ここでも散見される。USP-41・42は径の小さいもので、UH-4のHP-10・11および12・13、あるいはUH-4の北側で検出したUSP-35・36および16・44に似るが、性格は不明である。(影浦)

USP群4 (図Ⅲ-83・87)

位置：P-Q-9区を中心とする。USP-48・100~104・108・110

掘り込みのしっかりしたものが多いが、散発的な検出で、性格は不明である。単独の杭等の可能性がある。(影浦)

USP群5 (図Ⅲ-83・88 図版46)

位置：南東の低位段丘部分。USP-29・32・33・37・45・46・107・109・114・131

散発的に検出されたものをまとめた。性格不明であるが単独の杭等の可能性がある。USP-46から破損した石斧片を検出した。(影浦)

遺物：石器 1はUSP-46で出土した磨製石斧の胴部破片。緑色泥岩を素材とする。側縁部と一方の破損面が被熱で変色している。(谷島)

USP群6 (図Ⅲ-89)

位置：南東の台地上。M-10~12区。USP-49~51

3基を検出した。いずれも、台地上のVc層下位において確認したもので、低位段丘部において検出された他の柱穴状の小ピットとは完全に別のものと判断される。時期は縄文時代後期前葉。(影浦)

USP-49

規模：0.31m×—/0.12m

確認・調査：M-10区で検出した。傾斜に沿って北側半分をトレンチ状掘り下げて半載している。上面はほぼ円形を呈し、断面は底が丸く若干開き気味に立ち上がる。柱穴跡と考えられる。

覆土：3層に分割されるが、黒から黒褐色の砂壤土でKo-gの混合比率に違いがみられる。

USP-50

規模：0.48m×0.33m/0.35m

確認・調査：M-11区で検出した。傾斜に沿って南側を半載した。上面は楕円形を呈し、坑底は円形である。坑底が2段になっていることから柱を引き抜いた跡の可能性はある。

覆土：黒色砂壤土の単層である。

USP-51

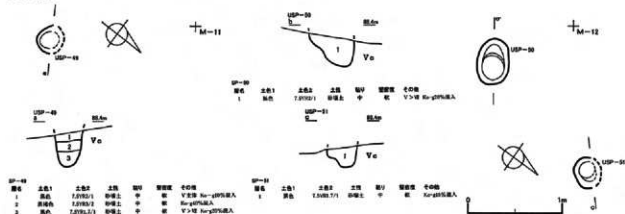
規模：0.34m×—/0.23m

確認・調査：M-12区で検出した。上面は楕円形を呈し、坑底は円形と思われる。坑底が2段になっていることから柱を引き抜いた跡の可能性はある。

覆土：黒色砂壤土の単層である。

(谷島)

USP群6



図Ⅲ-89 USP群6

Ⅳ 包含層出土の遺物

1 土器等

包含層からは土器33,678点、土製品39点、焼成粘土塊1点、粘土塊2点、計33,720点が出土した。いずれも縄文時代のものである。土器の内訳は後期前葉（Ⅳ群a類）が26,811点と最も多く、全体の8割を占めている。Ⅳ群a類は大津Ⅶ群前後のものが主体である。中期前半（Ⅲ群a類）が4,544点で、それに次いで多く出土した。Ⅲ群a類は円筒上層b式が主体である。他に前期後葉（Ⅱ群b類）、中期後葉（Ⅲ群b類）、後期中葉（Ⅳ群b類）、晩期後葉（Ⅴ群c類）の土器が出土している。Ⅱ群b類は円筒下層d式である。Ⅲ群b類は椀林式、ノダツブⅡ式に相当するもの。Ⅳ群b類はウサクマイc式と手稲式に相当するもの。Ⅴ群c類は聖山Ⅱ式に相当するものである。Ⅲ群b類とⅤ群c類は支流1に面した調査区南東側でほとんどが出土した。

Ⅱ群b類～Ⅳ群b類にかけてのものは、一個体がまとまっている出土状況がほとんど見られなかった。おそらく斜面地形や河川等による流れ込みの作用を受けたためと考えられる。とりわけⅡ群b類は器表面の磨滅が顕著であった。これとは対照的にもっとも新しい時期のⅤ群c類の土器は333点の出土であったが、一個体の土器が潰れた状態で出土する例がいくつか見られた。時期が新しいというだけでなく、縄文時代晩期後葉以降は、自然の営為による土砂の移動も少なかったと考えられる。

Ⅱ群b類（図Ⅳ-3・4-1・2 図版54）

723点出土した。すべて円筒下層d式である。M-13区、O-15区、S-53区においてまとまって出土したが、復元できたものはない。器表面の磨滅が顕著で、同一個体と考えられる破片がまとまっているながら、接合できないものがあった。

1は縄線文で文様帯を構成するもの。胴部との境には綾線文が巡る。2は上げ底気味の底部。

Ⅲ群a類（図Ⅳ-5～9-3～25 図版25・26・47・48・55）

4,544点出土した。数点を除いてすべて円筒上層b式に相当する。

3～21は円筒上層b式に相当するもの。3～11は復元個体。12～21は破片資料。

3～9・12～17は馬蹄形圧痕文ないし、それに類する刺突文が加えられたもの。3・4には半截竹管様の工具による刺突文が見られる。3は刺突に用いた工具の中央をスリット状にえぐっていると考えられる。地文は結束第2種斜行縄文。二重に施文しているところもある。5には自縄自巻の原体による馬蹄形圧痕文が施されている。口縁部と胴部の境に粘土紐が2本横環しているが、掲載図の裏側で、この粘土紐の間に馬蹄形圧痕文が部分的に加えられたところもある。6には馬蹄形圧痕文が縄文原体によるものと縄線文を3本束ねて付したものと2種認められる。また馬蹄形圧痕文が2段のところと1段のところがある。7は結束第1種羽状縄文を地文とする。一部、施文方向を変えて菱形を構成している。8と9の地文は結束第1種斜行縄文。8は突起下の文様構成がそれぞれ異なる。9は半截竹管様の工具による刺突文が施されたもの。14は馬蹄形圧痕文の中にヘラ状工具による刻み加えられている。一部に押し引き文風の痕跡も見られる。16は2本組の縄線文が2段巡り、その間に、原体をヘアピン状に折り曲げて押捺している。17は突起部分に馬蹄形圧痕文が観察される。

10・18は粘土紐による区画の中に縄線文が付されたもの。10は粘土紐によって網目状に区画されて

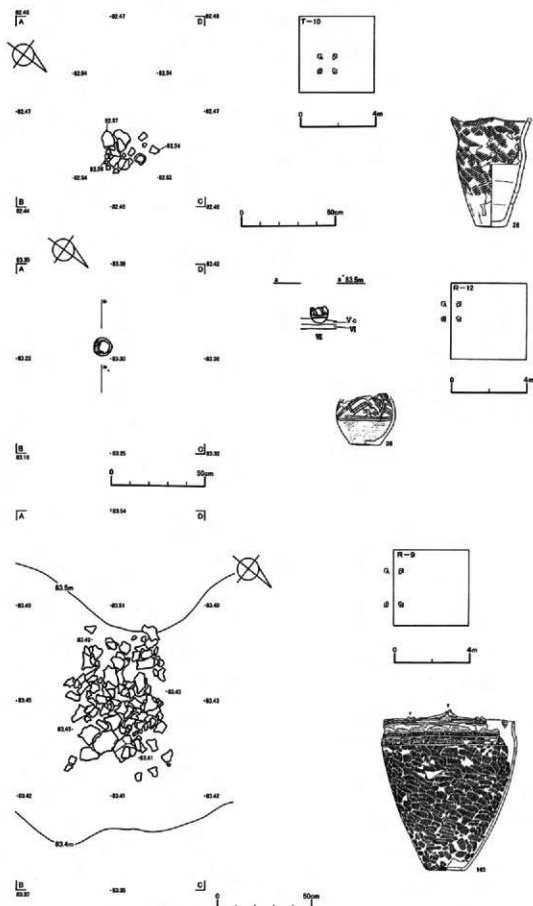


図 IV - 1 出土状況(1)

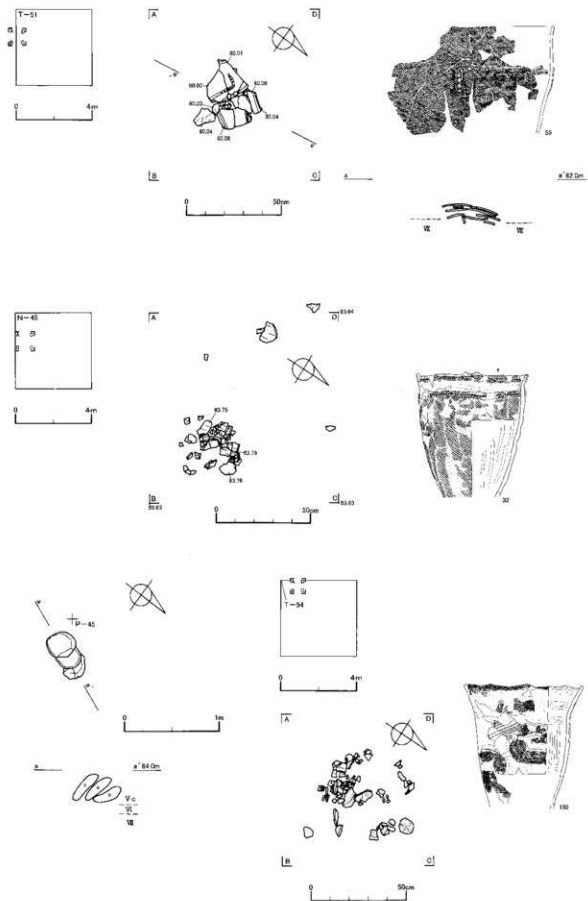
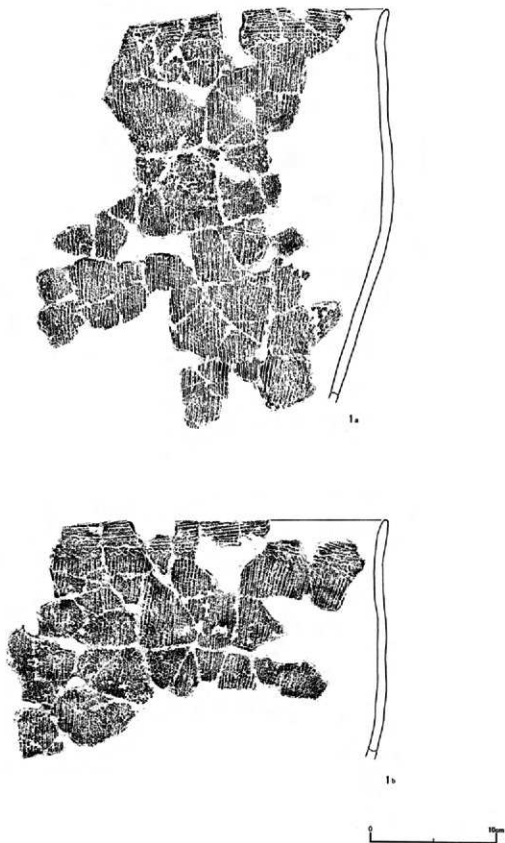
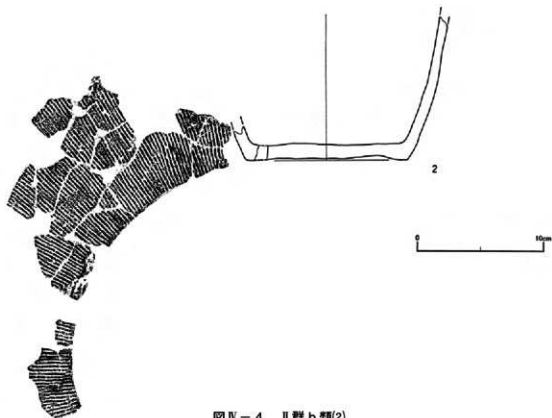


図 IV - 2 出土状況(2)



図Ⅳ-3 Ⅱ群b類(1)



図Ⅳ-4 II群b類(2)

いる。区画内を縁取るように3本組の縄線文が巡る。弁状突起には1つずつ孔が穿たれている。

19～21は口唇に燃糸圧痕が加えられたもの。

22は見晴町式相当。口唇上に縄文が施文されている。波頂部には縦に縄線文が加えられている。突起の下にレンズ状に描かれた文様があり、その下に2本の沈線文が垂下しているが、もとは波頂部から2本の沈線文を垂下させたものである。レンズ状に区画した中に沈線文を消した痕が残っている。

23～25は底部。25は短い縦の沈線文が底部を巡る。胎土に繊維を含む。

Ⅲ群b類 (図Ⅳ-10-26～30 図版26・49・55)

240点出土した。ほとんどが椀林式である。N-9区、T-10区、S-48区で比較的多く出土した。台地上(R-21・22・24・28区)でノダップⅡ式の破片が13点出土したが、これらは同一個体と考えられる。

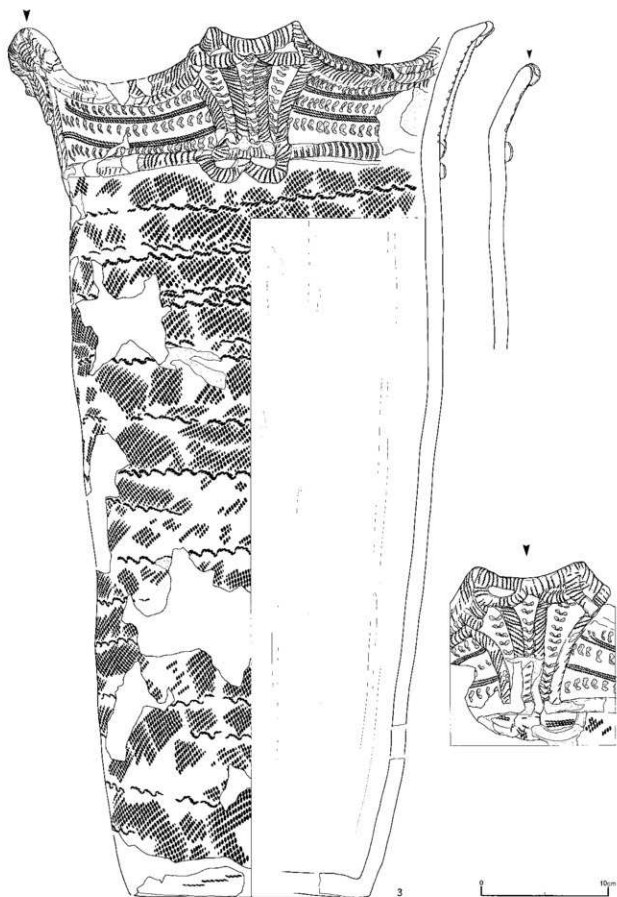
26～29は椀林式に相当するもの。26は緩やかな波状口縁。地文は横走気味に施文されたLR縄文。27は波頂部に円形刺突文が加えられたもの。28・29には口唇上に沈線文が引かれている。29は内外面とも磨き上げた後、文様を施文している。RL縄文を地文とし、弧線文が施されている。

30はノダップⅡ式。地文はRL縄文。原体の施文方向は不規則である。口縁から薄い貼付文を縦に垂下させ、そこに中空の工具による粗い押し引き文が施されている。

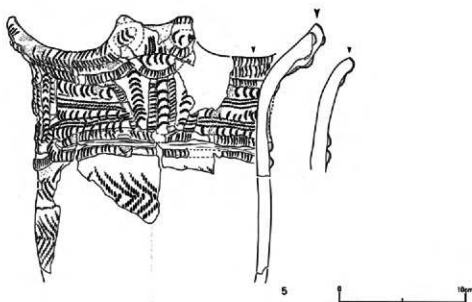
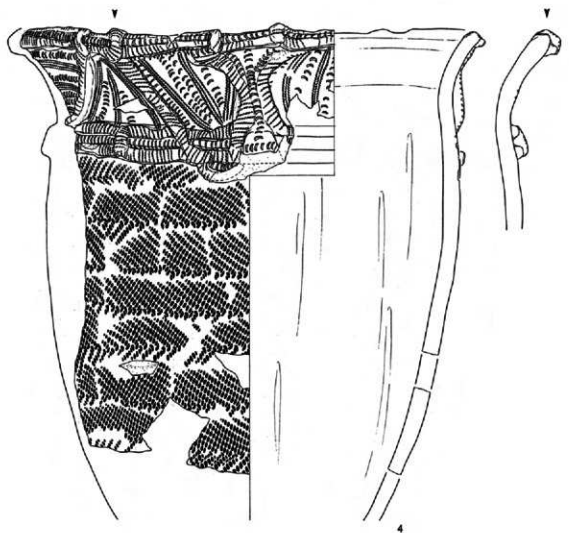
Ⅳ群a類 (図Ⅳ-10-22-31～149 図版26・49～53・56～61)

26,811点出土した。土器全体の約8割を占める。縄文のみのものや無文のものなどが相当数あった。

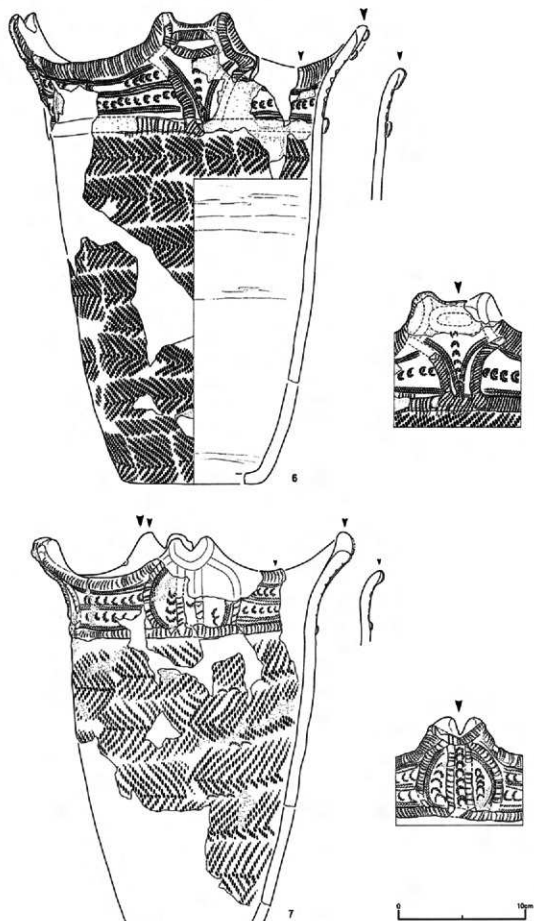
31・32・56～67は貼付文ないし折り返し口縁のもの。貼付文と折り返しを明確に区分できない資料



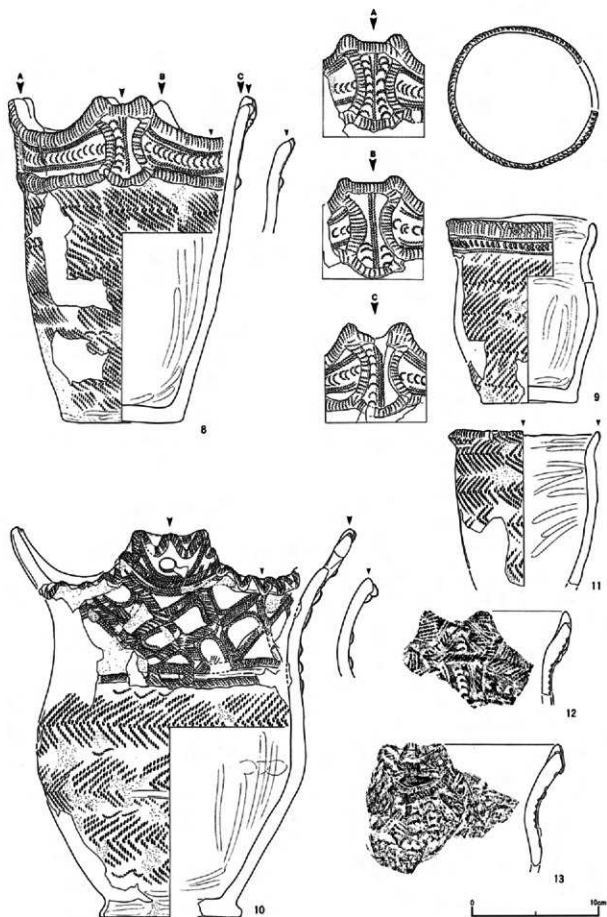
図Ⅳ-5 Ⅲ群a類(1)



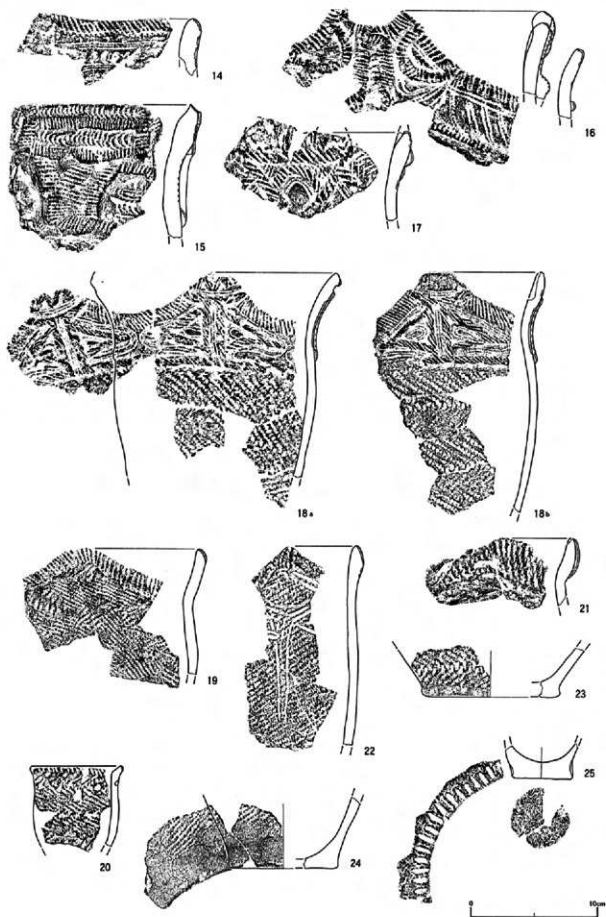
図Ⅳ-6 Ⅲ群a類(2)

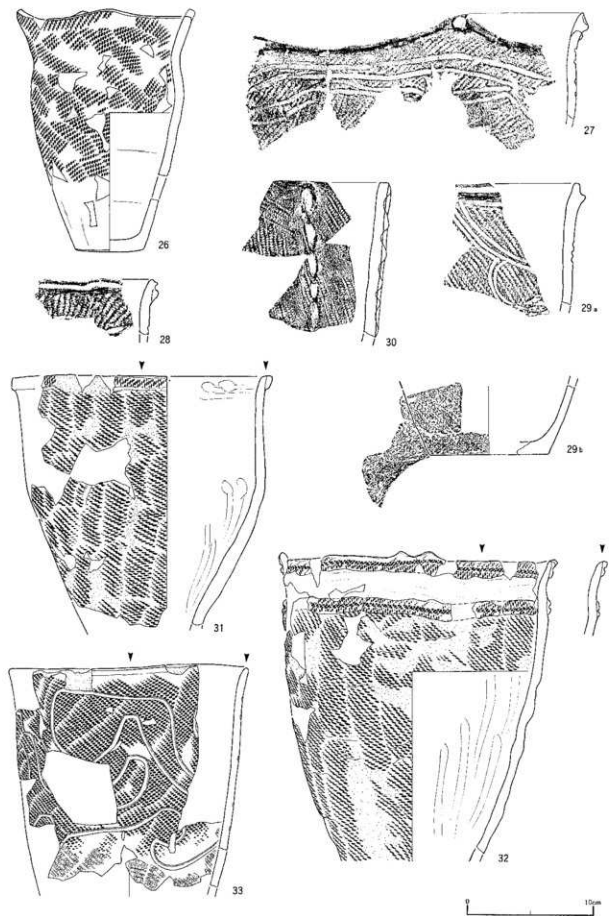


図Ⅳ-7 III群a類(3)

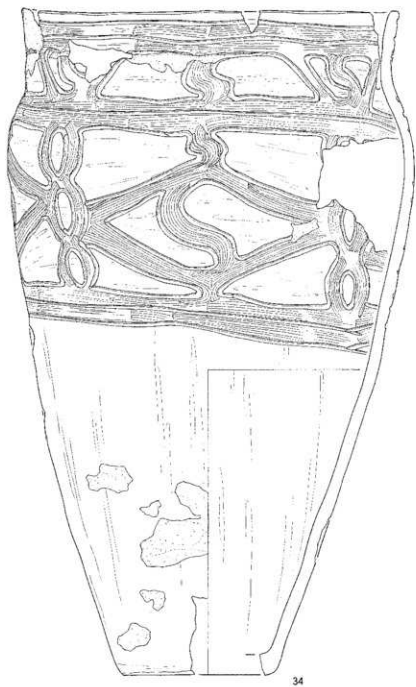


図IV-8 III群a類(4)



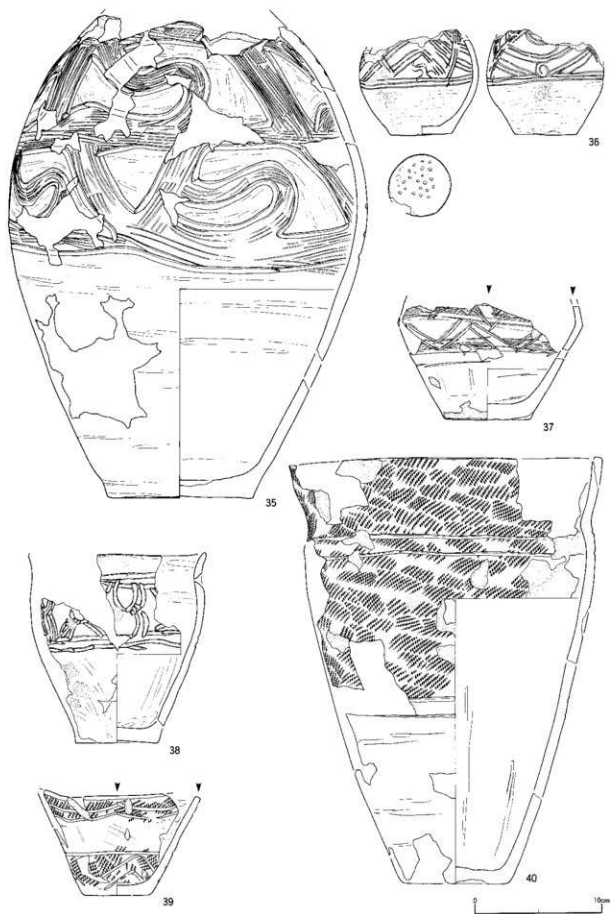


図IV-10 III群b類・IV群a類(1)

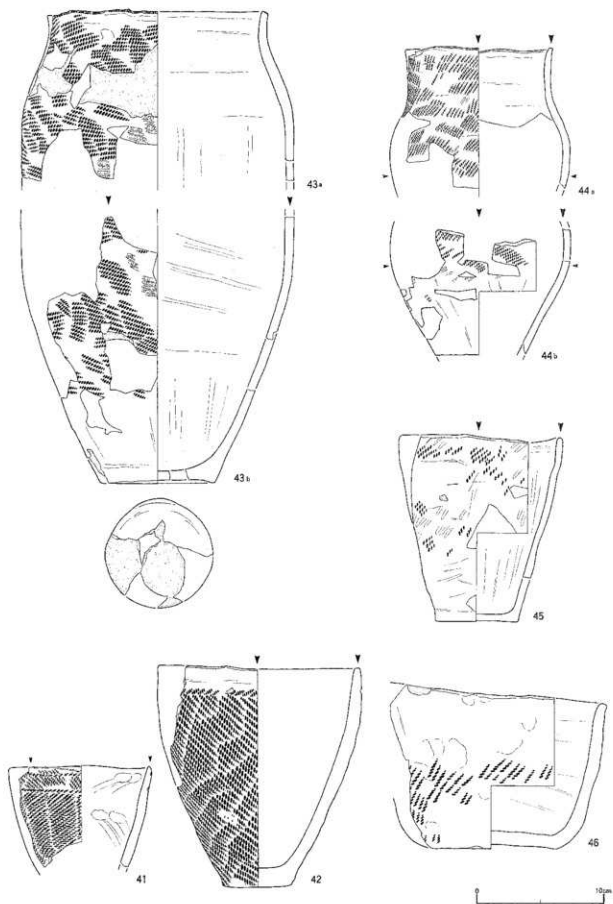


図IV-11 IV群a類(2)

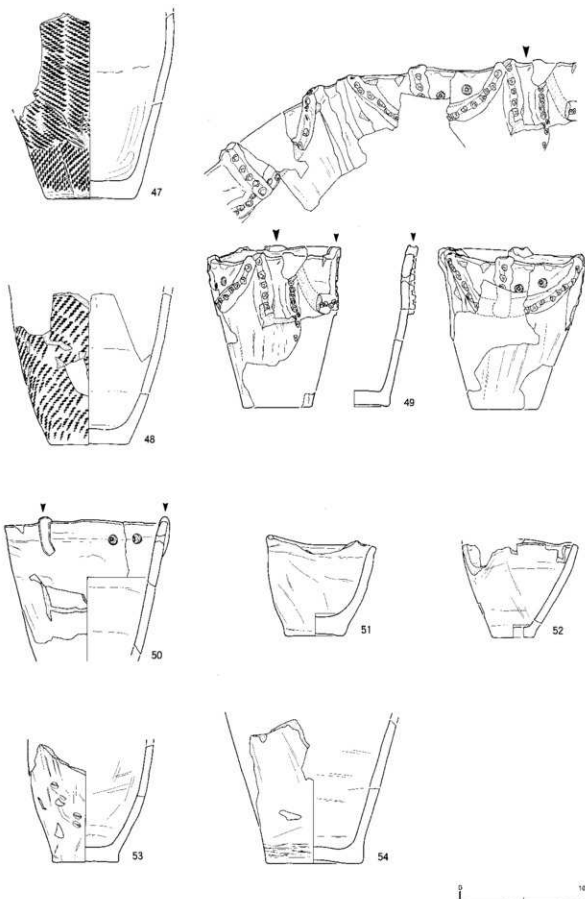




図IV-12 IV群a類(3)



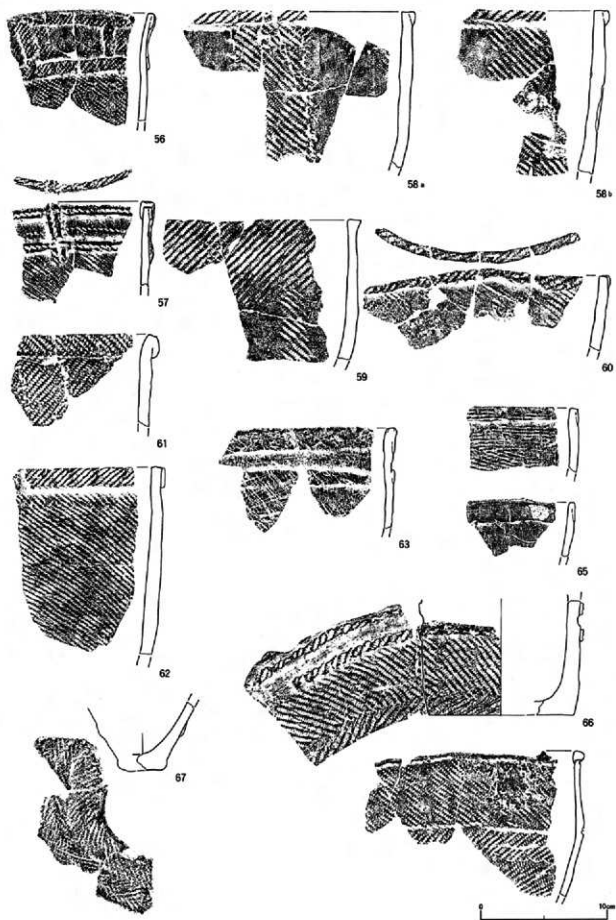
図IV-13 IV群a類(4)



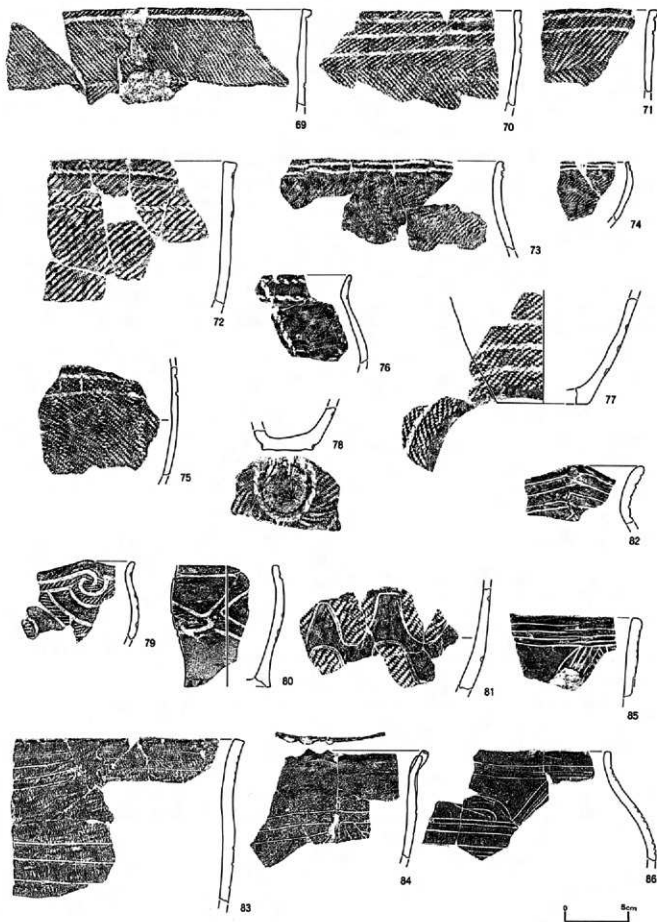
図IV-14 IV群a類(5)



圖Ⅳ-15 Ⅳ群a類(6)



図IV-16 IV群a類(7)



もあるため、まとめた。文様等の構成でこれに類すると思われるもの(59)もここに含めた。

31・58・60～62は貼付文ないし折り返し1条横環するもの。縄文原体の施文方向は貼付文では横位、胴部では縦位である。31は復元個体。55は薄い貼付文のもの。縄文は貼付部分を先に施文している。横位の貼付文が直角に曲がって縦に垂下しており、そのL字部に円形刺突文が加えられている。刺突後に縄文を施文しているため、刺突孔の潰れた部分や、中に縄文が観察できる部分もあった。拓本にはよく現れていないが、刺突は痕跡も含め11を数える。

32・56・57は貼付文が2条横環するもの。32は復元個体。貼付文上に縄線文が付され、貼付文間は無文である。56・57は2条の貼付文に縦の貼付文を組み合わせたもの。

58・59は四角く磨消した無文部を持つもの。58は無文部分との境界を原体の圧痕で強調しているところがある。59は無文部分を境に原体の施文方向を変え、羽状縄文としている。

60は粗雑な貼付文。貼付上から口唇上にかけて縄文を施文している。

61・62は口縁部の折り返しと胴部とで原体の施文方向を変えて羽状縄文にしたもの。

63～65は貼付文ないし折り返し1条が薄い。63は網目状の撚糸文が施されたもの。文様をつける際、部分的に原体の回転を往復させ、二重三重に施文している。64・65は折り返し口縁のもの。64は撚りの細いLR縄文を横位に施文している。

66・67は底部。いずれもLR原体の施文方向を変えて羽状縄文にしているが、67は整然としない。

41・42・68～78は縄線文が施されたもの。41・42は復元個体。41は縄線文を境に原体の施文方向を変えて、羽状縄文にしている。42は口縁部が無文であり、胴部にはRL縄文が施されている。

68と69は別個体であるが同一グリッド(P-46区)で出土したもので、文様が類似している。縄線文を境にLR原体の施文方向を変えて、羽状縄文にしている。68は小突起が見られ、縄線文の下から縄文を施文している。70には縄線文が3条、71には縄線文が2条施されている。こちらも原体の回転方向を変えて羽状縄文にしているが、68・69と異なり、縄線文の位置と関係なく羽状縄文にしている。73・74は口縁を狭い間隔で縄線文が巡る。73はややずばまった口縁。縄文施文後、器表面をナデ調整している。74は小型土器。撚りの細いLR縄文が地文である。75は胴部片。結束第1種斜行縄文が縦方向に施文されている。上の割れ口に縄線文の一部が観察されるため、少なくとも縄線文は3条が認められる。また、横位の縄線文の間を縦の短い縄線文が2本結んでいる。

77・78は底部片。いずれも地文はRL斜行縄文。78は底部周縁を縄線文が巡る。

33・79～93は沈線文が施されたもの。33は復元個体。沈線文による波頭文、J字文が連続的に施されている。IV群a類の中でも前半に属する可能性が高い。

79～81は磨消縄文により幾何的な文様を構成するもの。79は山形の波頂部の下に渦巻き模様を持つ。80は小型土器。LR縄文を横位に施文したのち、全面ナデ消したと見られ、ところどころに縄文の痕跡が見える。81は胴部片。磨消による波頭文が横位に展開している。地文はRL縄文。

82～86は沈線文が細いもの。84は口唇の一部が肥厚し、刺突文が加えられている。

87～93は沈線文が太いもの。87には把手の剥落した痕がある。壺形土器の可能性もある。88は無文部に爪の痕があるもの。89・90は胴部を弧線文が展開している。91～93は沈線文が斜めに施されたもの。93は菱形の格子状をなす。

43～48・94～103は縄文のみのもの。43～48は復元個体。43・44は文様や胎土、出土位置などから同一個体とみられる口縁部と底部を組み合わせて図化したもの。大きさが異なるものの、胴部が膨らみ、口縁に向けてすばまる器形が似ており、出土地点も近接している。いずれも胴部中央を欠き、上下が接合しなかったが、意図的に打ち欠いて上下を分けた可能性が高い。44は同じ高さで推定される

場所を横方向の矢印で図示した。43には粗い撚りのLR縄文が横走気味に施文されている。45・46はほとんど地文が消失している。指頭圧痕が顕著。45は口縁が一部内側に傾斜する。46は口縁が水平ではない。器壁は厚く、底部は上げ底気味。47・48は底部片。47は底部周辺がヘラ状工具で削られている。48にはRL縄文が施されている。

94～96は緩やかな山形口縁のもの。94には突起部分の口唇に棒状工具で溝が入れている。口唇上に一部、盛った粘土の継ぎ目が溝状に観察される。地文はLR縄文であるが、施文後に器面全体をナデ調整しており、ほとんど消失している。95は縄文が縦位に施文されている。96は撚りの細いLR縄文。上部は斜行であるが、胴部下になるにつれ横方向に流れている。

97～103は斜行縄文が施されたもの。98・101・102のように口縁から下がるにつれ、縄文が横位になっていくものもある。103は原体の施文方向を変えて羽状縄文にしている。

104は燃糸文が施されたもの。口縁は横方向に、胴部は縦に施文している。

49～54・105～107は無文のもの。49～54は復元個体。49・50は無文地の土器に粘土紐を貼付したものの。49には貼付文上に中空の工具による刺突が加えられている。粘土紐の貼付は粗雑で、刺突文も数や間隔に規則性が見られない。底面は正円に近いが、口縁の上面観は楕円である。50は短い縦の貼付文が観察されるもの。現存は1本であるが、2本剥落した痕跡があり、全部で3本あったと認められる。51・52は小型土器。51は河川堆積層の中から出土した完形品。口縁の一部を意図的に打ち欠いている。全体的に磨滅が顕著で、胎土中の砂粒が浮き出ているが、内外面に炭化物の付着が観察される。底は厚い。52は底径に比べ口径が大きい。53・54は底部片。53は器表面に植物質のものと見られる圧痕がある。54は上げ底気味の底部。106は波状口縁の間隔が緩やかである。

108～112は底部片。108は底面をナデ調整しているが、原体の痕が一部に観察できる。110は底面中央をナデ調整しており、やや上げ底である。111・112は無文のもの。111は底面に網代痕が残る。112は小型土器の底部。底の中央がへこんでいるが、土器の焼成後に、何らかの工具で削り込んだと見られるものである。上部は意図的に打ち欠いた可能性がある。113は小型土器。縄文が縦に加えられている。底面中央が112同様のへこみを呈している。

34～40・114～145は磨消縄文が多用され、Ⅳ群a類の中でも、後半に属する土器と考えられる。

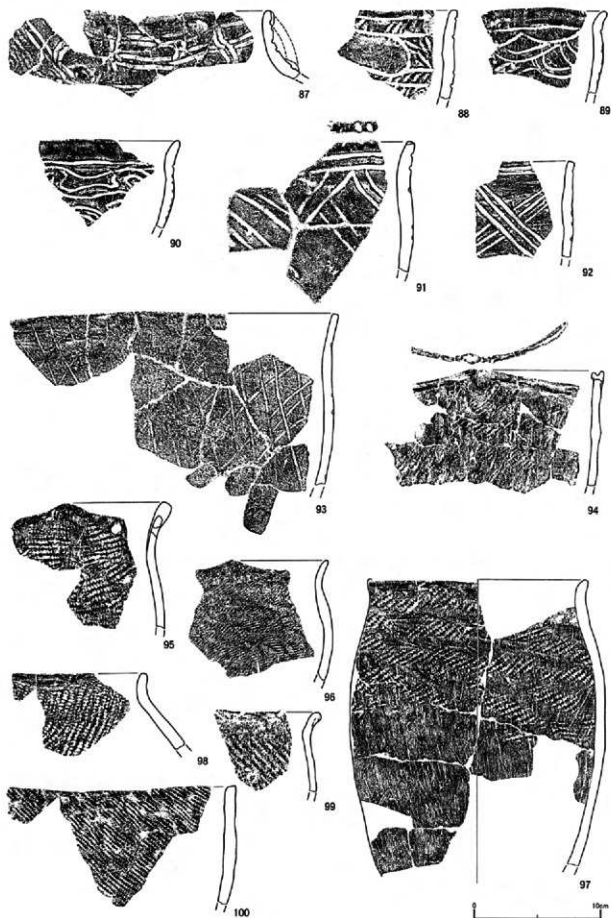
34・35・132～145は太い沈線文が施されたもの。34・35は復元個体。35は壺形土器と考えられる。口縁を一部欠くが、意図的に打ち欠いた可能性がある。

132～137は口縁の波頂部に粘土を貼付したものの。133には貼付した部分にのみ縄文が施文されている。132にもその可能性があるが、磨滅で判然としない。

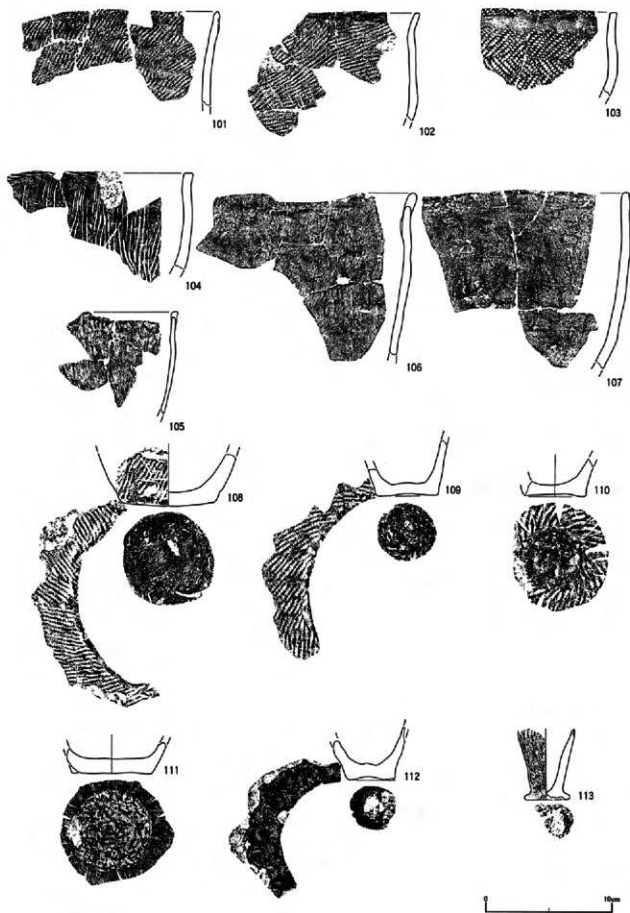
138～144は平線のもの。145は現状の貼付文が2個ついたアクセントがある。133同様に貼付部分に細い撚りの縄文が観察される。中空の工具による刺突が上下交互の2段で加えられている。

36・37は細い沈線文が施された小型の土器。いずれも胴部上半を欠いているが、意図的に打ち欠いた可能性が高い。36は3本組の細い沈線文のもの。一部、2本組の沈線文でS字を描いている。底面には浅い刺突文が20個ほど数えられる。これらの刺突文は沈線文を引いたものと同じ工具によって加えられたと考えられる。赤彩土器で、沈線文や底面の一部に赤色顔料が残っている。37は文様帯と無文部分の境に太い沈線文を巡らせている。文様帯は細い沈線文でやや乱雑に構成されている。

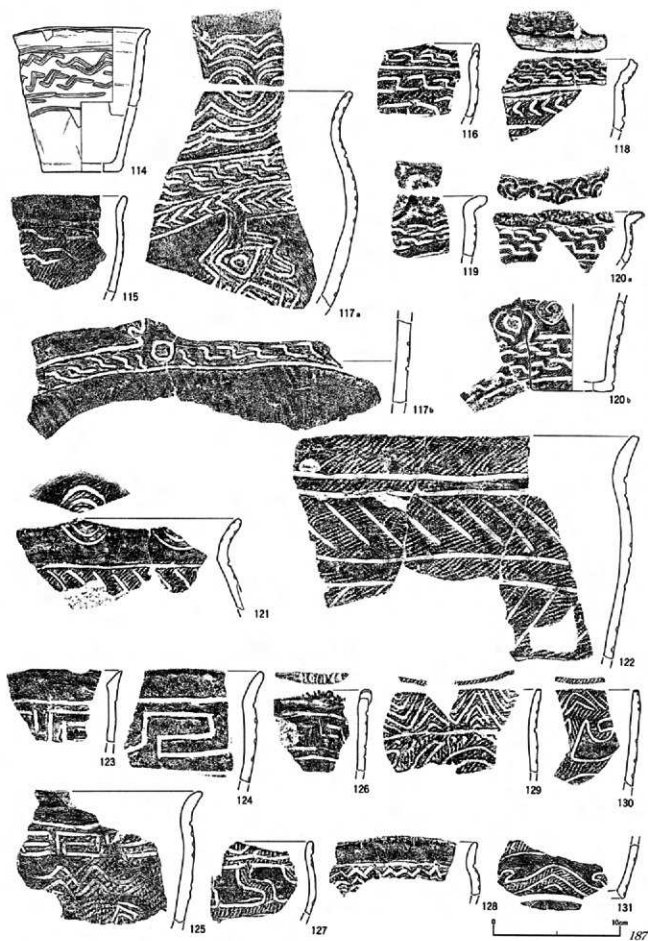
114～131は大津Ⅷ群に相当する。114～120は乙字文が施されているもの。114は復元個体。沈線文間に中空の工具による乙字文が巡る。117は口縁部の内外に連弧文が施されたもの。119・120は口縁部に粘土紐が貼付されている。120の貼付文は浮き彫り風で唐草状を呈している。貼付文部分と文様帯に縄文を施文しており、胴部下半にはカニのハサミ状文が施されている。123～127はクランク状の



図IV-18 IV群a類(9)



図IV-19 IV群a類(10)



図IV-20 IV群a類(1)

文様が施されたもの。123はナデ調整によってほとんど消失しているが、細かい縄文を施した痕跡が全体的に観察される。126・127は波状口縁のもの。126は波頂部の口唇にヘラ状工具で刻み加えられている。127は磨消部分がクランク状を呈する。128～130は鋸歯状沈線文が施されたもの。129・130は口唇上に縄文が施文されている。

146は小型土器。細い沈線文で渦文を描き、沈線文間を刺突文で充填したもの。縄文時代後期前葉は土製品に刺突文を加えるものが多いことから、鐸形土製品の可能性も考えられる。仮に鐸形土製品とすると、推定径は6.5cm程度でかなり開いた形が予想される。

147～149は底部。147は太い沈線文による紡錘形の文様が、放射状に5カ所数えられる。148・149は刺突文が認められるもの。148は孔が2カ所斜めに穿たれている。紐を通すと考えた場合、蓋の可能性もあるが、他に破片が出土しなかったため、ここでは底部の扱いとした。

Ⅳ群b類 (図Ⅳ-23-150～162 図版53・62)

1,027点出土した。主体は手稲式に相当するものである。他にウサクマイC式、鯨淵式相当のものが出土した。北西側のT-54区で219点がまとまって出土したが、そのうち213点は同一個体(150)でウサクマイC式相当の土器である。南東側ではR～T-9・10区に比較的多く出土しているが、2個体が復元しており(153・154)、こちらはいずれも手稲式相当の土器である。

150～152はウサクマイC式相当のもの。口唇上にも縄文を施文している。150・151は口縁部に細い平行沈線文が巡り、弧線によって文様帯が構成されている。150は復元個体。

153～157は手稲式相当。太い平行沈線文を施し、短い沈線文やS字状の蛇行沈線文が縦位に施されている。いずれも口唇上は無文である。153・154は復元個体。153は緩やかな波状口縁。波頂部と波頂部のほぼ中間に、縦の蛇行沈線文がある。155は口唇内側がやや肥厚する。156は口縁に向けてすぼまる器形。158は小型で薄い。口唇断面が丸みを帯びる。

159は鯨淵式。口縁に沈線文が2条巡り、縦に刻み列が施されている。胴部は沈線文で区画した中に燃りの方向が異なる原体を2本用いて羽状縄文を施文している。

160・161は表面が黒光りする精製土器。いずれも注口土器と考えられるもので、調査区北西端で出土した。162は注口部分である。付け根付近の下部に細い沈線文が引かれている。

Ⅴ群c類 (図Ⅳ-24・25-163～174 図版26・53・54・62)

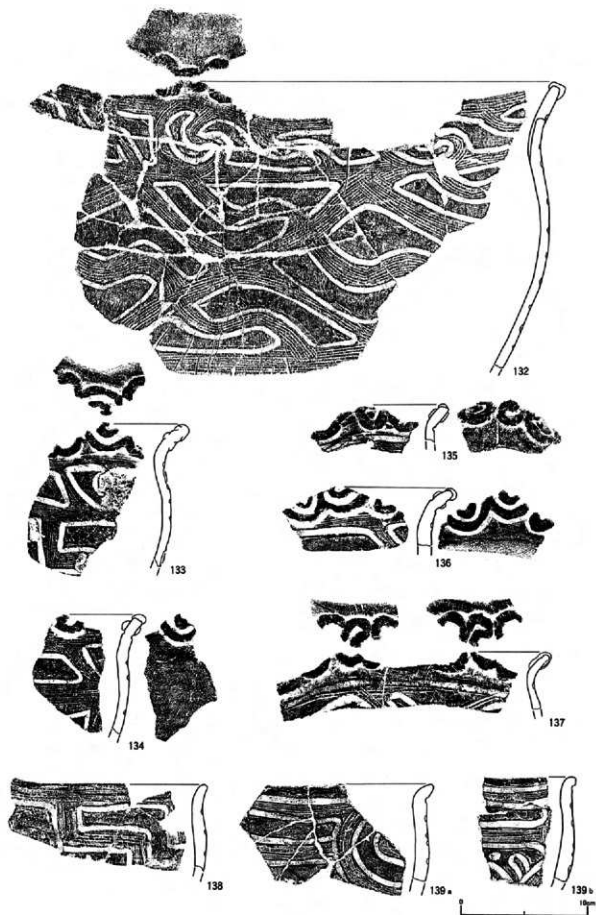
333点出土した。すべて聖山Ⅱ式に相当するものと考えられる。330点は南西側の地区での出土である。上台1遺跡の南西端は森川支流1を境に森川2遺跡と隣接しているが、森川2遺跡においても同時期の土器が出土している。

163は深鉢。1個体がまとまった状態で出土した、ほぼ完形の個体土器である。頸部の無文帯を挟んで、沈線文が上下に巡る。頸部の下には横方向に刺突文が加えられている。地文はLR縄文。

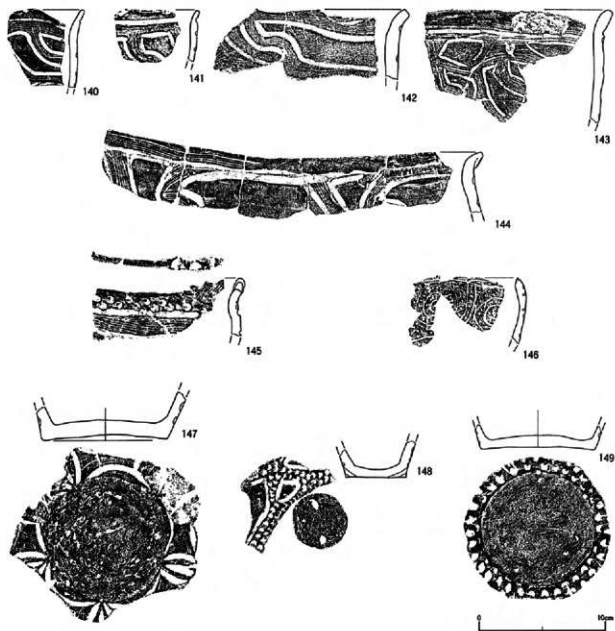
164・165は鉢。いずれもLR縄文を地文とし、縄文施文後に器面を磨いている。164は蝶ネジ状の突起を持つ。165は2個対の小突起が付されている。

166～168は工字文が巡るもの。166は蝶ネジ状の突起がついている。167は頸部が屈曲し、内面も肩になって張り出す。170は突起片。内面は縄線文を4本弧状に付し、中空の工具で浅い刺突を5カ所加えている。表面は深めの沈線文で円を描いている。

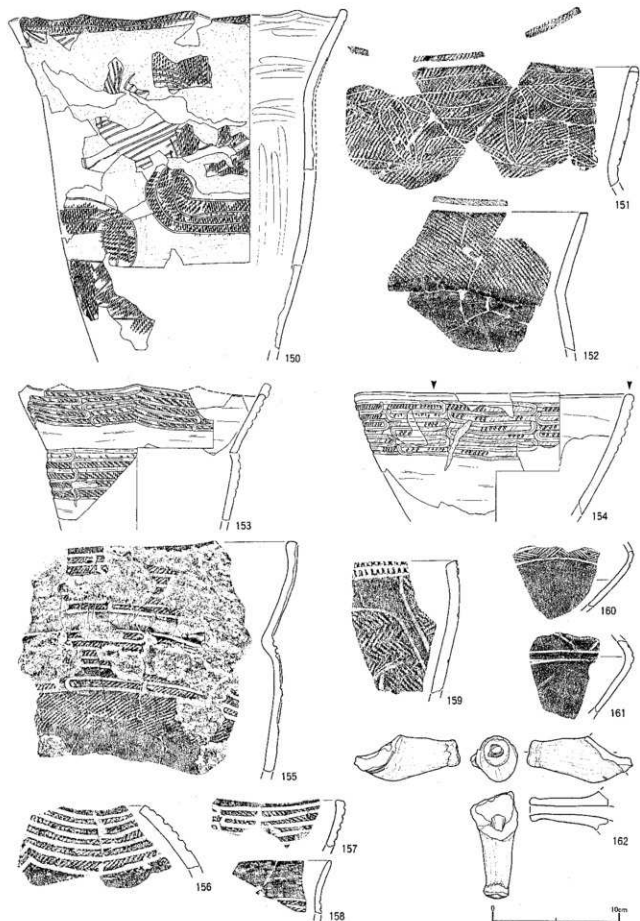
171～174は底部片。174は浅鉢の底面。一部で縁辺を擦って整形したところも見られ、意図的に底面を打ち欠いた可能性がある。



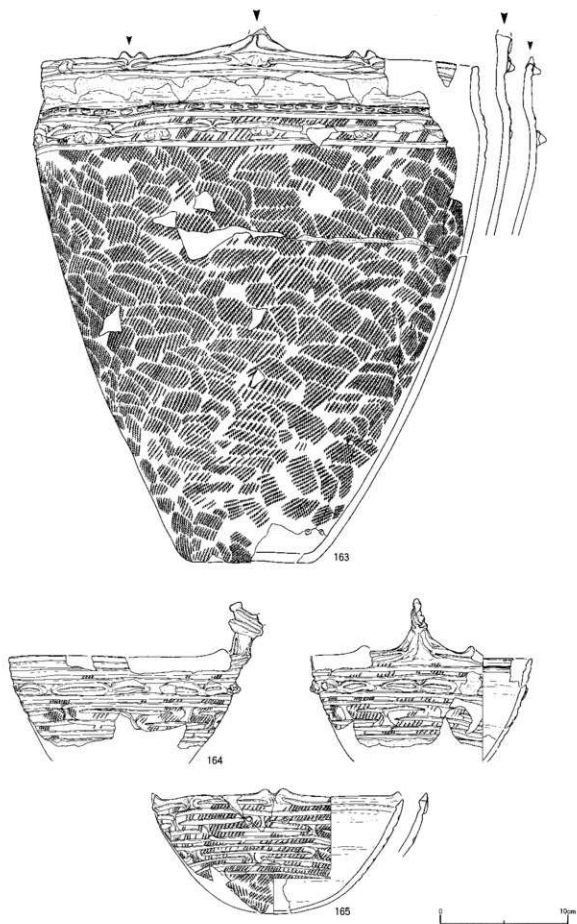
図IV-21 IV群a類(12)

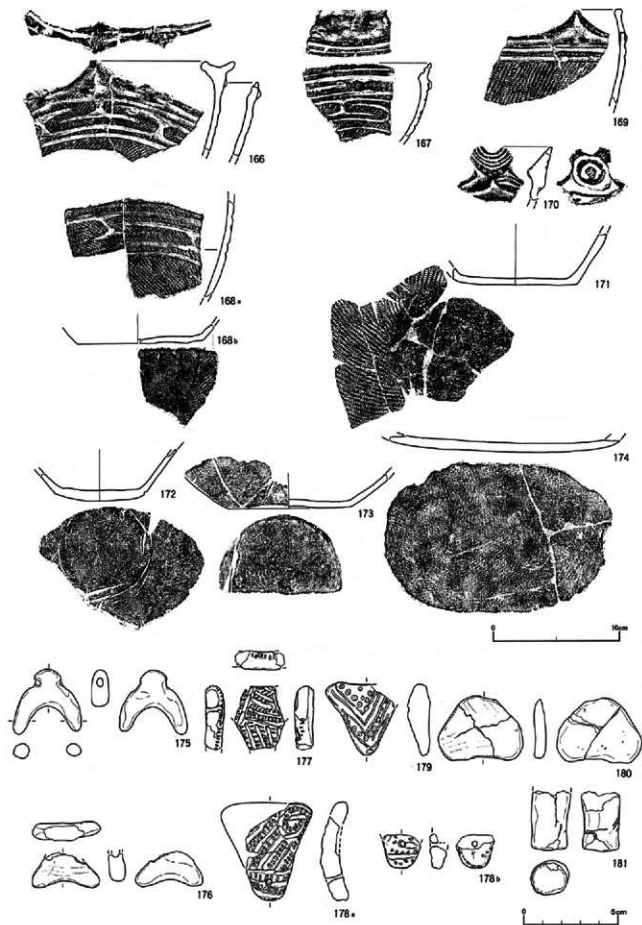


図IV-22 IV群a類(13)

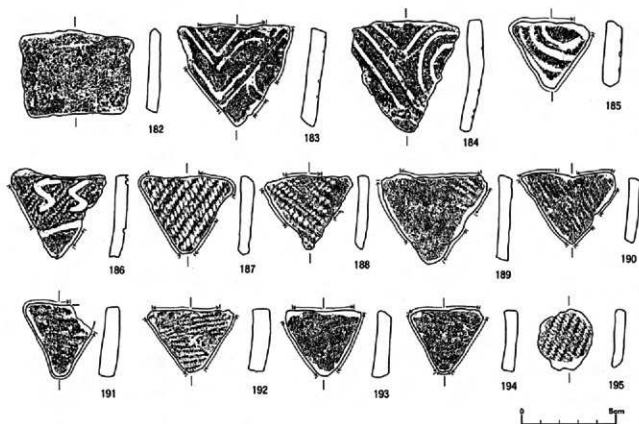


図IV-23 IV群b類





図IV-25 V群c類(2)・土製品(1)



図Ⅳ-26 土製品(2)

土製品 (図Ⅳ-25・26-175~195 図版69)

土玉2点、三角状土製品8点、三角板状土製品19点、円板状土製品8点、その他の土製品2点、計39点が出土した。いずれも縄文時代後期前葉の可能性が高い。このうち22点を掲載した。

175・176は土製玉。175は完形品。176は割れ口に貫通した孔の断面が観察される。177~180は三角状土製品。粘土成形の段階で三角形に造形したと見られるもの。177~179は沈線文と刺突文によって文様が構成されている。177・178はヘラ状の工具による刺突文。177は3カ所に割れ口を持つが、意図的に折損した可能性がある。179は縦位の3つの刺突文とV字を構成している他の刺突文とで、種類が異なる。一端を鋭利に加工した工具で沈線文と縦位の刺突文、もう一端で他を刺突したものであろう。180は粘土の余りを三角状にして焼いたもの。焼成粘土塊の可能性もある。

181と182はその他の土製品とした2点。181は円筒状。一端を欠く。耳栓の可能性も考えられるが、粘土を円筒状に握って焼いた焼成粘土塊の可能性もある。182は方形板状土製品。

183~194は三角板状土製品。土器片の縁辺を全周ないし一部研磨成形して、三角形にしたと見られる。195は円板状土製品。

(影浦)

2 石器等

包含層からは石鏃142点、石槍またはナイフ10点、石錐12点、つまみ付きナイフ15点、スクレイパー138点、石核61点、原石19点、Uフレイク51点、Rフレイク15点、フレイク2,222点、石斧43点、たつき石145点、すり石12点、扁平打製石器57点、北海道式石冠44点、砥石6点、台石・石皿176点、加工痕のある礫35点、礫・礫片1,692点、石製品4点、計4,899点が出土した。

石鏃 (図N-27-1~44 図版63)

1~8は三角形凹基のもの。5はメノウ質頁岩で、他は頁岩を素材とする。1は逆刺しの先端が突き出し、2は逆刺しがU字状に大きくえぐれている。3・5の逆刺しはやや内側に入っている。6~8は長さ比べ幅が狭い。9~17は頁岩を素材とした木葉形や菱形のもの。10・11・14・17は厚みがある。14は稜線を持つ縦長剥片を素材とし、背面の調整で形を整えている。18~21は頁岩を素材とした有茎凹基。19は茎の付け根両面に黒色物質が付着している。22~33は有茎平基。25・31はメノウ質頁岩、他は頁岩を素材とする。25・27は厚みがあり長さに比べ幅が広いことから破損した石鏃を再生したものと思われる。22・23・30は茎にアスファルトと見られる黒色物質が付着している。34~44は有茎凸基。35・42は黒曜石、38はメノウ質頁岩、他は頁岩を素材とする。41は茎の付け根に薄く黒色物質が付着している。アスファルトの付着痕であろう。

石槍またはナイフ (図N-28-45~50 図版63)

45~50は石槍またはナイフ。48は黒曜石で、50は流紋岩。他は頁岩を素材とする。47/2点が接合したもので上部の側縁に厚みが残ることと下部の調整が上方に入っていることから下部部を刃部にしていた可能性もある。また、破損面に再加工が施されている。49・50は基部破片。

石錐 (図N-28-51~57 図版64)

すべて頁岩を素材とする。51~54は素材の一部に刺突部を作り出したもの。54は上下2カ所に刺突部が作り出されている。他は不定形な剥片の一部に刺突部を作り出している。55・56は棒状のもの。両端に刺突部がある。57は棒状のものにつまみ部を有する。縄文時代晩期の所産と考えられる。

つまみ付きナイフ (図N-28-29-58~64 図版64)

すべて頁岩を素材とする。58~61は周縁加工のもの。58は片面をほぼ全面加工のうえ背面の下部部に厚みを減じる調整がみられる。60・61は縦長剥片に刃部がみられる。62・63は素材の形状を大きく変えていない。64は両面に刃部加工を施し、上部の側縁をえぐってつまみ部を作出している。

スクレイパー (図N-29・30-65~78 図版64・65)

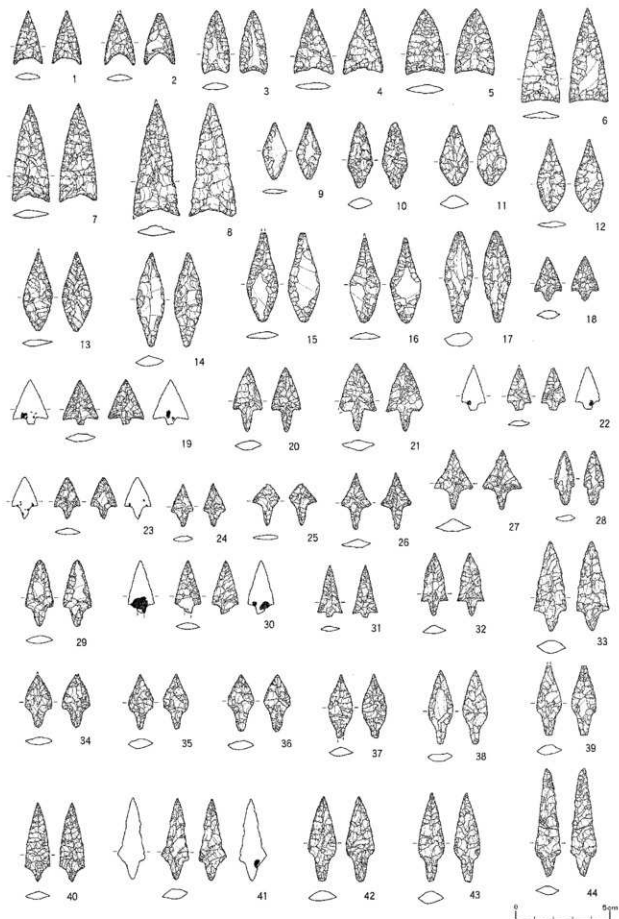
すべて頁岩を素材とする。65は石筈と称される形態をなすが横長剥片を素材とし、背面に調整を行い整形している。66~76は縦長剥片を素材としたもの。66~69は下部部と側縁に刃部を、70~76は側縁にのみ刃部をもつ。75は側縁にえぐりこみがある。内湾部は刃部が急角度。つまみ付きナイフに類似するが、つまみ部を作出していない。77は横長剥片の側縁に刃部をもつもので、背面に被熱による剥落がみられる。78は両面調整がなされている。

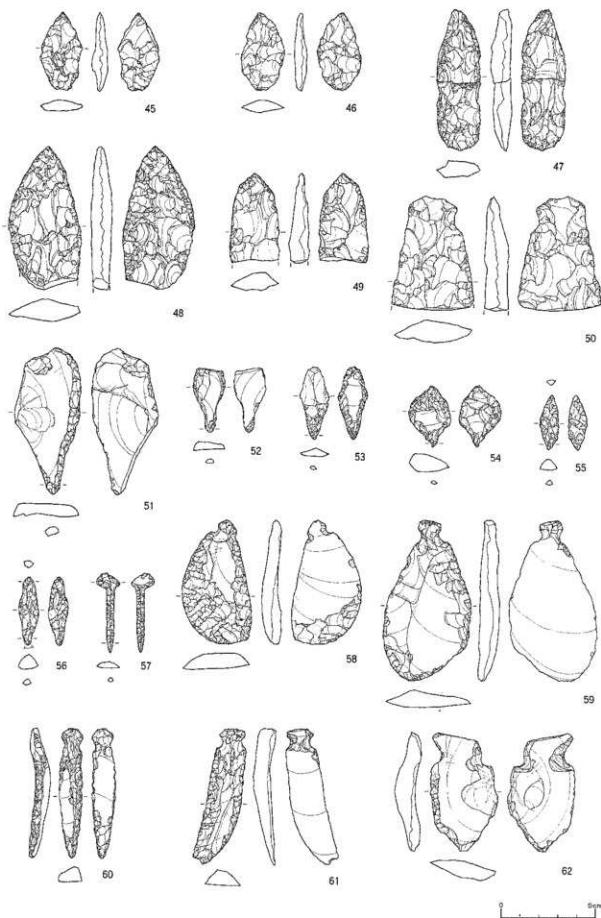
石核 (図N-30-79 図版65)

79は黒曜石の石核だが、大きさや原石面の残っていることから大きな剥片は取られていない。打面転移が頻繁になされている。

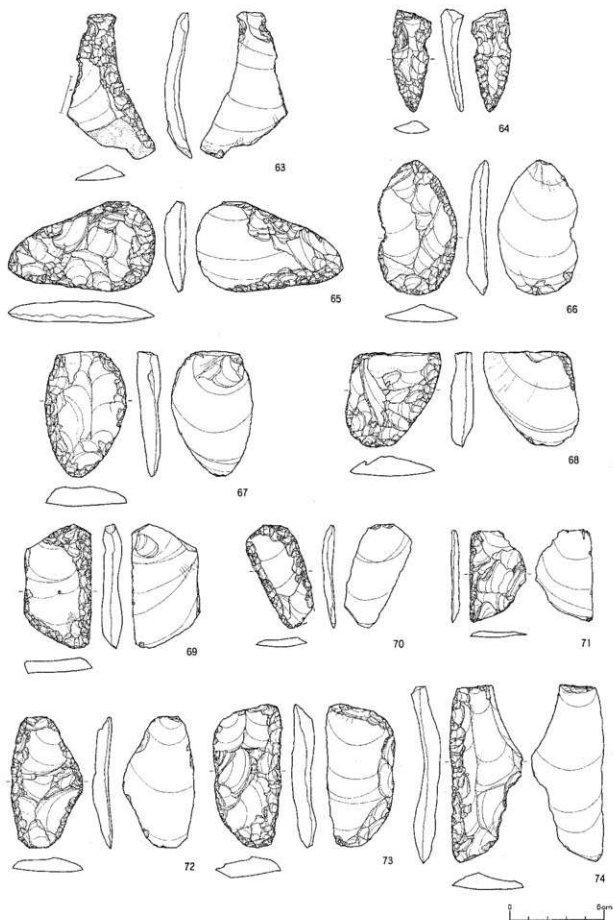
石斧 (図N-30・31-80~90 図版65)

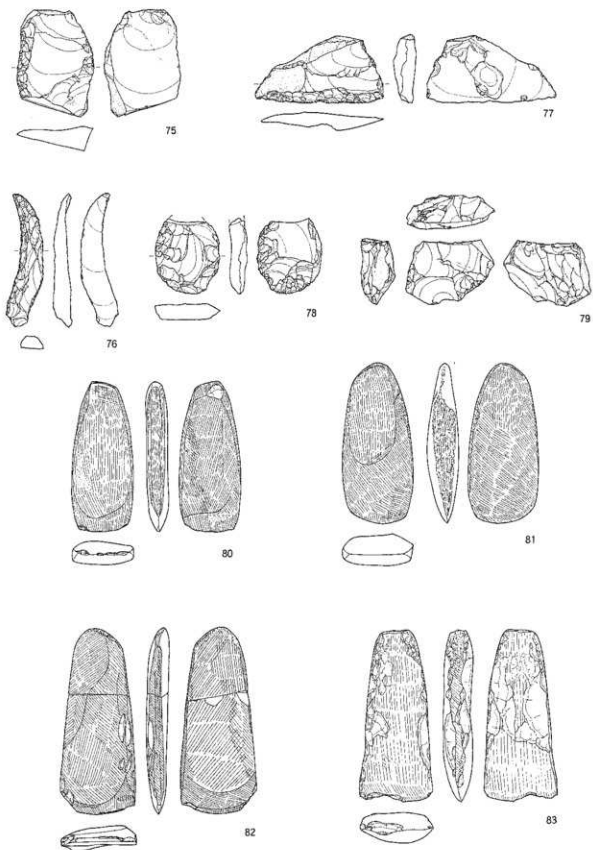
80~82・84・87・89は緑色泥岩、83・86・88・90は片岩、85は砂岩を素材とした石斧である。80は側面に敲打痕が残り、たたくで整形された後、研磨されているもの。82は打ち欠きにより整形された





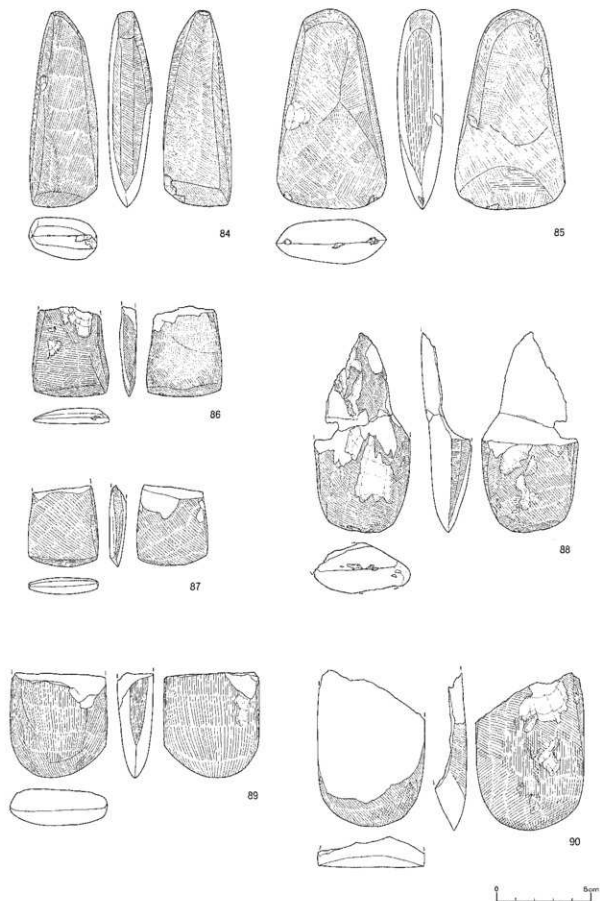
図IV-28 包含層の石器等(2)



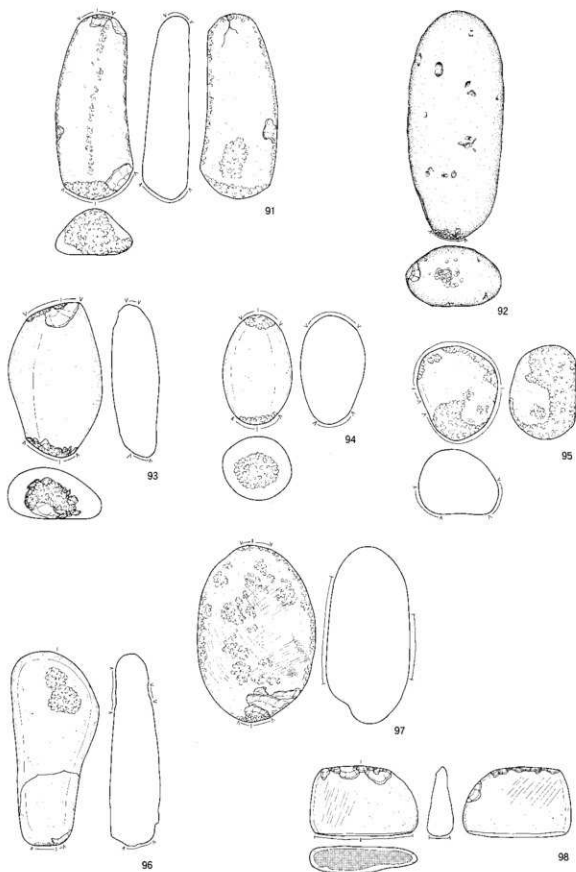


図IV-30 包含層の石器等(4)

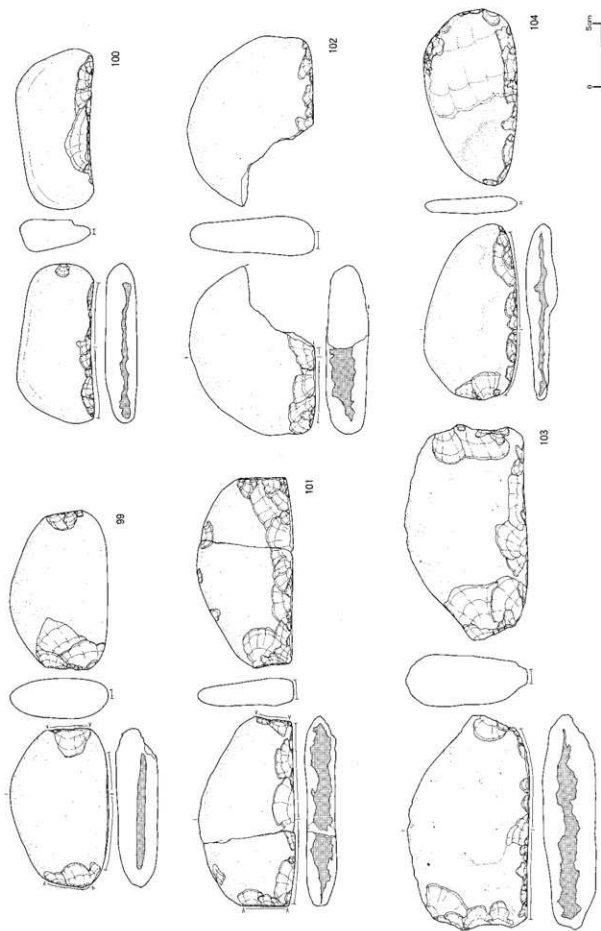
0 5cm



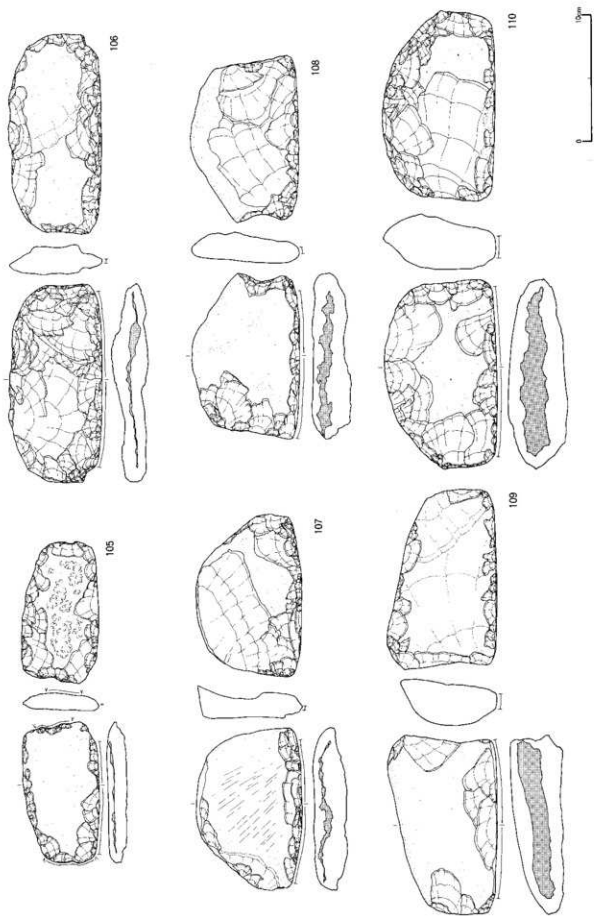
図Ⅳ-31 包含層の石器等(5)



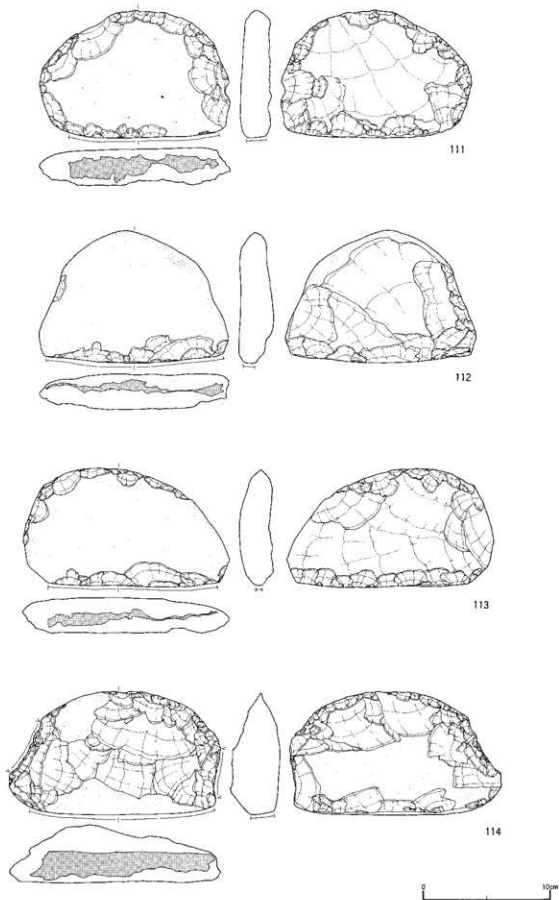
図IV-32 包含層の石器等(6)



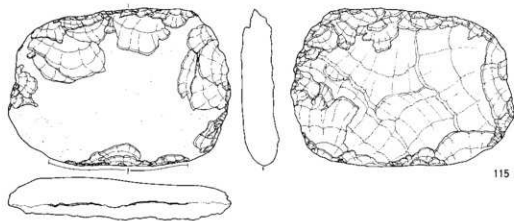
図Ⅳ-33 包含層の石器等(7)



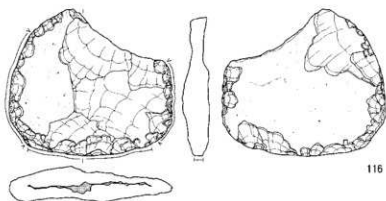
図Ⅳ-34 包含層の石器等(8)



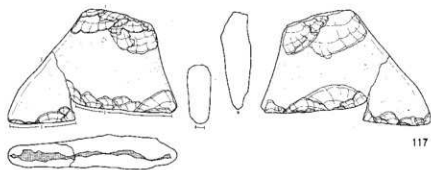
図Ⅳ-35 包含層の石器等(9)



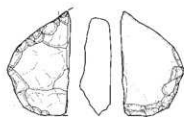
115



116



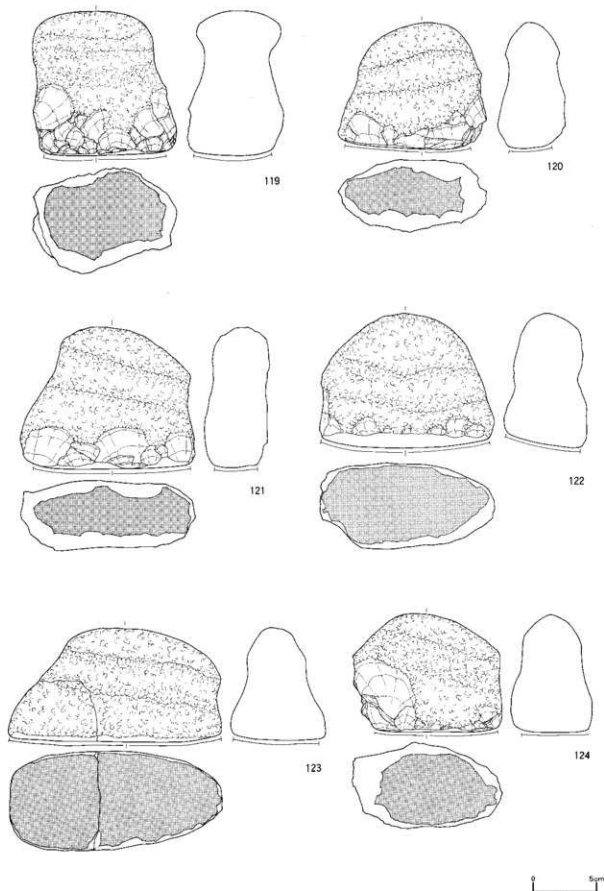
117



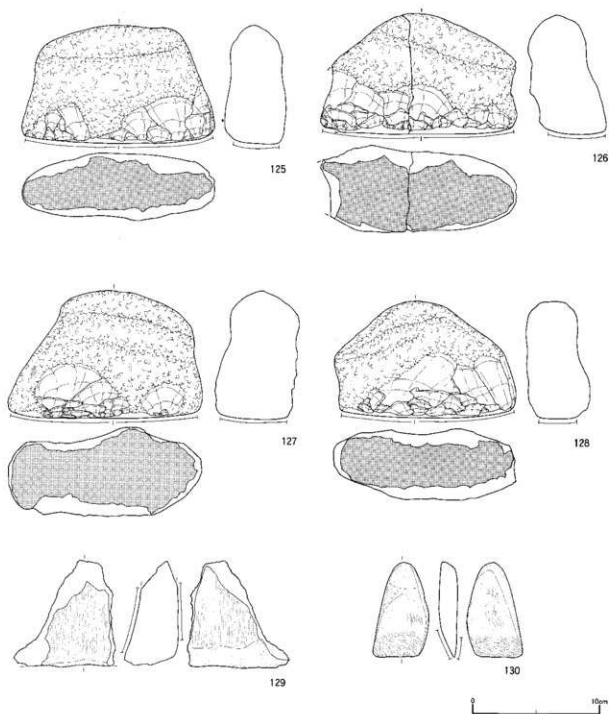
118



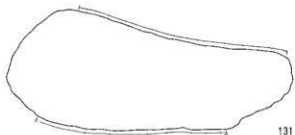
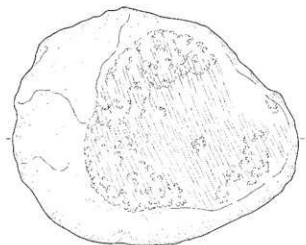
図IV-36 包含層の石器等(10)



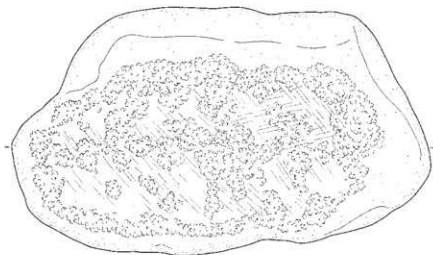
図Ⅳ-37 包含層の石器等(1)



図IV-38 包含層の石器等(12)



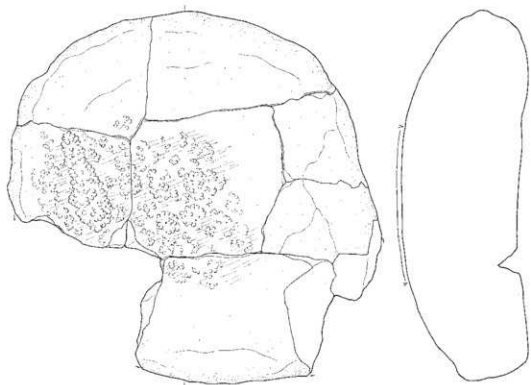
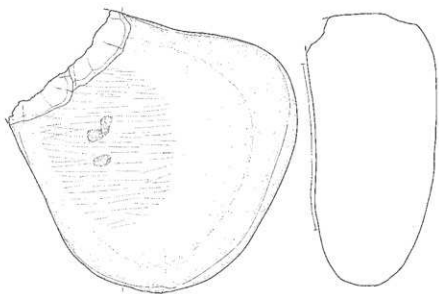
131



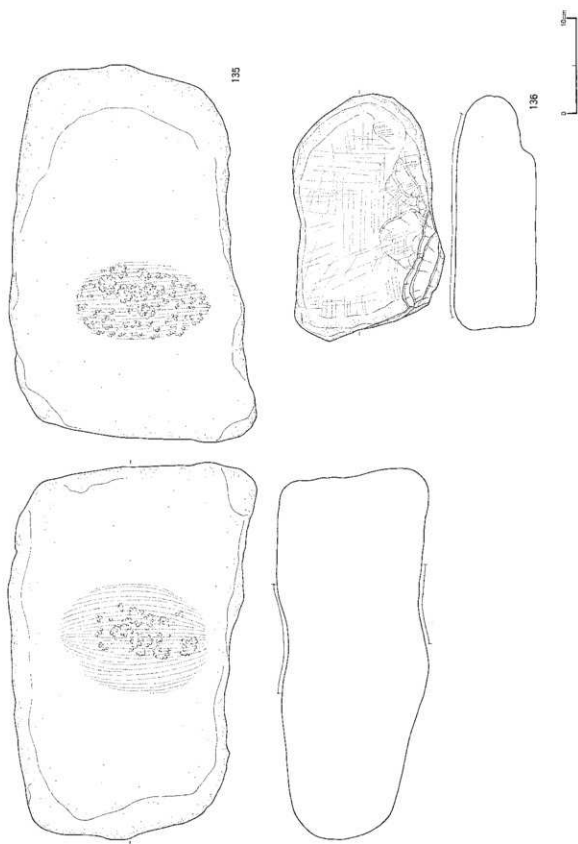
132



図Ⅳ-39 包含層の石器等(13)



図IV-40 包含層の石器等(4)



図Ⅳ-41 包舎籠の石器等(19)

後、研磨されている。刃先に潰れがみられ刃部が細かく粒状に割れている。82～86・88～90は打ち欠きにより整形された後、研磨されている。82は上部3分の1のところでは折れたものが接合している。83は刃先が大きくかけている。86～90は刃部が残存する。86は薄い礫を素材とするため主に片面を研磨している。87は全面磨製である。88は接合している。90は先の丸い片刃の刃部が残存している。

たたき石 (図Ⅳ-32-91～96 図版66)

すべて安山岩を素材とする。91・92は棒状礫を素材としたもの。91は両端に、92は下端に使用痕がみられる。93は扁平礫を素材としたもの。両端に使用痕がみられる。94・95は円礫を素材としたもの。94は上下両端に、95は帯状に使用痕がみられる。96は両面にくぼみ状の使用痕がみられるほか、下端部にも使用痕がみられる。下部は破損したものが接合している。

すり石 (図Ⅳ-32-38-97～128 図版66・67)

すべて安山岩を素材とする。97は円礫の両面に使用痕がみられる。98～118は扁平打製石器。98は打ち欠きが上部に見られる。被熱した扁平礫を素材とし、下側縁を使用している。99は左右両端に打ち欠きの見られるもの。100・101は下側縁に打ち欠きを加えられている。100は2点が接合。101は一端を欠損している。102～104は打ち欠きが両端および下側縁に及ぶもの。105～116は打ち欠きが全周するもの。厚さを減じるために面全体を大きく打ち剥がしているのが特徴的である。117は2点が接合したもの。図の左側の幅がやや広く、破損後に右側はすり面の狭いものに再加工されている。118は扁平打製石器の破片。

119～128は北海道式石冠。119は上部の横の張り出しが著しい。120～124は敲打で握部を帯状に作出したもの。122はすり面が斜めに損耗している。123はすり幅が広い。124は一端を欠く。125～127は握部の敲打が下側縁まで及ぶ。126・127はすり幅が広い。128は素材の形状を生かしたもの。

砥石 (図Ⅳ-38-129・130 図版67)

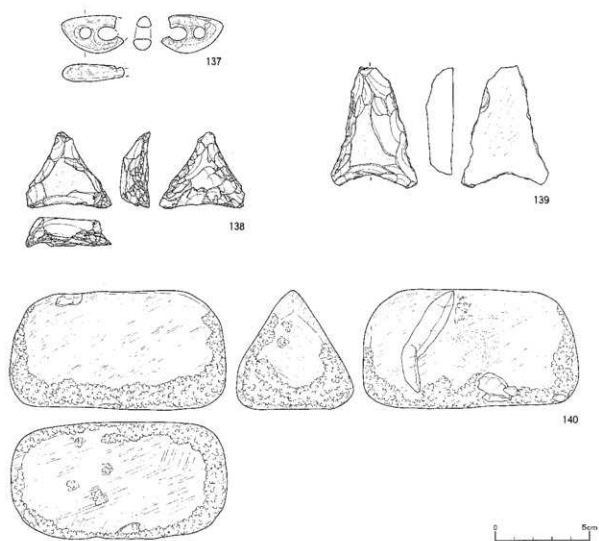
129は砂岩を素材とした両面にすり痕の残る砥石破片。130は泥岩を素材とした砥石で下部は石斧刃部の形態をなし擦痕がみられる。

台石・石皿 (図Ⅳ-39-41-131～136 図版68)

すべて安山岩を素材とする。131～133は台石。131は両面に使用痕がみられる。133は9点が接合した。134～136は石皿。135は両面に使用痕がある。

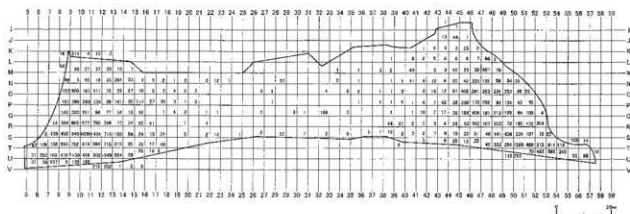
石製品 (図Ⅳ-42-137～140 図版69)

137は滑石を素材とした磨製の玉で2カ所に穴が開けられている。2点が接合している。138・139は頁岩を素材とした三脚状石製品で剥離による周縁加工が加えられている。140は安山岩を素材とした三角柱状石製品。打ち欠きで大まかに形を整えたのち全面を敲打整形し、最後に研磨で平滑に仕上げたものと考えられる。縁辺に敲打や打ち欠きの後が残っているが、一側縁だけ入念に研磨が施され、稜線が鋭くなっている。(谷島)

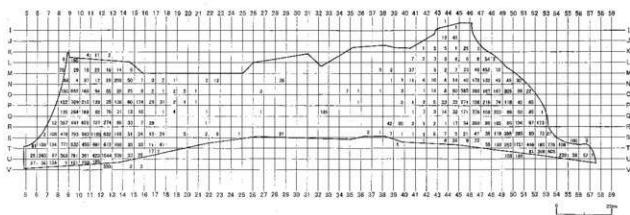


図IV-42 包含層の石器等(16)

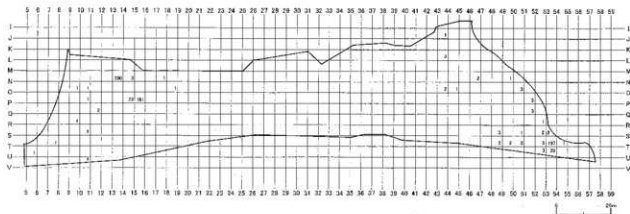
遺物総点数 38,723点



土器・土製品総数 33,791点



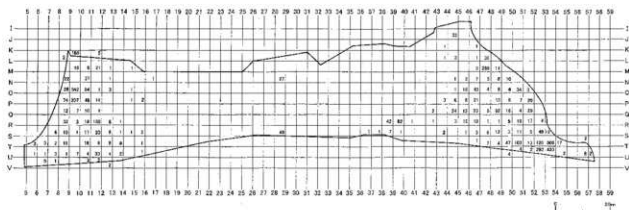
Ⅱ群b類 725点



図Ⅳ-43 包含層の遺物出土分布図(1)

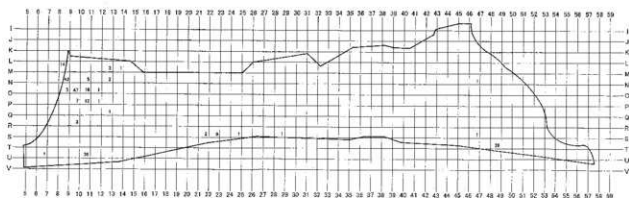
III群a類

4,549点



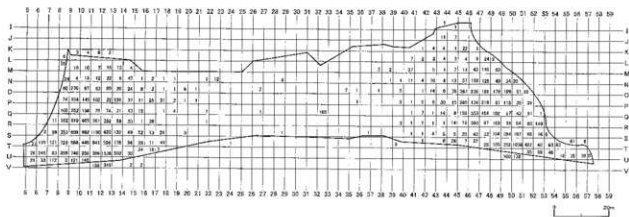
III群b類

240点



IV群a類

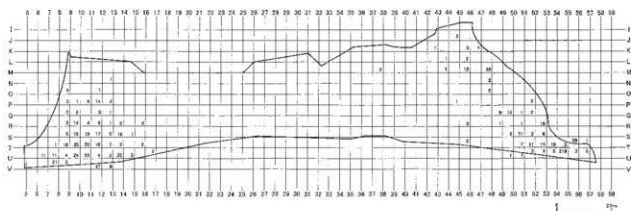
26,875点



図IV-44 包含層の遺物出土分布図(2)

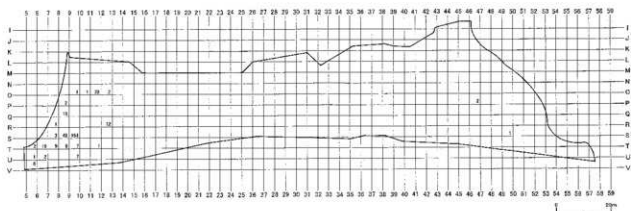
IV群b類

1,027点



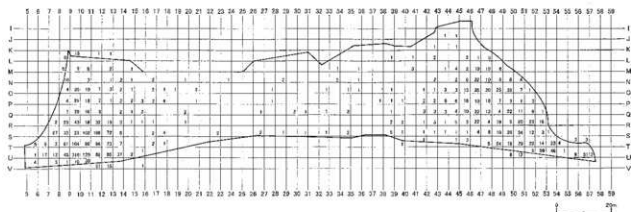
V群c類

333点



石器・石製品総数

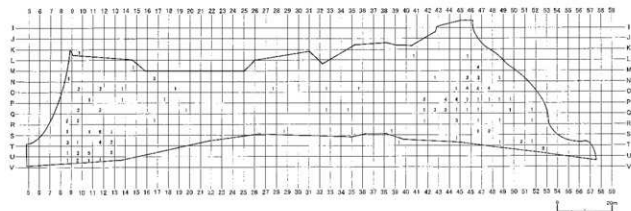
3,220点



図IV-45 包含層の遺物出土分布図(3)

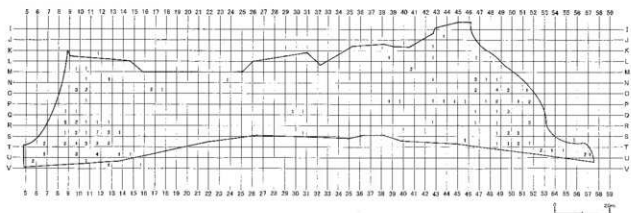
石鏃

142点



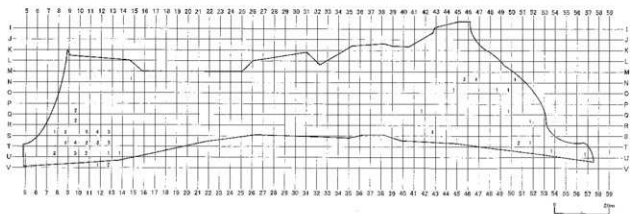
スクレイパー

138点



石核

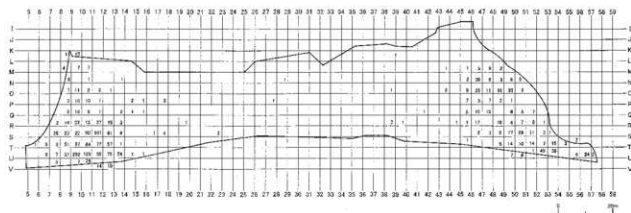
61点



図Ⅳ-46 包含層の遺物出土分布図(4)

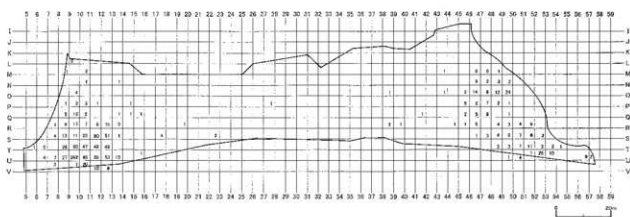
フレイク総数

2,229点



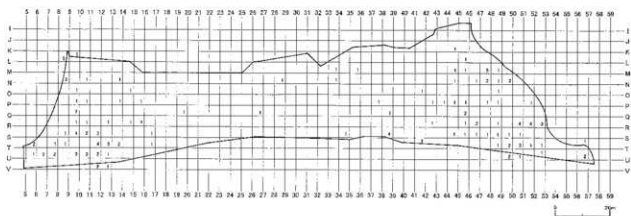
頁岩フレイク

1,338点



たたき石

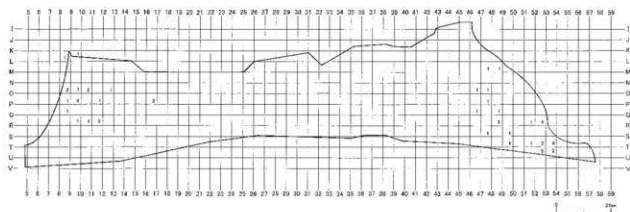
146点



図Ⅳ-47 包含層の遺物出土分布図(5)

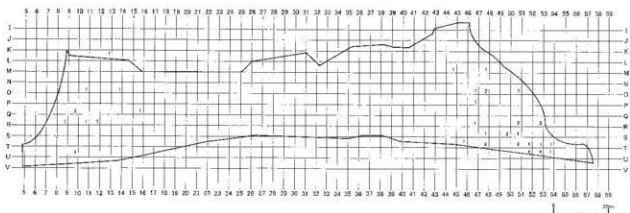
扁平打製石器

57点



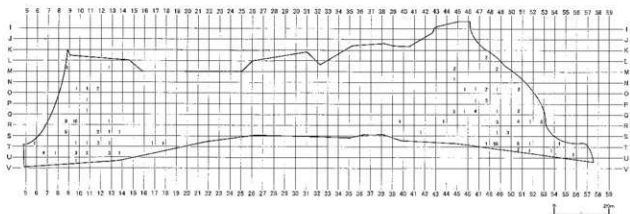
北海道式石冠

45点



台石・石皿

179点



図Ⅳ-48 包含層の遺物出土分布図(6)

V 自然科学的手法による分析結果

1 放射性炭素年代測定

(株) 地球科学研究所

報告内容の説明

未補正14C年代 (y BP) : (同位体分別未補正) 14C年代 "measured radiocarbon age"
試料の 14C/12C 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前 (BP) かを計算した年代。

14C年代 (y BP) : (同位体分別補正) 14C年代 "conventional radiocarbon age"
試料の炭素安定同位体比 (13C/12C) を測定して試料の炭素の同位体分別を知り 14C/12C の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。
試料の δ13C 値を -25(‰) に基準化することによって得られる年代値である。
(Stuiver, M. and Pelechi, H.A. (1977) Discussion Reporting of 14C data. Radiocarbon. 19 を参照のこと)
暦年代を得る際にはこの年代値をもちいる。

δ13C (permil) : 試料の測定 14C/12C 比を補正するための 13C/12C 比。
この安定同位体比は、下式のように標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表現する。

$$\delta^{13}\text{C} (\text{‰}) = \frac{(13\text{C}/12\text{C})[\text{試料}] - (13\text{C}/12\text{C})[\text{標準}]}{(13\text{C}/12\text{C})[\text{標準}]} \times 1000$$

ここで、13C/12C [標準] = 0.0112372 である。

暦年代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中14C濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の 14C の測定、サンゴの U-Th 年代と 14C 年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース ("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3)) により約 19000yBP までの換算が可能となった。*

*但し、10000yBP 以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いため、補正前のデータの保管を推奨します。

"The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in Radiocarbon, Vol. 40, No. 3, 1998 using the cubic spline fit mathematics as published by Talma and Vogel, Radiocarbon, Vol. 35, No. 2, pg 317-322, 1993: A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal BC and cal BP. Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration data beyond about 13,000 years is a "best fit" compilation of modeled data and, although an improvement on the accuracy of the radiocarbon date, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future. Because of this, it is very important to quote the original BP dates and these references in your publications so that future refinements can be applied to your results."

測定方法などに関するデータ

測定方法 AMS : 加速器質量分析
Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによる β-線計数法

処理・調製・その他 : 試料の前処理、調製などの情報

前処理 acid-alkali-acid : 酸-アルカリ-酸洗浄
acid washes : 酸洗浄
acid etch : 酸によるエッチング
none : 未処理

調製、その他

Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理
Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出
Cellulose Extraction : 木材のセルロース抽出
Extended Counting : Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

分析機関 BETA ANALYTIC INC.
4985 SW 74 Court, Miami, FL, U.S.A. 33155

表 V-1-1 ¹⁴C 年代測定結果

試料番号	測定値 (radiocarbon age)	±1σ (years)	1σ 範囲 (1σ BP)	測定値 (radiocarbon age)	±1σ (years)	1σ 範囲 (1σ BP)	
試料名 (ID): 101-1	3360 ± 40	-22.7	3360 ± 40	試料番号	3630 ± 40	-26.9	3630 ± 40
測定方法, 検定	AMS Standard			試料名 (ID): 101-8			
試料種, 放射性酸化	charred material			測定方法, 検定	AMS Standard		
				試料種, 放射性酸化	charred material		
Date: 186169				試料番号	3510 ± 40	-27.2	3470 ± 40
試料名 (ID): 101-2	3590 ± 40	-26.4	3570 ± 40	試料名 (ID): 101-7			
測定方法, 検定	AMS Standard			測定方法, 検定	AMS Standard		
試料種, 放射性酸化	charred material			試料種, 放射性酸化	charred material		
Date: 186167				試料番号	3540 ± 40	-27.6	3460 ± 40
試料名 (ID): 101-3	4100 ± 40	-25.7	4070 ± 40	試料名 (ID): 101-9			
測定方法, 検定	AMS Standard			測定方法, 検定	AMS Standard		
試料種, 放射性酸化	charred material			試料種, 放射性酸化	charred material		
Date: 186165				試料番号	3990 ± 40	-28.2	3910 ± 40
試料名 (ID): 101-4	3990 ± 40	-28.2	3910 ± 40	試料名 (ID): 101-6			
測定方法, 検定	AMS Standard			測定方法, 検定	AMS Standard		
試料種, 放射性酸化	charred material			試料種, 放射性酸化	charred material		
Date: 186162				試料番号	3670 ± 40	-28.1	3630 ± 40
試料名 (ID): 101-5	3670 ± 40	-28.1	3630 ± 40	試料名 (ID): 101-10			
測定方法, 検定	AMS Standard			測定方法, 検定	AMS Standard		
試料種, 放射性酸化	charred material			試料種, 放射性酸化	charred material		

表 V-1-2 ¹⁴C 年代測定資料一覧

測定番号	測定値	試料種	測定法	検定	放射性酸化	測定値	1σ 範囲	測定値	1σ 範囲	測定値	1σ 範囲	測定値	1σ 範囲	測定値	1σ 範囲
Beta-186169	3360 ± 40	AMS	AMS	AMS	AMS	3360 ± 40	3360 ± 40	3360 ± 40	3360 ± 40	3360 ± 40	3360 ± 40	3360 ± 40	3360 ± 40	3360 ± 40	3360 ± 40
Beta-186167	3590 ± 40	AMS	AMS	AMS	AMS	3590 ± 40	3590 ± 40	3590 ± 40	3590 ± 40	3590 ± 40	3590 ± 40	3590 ± 40	3590 ± 40	3590 ± 40	3590 ± 40
Beta-186165	4100 ± 40	AMS	AMS	AMS	AMS	4100 ± 40	4100 ± 40	4100 ± 40	4100 ± 40	4100 ± 40	4100 ± 40	4100 ± 40	4100 ± 40	4100 ± 40	4100 ± 40
Beta-186162	3990 ± 40	AMS	AMS	AMS	AMS	3990 ± 40	3990 ± 40	3990 ± 40	3990 ± 40	3990 ± 40	3990 ± 40	3990 ± 40	3990 ± 40	3990 ± 40	3990 ± 40
Beta-186170	3670 ± 40	AMS	AMS	AMS	AMS	3670 ± 40	3670 ± 40	3670 ± 40	3670 ± 40	3670 ± 40	3670 ± 40	3670 ± 40	3670 ± 40	3670 ± 40	3670 ± 40

(Variable: C13C12=21.3 lab work)
 Laboratory number: BETA-186248
 Conventional radiocarbon age: 3560 ± 40 BP
 2 Sigma calibrated result: Cal BC 1740 to 1530 (Cal BP 3490 to 2490)
 Intensity data

(Variable: C13C12=21.4 lab work)
 Laboratory number: BETA-186247
 Conventional radiocarbon age: 3670 ± 40 BP
 2 Sigma calibrated result: Cal BC 2830 to 1770 (Cal BP 3670 to 2730)
 Intensity data

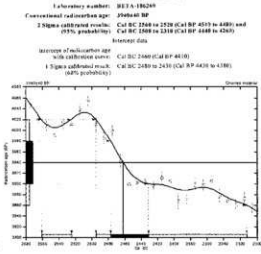
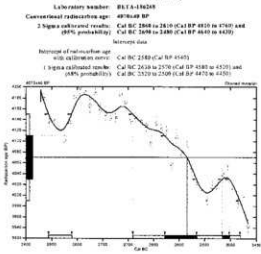
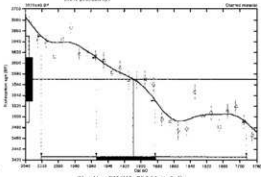
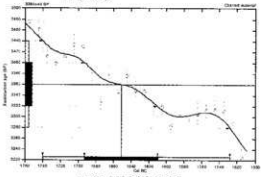
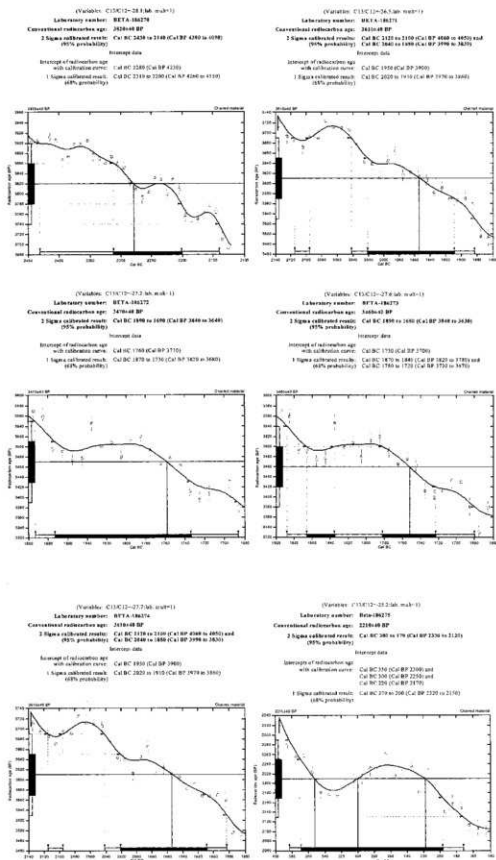


図 V-1-1 ¹⁴C 年代の暦年代校正(1)

図 V-1-2 ^{14}C 年代の暦年代較正(2)

2. 上台1遺跡出土の黒曜石製石器、剥片の原産地分析・水和層測定

有限会社 遺物分析研究所

薬科 哲男

(1) はじめに

石器石材の産地を自然科学的手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法によりサマサイトおよび黒曜石遺物の石材産地推定を行なっている¹⁾²⁾³⁾。石材移動を証明するには必要条件と十分条件を満たす必要がある。地質時代に自然の力で移動した岩石の出発露頭を元素分析で求めるとき、移動原石と露頭原石の組成が一致すれば必要条件を満たし、その露頭からの流れたルートを地形学などで証明できれば、他の露頭から原石が流れて来ないことが証明されて、十分条件を満たし、ただ一カ所の一致する露頭産地の調査のみで移動原石の産地が特定できる。遺物の産地分析では『遺物とある産地の原石組成が一致する必要はあるが、他の産地の原石にも一致する可能性が残っているから、その産地のものと言いつけられない。従って、他の産地に一致しない証明も同時に必要である。一致しなかった産地との交流がなかったと証明され、考古学資料として非常に有用と思われる』。考古学では、人工品の様式が一致すると言う結果が非常に重要な意味があり、見える様式としての形態、文様、見えない様式として土器、青銅器、ガラスなどの人手が加わった調合素材があり一致すると言うことは古代人が意識して一致させた可能性があり、一致すると言うことは、古代人の思考が一致すると考えてもよく、相互関係を調査する重要な意味をもつ結果である。石器の様式による分類ではなく、自然の法則で決定した石材の元素組成を指標にした分類では、例えば石材産地が遺跡から近い、移動キャンプ地のルート上に位置する、産地地方との交流を示す土器が出土しているなどを十分条件の代用すると産地分析は中途半端な結果となり、遠距離伝播した石材を近くの産地と誤判定する可能性がある。人が移動させた石器の元素組成とA産地原石の組成が一致し、必要条件を満足しても、原産地と出土遺跡の間に地質的関連性がないため、十分条件の移動ルートを実験的に証明できず、その石器原材がA産地の原石と決定することができない。従って、石器原材と産地原石が一致したことが、直ちに考古学の資料とならない、確かにA産地との交流で伝播した可能性は否定できなくなったが、B、C、Dの産地でないと証拠がないために、A産地だと言いつけられない。B産地と一致しなかった場合、結果は考古学の資料として非常に有用である。それは石器に関してはB産地と交流がなかったと言いつけられる。ここで、十分条件として、可能なかぎり地球上の全ての原産地(A、B、C、D…)の原石群と比較して、A産地以外の産地とは一致しないことを十分条件として証明すれば、石器がA産地の原石と決定することができる。この十分条件を肉眼観察で求めることは分類基準が混乱し不可能であると思われる。また、自然科学的分析を用いても、全ての産地が区別できるかは、それぞれが使用している産地分析法によって、それぞれ異なり実際に行ってみなければ分からない。産地分析の結果の信頼性は何方所の原産地の原石と客観的に比較して得られたかにより、比較した産地が少なければ、信頼性の低い結果と言える。黒曜石、安山岩などの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して、各平均値からの離れ具合(マハラノビスの距離)を求める。次に、古代人が採取した原産地と現代人が分析のために採取した原産地と異なる

る地点の可能性は十分に考えられる。従って、分析した有限個の原石から産地全体の無限の個数の平均値と分散を推測して判定を行うホテリングのT2乗検定を行う。この検定を全ての産地について行い、ある原石遺物素材と同じ成分組成の原石はA産地では10個中に1個みられ、B産地では1万個中に1個、C産地では100万個中に1個、D産地では…1個と各産地毎に求められるような、客観的な検定結果からA産地の原石を使用した可能性が高いと同定する。即ち多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

今回分析した遺物は森町に位置する上台1遺跡出土の黒曜石製剥片22個で、産地分析および黒曜石製剥片6個について非破壊分析による水和層厚さの結果が得られたので報告する。

(2) 黒曜石原石の分析

黒曜石原石の自然面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X分析装置によって元素分析を行なう。分析元素はAl, Si, K, Ca, Ti, Mn, Fe, Rb, Sr, Y, Zr, Nbの12元素をそれぞれ分析した。塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それをもって産地を特定する指標とした。黒曜石は、Ca/K, Ti/K, Mn/Zr, Fe/Zr, Rb/Zr, Sr/Zr, Y/Zr, Nb/Zrの比量を産地を区別する指標をしてそれぞれ用いる。黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に黒曜石の原産地は分布している。調査を終えた原産地を図1に示す。この図1の黒曜石原産地のほとんどすべてを分析している。元素組成によってこれら原石を分類し表1に示す。この原石群に原産地は不明の遺物で作った遺物群を加えると233個の原石群になる。ここでは北海道地域および一部の東北地域の産地について記述すると、白滝地域の原産地は、北海道紋別郡白滝村に位置し、鹿野北方2kmの採石場の赤石山の露頭、鹿野東方約2kmの幌加沢地点、また白土沢、八号沢などより転轍として黒曜石が採取できる。赤石山の産地の黒曜石は色に関係無く赤石山群(旧白滝第1群)にまとまる。また、あじさいの滝の露頭からは赤石山と肉眼観察では区別できない原石が採取でき、あじさい群を作った(旧白滝第2群)、また、八号沢の黒曜石原石と白土沢の転轍は梨肌の黒曜石で組成はあじさい滝群に似るが石肌で区別できる。幌加沢よりの転轍の中で70%は幌加沢群になりあじさい滝群と元素組成から両群を区別できず、残りの30%は赤石山群に一致する。置戸地域産原石は、北海道常呂郡置戸町の清水の沢林道より採取された原石の元素組成は置戸・所山群にまとまり、また同町の秋田林道で採取される原石は置戸山群にまとまる。留辺蘂町のケショマップ川一帯で採取される原石はケショマップ第1および第2群に分類される。また、白滝地域、ケショマップ、置戸地域産原石は、湧別川および常呂川に通じる流域にあり、両河川の流域で黒曜石の円礫が採取され、湧別川下流域から採取した黒曜石円礫247個の組成分類結果を表V-2-2に示し、中ノ島、北見大橋間の常呂川から採取した37個の円礫の中には、独特の組成の原石も見られ、新しい原石群を追加し分類結果を表3に示した。十勝三股産原石は、北海道河東郡上士幌町の十勝三股の十三ノ沢の谷筋および沢の中より原石が採取され、この原石の元素組成は十勝三股群にまとまる。この十勝三股産原石は十三の沢から音更川さらに十勝川に流れた可能性があり、十勝川から採取される黒曜石円礫の組成は、十勝三股産の原石の組成と相互に近似している。また、上士幌町のサンケオルベ川より採取される黒曜石円礫の組成も十勝三股産原石の組成と相互に近似している。これら組成の近似した原石の原産地は区別できず、遺物石材の産地分析でたとえ、この遺物の原産地が十勝三股群に同定されたとしても、これら十勝三股、音更川、十勝川、サンケオルベ川の複数の地点を考えなければならない。しかし、この複数の産地をまとめて、十勝地域としても、古代の地域間の交流を考察する場合、問題はないと考えられる。

清水町、新得町、鹿追町にかけて広がる美蔓台地から産出する黒曜石から2個の美蔓原石群が作られた。この原石は産地近傍の遺跡で使用されている。名寄市の智南地域、智恵文川および忠烈布貯水池から上名寄にかけて黒曜石の円礫が採集される。これらを組成で分類すると88%は名寄第1群に、また12%は名寄第2群にそれぞれなる。旭川市の近文台、台場、嵐山遺跡付近および雨文台北部などから採集される黒曜石の円礫は、20%が近文台第1群、69%が近文台第2群、11%が近文台第3群それぞれ分類され、台場の砂礫採取場からは近文台諸群に一致するもの以外に、黒、灰色系円礫も見られ、台場第1、2群を作った。また、滝川市江別乙で採集される親指大の黒曜石の礫は、組成で分類すると約79%が滝川群にまとなり、21%が近文台第2、3群に組成が一致する。滝川群に一致する組成の原石は、北竜市恵袋別川培本社からも採取される。秋父別町の雨竜川に開析された平野を見下す丘陵中腹の緩斜面から小円礫の黒曜石原石が採取される。産出状況とか礫状は滝川産黒曜石と同じで、秋父別第1群は滝川第1群に組成が一致し、第2群も滝川第3群に一致しさらに近文台第2群にも一致する。赤井川産原石は、北海道余市郡赤井川村の土木沢上流域およびこの付近の山腹より採取できる。ここの原石には、少球果の列が何層にも重なり石器の原材料として良質とはいえない原石で赤井川第1群を、また、球果の非常に少ない握り拳半分大の良質な原石などで赤井川第2群を作った。これら第1、2群の元素組成は非常に似ていて、遺物を分析したときしばしば、赤井川両群に同定される。豊泉産原石は豊浦町から産出し、組成によって豊泉第1、2群の2群に区別され、豊泉第2群の原石は斑点が少なく良質な黒曜石である。豊泉産原石の使用圏は道南地方に広がり、一部は青森県に伝播している。また、青森県教育庁の斉藤岳氏提供の奥尻島幌内川産黒曜石の原石群が確立されている。出来島群は青森県西津軽郡木造町七里長浜の海岸部より採取された円礫の原石で作られた群で、この出来島群と相互に似た組成の原石は、岩木山の西側を流れ鮎ヶ沢地区に流入する中村川の支流で1点採取され、また、青森市の鶴ヶ坂および西津軽郡森田村鶴ばみ地区より採取されている。青森県西津軽郡深浦町の海岸とか同町の六角沢およびこの沢筋に位置する露頭より採取された原石で六角沢群をまた、八森山産出の原石で八森山群をそれぞれ作った。深浦の両群と相互に似た群は青森市戸門地区より産出する黒曜石で作られた戸門第2群である。戸門第1群、成田群、浪岡町県民の森地区より産出の大釈迦群(旧浪岡群)は赤井川産原石の第1、2群と弁別は可能であるが原石の組成は比較的似ている。戸門、大釈迦産黒曜石の産出量は非常に少なく、希に石鎌が作れる大きさがみられる程度であるが、鷹森群は鷹森山麓の成田地区産出の黒曜石で中には5cm大のものもみられる。また、考古学者の話題になる下湯川産黒曜石についても原石群を作った。産地分析は、日本、近隣国を含めた産地の合計233個の原石群と比較し、必要条件と十分条件を求めて遺物の原石産地を同定する。

(3) 結果と考察

遺跡から出土した黒曜石製石器、石片は風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。黒曜石製の石器で、水和層の影響を考慮するとすれば、軽い元素の分析ほど表面分析になるため、水和層の影響を受けやすいと考えられる。Ca/K、Ti/Kの両軽元素比量を除いて産地分析を行なった場合、また除かずに産地分析を行った場合、いずれの場合にも同定される産地は同じである。他の元素比量についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値にはやや不確かさを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。また、安山岩製の遺物は、白っぽく表面が風化しているために、アルミナ粉末を風化面に吹き付け、新鮮面を出して分析している。今回分析した上台1遺跡出土黒曜石製遺物の分析結果を表V-2-4に示した。石器の分析結果から石材産地を

同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするため Rb/Zr の一変量だけを考えると、表 V-2-4 の試料番号 92377 番の遺物では Rb/Zr の値は 1.004 で、赤井川第 1 群の [平均値] ± [標準偏差値] は、 0.969 ± 0.060 である。遺物と原石群の差を標準偏差値 (σ) を基準にして考えると遺物は原石群から 0.58σ 離れている。ところで赤井川第 1 群原産地から 100 個の原石を採ってきて分析すると、平均値から $\pm 0.58\sigma$ のずれより大きいものが 56 個ある。すなわち、この遺物が、赤井川第 1 群の原石から作られていたと仮定しても、 0.58σ 以上離れる確率は 56% であると言える。だから、赤井川第 1 群の平均値から 0.58σ しか離れていないときには、この遺物が赤井川第 1 群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を赤石山に比較すると、赤石山の平均値からの隔たりは、約 5.7σ である。これを確率の言葉で表現すると、赤石山の原石を採ってきて分析したとき、平均値から 5.7σ 以上離れている確率は、1 億分の 1 であると言える。このように、1 億個に 1 個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、赤石山の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は赤井川第 1 群に 56% の確率で帰属され、信頼限界の 0.1% を満たしていることから赤井川第 1 群産原石が使用されていると同定され、さらに赤石山に 100 万分の 1% の低い確率で帰属され、信頼限界の 0.1% に満たないことから赤石山の原石でないと同定される」。遺物が一カ所の産地 (赤井川第 1 群産地) と一致したからと言って、例え赤井川第 1 群と赤石山の原石は成分が異なっているとしても、分析している試料は原石でなく遺物で、さらに分析誤差が大きくなる不定形 (非破壊分析) であることから、他の産地に一致しないとは言えない、同種岩石の中での分類である以上、他の産地にも一致する可能性は推測される。即ちある産地 (赤井川第 1 群産地) に一致し必要条件を満たしたと言っても一致した産地の原石とは限らないために、帰属確率による判断を表 V-2-1 の 233 個すべての原石群について行ない十分条件を求め、低い確率で帰属された原石群の原石は使用していないとして消していくことにより、はじめて赤井川第 1 群産地の石材のみが使用されていると判定される。実際は Rb/Zr といったただ 1 つの変量だけでなく、前述した 8 つの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えば、A 原産地の A 群で Ca 元素と Rb 元素との間に相関があり Ca の量を計れば Rb の量は分析しなくても分かるようなときは、A 群の石材で作られた遺物であれば、A 群と比較したとき、Ca 量が一致すれば当然 Rb 量も一致するはずである。したがって、もし Rb 量だけが少しずれている場合には、この試料は A 群に属していないと言わなければならない。このことを数的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングの T^2 乗検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて産地を同定する¹⁹⁾。産地の同定結果は 1 個の遺物に対して、黒曜石製の 233 個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略しているが、本研究ではこれら産地の可能性が非常に低いことを確認したという非常に重要な意味を含んでいる。すなわち赤井川第 1 群産原石と判定された遺物に対して、カムチャッカ産原石とカロシア、北朝鮮の遺跡で使用されている原石および信州和田峠産の原石の可能性を考える必要がないという結果であり、ここでは高い確率で同定された産地のみを結果を表 V-2-5 に記入した。原石群を作った原石試料は直径 3 cm 以上であるが、多数の試料を処理するために、小さな遺物試料の分析に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには原石群の元素組成のパラツキの範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている 0.1% に達しない確率を示す場合が比較的多く

みられる。この場合には、原石産地（確率）の欄の確率値に替えて、マハラノビスの距離 D^2 乗の値を記した。この遺物については、記入された D^2 乗の値が原石群の中で最も小さな D^2 乗値で、この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ていると言えるため、推定確率は低いが、その原石産地と考えてほぼ間違いないと判断されたものである。今回分析した上台1遺跡出土の黒曜石製剥片22個の中で、信頼限界の0.1%に達した遺物は22個すべてだった。今回分析した剥片22個について各原産地別原石使用頻度を求めると、最も多く使用された原石は、赤井川産で95%（21個）、次いで豊泉産で5%（1個）であった。遺跡で使用頻度高い原石産地と交流・交易がより活発であったと推測すると、今回の分析で、赤井川地域、豊泉地域との交流が活発で、十勝地域、白滝地域との交流がないと確認されたことと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。

（4）非破壊分析による黒曜石製遺物の水和層測定

今回分析した遺物6個について非破壊分析による水和層厚さの結果が得られたので報告する。分析は黒曜石の表面に顕微鏡を通して光を照射したときに、黒曜石の表面で反射する光と、水和層で反射する光りで生じる干渉波の波長から水和層の厚さを求める方法。光りの反射を利用するため、遺物の表面にできた使用痕および埋土中にできた摩耗傷などが水和層測定の障害になり測定できない場合が多々ある。また、水和層と新鮮面との境界面での反射光が非常に弱いため、境界面が明確に到達した部分を探して測定しなければならない。従って、傷のない場所を顕微鏡下で探して分析を行うため、試料によっては1個に3時間以上かかることもある。石器について3カ所を分析し、代表的な水和層の干渉波スペクトルを図V-2-2に示した。また分析値の最大、中間、最小値を選んで表V-2-6に記した。水和層厚さを経過年代に換算するには、水和層を分析した黒曜石の経過年代を炭素-14法、フィッシュトラック法で求めた絶対年代から、水和速度を求めて行く。この水和速度は黒曜石の埋土中に受ける温度によって異なるため、黒曜石が環境から受けた温度を正確に求めなければ、正確な年代の換算はできない。従って、遺物が経過した年代の間に受けた温度を旧石器時代では約7.5℃を平均効果温度として水和速度⁹⁾を推定したとき、赤井川産原石は1.7 ($\mu 2 / 1000$ 年)として、また、縄文時代（約8.5℃）では、赤井川産原石1.9167 ($\mu 2 / 1000$ 年)を用いて下記の式により水和層厚さを経過年代に換算した。

$$\text{推定換算年代 (千年)} = \frac{\text{測定水和層厚} (\mu\text{m}) \times \text{測定水和層厚} (\mu\text{m})}{\text{水和速度} (\mu 2 / 1000\text{年})}$$

今回分析非破壊で水和層が測定できた遺物の経過年代の結果を表V-2-6に示した。水和層厚さを経過年代に換算するときの重要な係数である水和速度を決める重要な要因は、黒曜石の化学組成と温度であるため、自然科学者の実験室で水和実験によって水和速度を決定できるが、国内産黒曜石に関して研究はそこまで進んでいないのが現状である。現在は水和速度の決定については考古学者の協力なしでは決定できない。実験室での水和層生成が困難である限り、水和速度の決定の舞台は遺跡になる。今回の年代が炭素-14年代に比べて古すぎる場合は、温泉地とか温度の高い地下水などで埋土中の遺物温度が異常に高かったことが推測され、水和層は非常に厚くなり推定換算年代は古くなる。これは遺物の埋土位置の地温測定で推測できるが、しかし、過去の地温の測定はできない。炭素-14年代などで年代の分かる層から出土する黒曜石の水和層から水和速度を決定するため、発掘が重要な鍵を握ることは言うまでもない。石器の組成（原産地）さえわかれば、考古学者が炭素-14年代と水和層のデータを集積し整理するだけで、正確な水和層年代が得られるようになる。これら考古学

的作業により求められた水和速度は、水和機構（理論）が証明されていないが、考古学試料として実用するには問題ないと推測できる。したがって、水和層年代は考古学者が企画するだけで実用的な年代が得られるため、将来、水和層年代が石器における土器編年のように身近な存在になると推測できる。

参考文献

- 1) 藁科哲男・東村武信（1975）、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定（Ⅱ）。考古学と自然科学、8：61-69
- 2) 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌（1977）、（1978）、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定（Ⅲ）。（Ⅳ）。考古学と自然科学、10、11：53-81：33-47
- 3) 藁科哲男・東村武信（1983）、器原材の産地分析。考古学と自然科学、6：59-89
- 4) 東村武信（1976）、地推定における統計的手法。考古学と自然科学、9：77-90
- 5) 東村武信（1980）、古学と物理化学。学生社
- 6) 近堂祐弘（1986）、北海道における黒曜石年代測定法について、北海道考古学、22：1-15

表V-2-1 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値(2)

原石群名称	試料数	元素比											
		Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	As/Zr	Sr/Zr	Rb/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Sc/K	
東海	八戸川	29	0.172±0.008	0.066±0.002	0.020±0.001	1.176±0.043	0.083±0.012	0.011±0.004	1.159±0.035	0.024±0.014	0.023±0.002	0.276±0.017	0.010±0.007
		30	0.170±0.007	0.065±0.002	0.020±0.001	1.201±0.011	0.082±0.011	0.011±0.004	1.209±0.011	0.024±0.014	0.023±0.002	0.276±0.017	0.010±0.007
		31	0.193±0.008	0.068±0.002	0.020±0.001	1.286±0.100	0.085±0.005	0.011±0.004	1.383±0.040	0.024±0.014	0.023±0.002	0.283±0.019	0.010±0.007
	黒川	32	0.132±0.010	0.037±0.005	0.009±0.004	1.249±0.073	0.074±0.013	0.012±0.005	1.224±0.049	0.012±0.005	0.012±0.005	0.239±0.019	0.009±0.011
		33	0.131±0.009	0.037±0.005	0.009±0.004	1.249±0.073	0.074±0.013	0.012±0.005	1.224±0.049	0.012±0.005	0.012±0.005	0.239±0.019	0.009±0.011
		34	0.130±0.009	0.037±0.005	0.009±0.004	1.249±0.073	0.074±0.013	0.012±0.005	1.224±0.049	0.012±0.005	0.012±0.005	0.239±0.019	0.009±0.011
	黒川	42	0.190±0.012	0.062±0.006	0.008±0.011	1.011±0.023	0.082±0.199	0.010±0.004	1.079±0.056	0.020±0.006	0.020±0.006	0.208±0.030	0.008±0.019
		43	0.190±0.012	0.062±0.006	0.008±0.011	1.011±0.023	0.082±0.199	0.010±0.004	1.079±0.056	0.020±0.006	0.020±0.006	0.208±0.030	0.008±0.019
		44	0.190±0.012	0.062±0.006	0.008±0.011	1.011±0.023	0.082±0.199	0.010±0.004	1.079±0.056	0.020±0.006	0.020±0.006	0.208±0.030	0.008±0.019
	黒川	41	0.268±0.014	0.070±0.006	0.042±0.003	1.833±0.066	0.117±0.179	0.013±0.009	1.811±0.019	0.027±0.010	0.027±0.010	0.307±0.049	0.014±0.012
		42	0.268±0.014	0.070±0.006	0.042±0.003	1.833±0.066	0.117±0.179	0.013±0.009	1.811±0.019	0.027±0.010	0.027±0.010	0.307±0.049	0.014±0.012
		43	0.268±0.014	0.070±0.006	0.042±0.003	1.833±0.066	0.117±0.179	0.013±0.009	1.811±0.019	0.027±0.010	0.027±0.010	0.307±0.049	0.014±0.012
	黒川	40	0.423±0.016	0.070±0.007	0.049±0.017	2.397±0.274	1.189±1.183	0.143±0.182	2.349±0.369	0.028±0.010	0.028±0.010	0.443±0.063	0.017±0.009
		41	0.265±0.002	0.064±0.003	0.021±0.011	1.811±1.443	0.799±1.129	0.143±0.209	1.222±0.941	0.119±0.044	0.119±0.044	0.361±0.056	0.017±0.009
		43	0.194±0.009	0.054±0.005	0.040±0.008	1.888±0.114	0.833±0.008	0.251±0.025	1.810±0.027	0.120±0.019	0.120±0.019	0.318±0.011	0.013±0.017
東海	小島	30	0.217±0.023	0.127±0.005	0.043±0.007	1.441±0.019	0.111±0.024	0.010±0.004	1.419±0.011	0.021±0.011	0.021±0.011	0.257±0.017	0.020±0.017
		31	0.217±0.023	0.127±0.005	0.043±0.007	1.441±0.019	0.111±0.024	0.010±0.004	1.419±0.011	0.021±0.011	0.021±0.011	0.257±0.017	0.020±0.017
		32	0.217±0.023	0.127±0.005	0.043±0.007	1.441±0.019	0.111±0.024	0.010±0.004	1.419±0.011	0.021±0.011	0.021±0.011	0.257±0.017	0.020±0.017
	森	44	0.258±0.009	0.214±0.007	0.034±0.005	0.786±0.105	0.028±0.012	0.279±0.011	0.699±0.012	0.031±0.009	0.031±0.009	0.021±0.002	0.243±0.009
		45	0.258±0.009	0.214±0.007	0.034±0.005	0.786±0.105	0.028±0.012	0.279±0.011	0.699±0.012	0.031±0.009	0.031±0.009	0.021±0.002	0.243±0.009
		46	0.258±0.009	0.214±0.007	0.034±0.005	0.786±0.105	0.028±0.012	0.279±0.011	0.699±0.012	0.031±0.009	0.031±0.009	0.021±0.002	0.243±0.009
	森	53	1.544±0.139	0.065±0.035	0.073±0.008	4.849±0.405	0.247±0.014	1.296±0.002	4.690±0.018	0.041±0.012	0.041±0.012	0.262±0.019	0.027±0.019
		54	1.544±0.139	0.065±0.035	0.073±0.008	4.849±0.405	0.247±0.014	1.296±0.002	4.690±0.018	0.041±0.012	0.041±0.012	0.262±0.019	0.027±0.019
		55	1.544±0.139	0.065±0.035	0.073±0.008	4.849±0.405	0.247±0.014	1.296±0.002	4.690±0.018	0.041±0.012	0.041±0.012	0.262±0.019	0.027±0.019
	森	57	1.889±0.157	0.122±0.016	0.063±0.011	8.205±0.205	0.256±0.016	1.149±0.005	1.037±0.018	0.047±0.013	0.047±0.013	0.247±0.018	0.027±0.018
		58	1.889±0.157	0.122±0.016	0.063±0.011	8.205±0.205	0.256±0.016	1.149±0.005	1.037±0.018	0.047±0.013	0.047±0.013	0.247±0.018	0.027±0.018
		59	1.889±0.157	0.122±0.016	0.063±0.011	8.205±0.205	0.256±0.016	1.149±0.005	1.037±0.018	0.047±0.013	0.047±0.013	0.247±0.018	0.027±0.018
	森	52	1.869±0.145	0.094±0.006	0.080±0.010	4.877±0.087	0.253±0.013	1.090±0.016	1.089±0.028	0.040±0.008	0.040±0.008	0.261±0.003	0.028±0.012
		53	1.869±0.145	0.094±0.006	0.080±0.010	4.877±0.087	0.253±0.013	1.090±0.016	1.089±0.028	0.040±0.008	0.040±0.008	0.261±0.003	0.028±0.012
		54	1.869±0.145	0.094±0.006	0.080±0.010	4.877±0.087	0.253±0.013	1.090±0.016	1.089±0.028	0.040±0.008	0.040±0.008	0.261±0.003	0.028±0.012
森	48	1.471±0.136	0.062±0.041	0.078±0.011	4.808±0.618	0.252±0.006	1.299±1.284	1.361±0.024	0.042±0.013	0.042±0.013	0.305±0.019	0.048±0.002	
	49	1.509±0.140	0.061±0.030	0.073±0.011	4.721±0.272	0.257±0.010	1.252±1.122	1.094±0.018	0.040±0.009	0.040±0.009	0.305±0.019	0.041±0.010	
	50	1.509±0.140	0.061±0.030	0.073±0.011	4.721±0.272	0.257±0.010	1.252±1.122	1.094±0.018	0.040±0.009	0.040±0.009	0.305±0.019	0.041±0.010	
森	79	0.207±0.021	0.084±0.009	0.054±0.006	1.924±0.008	0.013±0.009	0.013±0.009	1.814±0.017	0.014±0.012	0.014±0.012	0.317±0.019	0.013±0.019	
	80	0.207±0.021	0.084±0.009	0.054±0.006	1.924±0.008	0.013±0.009	0.013±0.009	1.814±0.017	0.014±0.012	0.014±0.012	0.317±0.019	0.013±0.019	
	81	0.207±0.021	0.084±0.009	0.054±0.006	1.924±0.008	0.013±0.009	0.013±0.009	1.814±0.017	0.014±0.012	0.014±0.012	0.317±0.019	0.013±0.019	
黒川	黒川	43	0.196±0.023	0.083±0.006	0.037±0.008	1.811±0.019	0.068±0.008	0.007±0.002	1.811±0.019	0.021±0.011	0.021±0.011	0.222±0.016	0.019±0.014
		44	0.196±0.023	0.083±0.006	0.037±0.008	1.811±0.019	0.068±0.008	0.007±0.002	1.811±0.019	0.021±0.011	0.021±0.011	0.222±0.016	0.019±0.014
		45	0.196±0.023	0.083±0.006	0.037±0.008	1.811±0.019	0.068±0.008	0.007±0.002	1.811±0.019	0.021±0.011	0.021±0.011	0.222±0.016	0.019±0.014
	黒川	42	0.184±0.012	0.176±0.010	0.037±0.007	1.484±0.097	0.419±0.019	0.671±0.049	1.431±0.019	0.038±0.023	0.038±0.023	0.290±0.019	0.019±0.019
		43	0.184±0.012	0.176±0.010	0.037±0.007	1.484±0.097	0.419±0.019	0.671±0.049	1.431±0.019	0.038±0.023	0.038±0.023	0.290±0.019	0.019±0.019
		44	0.184±0.012	0.176±0.010	0.037±0.007	1.484±0.097	0.419±0.019	0.671±0.049	1.431±0.019	0.038±0.023	0.038±0.023	0.290±0.019	0.019±0.019
	黒川	40	0.262±0.016	0.143±0.006	0.022±0.004	1.178±0.040	0.113±0.029	0.888±0.023	1.010±0.018	0.028±0.013	0.028±0.013	0.191±0.014	0.016±0.006
		41	0.262±0.016	0.143±0.006	0.022±0.004	1.178±0.040	0.113±0.029	0.888±0.023	1.010±0.018	0.028±0.013	0.028±0.013	0.191±0.014	0.016±0.006
		42	0.262±0.016	0.143±0.006	0.022±0.004	1.178±0.040	0.113±0.029	0.888±0.023	1.010±0.018	0.028±0.013	0.028±0.013	0.191±0.014	0.016±0.006
	黒川	41	0.429±0.009	0.094±0.037	0.033±0.006	3.942±0.213	0.188±0.013	1.165±0.006	0.897±0.019	0.022±0.009	0.022±0.009	0.306±0.002	0.018±0.011
		42	0.429±0.009	0.094±0.037	0.033±0.006	3.942±0.213	0.188±0.013	1.165±0.006	0.897±0.019	0.022±0.009	0.022±0.009	0.306±0.002	0.018±0.011
		43	0.429±0.009	0.094±0.037	0.033±0.006	3.942±0.213	0.188±0.013	1.165±0.006	0.897±0.019	0.022±0.009	0.022±0.009	0.306±0.002	0.018±0.011
	黒川	48	0.523±0.029	0.147±0.006	0.081±0.013	1.044±0.011	0.081±0.009	0.689±0.012	1.127±0.023	0.039±0.012	0.039±0.012	0.494±0.011	0.011±0.011
		49	0.523±0.029	0.147±0.006	0.081±0.013	1.044±0.011	0.081±0.009	0.689±0.012	1.127±0.023	0.039±0.012	0.039±0.012	0.494±0.011	0.011±0.011
		50	0.523±0.029	0.147±0.006	0.081±0.013	1.044±0.011	0.081±0.009	0.689±0.012	1.127±0.023	0.039±0.012	0.039±0.012	0.494±0.011	0.011±0.011
黒川	77	0.222±0.023	0.188±0.027	0.038±0.020	1.863±0.019	0.333±0.019	0.333±0.019	1.814±0.017	0.014±0.012	0.014±0.012	0.292±0.017	0.017±0.017	
	78	0.222±0.023	0.188±0.027	0.038±0.020	1.863±0.019	0.333±0.019	0.333±0.019	1.814±0.017	0.014±0.012	0.014±0.012	0.292±0.017	0.017±0.017	
	79	0.222±0.023	0.188±0.027	0.038±0.020	1.863±0.019	0.333±0.019	0.333±0.019	1.814±0.017	0.014±0.012	0.014±0.012	0.292±0.017	0.017±0.017	
東海	黒川	43	0.196±0.023	0.083±0.006	0.037±0.008	1.811±0.019	0.068±0.008	0.007±0.002	1.811±0.019	0.021±0.011	0.021±0.011	0.222±0.016	0.019±0.014
		44	0.196±0.023	0.083±0.006	0.037±0.008	1.811±0.019	0.068±0.008	0.007±0.002	1.811±0.019	0.021±0.011	0.021±0.011	0.222±0.016	0.019±0.014
		45	0.196±0.023	0.083±0.006	0.037±0.008	1.811±0.019	0.068±0.008	0.007±0.002	1.811±0.019	0.021±0.011	0.021±0.011	0.222±0.016	0.019±0.014
	黒川	42	0.184±0.012	0.176±0.010	0.037±0.007	1.484±0.097	0.419±0.019	0.671±0.049	1.431±0.019	0.038±0.023	0.038±0.023	0.290±0.019	0.019±0.019
		43	0.184±0.012	0.176±0.010	0.037±0.007	1.484±0.097	0.419±0.019	0.671±0.049	1.431±0.019	0.038±0.023	0.038±0.023	0.290±0.019	0.019±0.019
		44	0.184±0.012	0.176±0.010	0.037±0.007	1.484±0.097	0.419±0.019	0.671±0.049	1.431±0.019	0.038±0.023	0.038±0.023	0.290±0.019	0.019±0.019
	黒川	40	0.262±0.016	0.143±0.006	0.022±0.004	1.178±0.040	0.113±0.029	0.888±0.023	1.010±0.018	0.028±0.013	0.028±0.013	0.191±0.014	0.016±0.006
		41	0.262±0.016	0.143±0.006	0.022±0.004	1.178±0.040	0.113±0.029	0.888±0.023	1.010±0.018	0.028±0.013	0.028±0.013		

表V-2-5 上台1遺跡出土黒曜石製剥片の元素比分析結果

遺物番号	元 素 比									
	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
92375	0.250	0.069	0.084	2.093	0.925	0.433	0.236	0.069	0.027	0.374
92376	0.251	0.069	0.089	2.343	1.071	0.467	0.240	0.069	0.025	0.348
92377	0.251	0.068	0.081	2.285	1.004	0.418	0.267	0.035	0.026	0.361
92378	0.256	0.074	0.092	2.370	1.069	0.461	0.254	0.078	0.026	0.362
92379	0.255	0.069	0.083	2.174	0.964	0.413	0.250	0.054	0.027	0.381
92380	0.255	0.072	0.091	2.300	1.068	0.394	0.256	0.059	0.026	0.354
92381	0.256	0.072	0.084	2.229	0.961	0.380	0.260	0.001	0.025	0.345
92382	0.256	0.071	0.083	2.223	0.984	0.402	0.252	0.109	0.026	0.370
92383	0.257	0.072	0.086	2.206	0.973	0.398	0.248	0.042	0.026	0.360
92384	0.255	0.069	0.085	2.192	0.965	0.401	0.236	0.118	0.026	0.362
92385	0.246	0.067	0.086	2.173	0.956	0.386	0.243	0.090	0.020	0.259
92386	0.256	0.063	0.073	1.915	0.828	0.350	0.209	0.094	0.026	0.359
92387	0.258	0.072	0.077	2.221	0.994	0.461	0.254	0.018	0.024	0.359
92388	0.254	0.071	0.090	2.372	1.095	0.470	0.238	0.047	0.026	0.350
92389	0.474	0.158	0.056	1.686	0.399	0.570	0.156	0.004	0.032	0.468
92390	0.259	0.073	0.085	2.162	0.978	0.399	0.236	0.111	0.026	0.362
92391	0.254	0.073	0.087	2.212	0.980	0.400	0.253	0.056	0.026	0.361
92392	0.255	0.077	0.084	2.215	1.037	0.455	0.236	0.080	0.026	0.363
92393	0.254	0.070	0.082	2.149	1.001	0.443	0.254	0.053	0.026	0.358
92394	0.254	0.076	0.082	2.170	0.977	0.407	0.243	0.065	0.026	0.362
92395	0.248	0.063	0.082	2.161	1.015	0.406	0.223	0.017	0.025	0.351
92396	0.265	0.070	0.089	2.157	0.984	0.504	0.268	0.001	0.027	0.375
JG-1	0.788	0.215	0.065	3.435	0.855	1.152	0.250	0.085	0.028	0.319

JG-1: 標準試料-Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol. 8 175-192(1974)

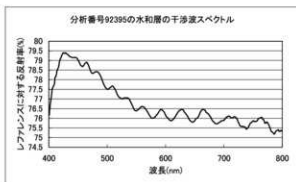
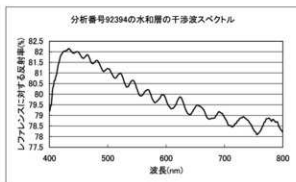
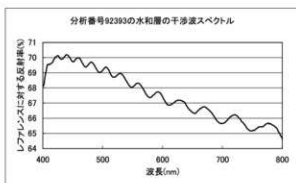
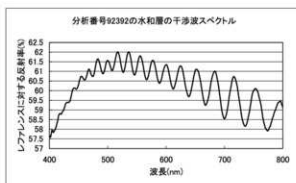
表V-2-6 上台1遺跡出土黒曜石製遺物の原産地分析結果

分析番号	遺物番号	出土位置	層位	原産地(確率)	判定結果	遺物名	時期	重さ	備考
92375	63	1	UF3C	Vc下層 赤井川第1群 (98%), 赤井川第2群 (10%)	赤井川	フレイク	縄文時代後前期	11.9g	
92376	64	2	UF3C	Vc下層 赤井川第1群 (99%), 赤井川第2群 (21%)	赤井川	フレイク	縄文時代後前期	29.9g	
92377	65	3	UF3C	Vc下層 赤井川第1群 (31%), 赤井川第2群 (28%), 十勝三股 (1%), 戸門第1群 (4%)	赤井川	スクレイパー	縄文時代後前期	35.8g	
92378	66	4	UF3C	Vc下層 赤井川第1群 (89%), 赤井川第2群 (88%)	赤井川	Rフレイク	縄文時代後前期	13.8g	
92379	67	7	UF3C	Vc下層 赤井川第1群 (99.8%), 赤井川第2群 (96%)	赤井川	スクレイパー	縄文時代後前期	15.3g	
92380	68	8	UF3C	Vc下層 赤井川第1群 (40%), 赤井川第2群 (22%)	赤井川	スクレイパー	縄文時代後前期	21.1g	
92381	69	9	UF3C	Vc下層 赤井川第1群 (56%), 赤井川第2群 (7%)	赤井川	スクレイパー	縄文時代後前期	14.2g	
92382	70	10	UF3C	Vc下層 赤井川第1群 (85%), 赤井川第2群 (84%)	赤井川	Rフレイク	縄文時代後前期	25.5g	
92383	71	11	UF3C	Vc下層 赤井川第1群 (99%), 赤井川第2群 (75%)	赤井川	スクレイパー	縄文時代後前期	34.5g	
92384	72	12	UF3C	Vc下層 赤井川第1群 (87%), 赤井川第2群 (71%)	赤井川	原石	縄文時代後前期	28.7g	
92385	73	13	UF3C	Vc下層 赤井川第1群 (78%), 赤井川第2群 (65%)	赤井川	原石	縄文時代後前期	16.9g	
92386	74	15	UF3C	Vc下層 赤井川第1群 (24%), 赤井川第2群 (0.2%)	赤井川	石造はなびら	縄文時代後前期	16.4g	
92387	75	16	UF3C	Vc下層 赤井川第2群 (91%), 赤井川第1群 (85%), 戸門第1群 (1%)	赤井川	Rフレイク	縄文時代後前期	30.2g	
92388	76	17	UF3C	Vc下層 赤井川第1群 (26%), 赤井川第2群 (12%)	赤井川	Rフレイク	縄文時代後前期	9.2g	
92389	77	19-1	UF3C	Vc下層 豊島第1群 (72%)	豊島	フレイク	縄文時代後前期	10.8g	
92390	78	19-2	UF3C	Vc下層 赤井川第1群 (72%), 赤井川第2群 (44%)	赤井川	Rフレイク	縄文時代後前期	14.4g	
92391	104	5	UF3C	Vc下層 赤井川第1群 (96%), 赤井川第2群 (97%)	赤井川	フレイク	日石器時代	9.8g	水と層
92392	105	6	UF3C	Vc下層 赤井川第1群 (28%), 赤井川第2群 (3%)	赤井川	フレイク	縄文時代後前期	12.6g	水と層
92393	106	14	UF3C	Vc下層 赤井川第1群 (71%), 赤井川第2群 (39%)	赤井川	フレイク	縄文時代後前期	17.1g	水と層
92394	107	18	UF3C	Vc下層 赤井川第1群 (75%), 赤井川第2群 (73%)	赤井川	フレイク	縄文時代後前期	16.0g	水と層
92395	108	61	UP8	覆土 赤井川第1群 (3%), 赤井川第2群 (7%)	赤井川	石造はなびら	縄文時代後前期	21.3g	水と層
92396	109	59	UP18	覆土 赤井川第1群 (5%), 赤井川第2群 (0.6%)	赤井川	フレイク	縄文時代後前期	8.5g	水と層

注意: 近年産地分析を行う者が多くなりましたが, 判定根拠が曖昧にも関わらず結果のみを報告される場合があります。本報告では日本における各遺跡の産地分析の判定基準を一定にして, 産地分析を行っています。判定基準の異なる研究方法(土器類の基準も研究方法で異なるように)にも関わらず, 似た産地名のために同じ結果のように思われるが, 全く関係(相互チェックなし)ありません。本研究結果に連続させるには本研究法で再分析が必要です。本報告の分析結果を考古学資料とする場合には常に同じ基準で判定されている結果で古代交流圏などを考察する必要があります。

表V-2-7 上台1遺跡出土黒曜石製遺物の水和層年代測定結果

分析番号	試料名	遺跡名	出土位置	遺物番号	層位	判定	水和層の厚さ 3×3mm測定(μm)			1, 2, 3それぞれの 経過年代(BP)(年)			経過年代の標準誤差(1σ) (年)	経過年代の標準誤差(2σ) (年)	遺物名	時期	備考	
							1	2	3	1	2	3						
9291	上1-5	上台1遺跡	UPC 3	5	Vc下層	赤井川	4.7	測定 不能	測定 不能	測定 不能					フレイク	旧石器時代	14.8g	
9292	上1-6	上台1遺跡	UPC 3	6	Vc下層	赤井川	1,9167	5,3262	4,2266	4,8094	11,747	9,408	12,629	12,261	2,195	旧フレイク	縄文時代 前期前葉	12.6g
9293	上1-14	上台1遺跡	UPC 3	14	Vc下層	赤井川	1,9167	2,6708	3,2254	3,3644	6,231	6,432	5,922	6,195	210	フレイク	縄文時代 後期前葉	17.1g
9294	上1-18	上台1遺跡	UPC 3	18	Vc下層	赤井川	1,9167	4,2332	4,2527	4,2776	9,207	9,382	9,403	5,361	117	フレイク	縄文時代 後期前葉	16.0g
9295	上1-21	上台1遺跡	UP 8	61	層土2	赤井川	1,9167	3,3278	3,603	3,3967	5,724	6,719	5,621	6,031	487	石輪または ナイフ	縄文時代 後期前葉	21.3g
9296	上1-22	上台1遺跡	UP 8	39	層土5	赤井川	1,9167	測定 不能	測定 不能	測定 不能						フレイク	縄文時代 後期前葉	8.3g



図V-2-2 水和層干渉スペクトル

3. 森町上台1遺跡から出土した炭化植物種子

* 椿坂 恭代

(1) 遺跡と調査の概要

遺跡の名称：森町上台1遺跡 (B-15-27)

遺跡の所在：北海道茅部郡森町字上台33-1、42-1、364ほか

調査機関：財団法人 北海道埋蔵文化財センター

調査期間：平成15年5月6日～10月24日

遺跡の立地：遺跡は森町中心部から南へ約2km挟まれた段丘上に位置し、標高は78～90mである。

遺跡の年代：縄文時代前期後葉～後期中葉、晩期後葉（主体は後期前葉である）

検出遺構：竪穴住居跡 (UH) 1軒、土坑 (UP) 59基、Tピット (TP) 5基、配石遺構 (US) 2基、集石・糞集中 (US) 4カ所、石囲い炉 (US) 14基、焼土 (UF) 4カ所、フレイク集中 (UFC) 4カ所、立石7基、柱穴状の小ピット (USP) 77基が検出された。

詳細については本文を参照していただきたい。

(2) 扱った資料

分析資料として扱った炭化植物は、縄文時代後期前葉の土坑から土壌を採取しフローテーション法で処理後、種子の第一次選別を経て送付されてきた。これらの資料について実体顕微鏡で観察ならびに撮影を行った。検出された植物種子の出土表は表V-3-2に示しておいた。

(3) 検出された種子

キハダ属 *Phellodendron* Rupr. (図版1-1：UP-9から出土)

UP-9の覆土からキハダ属の破片が4片検出されている。種子は半横広卵形で表皮に浅い凹みによる網目模様がある。これらの特徴からキハダ *Phellodendron amurense* Rupr. と判断される。図示したように、種子は破片のため計測はできなかった。

クルミ属 *Juglans* L. (図版1-2 a, 2 b：UP-9から出土)

UP-9の覆土からとUP-39の覆土内焼土から内果皮が0.09g検出されている。内果皮はすべて破片である。核表面には縦に浅い溝状の模様がある。これらの特徴からオニグルミ *Juglans sieboldiana* Maxim. と判断される。

不明 (図版1-3：UP-9から出土)

UP-9の覆土からとUP-39の覆土内焼土から写真3に図示した種子が8粒検出されている。手元に比較資料がないので、分類することが出来なかった。計測値は長さ2.5、幅0.7。

(4) 若干のコメント

検出された炭化植物はキハダ属とクルミ属であった。いずれも、集落の周囲に認められる木本のもので、可食性の高い植物である。

後世の攪乱を受けていない層準の土壌を採取することを目的として、各時代の遺構のサンプリングを実施してきた。その結果、縄文文化、中・近世の遺構からは必ず栽培種子、野生種子が検出できることがわかってきた。しかし、縄文時代の各時期から検出された資料を検討すると、遺跡によりかな

り種子の出土量に隔たりがあり、その原因は不明である。

今回、土壌の採集を試みた遺構は土坑の覆土と覆土内の焼土からで、炭化植物の出土量はきわめて少なかった。これまでのサンプリングの例を見ると、焼土遺構の場合、被熱により植物種子が燃え尽きてしまうようで、炭化種子の検出量は少ないという傾向にある。今後も、縄文時代の土壌サンプリングについて、いろいろな立場から検討していくことが必要である。

* 札幌国際大学博物館／客員研究員

表V-3-1 フローテーション試料一覧

試料番号	遺構	層位	採取範囲	乾燥重量 (g)	体積 (l)	残渣重量 (g)	浮遊物 (g)	土器 (g)	フレイク (g)	礫 (g)	骨片 (g)	炭化物 (g)	種子 (g)	備考
上1-1	UP-9	覆土下	—	19,900	25.8	1,312	51.5	15.4		4.3		0.97	0.08	
上1-2	UP-39	焼土	—	28.3	6.7	129.1	9.8	0.1	0.1	0.1	0.02	0.37	0.01	
合計				19,928	32.5	1,441	61.3	15.5	0.1	4.4	0.02	1.34	0.09	

表V-3-2 上台1遺跡炭化種子一覧

試料番号	遺跡名	遺構名	採取地点・層位	推定時期	キハダ属 (片)	クルミ属 (g)	不明(片)
上1-1	上台1遺跡	UP-9	覆土下	縄文時代後期前葉	4	0.08	3
上1-2	上台1遺跡	UP-39	覆土内焼土	縄文時代後期前葉		0.01	8



図版V-3-1 種実遺体

Ⅵ まとめ

1. 遺構

検出された遺構は住居跡（UH）1軒、土坑（UP）59基、Tピット（TP）5基、配石遺構（US）2基、集石・礫集中（US）4カ所、石囲い炉（US）14基、焼土（UF）4カ所、フレイク集中（UFC）4カ所、立石7基、柱穴状の小ピット（USP）78基である。すべて縄文時代のものである。

支流1に面した河岸段丘上では、住居跡1軒、土坑29基、配石遺構1基、集石1カ所、石囲い炉5基、フレイク集中2カ所、立石7基、柱穴状の小ピット75基が検出された。

住居跡（UH-4）は1軒のみの検出であった。径4mほどの円形プランで、床面中央に石組み炉が検出されたことから住居跡としたものである。周囲の墓と関連すると考えた場合、通常の住居ではなく、祭祀的な施設としての可能性もある。

土坑は周辺の出土遺物や規模・形状などから、多くは縄文時代後期前葉後半と考えられる。墓の可能性のあるものは23基（UP-7・8・11・12・16・18・19・21~23・30・32・35・37~39・42・57~60・62・63）あり、このうち、坑口部の径が1mほどの、くびれが弱いフラスコ状の土坑（UP-8・16・18・21~23・32・35・37・42・57~59・63）が14基ある。フラスコ状の土坑には礫を伴うものがあり、坑口部から覆土内にかけて礫その他の遺物がまがまって出土するもの（UP-8・16・21・59）、1~数点の礫が覆土内からまばらに出土するもの（UP-18・22・23・35・37・60）がある。他に、坑底から台石2、3点が出土したもの（UP-11）、ほぼ完形の土器を伴ったもの（UP-11・12・30）、土器片と礫が出土した小型土坑（UP-19・62）などがある。

UP-12ではⅣ群 a 類のトリサキ式相当の土器が、坑底に薄く埋め戻した黒色土の上からまがまって出土した。一個の土器を2つに割り、内面を上向きにして、意図的に2枚重ねたと見られる状態であった。ほぼ完形に復元されたが、胴の一部に大きな割れ口が開いていた。外側に剥離痕が広がっていたことから、内側から衝撃を加えて打ち割ったと見られる。

UP-19・62は確認面の長軸が50cmに満たない小型の土坑である。UP-19は2つに割れた土器片の1つが壁際に立った状態で、もう1つは坑口部から出土した。UP-62は覆土下位から台石が1点、坑口部付近から土器片がまがまって出土した。これらを墓とした場合、その大きさから、乳幼児の墓である可能性もある。

河岸段丘面には、この他に柱穴状の小ピットや立石と呼称した遺構なども分布している。

柱穴状のピットは周辺の低位段丘部分で75基が検出された。径や深さ、断面形状などからグループ分けをし、建物の存在を検討したが、判断としない。USP群1)としてくくったものにその可能性がある程度である（図Ⅲ-84）。石斧および石斧片を出土したものが2基（USP-26・46）あった。柱穴状の小ピットから石斧が出土した例は八雲町栄浜1遺跡（北埋調報175）のSP-8、森町濁川左岸遺跡（北埋調報208）のSP-2、森町倉知川右岸遺跡（北埋調報196）のSP-60などがある。

他に、覆土内から楕円形の扁平礫が立った状態で出土した例が1基（USP-74）あった。Ⅲ章においても述べたとおり立石として取り扱った7基についても、同様のものではあったと考えられる。またUP-64（図Ⅲ-54）のような礫が納まる大きさに掘り込んだ土坑も、礫が立っているか横になっているかの違いだけで、立石やUSP-74と同様の遺構と考えてよいのかもしれない。

支流2に面した地区では、土坑20基、石囲い炉9基、焼土2カ所、フレイク集中2カ所の遺構が検

出された。支流1に面した南東側の地区に比べると、土坑のあり方がバラエティに富んでいるように見える。UP-4・6・45・46は大型の土坑であった。UP-6は坑底面で付属遺構が5基（PP-1～5）検出された。そのうちPP-1～3は墓の可能性が高いものである。UP-45・46は隣接して検出されたもので、いずれも墓の可能性はある。UP-4・6は縄文時代後期前葉、UP-45・46は縄文時代中期前半のものである。

UP-14・25も墓と考えられるものである。これらは径2m内外の円形プランの土坑であり、ともに礫層を掘り抜いている。坑底付近と壁際をKo-gで埋め戻した後、土坑掘り上げ時に出た礫を投入しながら、さらに埋め戻していた。出土した礫は人頭大より小さいものが大半であったが、UP-25の坑底部からは53.8kgと101.3kgの極端に大きな礫が2個出土している。

UP-15・29は坑底から台石・石皿の素材と考えられる大型の扁平礫が出土した土坑である。礫の重量はいずれも30kg前後であるが、こうした土坑は南東側の地区では検出されていない。

支流1に面した遺構が、ほとんど縄文時代後期前葉後半、ほぼ同時期のものであるのに対して、支流2に面した遺構は縄文時代中期前半から後期前葉にかけてのものである。

2. 遺物

出土した遺物の主体は縄文時代後期前葉のものである。なかでも大津Ⅶ群相当の土器が多い。大津Ⅶ群に先行するトリサキ式は少なく、復元したものではUP-12の副葬された土器があげられる程度である。

大津Ⅶ群相当の土器には口縁部を欠いた壺型と思われるものがある（図Ⅱ-12-35）。この土器は喪棺として使用されたと報告されている八雲町浜松5遺跡の2号埋設土器（1995 八雲町教委『浜松5遺跡』）に類似するが、T-12区周辺の包含層中で出土した破片が接合したものである。森町倉知川右岸遺跡UP-34からも、頸部より上を欠く壺型土器が出土している（2004 道埋文『森町倉知川右岸遺跡』北埋調報196）。

出土した石器は、台石・石皿がもっとも多く、239点（22%）出土した。この他にたつき石171点（16%）、すり石類（すり石・扁平打製石器・北海道式石冠）146点（13%）、加工痕のある礫36点（3%）、砥石7点（0.6%）を加えると、出土石器全体の50%以上を礫石器が占める。扁平打製石器は、包含層から57点出土しており、N-9区とその周辺（16点）、T-52区とその周辺（14点）、2カ所の集中があった。

剥片石器類では石鏃154点（14%）、スクレイパー160点（15%）が多い。石鏃では有茎が106点ともっとも多く、凸基53点、平基48点、凹基5点からなる。凸基53点のうち44点が支流2に面した地区での出土であった。（影浦）

引用・参考文献

- 秋田県教育委員会 1999『伊勢堂岱遺跡』秋田県文化財調査報告書第293集
- 秋元信夫 1990『環状列石と建物跡—大湯環状列石近傍に分布する建物跡の分析—』『よねしろ考古』第6号
- 石川徹 1967『札幌部手稲町砂山出土の土器について』『北海道考古学』第3輯
- 今井富士夫・磯崎正彦 1968『十腕内遺跡』岩木山 岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書 岩木山刊行会
- 大島直行ほか 1979『知内川中流域の縄文時代遺跡』知内町教育委員会
- 大泰司統 2001『北海道の石冠—田川賢蔵氏採集の石冠—』『北海道考古学』第37輯
- 大沼忠春ほか 1976『元和』乙部町教育委員会
- 大沼忠春ほか 1977『統 元和』乙部町教育委員会
- 大沼忠春 1981『北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について』『考古学雑誌』66-4
- 大沼忠春 1986『道南の縄文前期土器群の編年について(2)』『北海道考古学』第22輯
- 葛西勲 1979『十腕内Ⅰ式土器の編年的細分』『北奥羽古代文化』第11号
- 葛西智義 1994『縄文時代後半期—後期—』『北海道考古学』第30輯
- 久保泰 1978『鬼沢B遺跡・棚石遺跡調査報告』松前町教育委員会
- 久保泰・井上真理子・石本省三・鈴木正語ほか 1983『白坂』松前町教育委員会
- 児玉大成 1999『小牧野遺跡における環状列石の構築時期』『青森県考古学』第11号
- 財北海道埋蔵文化財センター 1986『知内町湯の里3遺跡』北埋調報32
- 財北海道埋蔵文化財センター 1986『木古内町建川1・新道4遺跡』北埋調報33
- 財北海道埋蔵文化財センター 1987『上磯町矢不來2遺跡』北埋調報37
- 財北海道埋蔵文化財センター 1987『木古内町建川2・新道4遺跡』北埋調報43
- 財北海道埋蔵文化財センター 1988『木古内町新道4遺跡』北埋調報52
- 財北海道埋蔵文化財センター 2000『八雲町シラリカ2遺跡』北埋調報142
- 財北海道埋蔵文化財センター 2002『八雲町山越3遺跡・山越4遺跡』北埋調報166
- 財北海道埋蔵文化財センター 2002『八雲町栄浜1遺跡』北埋調報175
- 財北海道埋蔵文化財センター 2003『八雲町落部1遺跡』北埋調報181
- 財北海道埋蔵文化財センター 2003『森町濁川左岸遺跡—B地区—』北埋調報190
- 財北海道埋蔵文化財センター 2003『森町本茅部1遺跡』北埋調報191
- 財北海道埋蔵文化財センター 2004『森町倉川右岸遺跡』北埋調報196
- 財北海道埋蔵文化財センター 2004『森町石倉2遺跡』北埋調報197
- 財北海道埋蔵文化財センター 2004『森町本茅部1遺跡2』北埋調報199
- 財北海道埋蔵文化財センター 2004『森町石倉3遺跡・石倉5遺跡』北埋調報205
- 財北海道埋蔵文化財センター 2004『森町濁川左岸遺跡—A地区—』北埋調報208
- 斎藤傑 1974『松前町大津遺跡発掘調査報告書』松前町教育委員会
- 西蓮寺健 1976『松前町原口遺跡発掘調査報告書』松前町教育委員会
- 佐藤忠雄 1975『島崎遺跡』森町教育委員会
- 鈴木克彦 1999『北海道渡島・松山地域の中期末葉から後期初頭の編年—北海道西南部の縄文後期の編年学的研究1』『北海道考古学』第35輯

- 鈴木克彦 1999 「北海道渡島・桧山地域の後期前～中葉の編年 北海道西南部の縄文後期の編年学的研究2」『國學院大學 考古学資料館紀要 開館七十周年記念』第15輯
- 鈴木克彦 2001 『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣
- 鈴木正語 三上英則 大矢内愛史ほか 2003 『泉沢2遺跡 A地点』木古内町教育委員会
鷹巣町教育委員会 2002 『伊勢堂岱遺跡発掘調査報告書Ⅰ』鷹巣町埋蔵文化財調査報告書第8集
鷹巣町教育委員会 2003 『伊勢堂岱遺跡発掘調査報告書Ⅱ』鷹巣町埋蔵文化財調査報告書第9集
- 高橋正勝 1974 「知内町涌元遺跡出土の土器と北海道西南部の縄文時代後期前半について」『北海道の文化・31』
- 高橋正勝 1994 「北海道南部の土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣
- 富樫泰時 1981 「東北地方」『縄文土器大成2』講談社
- 戸沢光則編 1994 『縄文時代研究辞典』東京堂出版
- 成田滋彦 1994 「青森県の土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣
- 成田滋彦 1989 「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観4』小学館
- 藤井安正 1990 「大湯環状列石周辺遺跡の配石遺構群について」『よねしろ考古』第6号
- 古屋敷則雄ほか 1993 『戸井貝塚Ⅲ』北海道亀田郡戸井町教育委員会
- 古屋敷則雄ほか 1994 『戸井貝塚Ⅳ』北海道亀田郡戸井町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1992 『コタン温泉遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1995 『浜松5遺跡』八雲町教育委員会
- 村越潔 1987 「北東北の葬制」『よねしろ考古』第3号
- 柳澤清一 1990 「『岩木山』編年の再検討」『北奥古代文化』第20号 北奥古代文化研究会
- 矢吹俊男 1988 「配石遺構」『北海道考古学』第24輯
- 山本暉久 1999 「遺構研究 配石遺構」『縄文時代』第10号 縄文時代文化研究会

表1 遺構規模一覽(1)

住居跡

遺構名	グリッド	縦向き方位	規模			形状	備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)		
LP-4	R6-9	Vc層中位	4.14/4.25	1.93/3.70	0.3	ほぼ円形	遺構を持つ。

土坑

遺構名	グリッド	縦向き方位	規模			形状	長軸方位	備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)			
LP-1	J-41	Vc層中位	1.63/(1.52)	1.10/1.32	0.40	長條円形	N-35°-E	掘削点層土1に於いて発出
LP-2	O-41-42	埋藏土層	0.55/0.42	0.54/(0.30)	0.14	円形	-	-
LP-3	O-30	Vc層下位	0.95/0.70	0.60/0.40	0.18	楕円形	N-89°-E	掘削点層土と小堀1点を中央部において発出
LP-4	N-45	Vc層下位～埋藏土層	(1.64)/(1.18)	(0.97)/(0.61)	0.52	隅丸方形	N-67°-W	-
LP-6	M-A-45+46	埋藏土層	1.49/3.08	1.00/2.36	0.66	楕円形	N-54°-E	-
LP-7	O-P-10+11	Vb層	2.25/1.45	2.41/1.23	1.25	不整形形	-	-
LP-8	T-9	埋藏土層	1.62/1.38	1.56/1.35	0.66	ほぼ円形	-	小フラスコ状・鉄熱線・炭・骨片
LP-9	P-11	Vb層	2.94/1.30	(1.57)/1.13	1.21	不整形形	-	-
LP-10	O-45+46	Vc層中位	1.44/1.10	(0.70)/0.38	0.36	楕円形	N-27°-W	-
LP-11	O-9	Vc層下位	(1.30)/0.96	(1.04)/0.66	0.60	楕円形	不明	炭石・人頭大塚が各1箇所・土層1個体確認済
LP-12	O-9+P-9	Vb層	3.44/2.71	3.33/1.54	0.99	隅丸方形	-	-
LP-13	R6-50	Vc層上層	1.98/1.66	1.36/1.08	0.54	楕円形	N-12°-W	-
LP-14	R6-51	Vc層下位～埋藏土層	2.30/1.53	1.90/1.70	1.15	円形	-	-
LP-15	O-45	埋藏土層～埋藏土層	0.88/0.78	0.79/0.65	0.18	楕円形	N-82°-E	-
LP-16	S-11	Vc層中位	1.05/0.93	(0.96)/(0.84)	0.48	円形	-	鉄熱線・炭
LP-18	S-8	Vc層下位	1.54/1.26	1.40/1.16	0.75	ほぼ円形	-	小フラスコ状
LP-19	R-9	Vc層下位	(0.46)/(0.42)	0.38/0.32	0.32	楕円形	不明	-
LP-20	R6-46	埋藏土層～埋藏土層	0.95/0.63	0.95/0.62	0.39	ほぼ円形	N-17°-W	-
LP-21	S-12	埋藏土層	1.46/1.40	1.24/1.30	0.64	ほぼ円形	-	小フラスコ状・鉄熱線・土器多数
LP-22	O-11	Vc層	1.23/1.02	1.08/0.96	0.84	ほぼ円形	-	小フラスコ状・炭土に埋1点
LP-23	R-14	Vc層	1.30/1.06	1.20/0.96	0.76	ほぼ円形	-	小フラスコ状・埋土中に埋1点
LP-24	S-51+52	埋藏土層	1.01/0.84	0.78/0.86	0.21	楕円形	N-1°-E	-
LP-25	S-52	Vc層下位～埋藏土層	1.98/1.76	1.93/1.64	0.94	円形	N-20°-E	-
LP-26	O-46	埋藏土層	0.80/0.54	0.85/0.47	0.38	円形	N-17°-W	-
LP-27	P-46	埋藏土層	0.71/0.53	0.66/0.50	0.23	隅丸方形	N-69°-E	-
LP-28	R-47	Vc層下位	(0.79)/1.58	-/0.58	0.42	隅丸方形	N-4°-W	-
LP-29	R6-46	埋藏土層	0.83/0.51	0.78/0.53	0.48	円形	-	-
LP-30	O-12	埋藏土層	(1.12)/(0.82)	(0.96)/(0.58)	(0.34)	楕円形	N-66°-E	掘削点の確認・口縁の一部を欠く小型燧石土層1点
LP-31	O-12	埋藏土層	0.85/0.67	0.72/0.70	0.32	長條円形	N-59°-E	-
LP-32	S-15	埋藏土層	1.10/1.06	1.06/0.94	0.52	ほぼ円形	-	小フラスコ状
LP-33	R-11	埋藏土層	0.95/0.84	0.84/0.72	0.36	ほぼ円形	-	-
LP-34	P-Q-11	Vb層	1.74/1.18	1.06/1.14	0.32	ほぼ円形	-	-
LP-35	S-14	埋藏土層	1.10/1.22	0.98/1.10	0.80	ほぼ円形	-	-
LP-36	R-7	埋藏土層	(0.90)/(0.84)	(0.60)/(0.54)	0.30	円形	-	-
LP-37	T-13	Vc層	1.18/1.20	1.00/1.16	0.45	不整形形	-	-
LP-38	P-10	Vc層	0.87/0.44	0.87/0.33	0.44	長條円形	N-36°-W	-
LP-39	Q-9+10	Vb層	2.79/2.56	1.92/1.83	0.55	長條円形	N-37°-W	-
LP-40	R-30	埋藏土層	0.58/0.30	0.50/0.25	0.18	楕円形	N-84°-W	-
LP-41	P-22	埋藏土層	1.07/0.89	0.81/0.71	1.20	楕円形	N-8°-W	-
LP-42	P-12	Vb層	(0.76)/(0.73)	0.95/0.75	0.57	楕円形	N-0°	-
LP-43	Q-R-30	埋藏土層	1.54/1.34	(0.77)/0.70	0.28	楕円形	N-37°-W	-
LP-44	P-18	埋藏土層	1.80/1.02	1.88/0.62	1.02	楕円形	N-86°-W	-
LP-45	R-48	Vc層上層	(1.99)/(1.73)	(1.60)/(1.48)	0.40	隅丸長方形	N-11°-E	-
LP-46	S-48	Vc層上層	2.34/2.10	1.90/1.70	0.43	隅丸長方形	N-90°	-
LP-47	R-11	Vc層上層	0.64/0.48	0.60/0.46	0.30	ほぼ円形	-	-
LP-50	N-17	Vc層上層	1.04/0.91	0.90/0.82	0.32	ほぼ円形	-	-
LP-51	N-17	Vc層上層	3.31/2.67	3.13/2.49	0.58	円形	-	-
LP-53	N-10	埋藏土層	0.98/0.63	0.78/0.51	0.40	楕円形	N-85°-E	-
LP-54	L-9	埋藏土層	0.78/0.60	0.74/0.43	0.31	円形	-	-
LP-55	L-11	Vc層～埋藏土層	(1.30)/(1.22)	1.36/1.17	0.25	不明	-	-
LP-57	T-13	埋藏土層	0.88/1.12	0.34/0.38	0.44	ほぼ円形	-	-
LP-58	T-12	埋藏土層	1.04/0.86	0.92/0.84	0.46	ほぼ円形	-	-
LP-59	U-11	埋藏土層	2.42/2.10	1.68/1.32	0.74	楕円形	N-88°-E	-
LP-60	T-12	埋藏土層	0.94/0.76	0.88/0.69	0.38	ほぼ円形	-	-
LP-62	S-10	埋藏土層	0.48/0.34	0.46/0.30	0.38	円形	-	掘削口に口縁部分・層土下包に小燧石層
LP-63	U-9	埋藏土層	1.12/1.00	0.99/0.74	0.42	不整形形	-	-
LP-64	T-11	埋藏土層	0.46/0.44	0.26/0.15	0.18	楕円形	N-26°-E	-
LP-66	K-L-10	Vc層上層	1.30/0.97	0.85/0.58	0.41	楕円形	N-12°-W	-
LP-67	O-17	埋藏土層	2.46/1.29	1.93/1.46	0.80	不整形形	-	-

表1 遺構規模一覧(2)

Tピット

遺構名	グリッド	確認法部位	規模			形状	長軸方位	備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)			
TP-1	L-14	耳層	(1,30)×(1,46)	0,57/0,13	1,15	長機内形	N-64°W	
TP-2	O-16	耳層	2,21/2,30	0,51/0,12	1,07	長機内形	N-55°W	
TP-3	Q-18	耳層	2,32/2,08	0,66/0,17	1,12	機内形	N-60°W	
TP-4	N-21	耳層	2,31/2,40	0,75/0,19	1,27	長機内形	N-42°W	
TP-5	Q-21	耳層	2,37/2,38	0,69/0,16	1,36	長機内形	N-50°W	

配石遺構

遺構名	グリッド	確認法部位	規模(m)	形状	備考
LS-13	S-9	Vc層下位	不明	不明	区画・軸動
LS-19	K-11・L-9 ~11・M-9	Vb層	8,5×7,0	不明	

集石

遺構名	グリッド	確認法部位	規模(m)	形状	備考
LS-14	N-9	Vc層上位	0,75×0,45	機内形	
LS-15	L-8	耳層	1,2×0,6	機内形	
LS-16	K-10	Vb層下位	1,2×0,6	機内形	
LS-20	T-9	耳層上位	不明	三つ石	扁平楕円状遺構。

石囲い炉

遺構名	グリッド	確認法部位	規模(m)	形状	備考
LS-1	O-31	Vc2層	0,84 × 0,44	機内形	
LS-2	P-46	Vc層中位	0,51 × 0,38	半円形	
LS-3	Q-45	Vc層中位	(0,40) × (0,34)	L字形	
LS-4	P-Q-8	Vc層上位	0,45 × 0,35	円形	
LS-5	O-45	Vc層下位	0,38 × (0,26)	半円形	
LS-6	Q-9	Vc層下位	(0,95) × 0,50	不明	形状とどめていない・手掘
LS-7	S-12	Vc層下位	(1,26) × 0,70	長機形	
LS-8	S-50	Vc層下位	(0,50) × 0,52	不明	
LS-9	R-50	Vc層中位	不明	不明	
LS-10	R-45	Vc層下位	(0,40) × 0,26	半円形	
LS-11	R-5~48	Vc層上位	(0,73) × 0,42	不明	
LS-12	T-51	Vc層下位	0,58 × 0,38	機内形	
LS-17	T-10	耳層	0,96 × 0,78	正方形	一部が欠く。
LS-18	T-11	耳層	0,88 × 0,80	コの字形	

焼土

遺構名	グリッド	確認法部位	規模(m)	備考
UF-1	N-43	Vb層	0,36 × 0,64 × 0,20	
UF-2	R-50	Vc層中位	0,76 × 0,67 × 0,12	
UF-4	L-9	Vb層	2,30 × 1,40 × 0,12	
UF-5	N-13	Vb層	0,80 × 0,44 × 0,06	

フレイク集中

遺構名	グリッド	確認法部位	規模(m)	備考
UFC-1	T-54	Vc2層中位	0,18 × 0,17	黒曜石の集中
UFC-2	T-9	Vc層下位	2,0 × 1,6 × 0,2	赤色頁岩の集中
UFC-3	T-8	Vc層下位	—	黒曜石の増粘遺構
UFC-4	T-52	Vc層下位	0,37 × 0,20	メノウフレイク集中

立石

遺構名	グリッド	確認法部位	調査量(g)	素材	掘り込み規模(m)	備考
立石1	G-8	耳層中位	4,030	安山岩	0,22 × 0,16/0,18	
立石2	R-8	耳層中位	2,350	安山岩	0,18 × 0,17/0,32	
立石3	R-9	耳層中位	1,250	安山岩	0,25 × 0,20/0,22	
立石4	S-9	耳層中位	7,740	安山岩	0,38 × 0,22/0,42	
立石5	S-10	耳層中位	2,940	安山岩	0,19 × 0,14/0,20	
立石6	T-9	耳層中位	6,680	安山岩	0,26 × 0,17/0,10	
立石7	T-10	耳層中位	1,335	安山岩	0,16 × 0,16/0,28	

表1 遺構規模一覧(3)

柱六状の小ピット

遺構名	グリッド	確認面層位	規模(m)	備考
USP-1	R-10	Ⅱ	(0.20×0.20)×0.24	
USP-2	R-10	Ⅱ	(0.18×0.18)×0.21	
USP-3	R-10	Ⅱ	(0.24×0.20)×0.31	
USP-4	R-10	Ⅱ	(0.18×0.16)×0.24	
USP-5	R-10	Ⅱ	(0.20×0.17)×0.26	
USP-6	R-10	Ⅱ	(0.20×0.18)×0.24	
USP-7	R-10	Ⅱ	(0.18×0.16)×0.18	
USP-8	S-10	Ⅱ	(0.20×0.18)×0.18	
USP-9	S-10	Ⅱ	(0.17×0.16)×0.22	
USP-10	S-10	Ⅱ	(0.21×0.21)×0.21	
USP-13	S-10	Ⅱ	(0.14×0.12)×0.20	
USP-14	S-10	Ⅱ	(0.20×0.18)×0.32	
USP-15	S-10	Ⅱ	(0.24×0.20)×0.38	
USP-16	S-9	Ⅱ	(0.14×0.11)×0.05	
USP-17	R-9	Ⅱ	(0.18×0.16)×0.18	
USP-18	R-9	Ⅱ	(0.24×0.18)×0.14	
USP-19	R-9	Ⅱ	(0.28×0.26)×0.21	
USP-20	R-9	Ⅱ	(0.25×0.19)×0.20	
USP-21	R-9	Ⅱ	(0.14×0.13)×0.09	
USP-22	R-9	Ⅱ	(0.20×0.19)×0.18	
USP-23	R-8	Ⅱ	(0.22×0.20)×0.06	
USP-24	R-8	Ⅱ	(0.19×0.18)×0.14	
USP-25	R-8	Ⅱ	(0.28×0.19)×0.09	
USP-26	S-9	Ⅱ	(0.20×0.18)×0.34	層土内で石所出土。
USP-28	Q-8	Ⅱ	(0.30×0.22)×0.30	
USP-29	T-10	Ⅱ	(0.24×0.17)×0.38	
USP-30	Q-8	Ⅱ	(0.26×0.25)×0.23	
USP-31	R-9	Ⅱ	(0.18×0.16)×0.20	
USP-32	S-8	Ⅱ	(0.18×0.17)×0.12	
USP-33	S-8	Ⅱ	(0.31×0.27)×0.16	
USP-34	S-9	Ⅱ	(0.26×0.20)×0.14	
USP-35	S-9	Ⅱ	(0.12×0.09)×0.15	
USP-36	S-9	Ⅱ	(0.11×0.08)×0.08	
USP-37	T-13	Ⅱ	(0.22×0.17)×0.27	
USP-38	S-9	Ⅱ	(0.06×0.09)×0.10	
USP-39	S-9	Ⅱ	(0.16×0.17)×0.13	
USP-40	S-9	Ⅱ	(0.23×0.19)×0.34	
USP-41	R-9	Ⅱ	(0.13×0.10)×0.12	
USP-42	R-9	Ⅱ	(0.12×0.12)×0.09	
USP-44	S-9	Ⅱ	(0.14×0.12)×0.06	
USP-45	U-10	Ⅱ	(0.21×0.17)×0.26	
USP-46	U-10	Ⅱ	(0.25×0.22)×0.31	石所片出土。
USP-48	Q-10	Ⅱ	(0.24×0.18)×0.16	
USP-49	M-10	V c	(0.31/-)×0.40	
USP-50	M-11	V c	(0.40×0.34)×0.30	
USP-51	M-13	V c	(0.32/-)×0.24	
USP-56	R-10	Ⅱ	(0.36×0.28)×0.12	
USP-58	S-9	Ⅱ	(0.25×0.21)×0.16	
USP-70	S-9	Ⅱ	(0.25×0.22)×0.32	
USP-71	S-9	Ⅱ	(0.24×0.18)×0.20	
USP-73	S-10	Ⅱ	(0.18×0.16)×0.16	
USP-74	S-10	Ⅱ	(0.20×0.17)×0.32	層土内で燻土。立石と関連?
USP-75	S-10	Ⅱ	(0.16×0.14)×0.29	
USP-76	S-10	Ⅱ	(0.21×0.16)×0.11	
USP-82	S-10	Ⅱ	(0.18×0.15)×0.28	
USP-83	S-10	Ⅱ	(0.30×0.14)×0.22	
USP-84	S-10	Ⅱ	(0.22×0.15)×0.18	
USP-88	S-10	Ⅱ	(0.36×0.23)×0.36	
USP-92	S-10	Ⅱ	(0.24×0.18)×0.29	
USP-96	S-10	Ⅱ	(0.32×0.22)×0.23	
USP-97	S-10	Ⅱ	(0.16×0.14)×0.27	
USP-99	S-10-11	Ⅱ	(0.16×0.12)×0.14	
USP-99	S-10	Ⅱ	(0.18×0.16)×0.29	
USP-100	P-9	Ⅱ	(0.25×0.21)×0.26	
USP-101	P-9	Ⅱ	(0.36×0.18)×0.24	
USP-102	Q-9	Ⅱ	(0.29×0.23)×0.25	
USP-103	Q-9	Ⅱ	(0.16×0.10)×0.26	
USP-104	Q-9	Ⅱ	(0.18×0.16)×0.22	
USP-105	T-10	Ⅱ	(0.28×0.24)×0.34	
USP-106	S-10-11	Ⅱ	(0.21×0.20)×0.27	
USP-107	Q-11	Ⅱ	(0.22×0.18)×0.19	
USP-108	Q-9	Ⅱ	(0.28×0.23)×0.30	
USP-109	Q-11	Ⅱ	(0.23×0.21)×0.18	
USP-110	Q-9	Ⅱ	(0.34×0.18)×0.28	
USP-114	R-11	Ⅱ	(0.20×0.21)×0.18	
USP-120	S-11	Ⅱ	(0.25×0.21)×0.22	層土内から貫刺の燻土フレイク4枚出土。
USP-130	S-11	Ⅱ	(0.16×0.12)×0.29	
USP-131	S-11	Ⅱ	(0.30×0.26)×0.26	

表6 遺構出土掘載石器等一覧(1)

番号	図録番号	行方遺跡	遺物番号	器種	部位	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	取柄の有無	備考
LPF-4												
図録-7-9	図録33		89	石鏃	竪土上	頁岩	2.7	1.2	0.4	1.0		破片
図録-7-10	図録33		114	石鏃	竪土上	頁岩	3.8	1.4	0.3	1.0		
図録-7-11	図録33		85	石鏃	竪土上	頁岩	12.33	1.8	0.3	1.13		破片
図録-7-12	図録33		87	石鏃	竪土上	頁岩	12.21	1.2	0.4	1.11		破片
図録-7-13	図録33		113	スクレイパー	竪土上	頁岩	7.6	3.4	0.1	18.3		
図録-7-14	図録33		278	スクレイパー	竪土上	頁岩	7.9	3.7	0.9	24.2		
図録-7-15	図録33		1	スクレイパー	竪土上	頁岩	4.0	6.1	2.7	53.9		
図録-7-16	図録33		222	リフレイク	竪土上	頁岩	5.5	5.2	0.7	28.0		
図録-7-17	図録33		103	リフレイク	竪土上	頁岩	2.7	4.9	1.2	15.9		
図録-7-18	図録33		208	石核	竪土上	頁岩	2.1	4.0	4.0	37.7		
図録-7-19	図録33		221	石核	竪土上	頁岩	3.9	4.8	4.8	60.0		
図録-7-20	図録33		101	たたく石	竪土上	安山岩	9.4	4.2	2.7	138.9		
図録-7-21	図録33		242	たたく石	竪土上	安山岩	15.9	6.3	4.2	446.0		
図録-8-22	図録33		277	扁平打製石鏃	竪土上	安山岩	9.8	9.6	3.2	328.0		○
図録-8-23	図録33		40	石石	竪土上	安山岩	13.6	22.0	6.7	2890.0		○
図録-8-24	図録33		290	石石	竪土上	安山岩	22.0	29.5	12.0	7450.0		破片
LPF-4												
図録-10-2	図録33		3	つまみ付ナイフ	竪土上	頁岩	9.7	15.0	1.3	20.5		
図録-10-3	図録33		1	石石	竪土上	安山岩	24.5	16.0	12.6	805.0		石鏃から石石に変更
LPF-6												
図録-13-3	図録34		103	石鏃	竪土上	頁岩	3.1	1.2	0.4	1.4		
図録-13-4	図録34		127	石鏃	竪土上	頁岩	4.0	1.5	0.7	4.1		石鏃用磨石あり
図録-13-5	図録34		89	リフレイク	竪土上	頁岩	4.4	4.0	0.8	15.0		
図録-13-6	図録34		61	リフレイク	竪土上	頁岩	3.5	2.9	0.7	6.7		
図録-13-7	図録34		74	石鏃	竪土上	緑色頁岩	4.0	4.2	0.8	136.0		
図録-13-8	図録34		76	石鏃	竪土上	頁岩	13.61	11.0	10.43	12.81		刃磨削 2点検査
図録-13-9	図録34		17	たたく石	竪土上	安山岩	111.0	5.4	3.8	2263.0		
図録-13-10	図録34		88	石核	竪土上	安山岩	14.6	(12.4)	(11.8)	390.0		
図録-13-11	図録34		31	石石	竪土上	燧石	66.0	(12.1)	5.0	324.0		○ 破片
図録-13-12	図録34		27	石石	竪土上	安山岩	17.9	14.3	7.5	2480.0		
図録-14-3	図録34		168	石石	竪土上	安山岩	23.7	31.9	6.0	3392.0		
図録-14-4	図録34		194	石石	燧石	安山岩	245.0	291.0	81.5	5640.0		
図録-14-16	図録34	PP-1	3	リフレイク	竪土上	頁岩	3.2	3.9	0.4	5.5		
図録-14-17	図録34	PP-2	4	リフレイク	横切磨石	頁岩	9.3	3.6	0.8	19.6		
図録-14-18	図録34	PP-2	1	リフレイク	竪土上	頁岩	5.4	7.4	1.2	48.0		
図録-14-19	図録34	PP-3	7	スクレイパー	竪土上	頁岩	9.3	3.9	1.6	47.6		
LPF-8												
図録-16-3	図録35		86	石鏃	竪土上	黒曜石	1.43	(1.1)	0.2	10.2		破片
図録-16-4	図録35		61	石鏃またはナイフ	竪土上	黒曜石	39.5	43.0	12.8	21.3		
図録-16-5	図録35		59	三稜石製石鏃	竪土上	頁岩	4.5	4.4	1.2	8.0		
LPF-10												
図録-18-2	図録35		3	北海道式石鏃	竪土上	安山岩	10.5	14.6	8.0	916.0		○ 未成品
図録-18-3	図録35		2	石鏃	竪土上	安山岩	17.3	12.4	5.3	1420.0		
LPF-11												
図録-18-2	図録35		1	石石	竪土上	安山岩	13.5	15.3	7.8	2040.0		○
図録-18-3	図録35		2	石石	竪土上	安山岩	26.1	30.7	9.1	8400.0		○
図録-19-4	図録35		3	石石	竪土上	安山岩	36.6	33.4	11.1	18000.0		
LPF-12												
図録-20-9	図録36		134	石鏃	竪土上	頁岩	4.5	2.9	1.2	10.8		
図録-20-10	図録36		107	スクレイパー	竪土上	頁岩	4.9	4.7	1.0	31.4		
図録-20-11	図録36		150	リフレイク	竪土上	頁岩	4.6	1.9	0.4	2.9		
図録-20-12	図録36		110	扁平打製石鏃	Vc	安山岩	9.8	17.5	3.9	946.0		
図録-24-13	図録36		9	扁平打製石鏃	竪土上	安山岩	9.0	14.7	3.5	586.0		すり磨削
図録-24-14	図録36		9	扁平打製石鏃	竪土上	安山岩	11.4	16.1	4.0	844.0		
図録-24-15	図録36		45	扁平打製石鏃	竪土上	安山岩	10.1	16.9	5.3	1050.0		磨削的用途
図録-24-16	図録36		163	扁平打製石鏃	竪土上	安山岩	10.0	(10.0)	3.2	1002.0		○
図録-24-17	図録36		61	北海道式石鏃	竪土上	安山岩	10.4	12.8	5.3	980.0		
図録-24-18	図録36		175	石鏃	竪土上	安山岩	17.6	21.3	7.8	4750.0		
LPF-13												
図録-25-3	図録37		16	スクレイパー	竪土上	頁岩	4.4	7.6	0.9	26.2		
図録-25-4	図録37		2	石石	竪土上	安山岩	23.8	21.3	13.8	8540.0		破片
図録-26-5	図録37		5	石石	Vc	安山岩	25.2	(31.5)	13.0	14400.0		
図録-26-6	図録37		6	石石	Vc	安山岩	24.8	34.5	14.0	13400.0		
LPF-14												
図録-28-4	図録37		61	スクレイパー	竪土上	頁岩	3.6	4.5	1.0	16.0		
図録-28-5	図録37		96	北海道式石鏃	竪土上	安山岩	10.6	(10.0)	(4.8)	274.0		
図録-28-6	図録37		150	北海道式石鏃	竪土上	安山岩	8.4	12.7	6.5	1000.0		
LPF-25												
図録-29-4	図録37		2	扁平打製石鏃	竪土上	安山岩	6.6	14.3	4.1	576.0		すり磨削
図録-29-5	図録37		162	扁平打製石鏃	竪土上	安山岩	6.2	16.0	3.1	2340.0		すり磨削
図録-29-6	図録37		116	石石	竪土上	安山岩	17.8	16.4	10.5	3000.0		
LPF-18												
図録-30-2	図録38		58	石鏃	竪土上	頁岩	2.5	1.7	0.4	1.1		
図録-30-3	図録38		59	フレイク	竪土上	黒曜石	36.0	40.5	7.8	6.5		
LPF-29												
図録-31-1	図録38		3	たたく石	竪土上	安山岩	9.0	7.9	6.7	596.0		
図録-32-2	図録38		1	北海道式石鏃	竪土上	安山岩	8.4	9.0	7.0	650.0		
図録-32-3	図録38		2	北海道式石鏃	竪土上	安山岩	12.4	(15.2)	7.7	1798.0		
LPF-21												
図録-33-3	図録39		1	石石	竪土上	安山岩	114.0	(18.6)	8.0	2740.0		○
図録-33-4	図録39		78	石石	竪土上	安山岩	15.0	24.2	8.2	3800.0		
図録-33-5	図録39		2	石石	竪土上	安山岩	118.9	(21.4)	14.9	9716.0		○
LPF-28												
図録-35-1	図録39		1	たたく石	竪土上	安山岩	22.3	6.5	4.2	834.0		
LPF-26												
図録-35-2	図録39		1	北海道式石鏃	横切	安山岩	68.6	68.6	(7.3)	4440.0		破片
LPF-30												
図録-38-1	図録39		16	リフレイク	竪土上	頁岩	3.4	2.5	0.8	5.5		

表6 遺構出土掘載石器等一覧(2)

番号	図録番号	付属遺構	遺物番号	原種	層位	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	放射線 測定	備考
図録B-38-2	図録39		11-1	たたき石	層土	安山岩	9.6	6.0	3.1	306.3	○	
図録B-38-3	図録39		1	砂石	層土	安山岩	17.7	24.9	11.0	6500.0	○	
LP-57												
図録B-39-1	図録40		34	ナイフ	層土	頁岩	2.1	2.6	0.9	2.7		
LP-57												
図録B-40-2	図録40		76	ロフレイク	層土	頁岩	4.0	2.0	0.4	3.4		
図録B-40-3	図録40		75	スクレイパー	層土	頁岩	6.2	4.1	0.9	26.9		
図録B-40-4	図録40		74	たたき石	層土	安山岩	14.8	8.1	4.0	513.0		
図録B-40-5	図録40		65	扁平打製石	層土	安山岩	7.4	18.0	3.9	604.0		
LP-60												
図録B-41-1	図録41		8	砂石	—	安山岩	(16.1)	(20.1)	7.8	14170.0	○	
LP-60												
図録B-45-3	図録40		6	北海道式石剣	層土	安山岩	9.2	14.0	5.5	1070.0	○	
図録B-45-4	図録40		13	北海道式石剣	層土	安山岩	9.8	13.1	5.8	1100.0	○	
図録B-45-5	図録40		6	石剣	層土	安山岩	29.3	39.3	11.4	1820.0	○	
図録B-46-0	図録40		12	石剣	層土	安山岩	27.4	44.1	12.4	2470.0	○	
LP-60												
図録B-47-4	図録41		3	スクレイパー	—	頁岩	7.5	2.9	0.6	16.0		
LP-60												
図録B-50-1	図録41		1	砂石	層土	頁岩	26.4	37.0	6.4	4000.0		
図録B-50-2	図録41		2	砂石	層土	安山岩	19.6	22.7	4.6	3140.0		
図録B-50-3	図録41		3	石剣	層土	安山岩	23.6	28.3	7.5	6800.0	○	
LP-59												
図録B-51-1	図録41		1	砂石	層土	安山岩	21.2	(24.5)	11.6	10200.0		
LP-59												
図録B-52-5	図録42		72	つまみ付ナイフ	層土	頁岩	6.7	5.1	1.0	28.5		
LP-60												
図録B-52-2	図録42		5	スクレイパー	層土	頁岩	(2.7)	(4.7)	0.7	10.40		
図録B-52-3	図録42		4	砂石	層土	安山岩	(18.1)	(25.0)	8.7	14800.0		
LP-60												
図録B-54-3	図録42		8	ロフレイク	層土	頁岩	3.7	3.7	1.1	11.2		
LP-60												
図録B-55-1	図録42		1	砂石	層土	安山岩	34.5	42.3	8.6	10600.0		鏡片
LP-60												
図録B-56-1	図録42		5	砂石	層土	安山岩	19.1	30.9	8.2	6400.0	○	
LP-60												
図録B-58-1	図録42		1	北海道式石剣	層土	安山岩	(7.3)	(12.0)	6.7	6620.0		
LS-19												
図録B-65-2	図録42		M9-102	石剣	Vb	頁岩	4.1	1.4	0.6	2.4		
図録B-65-3	図録42		K11-101	石剣	Vb	頁岩	(4.5)	1.9	0.2	12.10		
図録B-65-4	図録43		L11-101	つまみ付ナイフ	Vb	頁岩	8.3	3.0	0.3	9.7		
図録B-65-5	図録43		M10-101	スクレイパー	Vb	頁岩	6.0	3.7	0.4	15.4		
図録B-65-6	図録43		L10-106	スクレイパー	Vb	頁岩	8.0	4.3	0.8	28.7		
図録B-65-7	図録43		L10-108	スクレイパー	Vc	頁岩	7.4	3.7	1.1	32.9		
図録B-65-8	図録43		L10-105	スクレイパー	Vb	頁岩	6.3	4.2	1.0	32.8		
図録B-65-9	図録43		M10-109	扁平打製石	Vb	安山岩	9.5	12.1	2.6	302.0		
図録B-66-10	図録43		M11-128	北海道式石剣	Vb	安山岩	9.6	14.5	6.4	1170.0		
図録B-66-11	図録43		M9-125	北海道式石剣	Vb	安山岩	9.6	12.8	5.6	1045.0		
図録B-66-12	図録43		M9-129	北海道式石剣	Vb	安山岩	9.0	14.7	7.1	1054.0		鏡片
図録B-66-13	図録43		M9-126	北海道式石剣	Vb	安山岩	(6.7)	(7.3)	5.0	2390.0		
図録B-67-14	図録43		L11-134	砂石	Vb	安山岩	16.9	25.2	4.5	2590.0		
図録B-67-15	図録43		K11-104	砂石	Vb	安山岩	28.2	41.1	10.5	11200.0		
図録B-68-16	図録44		L10-141	石剣	Vb	安山岩	21.0	(25.2)	20.7	2200.0		
図録B-68-17	図録44		L10-156	石剣	Vc	安山岩	26.8	38.2	13.9	2260.0		
LS-18												
図録B-75-1	図録44		1	たたき石	層土	安山岩	12.8	6.6	3.9	452.0	○	
LS-6												
図録B-71-1	図録44		3	砂石	—	安山岩	(15.2)	21.2	8.5	13100.0		
LS-7												
図録B-72-1	図録44		3	砂石	層土	安山岩	26.2	30.9	10.9	12200.0		
LS-9												
図録B-73-1	図録44		3	扁平打製石	—	安山岩	7.5	14.3	3.9	568.0	○	
LS-12												
図録B-73-2	図録45		2	たたき石	—	安山岩	7.9	13.6	3.5	354.0	○	砂石七割
LFC-1												
図録B-76-1	図録45		5	石剣	Vc	黒曜石	2.5	1.8	0.3	1.1		
LFC-4												
図録B-76-1	図録25-45		UFC4-1-3	フレイク	Vc	頁岩						鏡片体
			UFC4-2	石剣	Vc	頁岩	5.6	8.1	4.1	136.5		
			F-25-47	フレイク	Vc	頁岩						
図録B-76-2	図録25-45		UFC4-6	石剣	Vc	頁岩	5.7	7.3	2.4	93.0		鏡片体
			Q-51-4	石剣	Vc	頁岩	2.7	4.1	4.6	44.8		
図録B-76-3	図録25-45		UFC4-7	フレイク	Vc	頁岩	5.4	4.1	4.6	44.8		
LFC-2												
図録B-76-2	図録25-45		58	石剣	Vc	頁岩	3.1	1.4	0.4	1.4		
図録B-76-3	図録25-45		1	片フレイク	Vc	頁岩	5.3	5.8	1.3	56.7		
図録B-76-4	図録25-45		UFC 2-99・97・68・69・73・107・109・116・117・122・124・141・189・T8-11・T9-160	フレイク	Vc	頁岩	9.2	8.9	7.2	151.8		鏡片体
			UFC 2-97・108・121・122・189・512-550・T9-160	フレイク	Vc	頁岩	5.0	6.0	2.9	34.5		
図録B-76-5	図録25-45		UFC 2-81・82・109・122・137	フレイク	Vc	頁岩	3.0	5.8	2.1	18.9		鏡片体
図録B-76-7	図録25-45		UFC 2-22・33	フレイク	Vc	頁岩	3.4	3.6	2.6	16.8		鏡片体

表6 遺構出土掲載石器等一覧(3)

番号	図録番号	付属品類	遺物番号	器種	層位	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	取柄の有無	備考
図録-79-8	図録25-45		LFC 2-109・121・169	フレイク	Vc	貫岩	3.0	3.2	1.8	7.1		結合体
図録-79-9	図録25-45		LFC2-115	角石	Vc	安山岩	8.4	13.8	5.5	796.0		
LFC-3												
図録-80-1	図録25-46		15	石鏃またはナイフ	Vc	黒曜石	3.4	4.8	1.2	16.4		赤丹川産 破片
図録-80-2	図録25-46		3	スクレイパー	Vc	黒曜石	4.6	4.2	1.6	35.0		赤丹川産
図録-80-3	図録25-46		7	スクレイパー	Vc	黒曜石	6.4	3.5	0.9	15.3		赤丹川産
図録-80-4	図録25-46		11	スクレイパー	Vc	黒曜石	4.6	5.1	1.7	34.5		赤丹川産
図録-80-5	図録25-46		9	スクレイパー	Vc	黒曜石	4.8	3.6	1.2	14.2		赤丹川産
図録-80-6	図録25-46		8	スクレイパー	Vc	黒曜石	5.3	4.4	1.2	23.1		赤丹川産
図録-80-7	図録25-46		10-2	Rフレイク	Vc	黒曜石	2.7	4.4	1.3	9.8		赤丹川産
図録-80-8	図録25-46		4	Rフレイク	Vc	黒曜石	2.7	4.1	1.1	13.8		赤丹川産
図録-80-9	図録25-46		17	Rフレイク	Vc	黒曜石	3.3	3.7	0.9	9.2		赤丹川産
図録-80-10	図録25-46		6	Rフレイク	Vc	黒曜石	4.0	4.9	1.1	12.6		赤丹川産
図録-80-11	図録25-46		10	Rフレイク	Vc	黒曜石	4.2	4.2	1.7	25.3		赤丹川産
図録-80-12	図録25-46		16	Rフレイク	Vc	黒曜石	5.1	4.5	1.5	20.2		赤丹川産
図録-80-13	図録25-46		19-1	フレイク	Vc	黒曜石	3.2	3.1	0.9	10.2		遺棄産
図録-80-14	図録25-46		18	フレイク	Vc	黒曜石	3.3	4.5	1.0	16.0		赤丹川産
図録-80-15	図録25-46		5	フレイク	Vc	黒曜石	4.7	1.6	1.0	14.8		赤丹川産
図録-80-16	図録25-46		14	フレイク	Vc	黒曜石	4.0	2.7	1.0	17.1		赤丹川産
図録-80-17	図録25-46		1	フレイク	Vc	黒曜石	5.2	4.7	0.7	11.9		赤丹川産
図録-80-18	図録25-46		2	フレイク	Vc	黒曜石	5.0	5.5	1.3	29.9		赤丹川産
図録-80-19	図録25-46		13	角石	Vc	黒曜石	3.7	3.3	1.2	16.9		赤丹川産
図録-80-20	図録25-46		12	角石	Vc	黒曜石	5.5	4.8	1.1	28.7		赤丹川産
土石7												
図録-82-1	図録46		1	角石	層土1	安山岩	11.6	20.6	4.9	1335.0		
LSP-26												
図録-84-1	図録46		1	石斧	層土1	砂岩	9.2	4.2	2.6	154.0		
LSP-46												
図録-86-1	図録46		1	石斧	層土1	緑色頁岩	13.0	13.0	1.9	46.7		

表8 包含層出土掲載土器一覽(復元土器)(3)

調査番号	発出図番	器名	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	同一器体番号	分類	備考
調査-20-114	図版53	$O-12-20V \times \pi$, $H-11-21V \times \pi$ 1 , $T-9-13V \times \pi 1$, $T-9-3V \times \pi$ 1 , $T-9-25V \times \pi 1$, $T-9-9V \times \pi$ 2 , $T-9-10V \times \pi 1$, $T-9-9V \times \pi$ 1 , $T-9-20V \times \pi 1$, $T-9-10V \times \pi$ 2	10.7	6.3	11.4		B a (大津湾群相違)	器上に黒曜片と鉄屑を産じ、黒曜片もわずかに観察される。
		器12						
調査-23-150	図版53	$T-9a-13V \times 2 \times \pi$, $T-9b-13V \times 2 \times \pi$ 1 , $T-9a-12V \times 2 \times \pi 1$, $T-9a-12V \times 2 \times \pi$ 2	(25.7)	—	(26.5)	$T-9a-13V \times 2 \times \pi$, $T-9b-12V \times 2$ $\times 2$	B b (ワサマイC式相違)	器上に黒曜片と黒曜屑を産じ、黒曜屑の産出が僅しい。灰質陶質で、口蓋上にも黒曜文が施されている。
		器13						
調査-23-153	図版53	$S-10-13V \times \pi 1$, $S-10-10V \times \pi 1$, $S-10-10V \times \pi 2$, $S-10-10V \times \pi$ 1 , $T-10-10V \times \pi 1$, $T-10-10V \times \pi$ 2	(20.0)	—	(10.7)	$H-9-9-13V \times \pi 1$, $S-10-10V \times \pi 1$, $T-9-10-10V \times \pi 1$, $T-10-2V \times \pi$ 2 , $T-10-11V \times \pi 4$, $T-10-14V \times \pi 1$, $T-10-10V \times \pi 2$	B b (宇編式相違)	器上に黒曜片を産じ、黒曜屑の産出が僅しい。産出された器の多い器上で、黒曜片が産出されている。
		器14						
調査-23-154	図版53	$S-9-9-13V \times \pi 1$, $S-9-9-10V \times \pi 1$, $S-9-9-10V \times \pi 2$, $S-9-9-10V \times \pi$ 2 , $S-9-9-10V \times \pi 1$, $T-9-9-4V \times \pi$ 1 , $T-9-9-13V \times \pi 4$, $T-9-9-14V \times \pi$ 2	22.1	—	(9.6)	$S-9-9-13V \times \pi 1$, $S-9-9-10V \times \pi 1$	B b (宇編式相違)	器上に黒曜片を産じ、黒曜屑の産出もわずかに観察される。産出された器の多い器上で、黒曜片が産出されている。
		器15						
調査-23-162	図版62	$H-10-9-2V \times \pi 1$	(3.6)	(4.4)	(3.6)	$H-10-9-2V \times \pi 2$	B b	口蓋部は、器上に黒曜片と鉄屑を産じ、黒曜片もわずかに観察されている。陶質は灰質。
調査-24-163	図版25・53	$H-9-9-13V \times \pi 2$, $H-9-9-13V \times \pi 1$, $H-9-9-13V \times \pi$, $H-9-9-13V \times \pi$ 1 , $S-9-9-13V \times \pi 1$, $S-9-9-13V \times \pi$ 2	34.4	9.6	(41.9)	$H-10-13V \times \pi 5$, $H-9-9-13V \times \pi 3$, $S-9-9-13V \times \pi 1$	V c (船山B式相違)	器上に黒曜屑を産じ、黒曜屑の産出もわずかに観察される。産出された器の多い器上で、黒曜片が産出されている。
		器16						
調査-24-164	図版53	$H-10-13V \times \pi 3$, $H-10-13V \times \pi$, $H-10-13V \times \pi 2$	18.9 × 12.6 (横内径)	—	(11.7)	$H-10-13V \times \pi 1$	V c (船山B式相違)	黒曜屑と鉄屑がわずかに観察される。黒曜片もわずかに観察される。産出された器の多い器上で、黒曜片が産出されている。
		器17						
調査-24-165	図版53	$H-9-9-13V \times \pi 1$, $O-9-9-13V \times \pi$ 2 , $H-9-9-13V \times \pi 1$	19.6	—	9.9	$H-10-13V \times \pi 3$	V c (船山B式相違)	黒曜屑と鉄屑、黒曜屑がわずかに観察される。黒曜片もわずかに観察される。産出された器の多い器上で、黒曜片が産出されている。
		器18						

表10 包含層出土掘載土製品一覽

発掘番号	写真記録	グッド	部位	器物番号	分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備 考
図録25-175	図録的	T=52	Vc		土製品	3.5	3.6	1.0	6.7	№a
図録25-176	図録的	S=53	Vc	22	土製品	(1.9)	(3.8)	(0.9)	(3.3)	№a
図録25-177	図録的	S=9	Vc	53	土製品	(3.4)	(2.7)	(1.1)	(8.8)	№a
図録25-178a	図録的	S=9	Vc	116	土製品	(5.2)	(4.9)	(1.0)	(18.8)	№a 三角、三角状、
図録25-178b	図録的	T=9	Vc	125	土製品	(1.8)	(2.0)	(0.9)	(2.7)	№a
図録25-179	図録的	R=11	Vb	7	土製品	3.9	(3.7)	1.2	(10.5)	№a 三角状、
図録25-180	図録的	P=50	Vc	17	土製品	3.5	4.5	0.9	10.1	№a
図録25-181	図録的	T=12	Vc	148	土製品	(3.2)	(2.1)	(1.8)	(11.4)	№a
図録25-182	図録的	S=6	Vc 2	53	方形状土製品	4.4	8.2	0.6	24.2	№a 磁器かの単位で水平に磨したものを再利用したと考 えられる。
図録25-183	図録的	R=10	Vc	64	三角状土製品	5.1	(6.0)	0.8	(28.2)	№a 三角、三線送り型彫。
図録25-184	図録的	R=40	Vb	12	三角状土製品	5.6	(5.7)	0.9	(27.4)	№a 三角、三線送り型彫。
図録25-185	図録的	Q=11	Vc	78	三角状土製品	3.5	4.2	0.9	12.6	№a 三角、三線送り型彫。
図録25-186	図録的	S=10	Vc	138	三角状土製品	4.4	5.0	0.7	12.7	№a 六角、二線送り型彫。
図録25-187	図録的	T=53	Vc 2	68	三角状土製品	4.1	4.9	0.7	12.1	№a 縦文、三線送り型彫。
図録25-188	図録的	R=12	Vc	138	三角状土製品	4.0	4.7	0.5	11.1	№a 縦文、三線送り型彫。
図録25-189	図録的	R=9	Vb	30	三角状土製品	4.5	5.6	0.5	17.7	№a 縦文、三線送り型彫。
図録25-190	図録的	S=17	Vc	114	三角状土製品	3.9	4.9	0.6	16.0	№a 三線送り型彫。
図録25-191	図録的	S=12	Vc	131	三角状土製品	3.8	(3.5)	0.9	(9.1)	№a 縦文、全体に磨かれた、三線送り型彫。
図録25-192	図録的	Q=9	Vc	159	三角状土製品	3.4	4.5	0.9	13.4	№a 縦文、三線送り型彫。
図録25-193	図録的	S=14	Vc	9	三角状土製品	3.4	4.1	0.7	12.1	№a 縦文、三線送り型彫。
図録25-194	図録的	S=16	Vc	120	三角状土製品	3.4	3.9	0.7	8.3	№a 縦文、脱色付、三線送り型彫。
図録25-195	図録的	Q=46	Vc	75	円筒状土製品	3.3	2.9	0.5	6.7	№a

表11 包含層出土掘載石器等一覽(1)

番号	図録番号	角測定	器物番号	部位	原料	石種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備 考
№27-1	図録63	Q=10	32	Vc	石核	頁岩	2.8	1.5	0.3	0.9	
№27-2	図録63	L=14	3	Vb	石核	頁岩	(2.7)	1.6	0.3	(1.1)	
№27-3	図録63	Q=47	61	Va	石核	頁岩	3.3	1.5	0.4	2.1	
№27-4	図録63	M=27	1	Vc	石核	頁岩	3.4	2.1	0.3	1.6	
№27-5	図録63	Q=9	7	Vc	石核	メノウ質頁岩	3.5	2.1	0.5	2.5	
№27-6	図録63	P=9	79	Vc	石核	頁岩	4.9	2.0	0.3	2.9	
№27-7	図録63	P=19	1	Vc	石核	頁岩	5.2	2.0	0.4	3.4	
№27-8	図録63	R=46	1	Vb	石核	頁岩	(5.9)	(2.5)	0.5	(5.0)	
№27-9	図録63	Q=13	42	Vc	石核	頁岩	3.0	1.3	0.2	0.8	
№27-10	図録63	K=9	19	磨削面	石核	頁岩	3.5	1.3	0.5	1.6	
№27-11	図録63	P=43	2	Vc	石核	頁岩	3.2	1.5	0.7	2.8	
№27-12	図録63	M=16	4	Vb	石核	頁岩	3.8	1.5	0.3	1.8	
№27-13	図録63	M=27	6	Vc	石核	頁岩	(4.2)	1.6	0.3	1.6	
№27-14	図録63	Q=48	9	Vc	石核	頁岩	5.0	1.5	0.5	3.2	
№27-15	図録63	Q=17	4	Vc	石核	頁岩	(4.7)	1.7	0.3	(2.2)	
№27-16	図録63	N=18	1	Vc	石核	頁岩	(4.5)	1.6	0.3	(2.2)	
№27-17	図録63	Q=48	40	Vb	石核	頁岩	4.9	1.5	0.7	4.2	
№27-18	図録63	L=10	48	Vc	石核	頁岩	3.4	1.4	0.4	1.6	
№27-19	図録63	T=12	151	Vc	石核	頁岩	2.4	1.8	0.4	1.2	
№27-20	図録63	L=8	2	Vc	石核	頁岩	3.4	1.5	0.5	1.6	
№27-21	図録63	R=12	41	Vb	石核	頁岩	3.6	(2.0)	0.5	(2.0)	
№27-22	図録63	T=9	138	Vc	石核	頁岩	(2.2)	1.3	0.3	(2.8)	
№27-23	図録63	R=11	85	Vc	石核	頁岩	2.2	1.4	0.3	0.7	
№27-24	図録63	Q=8	31	Vc	石核	頁岩	2.3	1.2	0.3	0.4	
№27-25	図録63	Q=41	2	Vb	石核	メノウ質頁岩	2.2	1.4	0.3	0.4	
№27-26	図録63	T=10	41	Vc	石核	頁岩	3.0	1.4	0.4	2.1	
№27-27	図録63	P=9	11	Vb	石核	頁岩	3.2	2.0	0.7	1.6	
№27-28	図録63	Q=41	3	Vb	石核	頁岩	2.9	1.1	0.3	0.9	
№27-29	図録63	P=46	8	Vb	石核	頁岩	3.5	1.5	0.4	1.8	
№27-30	図録63	T=10	35	Vc	石核	頁岩	(2.9)	1.4	0.4	(1.0)	
№27-31	図録63	N=48	13	Vc	石核	メノウ質頁岩	3.8	1.3	0.3	0.8	
№27-32	図録63	N=47	10	Vb	石核	頁岩	3.4	1.4	0.4	1.1	
№27-33	図録63	M=46	48	Vc	石核	頁岩	4.7	1.7	0.7	3.7	
№27-34	図録63	Q=48	33	Vc	石核	頁岩	(2.8)	1.4	0.4	(1.3)	
№27-35	図録63	N=48	10	Vb	石核	頁岩	2.9	1.3	0.5	1.4	
№27-36	図録63	Q=45	1	Vb	石核	頁岩	3.0	1.4	0.4	1.4	
№27-37	図録63	Q=45	25	Vc	石核	頁岩	(3.4)	1.3	0.4	(1.8)	
№27-38	図録63	P=34	1	Vb	石核	メノウ質頁岩	3.9	1.3	0.4	1.9	
№27-39	図録63	N=32	1	Vb	石核	頁岩	(3.7)	1.3	0.5	(2.2)	
№27-40	図録63	Q=48	10	Vb	石核	頁岩	4.2	1.3	0.5	1.7	
№27-41	図録63	M=48	10	Vb	石核	頁岩	4.3	1.5	0.5	2.1	
№27-42	図録63	P=32	1	Vb	石核	黒曜石	4.5	1.5	0.5	2.6	
№27-43	図録63	Q=44	15	Vc	石核	頁岩	4.7	1.4	0.6	3.1	
№27-44	図録63	L=48	10	Vb	石核	頁岩	3.7	1.4	0.4	2.3	
№27-45	図録63	R=11	252	Vc	石核またはナイフ	頁岩	4.1	2.2	0.8	5.3	
№27-46	図録63	T=10	23	Vc	石核またはナイフ	頁岩	4.1	2.3	0.7	4.4	
№27-47	図録63	N=20	1	Vc	石核またはナイフ	頁岩	7.4	2.0	1.0	21.0	
№27-48	図録63	T=10	35	Vc	石核またはナイフ	黒曜石	(7.5)	3.8	1.1	(31.5)	
№27-49	図録63	Q=30	2	Vc	石核またはナイフ	頁岩	(4.7)	2.7	1.1	(12.4)	
№27-50	図録63	S=53	55	Vc 2	石核またはナイフ	流紋岩	(6.0)	4.4	1.3	30.0	
№27-51	図録64	N=8	18	Vc	石核	頁岩	7.7	3.5	0.7	21.7	
№27-52	図録64	Q=42	4	Vc	石核	頁岩	3.4	1.7	0.4	2.7	
№27-53	図録64	U=5	2	Vc 2層	石核	頁岩	3.8	1.6	0.5	3.0	
№27-54	図録64	Q=50	66	Vc	石核	頁岩	3.2	2.2	0.9	5.0	
№27-55	図録64	S=10	77	Vb	石核	頁岩	2.9	1.0	0.5	1.4	
№27-56	図録64	T=95	15	Vc 2	石核	頁岩	4.8	1.1	0.8	2.7	
№27-57	図録64	T=12	194	Vc	石核	頁岩	4.2	1.2	0.3	3.8	
№27-58	図録64	R=30	2	Vc	つまみ付ナイフ	頁岩	6.5	3.5	0.9	21.7	

表11 包含層出土掲載石器等一覧(2)

番号	図録番号	発掘区	遺物番号	層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
№-29-59	図録64	O-43	8	Vb	つまみ針ナイフ	頁岩	6.9	4.7	0.9	31.4	
№-29-60	図録64	R-50	5	Vb	つまみ針ナイフ	頁岩	6.9	1.2	0.8	8.6	
№-29-61	図録64	T-56	19	Vc1層	つまみ針ナイフ	頁岩	7.7	3.8	0.9	12.9	
№-29-62	図録64	P-48	4	Vb	つまみ針ナイフ	頁岩	6.3	3.5	1.0	20.0	
№-29-63	図録64	R-34	1	Vc	つまみ針ナイフ	頁岩	7.7	4.6	0.8	21.0	
№-29-64	図録64	T-49	22	Vc	つまみ針ナイフ	頁岩	8.4	2.1	1.2	22.3	
№-29-65	図録64	K-38	1	Vc	スクレイパー	頁岩	4.7	7.8	1.1	44.0	
№-29-66	図録64	N-18	3	Vb	スクレイパー	頁岩	7.1	4.2	1.1	30.1	
№-29-67	図録64	T-53	164	Vc2	スクレイパー	頁岩	6.6	4.3	1.3	38.2	
№-29-68	図録64	P-48	22	Vc	スクレイパー	頁岩	6.0	5.1	1.2	28.9	
№-29-69	図録64	R-48	63	Vc	スクレイパー	頁岩	6.5	3.6	1.1	28.0	
№-29-70	図録64	L-40	1	Vb	スクレイパー	頁岩	5.3	2.8	0.8	9.1	
№-29-71	図録64	T-52	24	Vc	スクレイパー	頁岩	4.8	3.0	0.4	6.3	
№-29-72	図録64	L-10	8	Vc	スクレイパー	頁岩	6.2	3.8	0.9	20.5	
№-29-73	図録64	Q-51	39	Vc2	スクレイパー	頁岩	7.5	3.8	1.1	38.0	
№-29-74	図録64	U-12	49	Vc	スクレイパー	頁岩	9.7	3.8	1.1	32.4	
№-29-75	図録65	L-9	18	Vb	スクレイパー	頁岩	5.6	4.0	1.3	30.0	
№-29-76	図録65	Q-42	3	Vb	スクレイパー	頁岩	7.0	1.5	0.9	7.2	
№-29-77	図録65	R-9	88	Vc	スクレイパー	頁岩	3.0	6.9	1.2	23.0	
№-29-78	図録65	P-9	5	Vb	スクレイパー	頁岩	(4.0)	3.4	0.9	(16.0)	
№-29-79	図録65	T-56	16	Vc1層	石核	黒曜石	3.5	4.7	1.9	23.6	
№-29-80	図録65	P-48	29	Vc	石核	緑色定粉	7.9	3.3	1.3	53.8	
№-29-81	図録65	Q-46	20	Vb	石核	緑色定粉	8.5	3.8	1.7	62.2	
№-29-82	図録65	S-47	22	Vc	石核	緑色定粉	9.9	4.0	0.9	60.8	磨石
№-29-83	図録65	M-48	13	Vb	石核	片岩	9.1	3.9	1.6	84.7	
№-29-84	図録65	N-50	8	Vc4	石核	緑色定粉	10.4	3.6	2.3	72.8	
№-29-85	図録65	M-33	1	Vb	石核	片岩	15.0	5.9	2.5	138.4	
№-29-86	図録65	Q-47	18	Vc	石核	片岩	(4.8)	(4.0)	(0.9)	(26.0)	
№-29-87	図録65	P-48	26	Vc	石核	緑色定粉	(4.3)	(3.7)	(0.9)	(21.2)	
№-29-88	図録65	Q-45	7	Vc	石核	片岩	(16.0)	(5.1)	(2.7)	(98.7)	磨石
№-29-89	図録65	R-26	2	Vb	石核	緑色定粉	(5.0)	(5.7)	(2.0)	(38.7)	
№-29-90	図録65	T-6	81	Vc1	石核	片岩	(8.3)	(5.7)	(1.7)	(68.3)	
№-29-91	図録66	M-46	45	Vc	たふき石	安山岩	14.7	6.1	3.7	422.0	
№-29-92	図録66	Q-46	69	Vb	たふき石	安山岩	1.9	7.6	4.8	1022.0	
№-29-93	図録66	R-9	133	Vc	たふき石	安山岩	12.3	7.5	4.1	549.0	
№-29-94	図録66	L-47	68	Vc	たふき石	安山岩	8.7	5.5	5.1	342.0	
№-29-95	図録66	Q-52	33	Vc2	たふき石	安山岩	7.5	5.5	5.3	350.0	
№-29-96	図録66	S-13	44	Vc	たふき石	安山岩	15.4	7.0	4.0	804.4	磨石
№-29-97	図録66	T-8	19	Vb	すり石	安山岩	14.0	9.4	8.6	1200.0	
№-29-98	図録67	Q-48	25	Vc	扁平打製石器	安山岩	5.6	8.6	2.3	129.9	
№-29-99	図録67	Q-9	67	Vc	扁平打製石器	安山岩	7.8	12.6	3.3	486.0	
№-29-100	図録67	N-9	10	Vc	扁平打製石器	安山岩	8.2	13.7	2.9	289.0	
№-29-101	図録67	N-9	53	Vc	扁平打製石器	安山岩	7.7	12.6	3.5	284.0	
№-29-102	図録67	N-9	78	Vc	扁平打製石器	安山岩	10.0	13.4	3.4	520.0	
№-29-103	図録67	O-8	8	Vc	扁平打製石器	安山岩	9.9	17.0	4.2	884.0	
№-29-104	図録67	O-9	34	Vc	扁平打製石器	安山岩	7.4	14.0	2.5	278.0	
№-29-105	図録67	S-53	31	Vc2	扁平打製石器	安山岩	8.1	11.2	1.8	98.0	
№-29-106	図録67	S-52	43	Vb	扁平打製石器	安山岩	7.4	16.7	2.9	392.0	
№-29-107	図録67	P-48	10	Vc	扁平打製石器	安山岩	8.4	12.9	2.7	316.0	磨石、破石製、
№-29-108	図録67	N-10	10	Vc	扁平打製石器	安山岩	8.6	13.2	3.1	385.0	
№-29-109	図録67	N-8	20	Vc	扁平打製石器	安山岩	8.7	14.2	4.2	420.0	
№-29-110	図録66	N-9	77	Vc	扁平打製石器	安山岩	9.0	15.1	4.8	560.0	
№-29-111	図録66	N-9	78	Vc	扁平打製石器	安山岩	10.1	16.1	3.0	58.0	
№-29-112	図録66	N-10	12	Vc	扁平打製石器	安山岩	10.9	16.0	2.9	542.0	
№-29-113	図録66	N-9	80	Vc	扁平打製石器	安山岩	8.5	16.3	2.9	560.0	
№-29-114	図録66	O-11	1	Vc	扁平打製石器	安山岩	8.8	16.6	4.6	860.0	
№-29-115	図録66	O-16	5	Vb	扁平打製石器	安山岩	12.6	17.7	3.2	980.0	
№-29-116	図録66	N-9	79	Vc	扁平打製石器	安山岩	11.7	13.0	2.5	395.0	
№-29-117	図録66	T-52	26	Vc	扁平打製石器	安山岩	9.2	13.3	2.7	334.5	磨石
№-29-118	図録66	S-51	35	Vc	扁平打製石器	安山岩	8.2	4.8	2.9	212.0	
№-29-119	図録67	T-9	124	Vb	北海道式石核	安山岩	11.4	11.5	7.6	1380.0	
№-29-120	図録67	N-10	7	Vc	北海道式石核	安山岩	10.0	11.8	5.7	882.0	
№-29-121	図録67	Q-50	43	Vc	北海道式石核	安山岩	11.3	13.9	5.4	1245.0	
№-29-122	図録67	R-48	70	Vc	北海道式石核	安山岩	10.7	13.8	6.9	1195.0	
№-29-123	図録67	N-47	71	Vc	北海道式石核	安山岩	8.0	16.9	7.8	1388.0	磨石
№-29-124	図録67	Q-52	36	Vc2	北海道式石核	安山岩	9.3	11.9	6.7	7700.0	
№-29-125	図録67	S-50	38	Vc	北海道式石核	安山岩	8.4	18.3	5.3	2380.0	
№-29-126	図録67	P-9	37	Vc	北海道式石核	安山岩	9.6	(18.0)	6.8	(1164.0)	磨石
№-29-127	図録67	Q-8	33	Vb	北海道式石核	安山岩	10.1	15.4	6.9	1370.0	
№-29-128	図録67	T-52	38	Vc	北海道式石核	安山岩	13.2	14.4	6.5	1824.0	
№-29-129	図録67	T-12	158	Vc	礫石	砂岩	(8.0)	(6.7)	(4.2)	(234.0)	
№-29-130	図録67	S-10	135	Vc	礫石	泥岩	7.5	4.5	1.4	49.3	
№-29-131	図録66	P-44	18	Vc	礫石	安山岩	26.3	30.9	12.4	1200.0	
№-29-132	図録66	Q-48	51	Vc	礫石	安山岩	28.7	44.4	10.4	2600.0	
№-29-133	図録66	Q-18	3	Vc	礫石	安山岩	39.7	39.4	12.7	2400.0	
№-29-134	図録66	P-48	27	Vc	礫石	安山岩	30.4	28.8	13.6	3600.0	
№-41-135	図録66	R-49	69	Vc	礫石	安山岩	38.3	39.8	15.9	2800.0	
№-41-136	図録67	Q-51	47	Vc2	礫石	安山岩	15.5	25.0	8.6	3800.0	
№-42-137	図録66	R-50	24	Vc	礫石	砂岩	2.1	(33.0)	1.0	(84.0)	
№-42-138	図録66	T-13	4	Vc	三稜形石製品	頁岩	4.3	4.6	1.5	14.9	
№-42-139	図録66	T-9	166	Vc	三稜形石製品	頁岩	6.4	4.6	1.5	23.8	
№-42-140	図録66	U-11	64	Vc	三稜形石製品	安山岩	6.3	11.5	6.3	58.0	

写 真 图 版



調査状況 南東側低位平坦面 NE→



調査状況 北西側斜面 NW→



UH-4 完掘 NW→



UH-4 セクション E→



UH-4 炉 S→



UH-4 HP-2 遺物出土状況 S→



UP-1 検出 SE→



UP-1 セクション N→



UP-2 完掘 N→



UP-3 セクション N→



UP-4 セクション SW→



UP-4 完掘 S→



UP-6 遺物出土状況・付属土坑検出状況 E→



UP-6 セクション NE→



UP-6 PP-1 セクション E→



UP-6 PP-1 完掘 N→



UP-6 PP-2 セクション SE→



UP-6 PP-3 完掘 N→



UP-6 PP-4 遺物出土状況 NW→



UP-6 検出面の礫出土状況 E→



UP-7 セクション SW→



UP-7 セクション SE→



UP-7 完掘 N→



UP-7 遺物出土状況 NE→



UP-9 セクション S→



UP-9 完掘 S→



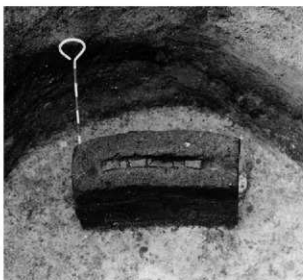
UP-8 セクション E→



UP-8 遺物出土状況 S→



UP-8 完掘 N→



UP-8 木製品?出土状況 E→



UP-10 セクション SW→



UP-11 セクション N→



UP-12 完掘 N→



UP-12 遺物出土状況 W→



UP-12 セクション NE→



UP-12 セクション NW→



UP-13 完掘 NW→



UP-16 遺物出土状況 W→



UP-18 セクション N→



UP-18 完掘 NE→



UP-19 セクション W→



UP-19 完掘 E→



UP-14 セクション S→



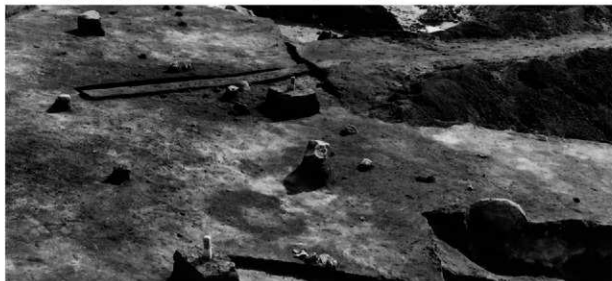
UP-14 下層セクション S→



UP-14 遺物出土状況 E→



UP-14 完掘 E→



UP-14・24・25 検出状況 NE→



UP-25 セクション S→



UP-25 下層セクション S→



UP-25 遺物出土状況 SE→



UP-25 遺物出土状況 E→



UP-14(手前)・25(奥) 作業状況 S→



UP-25 完掘 NW→



UP-20 セクション S→



UP-20 完掘 NW→



UP-21 遺物出土状況 NW→



UP-21 遺物出土状況・セクション NW→



UP-22 セクション NE→



UP-22 完掘 NE→



UP-23 完掘 S→



UP-24 セクション W→



UP-26 完掘 SE→



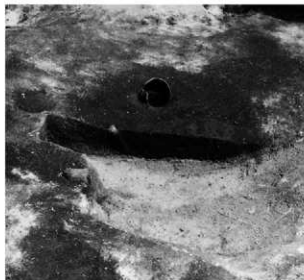
UP-27 セクション S→



UP-28 セクション NE→



UP-28 完掘 NE→



UP-30 セクション S→



UP-33 完掘 SW→



UP-29 セクション SE→



UP-29 完掘 N→



UP-32 セクション S→



UP-32 完掘 S→



UP-34 セクション E→



UP-34 完掘 E→



UP-35 セクション SE→



UP-35 完掘 S→



UP-37 セクション S→



UP-37 完掘 S→



UP-39 セクション E→



UP-39 拵 E→



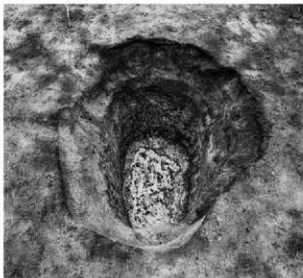
UP-39 完掘 E→



UP-43 完掘 NE→



UP-44 セクション E→



UP-44 完掘 SE→



UP-45 セクション E→



UP-45 遺物出土状況 N→



UP-45 遺物出土状況 E→



UP-45 遺物出土状況 NE→



UP-46 セクション NE→



UP-46 完掘 SW→



UP-46 遺物出土状況 NW→



UP-53 完掘 S→



UP-51 セクション S→



UP-51 完掘 S→



UP-59 遺物出土状況 W→



UP-59 完掘 W→



UP-57 セクション E→



UP-57 完掘 NE→



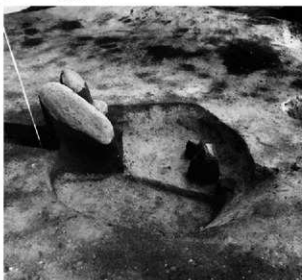
UP-58 セクション S→



UP-58 完掘 S→



UP-60 セクション NW→



UP-60 完掘 NW→



UP-62 セクション S→



UP-62 完掘 SW→



UP-63 セクション S→



UP-64 完掘 NE→



UP-66 セクション W→



UP-66 完掘 NE→



UP-67 セクション W→



UP-67 完掘 N→



TP-2 セクション SE→



TP-2 完掘 W→



TP-4 セクション S→



TP-5 完掘 S→



US-2 SW→



US-7 W→



US-12 NE→



US-17 W→



US-6 E→



US-14 SE→



US-13 NW→



US-19 NW→



UF-1 セクション W→



立石1 セクション SE→



立石2 検出 E→



立石3 セクション SE→



立石5 検出 W→



立石6 セクション S→



USP-74(左)・76(右) セクション N→



USP-88(左) セクション SE→



UFC-2 (2回目) SE→



UFC-2 (4回目) SE→



UFC-3 NE→



UFC-4 E→



石皿出土状況 (P-44区) E→



Ⅲ群 a類土器出土状況 (S-53区、図Ⅳ-7-6) NW→



Ⅲ群 a 類土器出土状況(N-9区) NE→



Ⅲ群 b 類土器出土状況(T-10区、図Ⅳ-10-26) W→



Ⅳ群 a 類土器出土状況(N-45区、図Ⅳ-10-32) N→



Ⅳ群 a 類土器出土状況(M-14区、図Ⅳ-11-34) S→



Ⅳ群 a 類土器出土状況(T-50区、図Ⅳ-15-55) SW→



Ⅴ群 c 類土器出土状況(R-9区、図Ⅳ-24-163) W→



土石流堆積物検出状況(南東側低位平坦面) NE→



土石流堆積物検出状況(北西側斜面、R-44付近) S→



UH-4 (图 III-6-1)



UP-12 (图 III-23-7)



UP-6 (图 III-13-1)



UP-6 PP-1 (图 III-14-15)



UP-14 (图 III-28-1)



UP-16 (图 III-30-1)



UP-12 (图 III-22-1, 正面)



UP-12 (图 III-22-1, 裏面)



UP-11 (图 III-18-1)



UP-13 (图 III-25-1)



UP-30 (图 III-36-1)



UP-46 (图 III-47-1)



UP-59 (图 III-52-1)



UP-59 (图 III-52-2)



UP-59 (图 III-52-3)



土坑出土 (图 III-57-2)



土坑出土 (图 III-57-3)



土坑出土 (图 III-58-4)



土坑出土 (图 III-58-5)



土坑出土 (图 III-58-6)



土坑出土 (图 III-59-7)



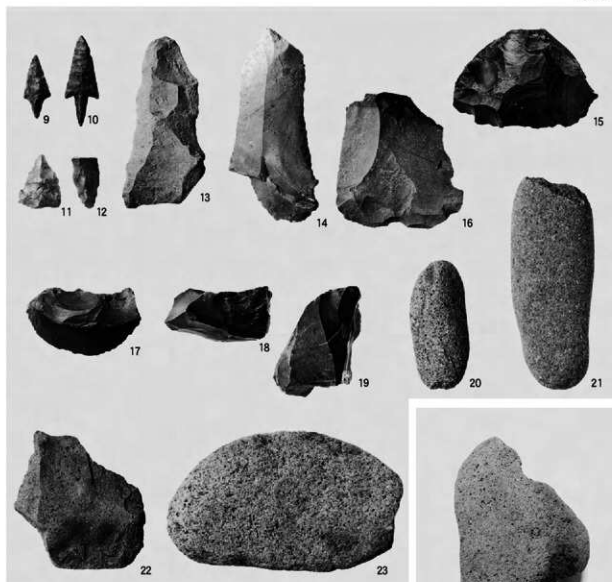
UP-45 (图Ⅲ-44-1)



土坑出土 (图Ⅲ-57-1)



UH-4 (1)



UH-4 (2)



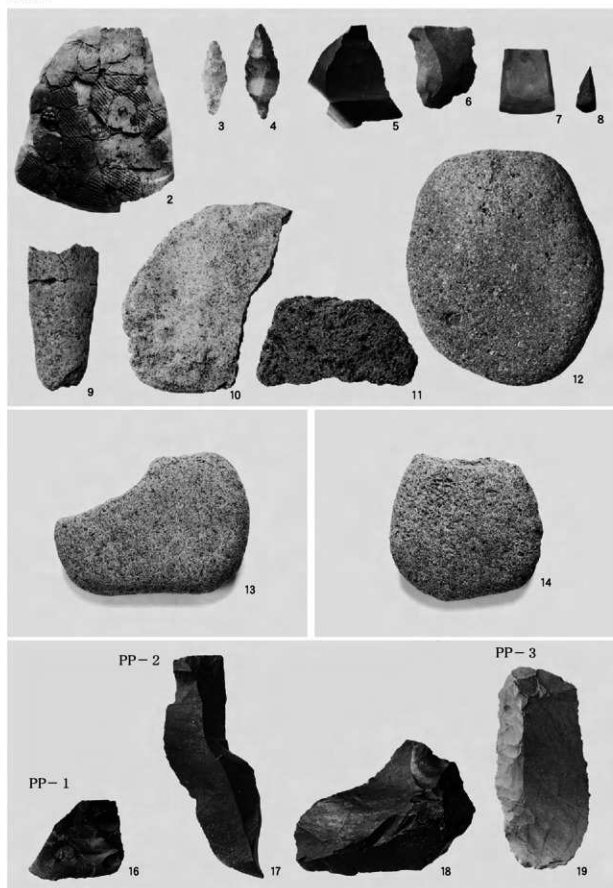
UP-4 (1)



UH-4 (3、図Ⅲ-8-24)



UP-4 (2、図Ⅲ-10-3)

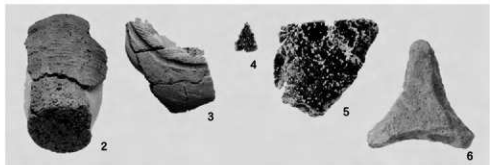




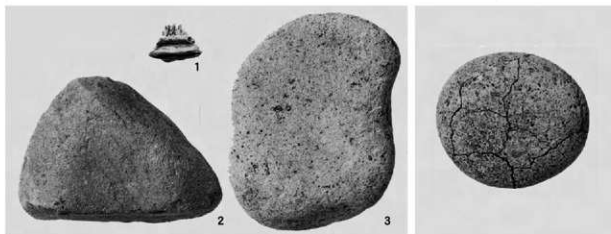
UP-7



UP-9



UP-8



UP-10

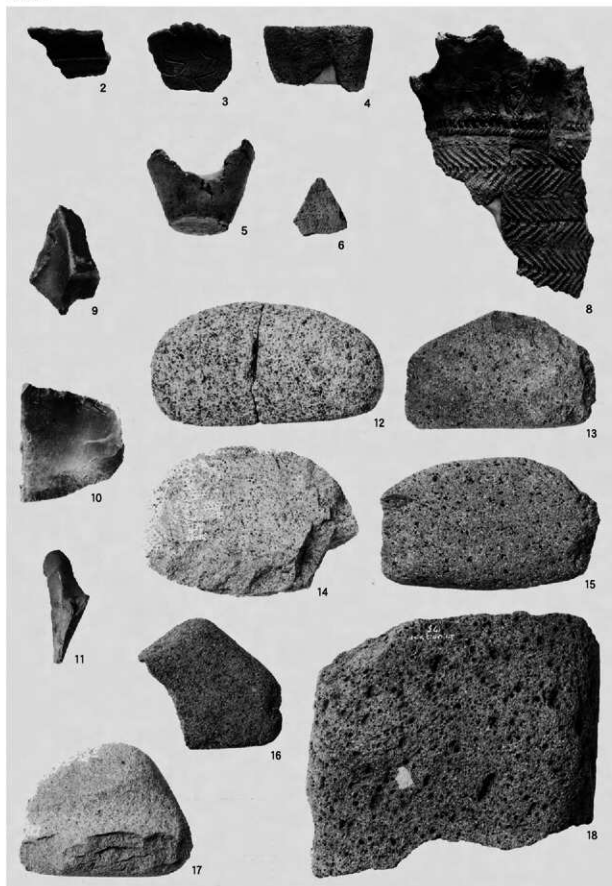
UP-11 (1, 図III-18-2)

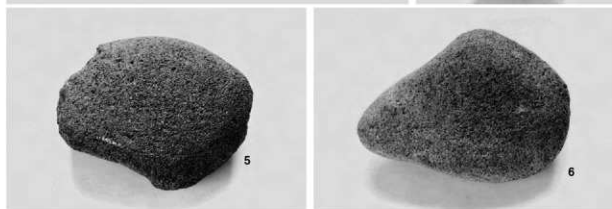


UP-11 (2, 図III-18-3)



UP-11 (3, 図III-18-4)

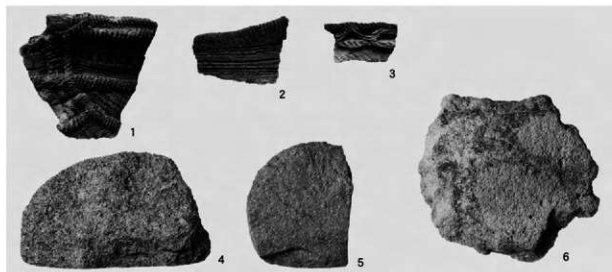




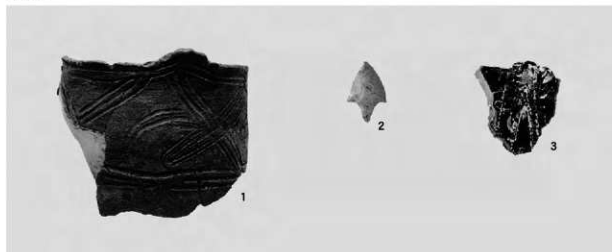
UP-13



UP-14



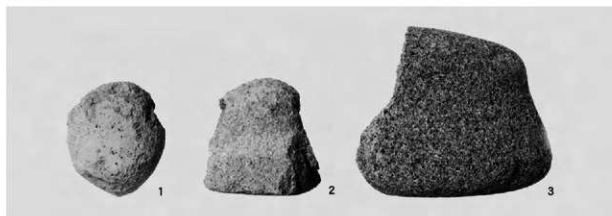
UP-25



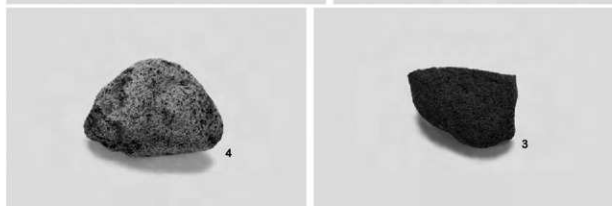
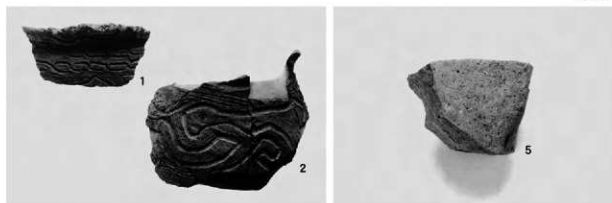
UP-18



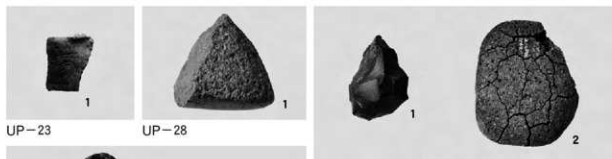
UP-19



UP-20



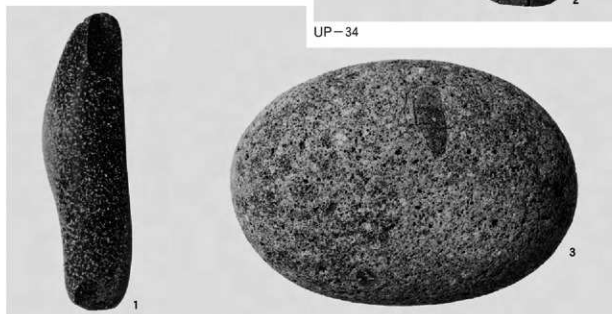
UP-21



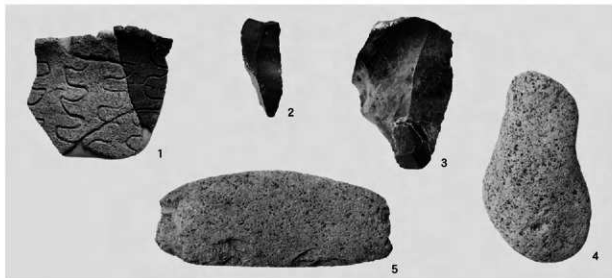
UP-23

UP-28

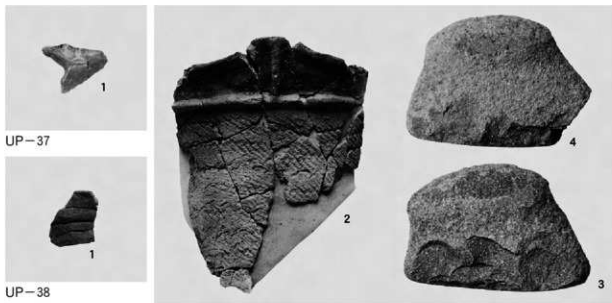
UP-34



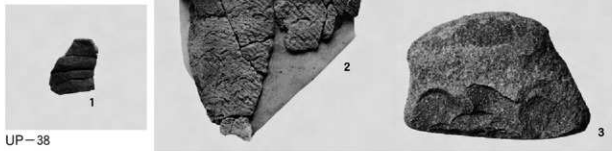
UP-26



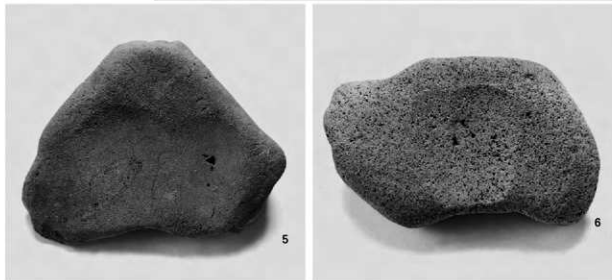
UP-39



UP-37



UP-38



UP-45



UP-43



UP-46



UP-58 (図Ⅲ-51-1)



UP-55 (1、図Ⅲ-50-1)



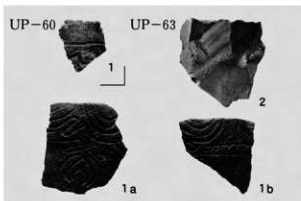
UP-55 (2、図Ⅲ-50-2)



UP-55 (3、図Ⅲ-50-3)



UP-59



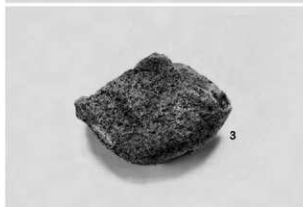
UP-60・63



UP-62



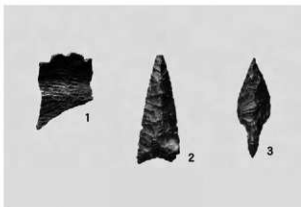
UP-64 (図Ⅲ-55-1上)



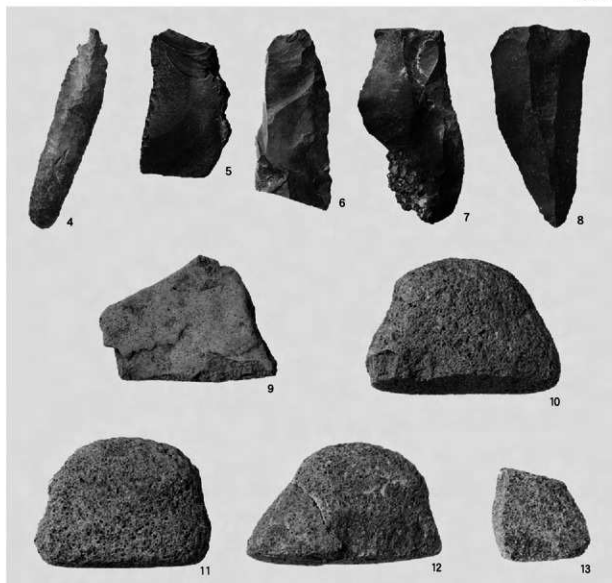
UP-66 (図Ⅲ-55-1下)



UP-67



US-19 (1)



US-19 (2)



US-19 (3, 图 III-67-14)



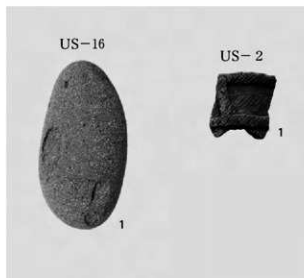
US-19 (4, 图 III-67-15)



US-19 (5、図Ⅲ-68-16)



US-19 (6、図Ⅲ-68-17)



US-16・2



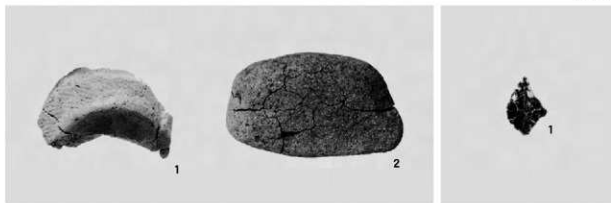
US-6 (図Ⅲ-71-1)



US-7 (図Ⅲ-72-1)

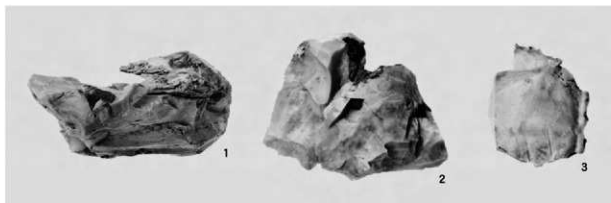


US-9

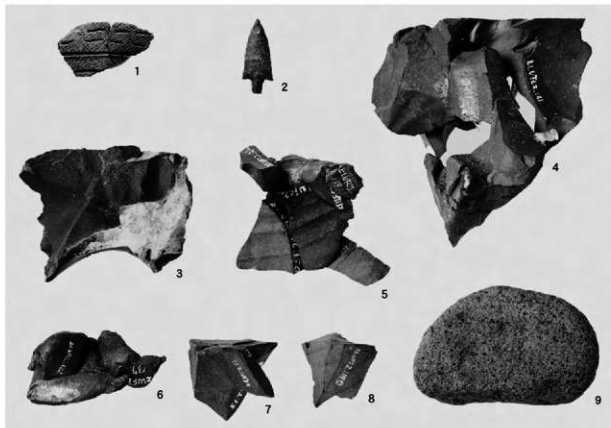


US-12

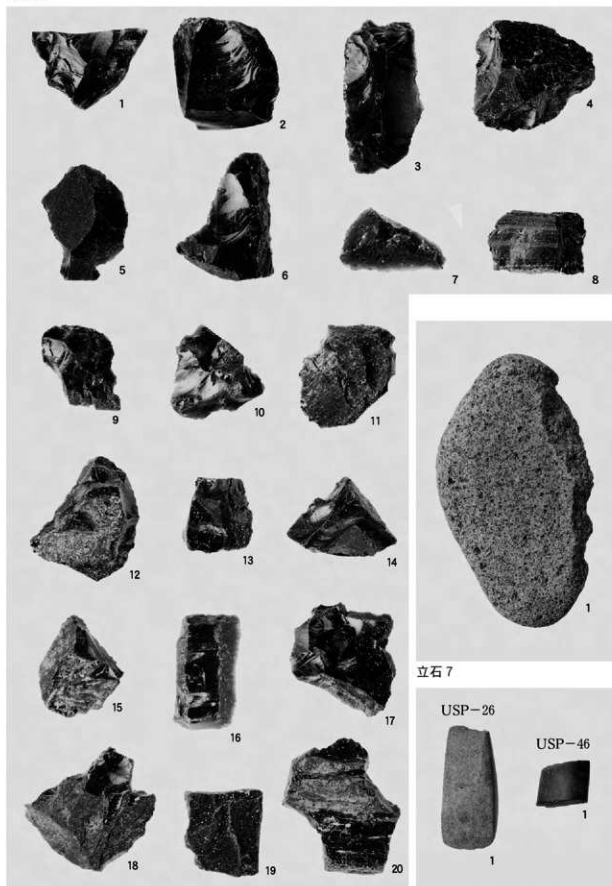
UFC-1



UFC-4



UFC-2



UFC- 3

USP-26・46



Ⅲ群a類 (图Ⅳ-5-3)



Ⅲ群a類 (图Ⅳ-6-4)



Ⅲ群a類 (图Ⅳ-6-5)



Ⅲ群a類 (图Ⅳ-7-6)



Ⅲ群 a類 (図Ⅳ-7-7)



Ⅲ群 a類 (図Ⅳ-8-8)



Ⅲ群 a類 (図Ⅳ-8-9)



Ⅲ群 a類 (図Ⅳ-8-11)



Ⅲ群 a類 (図Ⅳ-8-10)



Ⅲ群 b類 (図Ⅳ-10-26)



Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-10-31)



Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-10-32)



Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-10-33)



Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-11-34)



Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-12-35)



Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-12-36)



Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-12-37)



Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-12-38)



Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-12-39)



Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-12-40)



Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-13-41)



Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-13-42)



Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-13-43a)



Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-13-44a)



Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-13-43b)



Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-13-44b)



IV群a類 (図IV-13-45)



IV群a類 (図IV-13-46)



IV群a類 (図IV-14-47)



IV群a類 (図IV-14-48)



IV群a類 (図IV-14-49)



IV群a類 (図IV-14-50)



IV群a類 (図IV-14-51)



IV群a類 (図IV-14-52)



IV群a類 (図IV-14-53)



Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-14-54)



Ⅳ群 a類 (図Ⅳ-20-114)



Ⅳ群 b類 (図Ⅳ-23-150)



Ⅳ群 b類 (図Ⅳ-23-153)



Ⅳ群 b類 (図Ⅳ-23-154)



Ⅴ群 c類 (図Ⅳ-24-163)



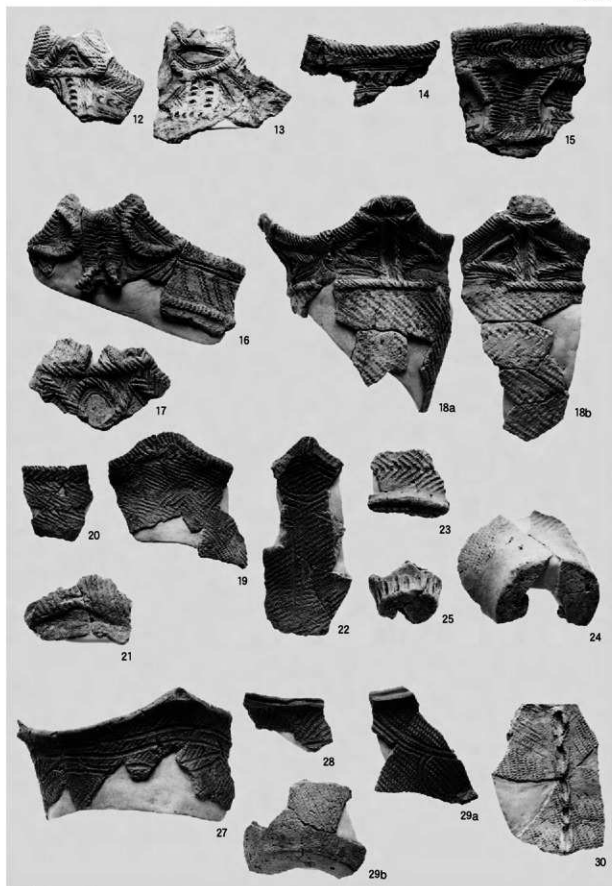
V群c類 (図IV-24-164)



V群c類 (図IV-24-165)



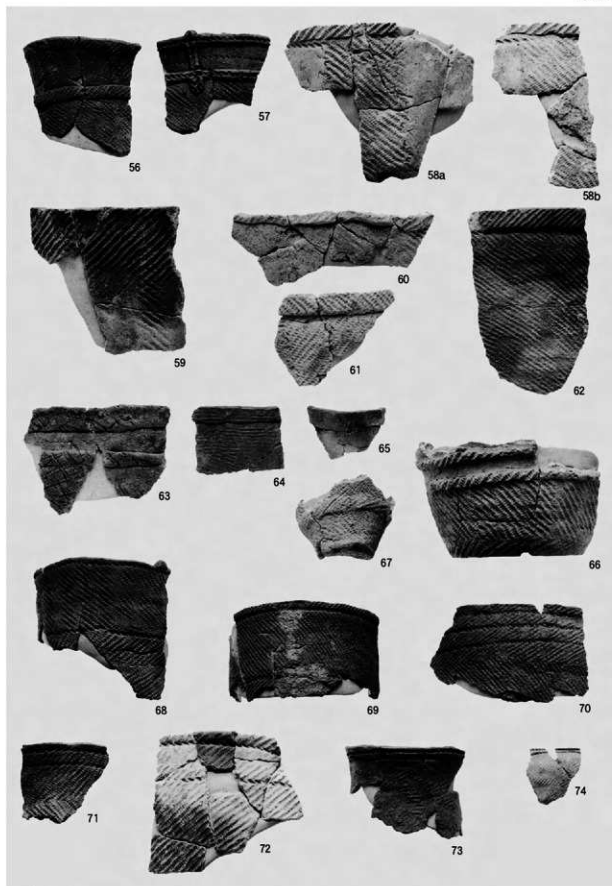
II群b類



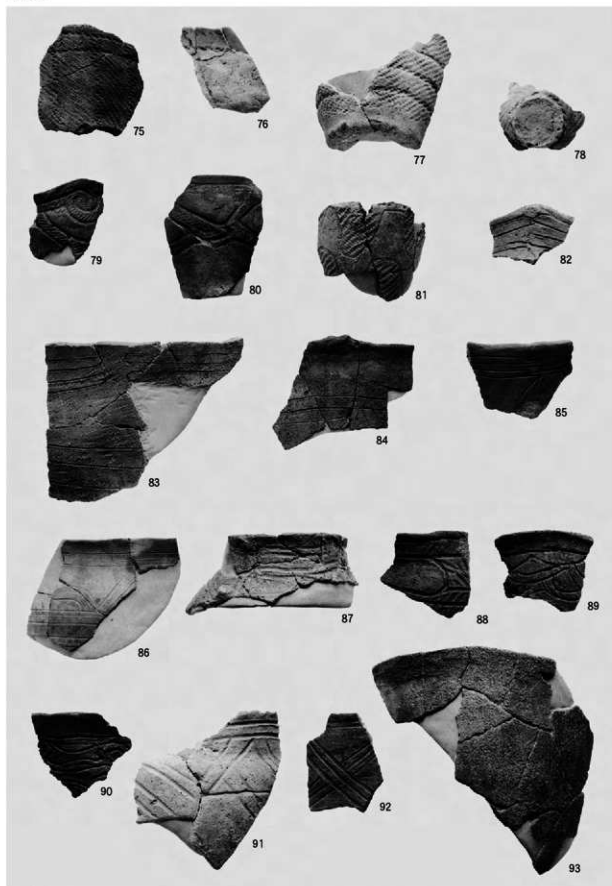
Ⅲ群 a類・Ⅲ群 b類



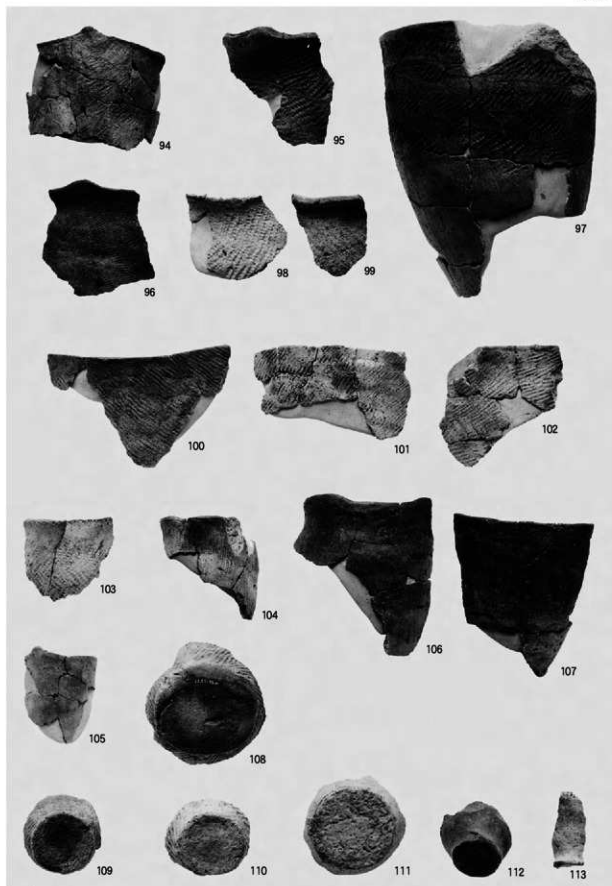
IV群a類(1)



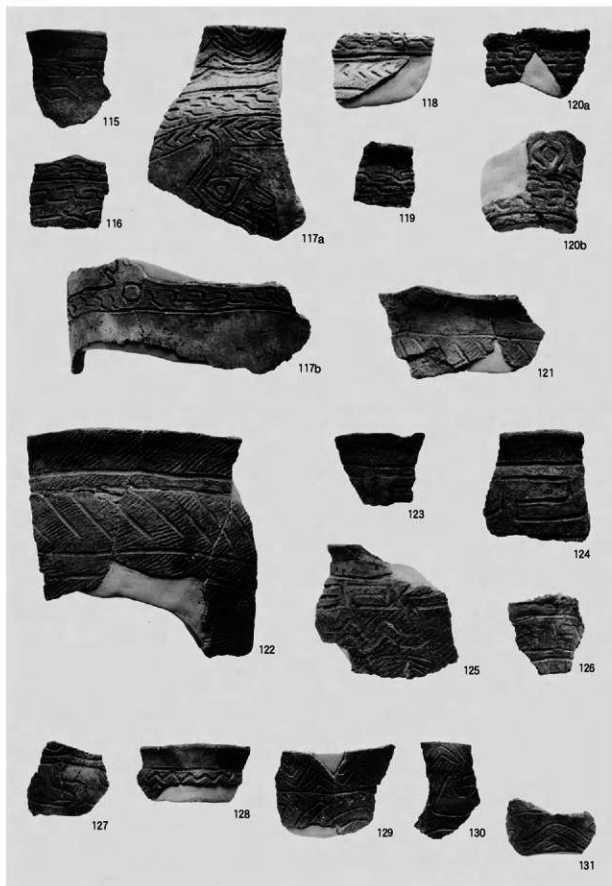
IV群a類(2)



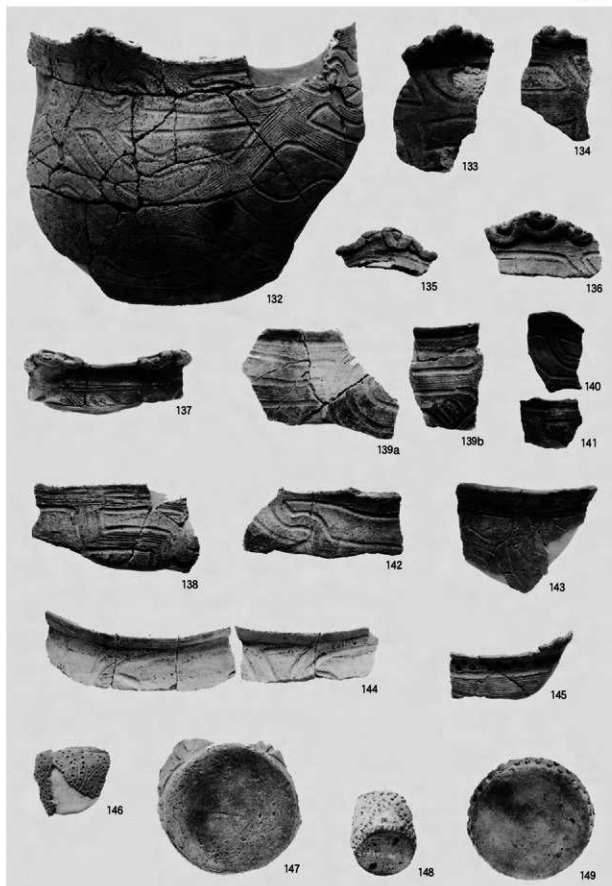
IV群a類(3)



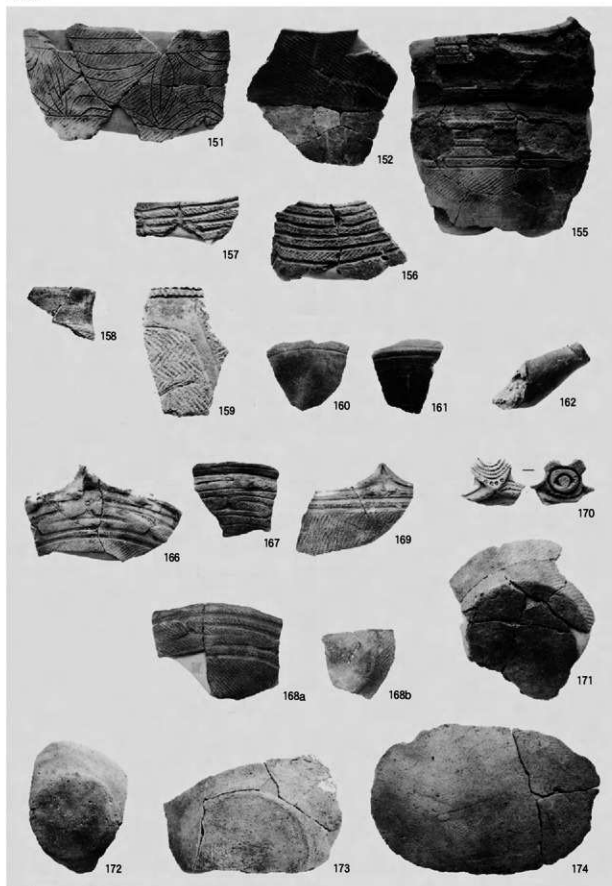
IV群a類(4)



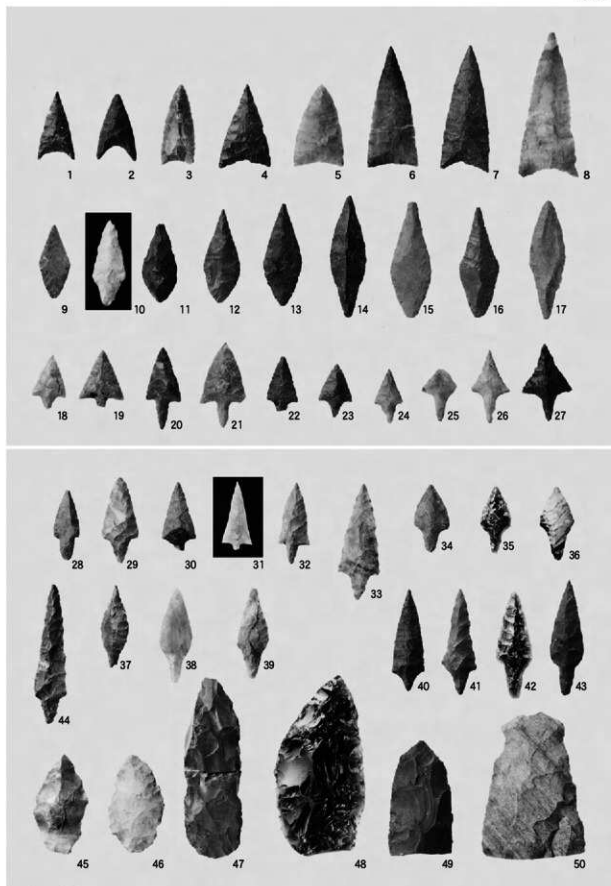
IV群a類(5)



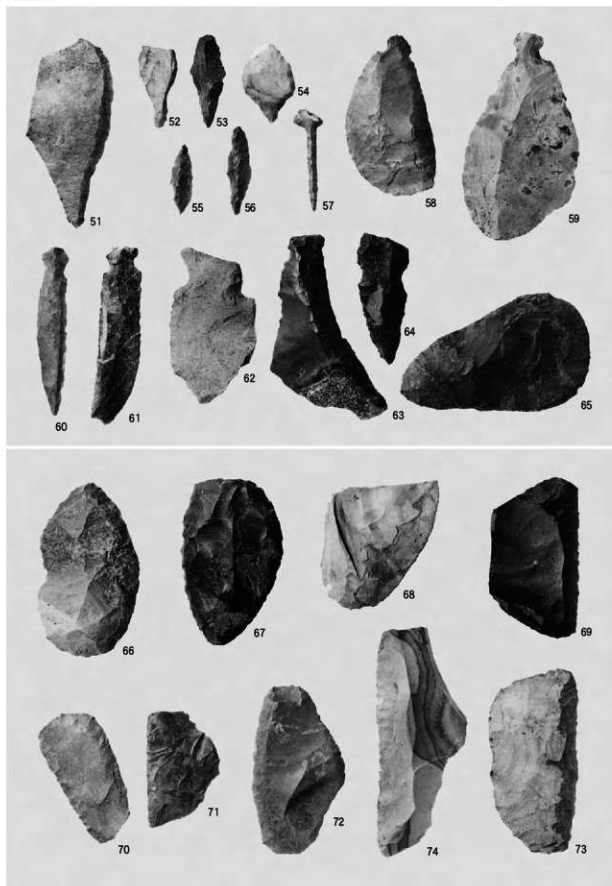
IV群a類(6)



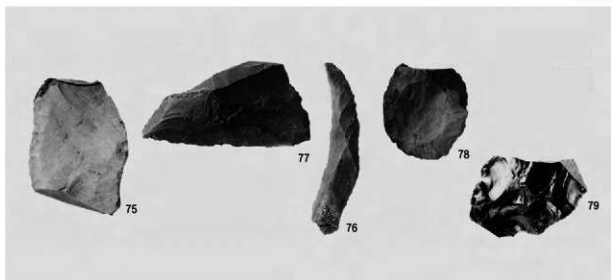
IV群b類・V群c類



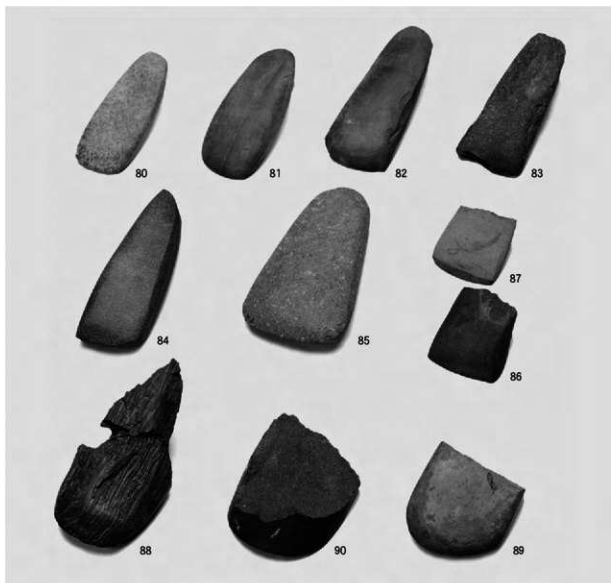
石鏃・石槍またはナイフ



石錐・つまみ付ナイフ・スクレイパー（1）

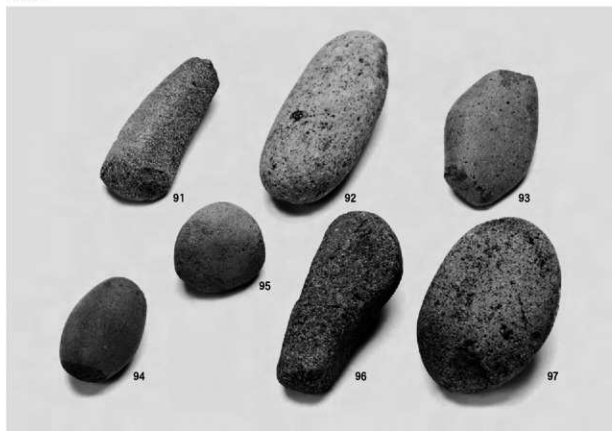


スクレイパー (2)・石核

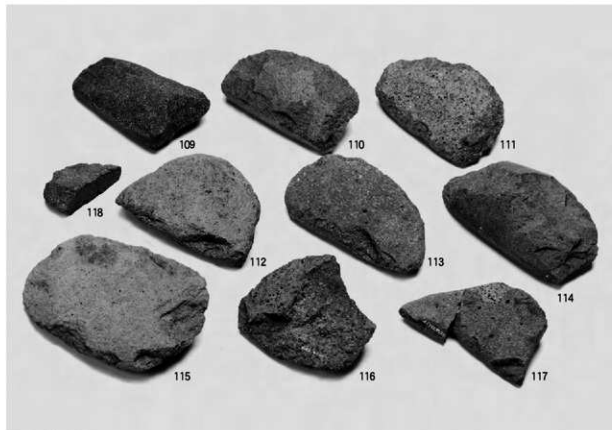


石斧

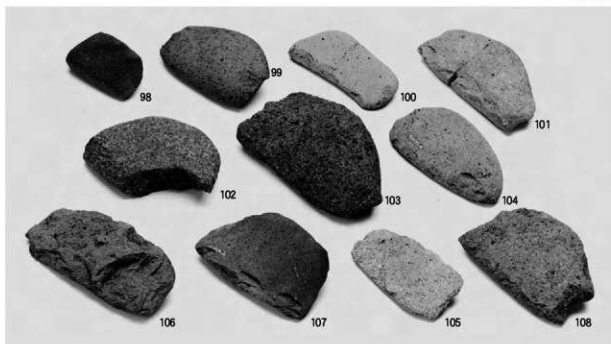
図版66



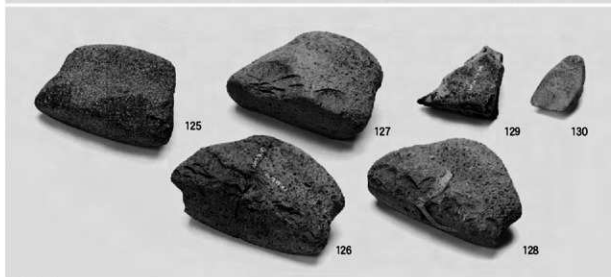
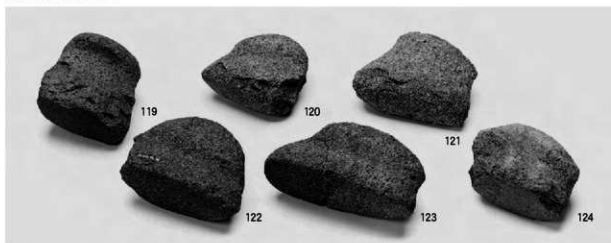
たたき石・すり石



扁平打製石器(2)



扁平打製石器 (1)



北海道式石冠・砥石



台石 (圖 IV - 39 - 131)



台石 (圖 IV - 39 - 132)



台石 (圖 IV - 40 - 133)



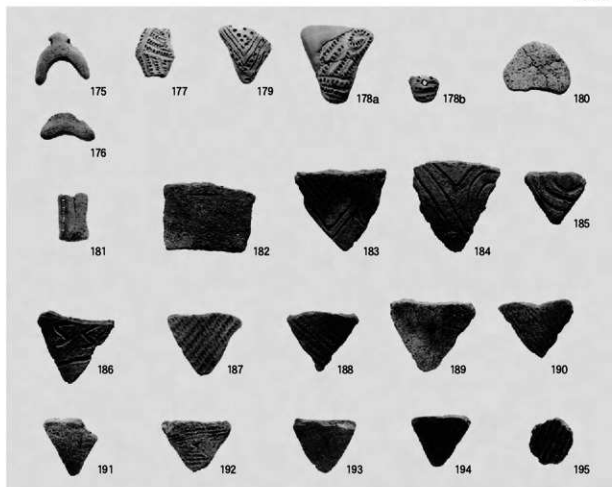
石皿 (圖 IV - 40 - 134)



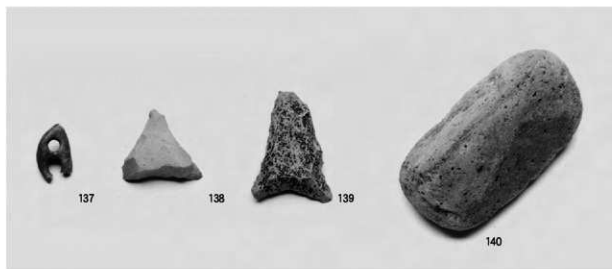
石皿 (圖 IV - 41 - 135)



石皿 (圖 IV - 41 - 136)



土製品



石製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	もりまち うわだいいちいせき							
書名	森町 上台1遺跡							
副書名	北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第217集							
編著者名	影浦 覚・柳瀬由佳							
編集機関	財団法人 北海道埋蔵文化財センター (http://www.domaibun.or.jp)							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地-1 TEL011-386-3231							
発行年月日	西暦2005年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上台1遺跡	北海道 茅部郡 森町 字上台町 33-1、 42-1、 364ほか	01345	B-15-27	42° 5' 8"	140° 34' 18"	20030506 ～ 20031024	6,200㎡	高速道路北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）建設工事に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上台1遺跡	墓域	縄文時代	住居跡	1軒	縄文土器	縄文時代後期 前葉の墓域		
	前期	土坑	59基	円筒土器下層d式				
	中期	Tピット	5基	円筒土器上層b式				
	後期	配石遺構	2基	トリサキ式 大津Ⅷ群				
	晩期	集石・礫集中	4カ所	白坂3式 手鋸式				
		石囲い炉	14基	聖山Ⅱ式				
		焼土	4カ所	土製品				
		フレイク集中	4カ所	石器等				
		立石	7基	石鎌・石槍・石錐・つ				
		柱穴状の小ピット	78基	まみ付きナイフ・スク レイパー・扁平打製石 器・石核・フレイク・ 石斧・たたき石・すり 石・砥石・石皿・台石・ 加工痕のある礫・焼成 礫・礫など				

財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書第217集

森 町

上台 1 遺跡

—北海道縦貫自動車道(七飯～長万部間)埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成17年3月31日

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒069-0832 江別市西野幌685番地1

TEL (011) 386-3231 (代表)

FAX (011) 386-3238

印刷 株式会社 広報社印刷

〒064-0808 札幌市中央区南8条西10丁目石黒ビル

TEL (011) 532-8160 (代表)

FAX (011) 532-9060
